

武蔵野大学しあわせ研究所紀要

Journal of Musashino University Creating Happiness Incubation

Vol.7, October 2024

【査読論文】

仏教的ウェルビーイング学と科学的ウェルビーイング学の響創の可能性

前野 隆司1

【査読論文】

サステナブルキャンパスの実現を目指して

～ Impact Rankings 分析と事例研究の視点から～

田中 笑子・鈴木 菜央・明石 修25

【査読論文】

2歳児におけるリトミック活動の動きの分析

－ Aちゃんの行動変容に注目して－

高牧 恵理・松井 いずみ・荒金 幸子66

【査読論文】

我が国における道德教育と国際バカロレア教育の関係についての基礎的考察

田中 無量79

【査読論文】

ウェルビーイング中心デザインによる社会装置の開発並びにそのソーシャル

インパクトの特定：コロナ禍下でのエミー・ウォッシュ設置運動を事例として

保井 俊之100

【査読論文】

コミュニティウェルビーイングへの持続可能な観光の貢献

～農泊推進地における幸福度からの示唆～

岡田 美奈子114

エシカル・トランスフォーメーションと幸福度向上に関する
市民意識・行動についての研究

白鳥 和彦・薄羽 美江.....141

保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因と
保育者の同僚性の構築を目指す試み
ー保育者の幼少期の経験との関連性を手掛かりにー

小川 房子・石田 由紀子・兼間 和美.....160

BERT を用いた保育士の感情分析

佐々木 多希子・小川 房子.....184

日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その５）
ー伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操制作の試み（その２）ー

森田 ゆい・大室 弘美・三浦 裕子.....196

プロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験はアイデンティティ、
異文化コミュニケーション能力、キャリア形成にどのように影響するのか

林 佳祐・渡辺 英雄.....212

通信制大学での充実した学び方のための授業実践
～「教育心理学」メディア授業の構成と学習者の振り返りから～

川島 哲.....232

【査読論文】

仏教的ウェルビーイング学と科学的ウェルビーイング学の 響創の可能性

前野 隆司（武蔵野大学教授、慶應義塾大学教授）

要約

本稿では、まず、仏教の基本的な考え方および仏教における幸福・ウェルビーイングの捉え方について述べる。次に、現代科学、特にウェルビーイングの科学についての現状と、仏教的ウェルビーイングとの関係について述べる。また、感性の陶冶とイノベーション指向が仏教的ウェルビーイングと科学的ウェルビーイングの響創を加速すると考えられることについても述べる。さらに、農耕革命、産業革命に次ぐ三つ目の変革、すなわち、近現代からウェルビーイング時代への人類史上3度目の大転換を、仏教的ウェルビーイング学と科学的ウェルビーイング学の響創が先導する可能性についても述べる。仏教的ウェルビーイングと科学的ウェルビーイングの学問を体系化し、共に学び、共に実践することによってこそ、生きとし生けるものが幸せに生きる未来の創造への道が拓けてくると考えられる。ウェルビーイング学部は、これらを実践する学部である。

1. はじめに

産業革命以来の人類が選択した主要な価値の一つは、経済成長を重視する資本主義・自由主義であると考えられる。欧米、特にアメリカやイギリスにおいては、マックス・ヴェーバー¹が述べているように、プロテスタンティズムが資本主義発展のきっかけの一つであったと考えられている。すなわち、プロテスタントの倫理規範の一つである「清貧」と経済的発展という、いわば逆説的な二つの概念が実は通底する。つまり、人間の性質は神が授けた賜物であるから、この賜物を用いて天職を全うし蓄財することは善である、という考え方が近代資本主義発展の一因となった。この過程には、経済活動が、その基底にあった世俗内禁欲という宗教倫理を喪失し、形骸化した制度のみを資本蓄積の手段と化したという問題がある。

日本においては、明治維新前後の神仏分離・廃仏毀釈や戦後の欧米型教育の導入に代表されるように、仏教的・東洋思想的価値観が希薄化する方向に近現代社会形成が進んできた歴史がある。また、欧米においても、宗教を信じる人の割合は減少している²。つまり、宗教的・思想的ないしは全体的・包括的価値観抜きに経済成長重視型、すなわち「個人が各々に自由な活動を行えば結果として全体もうまくいくに違いない」という資本主義・自由主義の価値観が現代先進諸国の主要な価値観として広まっているといえよう。

そんな世界が現在直面している課題は、格差の拡大、環境問題、戦争や紛争、パンデミック、資本主義の後退である。すなわち、世界全体について考える規範的価値が希薄化した現代において、世界全体について考えるべき課題がきわめて深刻な社会問題として現代世界を覆っている。

このような現代社会において、仏教的真理観に基づいて煩惱の無力化を目指すとともに生きとし生けるものの幸せを実現しようとする仏教思想³と、科学的手法に基づく学問分野横断型学問であるウェルビーイング学⁴の響創（響きあいながら協創すること）が、産業革命以来の人類文明の行きすぎた進歩主義を抜本的に革新する可能性を有するのではないだろうか。なお、ウェルビーイングとは、直訳すれば「よい（well）あり方（being）」である。具体的には、幸せ、生きがい、安心、福祉、健康、平和など、生きとし生けるもののよき生き方を包含する概念である。もとより、仏教において「よき生き方」とは、自己の現世的な生の安楽のみならず、過去未来現在の他者の幸福という、自己を超越した存在様態における生を想定しており、それは伝統的に浄土や彼岸という形象として受容されてきた。現在課題になっているのは、この完成された伝統的理念を現在の思想状況のなかでいかに再現しうるかである。この問題意識のもと、本稿においては仏教的ウェルビーイング論が科学的幸福論をさらに豊かものにしうる可能性について、考えを述べる。また、農耕革命、産業革命に次ぐ三つ目の変革、すなわち、近現代からウェルビーイング時代への人類史上3度目の大転換を、仏教的ウェルビーイング学と科学的ウェルビーイング学の響創が先導する可能性についても述べる。

2. 仏教の根本的真理観

(1) 三法印に表される仏教的真理

仏教の最古の文献のひとつであるといわれる『真理のことば』（ダンマパダ）「第20章 道」に説かれている仏教の根本的真理（仏法、ブッダ・ダルマ）は以下のとおりである。なお、パーリ語の dhamma（ダンマ）はサンスクリット語では dharma ダルマである。

「一切の形成されたものは無常である」（諸行無常）と明らかな知慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそが人が清らかになる道である」（二七七）

「一切の形成されたものは苦しみである」（一切皆苦）と明らかな知慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそが人が清らかになる道である」（二七八）

「一切の事物は我ならざるものである」（諸法非我）と明らかな知慧をもって観るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそが人が清らかになる道である」（二七九）⁵

これら「諸行無常」「一切皆苦」「諸法非我（諸法無我とも呼ばれる）」は、仏教の根本的な理念を示しており、三法印と呼ばれる。後述する「涅槃寂静」も併せて四法印と呼ばれることもある。日本には中国を経て仏教が伝来したため仏教概念は漢字で表される。このため、四法印は現代人には一見難解な概念に思われるかもしれない。四法印の法とは法則・真理という意味であり、ダルマ（保つ、支持するという意味の語根√dhr̥ から派生した名詞）の訳である。仏教もそもそも仏法（ブッダ・ダルマ）と呼ばれていたが、明治以降にキリスト教やイスラム教と区別された Buddhism という西洋起源の概念に対応する語として仏教という用語が使われるようになったといわれる。さて、武蔵野大学のケネス・タナカ名誉教授が四法印をシンプルな英語に訳している⁶ので紹介しよう。

諸行無常 人生は無常である。 Life is impermanent.

一切皆苦 人生は凹凸道である。 Life is bumpy road.

諸法無我 人生は縁起である。 Life is interdependent.

涅槃寂静 人生は根本的に良いものである。 Life is fundamentally good.

また、『感興のことば』「第1章 無常」の冒頭には、「諸行無常」について、「諸のつくられた事物は実に無常である。生じ滅びる性質のものである。それらは生じては滅びるからである。それらの静まるのが、安楽である。」(三)⁷と説かれている。続く箇所では、無常の事態が次のように描き出されている。

「朝には多くの人々を見かけるが、夕べには或る人々のすがたが見られない。夕べには多くの人々をみかけるが、朝には或る人々のすがたが見られない。」(七)

「「わたしは若い」と思っている、死すべきはずの人間は、誰が(自分の)生命をあてにしているよいだろうか? 若い人々でも死んで行くのだ。—男でも女でも、次から次へと—。」(八)⁸

つまり、世界の一切は無常であり(諸行無常)、それを生じさせているのは我ならざるものである(諸法非我)のに、その仏教的真理を理解せず、愛着・執着のこだわりに囚われる人は、苦しみから逃れられない(一切皆苦)と考えるのが三法印である。『ゴータマ・ブッダI』⁹には以下のように述べられている。

わたくしのさとしたこの真理は深淵で、見がたく、難解であり、しずまり、絶妙であり、思考の域を超え、微妙であり、賢者のみよく知るところである。ところがこの世の人々は執着のこだわりを楽しみ、執着のこだわりに耽り、執着のこだわりを嬉しがっている。さて執着のこだわりを楽しみ、執着のこだわりに耽り、執着のこだわりを嬉しがっている人々には、<これを条件としてかれがあるということ>すなわち縁起という道理は見がたい。・・・すべての執着を捨て去ること、妄執の消滅、貪欲を離れること、止滅、やすらぎ(ニルヴァーナ)というこの道理もまた見がたい。

ではいかにすれば『真理のことば』における「清らか」、『感興のことば』における「安楽」ないしは『ゴータマ・ブッダI』における「やすらぎ(ニルヴァーナ)」に到達できるのだろうか。そのことについては次節で述べよう。

(2) 苦しみからの解放の理論と涅槃寂静

『ブッダのことば』(スッタニパータ)「第三 大いなる章 十二 二種の観察」には、次のように説かれている。

「苦しみを知り、また苦しみの生起するもとを知り、また苦しみのすべて

残りなく滅びるところを知り、また苦しみの消滅に達する道を知った人々、
— かれらは、心の解脱を具現し、また智慧の解脱を具現する。」(七二六、七二七)¹⁰

また、『ブッダのことば』(スッタニパータ)「第四 八つの詩句の章 一 欲望」には次のように述べられている。

「欲望をかなえたいと望んでいる人が、もしもうまくゆくならば、かれは
実に人間の欲するものを得て、心に喜ぶ。

欲望をかなえたいと望み貪欲の生じた人が、もしも欲望をはたすことができなくなるならば、かれは、矢に射られたかのように、悩み苦しむ。

足で蛇の頭を踏まないようにするのと同様に、よく気を付けて諸々の欲望を回避する人は、この世でこの執着をのり超える。」(七六六～七六八)¹¹

「無力のように見えるもの(諸々の煩悩)がかれにうち勝ち、危い災難がかれをふみにじる。それ故に苦しみがかれにつき従う。あたかも壊れた舟に水が侵入するように。

それ故に、人は常によく気をつけていて、諸々の欲望を回避せよ。船のたまり水を汲み出すように、それらの欲望を捨て去って、激しい流れを渡り、彼岸に到達せよ。」(七七〇、七七一)¹²

同じく、『ブッダのことば』(スッタニパータ)「第五 彼岸に至る道の章 五、学生メッタグーの質問」では、次のように説かれている。

「世の中にある種々様々な苦しみは、執着を縁として生起する。実に知ることなくして執着をつくる人は愚鈍であり、くり返し苦しみに近づく。だから、知ることあり、苦しみの生起のもとを観じた人は、再生の素因(=執着)をつくってはならない。」(一〇五〇、一〇五一)¹³

同様に、怒りについても、『感興のことば』「第二〇章 怒り」において、次のように述べられている。

「怒りを捨てよ。慢心を除き去れ。いかなる束縛をも超越せよ。名称と形態とに執着せず、無一物となった者は、苦悩に追われることがない。

怒りが起こったならば、それを捨て去れ。欲情が起こったならば、それを防げ。思慮ある人は無明を捨て去れ。真理を体得することから幸せが起こる。」(一、二)¹⁴

このように、欲望を回避し、怒りを捨て、執着を手放すことによってこそ、安楽・安らぎは得られるのである。言い換えれば、「諸行無常」「諸法非我（諸法無我）」を理解し、「一切皆苦」を離れることができれば、「涅槃寂静」に到達できると説くのが仏教の根本的真理（仏法、ブッダ・ダルマ）である。

3. 仏教における幸福観とウェルビーイング

（1）慈悲に基づいて成立する仏教的幸福観

また、仏教の書物にはウェルビーイングに関連すると考えられる言及が少なくない。このため、本節では仏教において幸福感とウェルビーイングについて言及されている部分について述べよう。

『ブッダのことば ―スッタニパーター―』「第一 蛇の章 八、慈しみ」に次の一節がある。

「いかなる生物生類であっても、怯えているものでも強剛なものでも、悉く、長いものでも、大きなものでも、中くらいのものでも、短いものでも、微細なものでも、粗大なものでも、目に見えるものでも、目に見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。」（一四六、一四七）¹⁵

「あたかも、母が己が独り子を命を賭けても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）ところを起すべし」（一四九）¹⁶

ここには、すべての生きとし生けるものの幸せを願うブッダの思いが込められている。すなわち、初期仏教における慈しみの思想である。

（2）大乘仏教の慈悲

初期仏教における慈しみの思想は、大乘仏教においてさらに豊かに展開する。すなわち、四無量心（慈悲喜捨）あるいは大悲・中悲・小悲などの区別も説かれるようになる。「慈」とは他者へ安楽を与えること、「悲」とは他者の苦しみを抜くこと、「喜」とは他者の安楽をともに喜ぶこと、「捨」とは対象に執着なく平等無差別に慈悲の実践をすることである。

大乘仏教では、無分別智の重要性が強調される。分別、分離、分析に基づく思考（分別智）によって近代以降の執着追求容認型社会は発展したのであるが、それに対し、そもそも仏法（仏教的真理）は言語化され分析されうる事態を超えており、それを把握する智慧としての無分別智に至ったのが大乘仏教である。例えば禅宗では「不立文字」と言われる。文字では表せない、という考え方である。また、浄土真宗をはじめとする浄土教では、涅槃寂靜を言葉で表し得ないばかりか、そもそも人間は簡単には涅槃寂靜には至れないという凡夫（愚かな者、無知な者、凡庸な人、一般の人）としての自覚が強調される。もちろん、仏教の根本的真理の理解と実践のために高邁な志を抱くことも重要であるが、それと同時に、自己の欲望充足に向けた飽くなき衝動に導かれ、暴走してしまう本性を自覚し、その凡夫が凡夫でありつつ、いかに仏道完成の歩みが続けていくかという、非常に謙虚かつ誠実な自己存在の在り方を深く見つめる自覚が強調される。浄土教の流れ、とりわけ親鸞の浄土思想においては、阿弥陀仏の本願力回向によって、自己の有限性の限界に気づかされ、さらには有限性を越えた世界へと生まれていくという、究極の他力思想が表明されている。

たとえば、親鸞の『一念多念文意』¹⁷には、以下のように述べられている。

凡夫はすなはちわれらなり。（中略）凡夫といふは、無明煩惱われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水（水の河は貪欲の例え）火（火の河は怒りの例え）二河のたとへにあらはれたり。

自己の有限性の深遠な自覚を通し、それを超える無限なる存在に開かれようとする、仏教思想の究極的な発展形態である。仏法がインドから中国を経て日本に伝来し、長い年月をかけ、様々な思惟を経て、人間心理のあらゆる面を吟味した結果として到達した境地がそこにある。すなわち、人間は悟りたくても悟れない。煩惱と愛欲に悩まされる。仏教的真理を実現すべきなのに、頭ではわかって、実践できない。生きとし生けるものを救う慈悲を根本思想の一つとする仏教は、そんな人をも救いの対象とするのである。自分は煩惱がある人（悪人、ないしは凡夫）であると自覚するとともに、その上で仏法を会得しようとする人こそが、阿弥陀如来（アミターバ、はかりしれない光を持つもの、

真理に目覚めたもの)により救われると考えるのである。以上が、大乘仏教の、特に浄土真宗の、慈悲と願いの思想である。

(3) ブッダの説くこよなき幸せ

ここまで慈悲と幸せの関係について述べてきた。ここでは、仏教の智慧(根本的真理)と幸せの関係について述べる。

『ブッダのことば』「第二 小なる章 四 こよなき幸せ」においては、こよなき幸せとして次のように説かれている。

「諸々の愚者に親しまないで、諸々の賢者に親しみ、尊敬すべき人々を尊敬すること、—これがこよなき幸せである」(二五九)¹⁸

この箇所が続いて、深い学識があること、技術を身につけ、身をつつしむことをよく学ぶこと、父母につかえること、仕事に秩序あり混乱せぬこと、ほどこしを行うこと、親族を愛し護ること、非難を受けない行為につとめること、悪をやめ悪を離れ飲酒をつつしみ、徳行をゆるがせにしないこと、尊敬と謙遜と満足と感謝、教えを聞くこと、耐え忍ぶこと、ことばのやさしいこと、諸々の〈道の人〉に会うこと、理法についての教えを聞くことなどがこよなき幸せとして説かれている。世俗の中での、人間関係、社会生活についても、節度を保ちつつ行動することが説かれており、中村元の注によると、この章は南アジアにおいては、「大いなる幸せを説いた経」としてよく読誦されているということである。また、「この短い一節は、〈人生の幸福とは何か〉をまとめて述べている。いわば釈尊の幸福論である」¹⁹とも解説されている。したがって、ブッダの幸福論は、出家して修行生活を送るものだけを対象として説かれているものではなく、世間的、日常的な生活を送る中で、幸せな生活がどうあるべきか、という点に十分な配慮がなされていることがわかる。

その上で、最後の箇所では次のように述べている。

「修養と、清らかな行いと、聖なる真理を見ること、安らぎ(ニルヴァーナ)を体得すること、—これがこよなき幸せである。

世俗のことがらに触れても、その人の心が動揺せず、憂いなく、汚れを離れ、安穩であること、—これがこよなき幸せである。」(二六七、二六八)²⁰
 こうした道は出家者にしか歩めないのだろうか。仏教の歴史の事実、そうで

はないことを明らかに示している。「聖なる真理を見ること」、「安らぎ（ニルヴァーナ）を体得すること」、動揺・憂い・煩悩のほしいままの暴走を離れて心が「安穏であること」などが仏教の目指す最終的な幸せのゴールに設定されていることは明らかである。

このような仏教的幸福観は、『ブッダのことば ―スッタニパーター―』「第二小なる章 一、宝」においても、次のように述べられている。

「心を統一したサキヤムニは、（煩悩の）消滅・離欲・不死・勝れたものに到達された、—その理法と等しいものは何も存在しない。このすぐれた宝は理法のうちに存する。この真理によって幸せであれ。

最も勝れた仏が讃嘆したもうた清らかな心の安定を、ひとびとは「〔さとりに向かって〕間をおかぬ心の安定」と呼ぶ。この〈心の安定〉と等しいものはほかに存在しない。このすぐれた宝は理法の（教え）のうちに存する。

この真理によって幸せであれ。」（二二五、二二六）²¹

この箇所においても、ブッダの幸せは、煩悩の生滅、欲望からの解放によって、死をはじめとした苦しみの事態から自由になった状態、心が安定的に統一され、真理に導かれた幸せであることがわかる。また、「第二 小なる章 九、いかなる戒めを」においても、真理について、次のように説かれている。

「真理を楽しみ、真理を喜び、真理に安住し、真理の定めを知り、真理をそこなうことばを口にするな。みごとに説かれた真実にもとづいて暮らせ。」（三二七）²²

『ブッダのことば』に説かれる仏教の真理観を集約すれば、ブッダが目覚めた真理、ブッダによって説かれた真実の理法を拠り所として生きていくということが苦しみからの解放、この上なき心の安定を実現していく上で決定的に重要なメッセージであり、また「真理によって幸せであれ」という言葉こそが仏教的幸福論の結論ともいえよう²³。

4. 仏教的ウェルビーイング学と科学的ウェルビーイング学の響創の可能性 —仏教的真理からの演繹、科学からの帰納および両者の響創による未来創造の仮説形成—

（1）仏教と現代諸科学の類似点と相違点

（a）諸行無常と諸法非我

ここでは、これまでに述べてきた仏教の本質と、自然科学、人文科学、社会科学、特にウェルビーイング学との類似点及び相違点を整理したい。

まず、「諸行無常」と「諸法非我」、あるいは縁起の思想が、現代の科学的 세계觀に通じ得ることについて述べたい。

近代以降の科学、主に自然科学と社会科学は、物事を分解し、分析し、要素還元論的に部分を明確に理解するとともに、それを積み上げることによってさまざまな物事は理解できる、という考え（分別智）に基づいている。ただし、科学的な分析の結果、量子力学、複雑系の科学、脳神経科学、人工知能など、要素の積み上げだけでは説明できない現象がこの世界には存在することが科学的に明らかにされている²⁴。つまり、今も科学の手法は要素還元論的であるが、しかし、最先端科学の一部は要素還元論からの帰納（部分からの全体の推測）によって全体的世界觀についての科学的事実を導き出しつつあるのである。たとえば光は粒子としての性質と波動としての性質を併せ持つため、光は粒子なのか波動なのかという問いに答えはない。あるときには粒子の性質を示し、あるときには波動の性質を示すのであって、“粒子”および“波動”という表現自体が本来物理現象に対する近似的な定義に過ぎないというべきなのである。また、複雑系の科学によれば、すべての物事は相互作用し合っていて、その挙動は要素の積み上げでは説明できない複雑さを示すことが知られている。脳神経科学による自由意志に関する実験結果を説明するには、心が自由意志によって意思決定をしているということ自体を疑わざるを得ない（受動意識仮説²⁵）。近年の人工知能では、生物の神経回路網を模倣したニューラルネットワークによるディープラーニングという手法が用いられるが、もはやニューラルネットワークの優れた挙動を論理的に説明し尽くすことはできない。いずれも、二項対立的な分類・分析・分別による科学的手法には限界があることを科学自体が実証して見せるとともに、部分的理解からの帰納によって全体理解を深める可能性を示した事例である。

これらの現代科学の知見は「諸行無常」および「諸法非我」に近似している。一切の物事はさまざまな相互作用の結果、移り変わっているのであって、光は粒子ないし波動に留まるものではないし、物事の相互作用を司る自由意志のよ

うなものが確固として存在すると言い切ることは困難であり、さまざまな相互作用は自己という主体が司ると考えない時に脳神経科学の研究結果は説明できるのである。

ただし、科学が解を導き出すやりかたはあくまで要素還元論的・部分的現象理解からの全体の帰納である。たとえば、複雑系の科学は、非線形二元二次連立方程式がカオスの挙動を示すことから、世界全体も複雑系であることを帰納する。ニューラルネットワークという関係性に基づく人工知能のディープラーニングが囲碁や将棋で人間に勝ったことから、世界全体も関係性により成り立っていることを帰納する。こうした事例は、「諸行無常」や「諸法非我」という仏教的真理が、現代諸科学の個々の方法によって個別に明らかにされ、全体として追認されつつあることを示していると考えられる。

(b) 一切皆苦および仏教の幸福感

次に「一切皆苦」および仏教の幸福感は現代の科学とどのような関係にあるかについての考えを述べたい。

「諸行無常」および「諸法非我」は現実世界について論じるのに対し、「一切皆苦」はそれらを受け入れがたい人間の心の状態を述べているので、両者は範疇が異なる。科学の側から単純化して見ると、物理学の対象であるか、心理学の対象であるかという違いがあるといえよう。すなわち、先ほどから述べてきたように、「諸行無常」および「諸法非我」は物理現象に対する現代の先端科学と整合する。一方、私たちの心が感じているものはどのようなものであるかという問いは現代科学の中では主に心理学が扱ってきた問いである。フロイト、ユング、マズロー、アドラーの頃の心理学は哲学の一分野であったが、コンピュータが発展し、統計学により実証科学的に人の心を扱えるようになって以来、心理学（の一部である実証主義的な心理学）は科学の対象となった。すなわち、現代の実証主義的な心理学とは、人の心の振る舞いの特徴を要素還元論的に明らかにするものである。このような、分析的な科学の立場からは、「一切」という全体的な議論は行えない。行えるとしても、(a)と同じく帰納によってしか論じられない。よって、一切が全て苦であるというような哲学的・宗教的な結論は、自然科学・社会科学的な研究（実証的な心理学も含む）

からは導けず、できるとしても、(a)と同様に A は苦である、B もまた苦である、などの要素還元的な事実の積み上げから、多くのことは苦であるに違いない、と帰納するところまでが科学の限界である。なお、前出のケネス・タナカ名誉教授が行ったように一切皆苦を Life is bumpy road と平易に英訳するならば、現代科学・心理学のみならず一般的な人生観と一切皆苦がより近接すると考えることもできる。

心理学における主観的幸福 (subjective well-being) 研究により、多くの部分的事実が知られている。なお、統計学に基づく心理学の研究手法は帰納的である。たとえば、誠実さと幸福度を多くの人にアンケート調査し、その結果を統計処理すると、誠実さと幸福度とは中程度の相関を有することがわかる。つまり、統計的に、調査対象者のうち、多くの誠実な性格の人は幸せな傾向があることが明らかにされる。ここから帰納して、「誠実な人は幸せである」に違いない、という科学的帰結が導かれる。哲学・思想や宗教が演繹的に議論を進めることを基本とするのとは逆の道筋である。

主観的幸福研究により、多くの統計的研究結果が既に導かれている。金銭欲、物欲、名誉欲による幸せは長続きしない。視野の広い人は幸せである。多様性を受け入れる人は幸せである。利他的で親切な人は幸せである。寛容な人は幸せである。自分の個性や境遇を受け入れ、ありのままに生きる人は幸せである。健康な人は幸せである。成長意欲が高く、何かを身につける人は幸せである。満足する人は幸せである。感謝する人は幸せである。辛いことを乗り越えた人は幸せである。怒ったり、イライラしたり、落ち込んだりしにくい人は幸せである。慈悲の心を持ち、今ここを大切に生きて生きる人は幸せである。大きな目標を立てすぎる人よりも、自分にできる範囲で満足する人の方が幸せである。

これらの結果は、前に述べた仏教的幸福感とよく似ている。つまり、(a)と同様、科学は、部分の積み上げという帰納的な方法により、仏教の述べてきた幸福感を一つずつ追認しているといえることができる。よって、科学的な研究の積み上げと帰納によって、四法印に代表される真理に接近していくことや、「すべての生きとし生けるものの幸せを願う」という慈悲の想いに接近していくことは可能であると考えられる。

また、主観的幸福研究とは、言い換えれば、主観的不幸研究である。上に羅

列した幸福研究結果は、以下のように言い換えることもできる。

不誠実な人は不幸せである。金銭欲、物欲、名誉欲に囚われすぎることは不幸せである。視野の狭い人は不幸せである。多様性を受け入れない人は不幸せである。利己的で自分勝手な人は不幸せである。寛容でない人は不幸せである。自分の個性や境遇を受け入れられず、ありのままに生きられない人は不幸せである。不健康な人は不幸せである。成長意欲が低く、新たに学ばない人は不幸せである。満足しない人は不幸せである。感謝しない人は不幸せである。辛いことを乗り越えない人は不幸せである。怒ったり、イライラしたり、落ち込んだりする人は不幸せである。慈悲の心を持たず、過去と未来を憂いながら生きる人は不幸せである。大きな目標を立てすぎ、自分にできる範囲で満足しない人は不幸せである。

このように、主観的幸福研究は、主観的な不幸ないしは苦しみについて要素還元論的に明らかにしてきたということもできる。ここから帰納的に導けることは、幸せ（ウェルビーイング）に留意して生きないと、多くのことは苦であり、人生は凸凹道であるという帰結である。「一切皆苦」とは言えないが、「多くのことは苦」であるというところまでは到達できる。この違いは、これまでの比較と同様、帰納的手法によって部分から全体を述べることと、宗教や哲学が基本的に用いることの多い演繹的な方法の違いに基づいているといえよう。重要な点は、方法論が異なるとはいえ、科学の側がここでも仏教の真理にある程度は近づいてきているという点である。

つまり、ウェルビーイングの科学を学ぶことのみによっては、最後まで「一切皆苦」そのものを科学的に明らかにすることはできないが、「多くのことは苦であるから、それをいかにして超えるかを考えるべきである」というところまでは到達できる。一切皆苦に漸近することはできるのである。よって、仏教の真理とウェルビーイングの科学の両者を学ぶことによって、仏教の真理とウェルビーイングの科学双方の理解を深めるとともに、これをベースにしてウェルビーイングに溢れた世界を創造的にデザインしていくことが可能になると考えられる。伝統的な仏教のアプローチと現代科学のアプローチとの響創による新たな知の創発を通して、仏教の智慧を未来社会に開き出してゆく企図である。

(c) 慈悲・愛欲・愛について

現代日本人が知っておくべき重要な論点であると考えるので、慈悲と愛の関係についての考察を行う。日本では、「愛」という単語はもともと愛欲・愛着という意味であった。仏教では、愛はアーラヤ（執着・愛着のこだわり）の一相であることが強調される。

一方で、近代に入り、諸外国の概念を和訳する必要性により、愛は英語の「love」の意味も含むようになり、現代に至る（love は当初、愛ではなく御大切と訳されていたことから、love は従来の愛の概念とは同一ではないことがわかる）。その過程で、現代一般用語としての愛は、古代ギリシャやキリスト教の愛の概念も含む一般用語として用いられるようになった。古代ギリシャにおいては、愛には四つの相があると考えられる。エロス（性愛）、ストルゲー（家族愛）、フィリア（友愛）、アガペー（古代ギリシャでは普遍的な愛、キリスト教では神による無限・無償の真の愛）である。エロス、ストルゲー、フィリアは仏教における愛欲・愛着という意味も含むと考えられるが、アガペーはむしろ対人執着的な意味は持たず、人類愛、無償の愛、真の愛という意味を持つため、その古代ギリシャにおける本来の意味は、むしろ仏教における重要概念である慈悲に近い、ないし少なくとも執着・愛着からは離れた意味の単語と考えることもできるのではないだろうか。菅原ら²⁶による心理学に基づく主観的ウェルビーイング研究においては、クラスター分析の結果、日本語における思いやり（慈悲、compassion）と愛情（love）は、感嘆、畏敬・尊敬、和み・喜び、意気込み、誇りなどの他のポジティブ感情に比べて近い概念であることが示されている。一方、欧米では、love と compassion を別の概念と捉える研究²⁷も存在する。玉城²⁸は、新約聖書の愛（アガペー）と原始仏典の慈悲とを比較し、大枠での同一性、類似性を認めつつ、違いも述べている。よって、仏教用語、心理学用語、現代一般用語の「愛」には、定義やニュアンスの違いがあることに注意が必要であるといえよう。

以上に述べてきたように、愛という一般用語には、煩惱・愛着を表す面と、思いやり・慈悲に近いニュアンスを持つ面があると考えられるので、使用される文脈に応じて注意深く用いるべき概念であるというべきであろう。

(d) 凡夫の自覚と他力

浄土真宗では、その自己観は凡夫としての限界性の自覚に基づく謙虚かつ誠実な自己観であり、その限界は阿弥陀仏の他力によって突破され则认为。

(a)(b)と同様な理由により、このような真理観に対して直接的に対応する科学的研究結果は見られないが、この真理観を部分的に支持する研究結果には様々なものがある。

筆者が提唱し、多くの脳神経科学研究結果と整合する受動意識仮説²⁹では、私たちの自由意志は幻想であり、その意思決定は脳の無意識的な情報処理結果に随伴すると考えられる。すなわち、そもそも自己のみによる決定などないと考えるのである。

また、先ほど述べた主観的幸福研究結果の中に、「大きな目標を立てすぎる人よりも、自分にできる範囲で満足する人の方が幸せである」という興味深い研究結果がある。自分だけの力で大志をなさんとするよりも、自分の小ささを自覚する方が幸せという結果は、自身の現実の姿に目覚めさせようとする浄土真宗の自己観に似ている面がある。

さらに、産業革命以来の人間中心主義そのものも、人間が自力で新たな世界を構築できるという思い上がりに基づいていると見ることもできる。様々な課題に直面する現代社会において、本来人間は世界の一部に過ぎず、自己のみの力で成し遂げることなどないという限界性の自覚に基づく謙虚さと誠実さが求められているというべきではないだろうか。もちろん、人間存在の真理としての他力と、世界構築の意思としての自力志向の行きすぎへの警鐘とを混同すべきではないものの、両者はアナロジーとして類似している面もある。このことは、科学・工学によってウェルビーイングに関する部分的課題解決に対応するとともに、社会デザインの基盤として仏教真理を生かすというあり方の可能性を表していると考えられる。

以上のように、浄土真宗の基本としての他力と、現代科学から導かれる局所的な知見を比較すると、さらに両者の距離を縮める努力がなされるべきであると考えられるものの、両者の対話を重ねることが人類のより良いあり方(ウェルビーイング)への歩みに貢献できる可能性を示唆していると考えられる。

これまでに述べてきたことを図1にまとめる。四法印などの真理からの演繹

として論じることが基本とする仏教的ウェルビーイングが部分の蓄積として論じられる科学的ウェルビーイングなどの科学からの帰結を構造として包含する関係にあることがわかる。

なお、現代西洋哲学が、構造主義（すべてのことは要素ではなく構造に基づいているという考え方）、ポストモダン（分析、分解、分別へのアンチテーゼ）、ニヒリズム（すべては無であるという考え方）に至ったことは、科学が分析、分解、分別の限界を発見したことと呼応している。現代において分別智に基づいて発展してきた西洋哲学も、仏教真理に近接しつつあるというべきかもしれない。

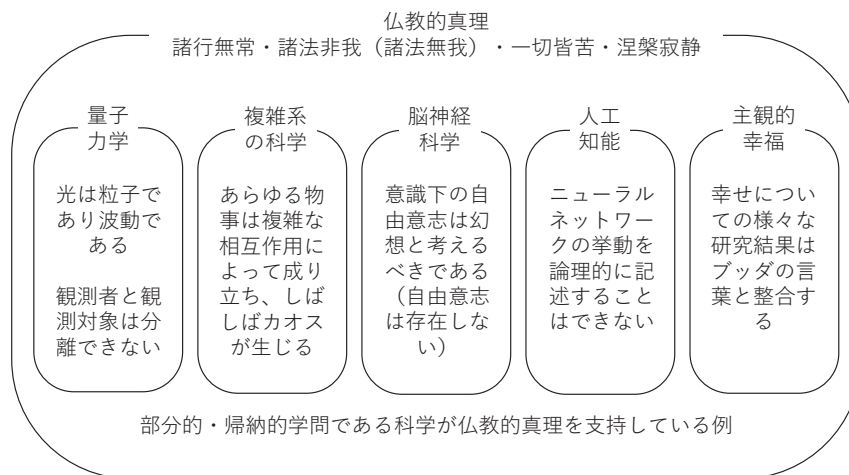


図1 仏教的真理・しあわせと科学的帰結の関係

（2）仏教的ウェルビーイングと科学的ウェルビーイングの響創の必要性

産業革命以降の 250 年間、科学による発明・発見は人間生活を利便・快適にし、衣食住における満足度を高めてきた。しかしながら、このような「文明発展」のスタイルによっては、一部の人間の欲望を優先的に充足することは可能でも万人の際限なき欲望の安定的充足は不可能であること、欲望充足を願う人々の欲望への執着が、自己を中心とした広がりの中で必然的に他の人々、集団の抱く異なる好悪、欲望と矛盾を来し、衝突することによっておびただしい憎悪、差別、紛争、戦争、殺戮などの事態を引き起こす可能性があること、人間中心主義の蔓延により人間以外の生態系や地球環境への配慮がなごりにされ、生態系や地球環境の不可逆的破壊に足を踏み入れつつあることなど、様々な解決困難な事態を科学が因となり縁となって生起させてきたことを直視

すべきであろう。

近代以降の人類は、二項対立的思考や分析的アプローチに偏りすぎたことにより、全体性を喪失してきたと考えることができる。ただし、前節で述べたように、量子力学、複雑系の科学、脳神経科学、人工知能、主観的幸福研究などの最先端科学は、分析的アプローチからの帰納により全体にアプローチする可能性を模索中である。中でも、人類のウェルビーイングのために重要な分野であるにもかかわらず未だ発展途上にあるのがウェルビーイングの科学である。

「生きとし生けるものが幸せな世界」を願い、執着から生じた現代社会の課題を離れて仏教の理想実現に近づくためには、真理からの演繹を基本とする仏教的ウェルビーイングと、要素から積み上げて帰納する科学的ウェルビーイングについて、両者の専門家がともに学び、両者の役割分担を明確に理解することに基づいて、新たな学問を創造的に構築するとともに、その学問を多くの人に教育し社会に広めていくアプローチが不可欠であると考えられる。

ここでキーとなるのは、執着なきイノベーションであると考えられる。仏教では、執着から離れることを説く。一方で、グローバル 이슈が山積する現代社会を変革するためには、イノベーションを引き起こし、世界の幸せをカタチにする強い意志が求められる。後者は、よりよい社会を自らが創ることへの執着であるように見えるかもしれないが、そうではないあり方が可能である。己の力のみを根拠にし、他人に打ち勝つことへの欲望をドライビングフォースとして社会変革を志すのではなく、自己の限界を自覚した上で、謙虚かつ誠実に、生きとし生けるものにとっての幸せな世界を志すという、無私・無欲なあり方での自己変革からの社会変革を志向するなら、両者は矛盾しない。「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」が近現代の経済成長第一主義的社会拡大の契機となったと考えられるのに対し、これからの時代には、「ブディズムの真理とポスト近代資本主義の科学」こそが、時代をリードすべきなのではないだろうか。このことによってこそ、産業革命以来の文明の大転換と、生きとし生けるものが幸せな世界への抜本的な改革が成し遂げられるであろう。

なお、演繹 (deduction)、帰納 (induction) の両者からアプローチするからこそ、その融合としての仮説形成 (abduction) が創出される結果として、執着なきイノベーションの実現を目指すことが可能となる点が重要である。すなわ

ち、仏教真理からの演繹的説明の理解と実践（仏教的ウェルビーイング学）、科学的ウェルビーイングからの帰納的探求（科学的ウェルビーイング学）、そして創造的イノベーションのための仮説形成とその実践（執着なきイノベーションに基づくウェルビーイング学の統合と世界の変革）の3つを、基礎から応用展開まで、体系的に教育・研究・実践していくことが、これからの自己変革・社会変革のために必要不可欠な考え方・やりかたであると考えられる。言い換えれば、演繹、帰納、仮説形成の響創によってこそ、統合されたウェルビーイング学は、現代社会において機能する実践的智慧になりうる。

なお、本書の主題からは若干離れるものの、ウェルビーイングの響創のためには、演繹（deduction）、帰納（induction）、仮説形成（abduction）の3つに加えてもうひとつの柱が必要であることについて述べたい。実践に基づく感性の陶冶である。

人類は古来自然の一部として生きてきた。仏教が人間中心主義を超えて生きとし生けるものの幸せを願うのはその表れである。ところが、近現代社会において、人類は自らが作り上げた都市文明や欲求充足社会に依存し過ぎた結果として全体性・無分別性を喪失しかけていることは前述の通りである。人間と人間以外を分断する人間中心主義を超え、全体性・無分別性を取り戻すためには、自然体験や農林水産業体験のような、世界と触れ合う機会が重要である。すなわち、図2に示したように、ウェルビーイング学の協創のためには、4つの柱が重要であると考えられる。このため、2024年4月に発足したウェルビーイング学部では、これら4つの柱に基づいたカリキュラムを構築している。

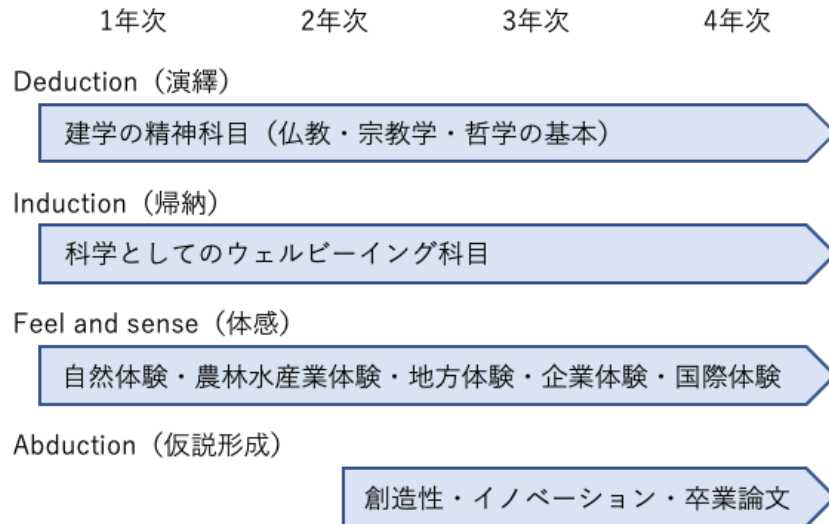


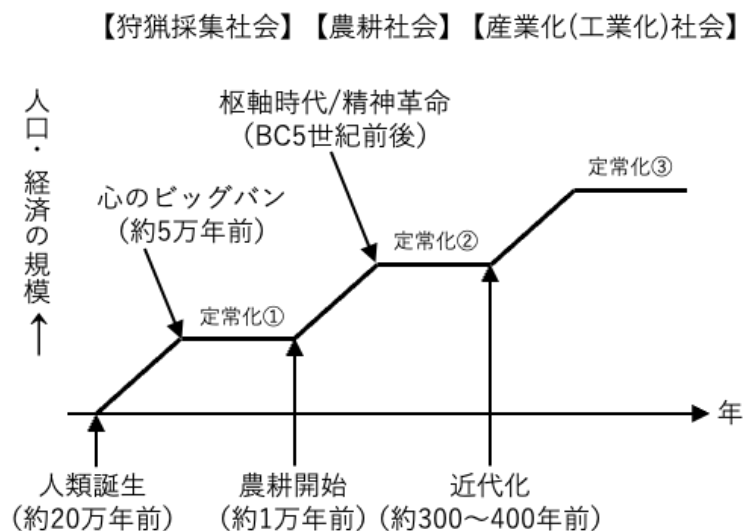
図2 ウェルビーイング学の響創のための教育カリキュラムのイメージ図

(3) ウェルビーイング学統合の歴史的意義

ウェルビーイングの響創は、人類に新たな地平をもたらすであろう。このことをマクロな視点から捉え直すために、人類史を俯瞰してみよう。広井³⁰によると人口・経済の規模は3度の成長期と踊り場を迎えている(図3)。1度目の成長と踊り場は狩猟採集社会のものであり、踊り場が始まった頃の時代は「心のビッグバン」と呼ばれ、洞窟の壁画や縄文土器など、人類がアートを広く残した時代であると言われる。2度目の成長と踊り場は農耕革命後のものであり、踊り場を迎えた紀元前5世紀は枢軸時代と呼ばれる。この時代は、ブッダの他、中国には諸氏百家、古代ギリシャにはソクラテスなどが出た時代であり、人類が広く思想・宗教を発展させた時代である。3度目の成長期は近代化と産業革命によるものであるが、環境問題、貧困問題、少子高齢化問題などが表面化していることからわかるように、産業革命後の成長は限界を迎え、3度目の踊り場に差し掛かるところであると考えられる。実際に日本では人口増加も経済成長も止まっており、世界に先駆けて3度目の定常化③社会に突入したとみることもできよう。

すなわち、過去の2度の踊り場は、それまでの経済成長第一の時代の行き詰まりを実感するとともに、だからこそ人間としての思惟を重ねた結果として、心の成長と思想・宗教・文化の発展に向かった時代であったということができよう。では、3度目の定常時代とはどのような時代なのであろうか。世界経済

フォーラムのクラウド・シュワブ会長は産業革命以来の「グレートリセット」と呼ぶ。革命家を自認するジョアンナ・メーシーは、農耕革命、産業革命に次ぐ3度目の「グレートターニング」と呼ぶ。大いなるリセットの時、大いなる転換の時。まさに産業革命以来の文明の大転換と抜本的な改革が進むウェルビーイングの時代である。このような時代に、2度目の成長後の踊り場の時期に花開いた思想である仏教と近代化以降に大きく発展した科学の響創に基づき新たな未来をデザインするウェルビーイング学が次なる大転換・抜本的改革時代のために有効であることは想像に難くない。特に、煩悩を離れるべきであることを説く仏教は、煩悩主導型経済成長第一主義的社会から定常型ウェルビーイング社会への変革を先導する思想として適切である上、ウェルビーイングの科学はそれを支えるとともに定常化時代のイノベーションを担う方法論として有効である。よって、両者を基盤とし、そこに感性の陶冶とイノベーションの実践を加えた4つの柱の響創は、人類に新たな地平をもたらす方法論になりうるものと考ええる。



5. 課題

今後の課題について述べる。まず、本論文では大乘仏教、特に浄土真宗の考え方と科学的ウェルビーイングの関係については簡単に触れるにとどまった。

今後は、両者の議論をさらに重ね、理解を深化させる必要があるだろう。特に、大乘仏教や浄土真宗において強調される慈悲の思想を理解するためには、縁起、空の思想、浄土、本願、菩薩の概念、阿弥陀仏の概念、大乘仏教と上座部仏教の相違点などについての深い議論が必要である。愛と慈悲の現代的理解や相違点についての議論も今後さらに深める必要があるだろう。さらに、宗教的ウェルビーイングと科学的ウェルビーイングをいかにして具体的に響創されていくべきか、といった根源的な議論を学際的に継続する必要があるだろう。以上のように課題は山積しているけれども、武蔵野大学ウェルビーイング学部が集まった多様なバックグラウンドを持つ教員陣と学生との活発な議論によって、これらの膨大かつ深淵な響創が深化していくものと考ええる。また、このことこそが、世界中の生きとし生けるものの幸せ実現への歩みとして日本の仏教思想および日本的ウェルビーイング学が世界に貢献する道程であると考ええる。

6. おわりに

本稿では、まず、仏教の基本的な考え方および仏教における幸福・ウェルビーイングの捉え方について述べた後に、現代科学、特にウェルビーイングの科学についての現状と、仏教的ウェルビーイングとの関係について述べた。また、感性の陶冶とイノベーション指向が仏教的ウェルビーイングと科学的ウェルビーイングの響創を加速することについても述べた。仏教的ウェルビーイングと科学的ウェルビーイングの学問を体系化し、共に学び、共に実践することによってこそ、生きとし生けるものが幸せに生きる未来の創造への道が拓けてくると考えられる。すなわち、自己のあり方と他者との関係性を諸行無常・諸法無我の視点から深め、一切皆苦から離れたくてもなかなか離れ得ない人間の未熟さを自覚し、それでも光り輝く理想を願い、そのために真の社会変革の成就を謙虚かつ誠実に目指すことによって。

謝辞

本論文は、武蔵野大学ウェルビーイング学部ウェルビーイング学科教員就任予定者のみなさんおよび武蔵野大学に関わる多くの専門家・実践者の方々のご助言に基づいて作成した。ご助言くださったすべての方々への謝意を表する。

注釈

- 1 ヴェーバー〔1989〕
- 2 海外の宗教事情に関する調査報告書、文化庁、2008年3月
- 3 中村〔1984〕、p. 37.
- 4 前野〔2022-a〕
- 5 中村元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』、岩波文庫、1978年第1刷、1995年第33刷、p. 49、(以下、中村〔1978〕と略称).
- 6 タナカ〔2014〕
- 7 中村〔1978〕、p. 161.
- 8 中村〔1978〕、p. 162.
- 9 中村〔1992〕、p. 444.
- 10 中村元訳『ブッダのことば ースッタニパーター』、岩波文庫、1984年、第1刷、2008年第48刷、p.157 (以下、中村〔1984〕と略称). 西本〔2021〕、p.158.
- 11 中村〔1984〕、p.174.
- 12 同、p.174.
- 13 同、p.221.
- 14 同、p.220.
- 15 中村〔1984〕、p. 37.
- 16 同、p. 38
- 17 『一念多念文意』（『浄土真宗聖典註釈版』、p. 693.）
- 18 中村〔1984〕、p. 58.
- 19 同、p. 306.
- 20 中村〔1984〕、pp. 58-59.
- 21 同、p. 51-52.
- 22 同、p. 69.
- 23 西本〔2021〕、p.163.
- 24 前野〔2010〕 pp.108-134.および前野〔2022b〕 pp.215-218.
- 25 前野〔2004〕
- 26 菅原〔2018〕

- 27 Fredrickson〔2009〕、Sauter〔2017〕
- 28 玉城〔1975〕、p. 35
- 29 前野〔2004〕
- 30 広井〔2019〕 ないしは前野〔2022-a〕 p. 31.、前野〔2022-b〕 p. 229.
- 31 広井〔2019〕 ないしは前野〔2022-a〕 p. 31.、前野〔2022-b〕 p. 229.

参考文献

- ヴェーバー〔1989〕：マックス・ヴェーバー (1989)、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫
- 丘山新・丘山万里子〔2005〕：丘山新・丘山万里子 (2005)、『アジアの幸福論』、春秋社
- 『浄土真宗聖典（註釈版）』〔1988〕：『浄土真宗聖典（註釈版）』、本願寺出版社、1988 年初版、2004 年第二版
- 菅原〔2018〕：菅原大地、武藤世良、杉江征 (2018)、ポジティブ感情概念の構造－日本人大学生、大学院生を対象として－、心理学研究、第 89 巻 第 5 号、pp. 479– 489
- タナカ〔2014〕：ケネス・タナカ (2014)、仏教に目覚めるアメリカ人－現代化する日本社会（仏教・真宗）への示唆となるか？ <https://www.okazaki-kyoku.net/library/pdf/speech01.pdf>
- 玉城康四郎〔1975〕：玉城康四郎 (1975)、「愛に関する新約聖書と原始経典」『仏教思想、I、愛』、平楽寺書店
- 中村〔1978〕：中村元訳 (1978)、『ブッダの真理のことば 感興のことば』、岩波文庫、1978 年第 1 刷、1995 年第 33 刷
- 中村〔1984〕：中村元訳 (1984)『ブッダのことば ースッタニパーター』、岩波文庫、1984 年第 1 刷、2008 年第 48 刷
- 中村〔1992〕：中村元選集 (1992)、『ゴータマ・ブッダ I』（中村元選集[決定版]第 11 巻)、春秋社
- 西本〔2021〕：西本照真 (2021)、「ブッダの言葉に見る不可避の老病死としあわせ」（西本照真・一ノ瀬正樹編『病災害の中のしあわせ 自然災害とコロナ問題を踏み分けて』第 7 章（武蔵野大学しあわせ研究所叢書①）、武蔵野大学出

版会

前野〔2004〕：前野隆司（2004）、『脳はなぜ「心」を作ったのか ―「私」の謎を解く受動意識仮説』、筑摩書房

前野〔2010〕：前野隆司（2010）、『思考脳力のつくり方―仕事と人生を革新する四つの思考法 』、角川ワンテーマ 21（新書）

前野〔2022-a〕：前野隆司・前野マドカ（2022）、『ウェルビーイング』、日経文庫

前野〔2022-b〕：前野隆司（2022）、『ディストピア禍の新・幸福論』、プレジデント社

広井〔2019〕：広井良典（2019）、人口減少社会のデザイン、東洋経済新報社

Fredrickson〔2009〕：Fredrickson, B. L. (2009). Positivity: Groundbreaking research reveals how to embrace the hidden strength of positive emotions, overcome negativity, and thrive. New York: Crown.

Sauter〔2017〕：Sauter, D. A. (2017). The nonverbal communication of positive emotions: An emotion family approach. *Emotion Review*, 9, 222–234.

【査読論文】

サステナブルキャンパスの実現を目指して ～ Impact Rankings 分析と事例研究の視点から～

田中 笑子（武蔵野大学 看護学部）

鈴木 菜央（武蔵野大学 工学部）

明石 修（武蔵野大学 工学部）

要約

気候変動など世界的課題に対して、人々の未来をより良いものにするために大学として貢献することが求められている。この論文の目的は、世界の動向、国内の動向を整理し、本学の位置を確認するとともに、世界的課題の解決に貢献し世界の幸せをカタチにする人材の育成（ハピネスクリエーター）のために求められる取り組み、効果的と考えられる取り組みについて本学の活動と特徴を踏まえて検討することである。

Times Higher Education が発表している Impact Rankings は世界の大学のSDGs への貢献度を評価するものであり、本論文では Impact Rankings に着目して分析と事例研究を行った。大学ごとに戦略や強みなど異なる特徴がみられた一方、上位校はホリスティック（包括的）な視点に立ち、原則・理念を日常生活に落とし込むところにまで至っている点が特徴的であった。本学の理念でもある「四弘誓願」はまさにホリスティックな視点に立つものであり、現在の教育研究活動を発展させることを通じて、上位校同様に理念を個別の活動展開として落とし込み、「いきとし生けるものが幸せになるために」その響創者を育成し、実現していくことが期待される。

1. はじめに

私たちの暮らす地球環境について、Richardson ら（2023）は、気候変動、海洋の酸性化、成層圏のオゾンの破壊、窒素とリンの循環、世界的な淡水利用、土地利用の変化、生物多様性の損失、大気エアロゾルの負荷、化学物質による汚染という9つの「地球の境界（プラネタリー・バウンダリー）」のうち6つが、人々が将来の世代に向けて発展と繁栄を続けられる境界（閾値）を超えていると警鐘

を鳴らしている。このような環境問題に加えて、戦争、格差、コミュニティの希薄化、心の問題など現代社会が抱える課題を克服し、生けるものがいきいきと幸せに暮らすことのできる世界の実現は SDGs に代表される、目指すべき方向性である。これまでの還元主義的な世界観、人間観から、ホリスティック（全体論的）なものの見方を取り戻す視点が必要である（クマール, 2017）。すなわち、自然とのつながり、人とのつながり、自分とのつながりを見つめ直し、取り戻すことが求められている。自然とのつながりは、自分が生態系と一体であり、命の営みに生かされているという感覚を指し、人とのつながりは自分が孤立した存在でなく、他者とのかかわりの中で生かされている存在であるという感覚、自分とのつながりは、身体性や精神性への気づき、自分がかげがえのない存在であるという感覚を意味する。

現代社会は、これらのつながりを断ち切ることで物質的、経済的发展をしてきたと言えるが、結果として環境問題や格差などの問題を引き起こしているのが現状である。個人主義を超えて自然、他者、自分を大事にし、しあわせで持続可能な暮らしや社会をつくるために、自然と人、自分とのつながりをつなぎ直すために、自分と向き合う場、自然や他者と対話する場を創り出すことが求められる。

そのような問題意識のもと、著者らは、武蔵野大学しあわせ研究所の助成を受け、キャンパスの中につながりを取り戻す拠点をつくり、研究・教育活動を展開している。サステナブルキャンパスの実現に向けた取り組み例のひとつには、有明キャンパス3号館屋上におけるコミュニティガーデンの整備がある。教職員や学生、そして地域の人々が協働で自然循環型の菜園づくり、分かち合い、ものづくり等を行う場は、すなわち対話の場である。自然の恵みを実感しながら、他者との関係性の構築や自分を見つめ直す教育活動を展開することは、SDG2「飢餓をゼロに」、SDG10「人や国の不平等をなくそう」、SDG12「つくる責任つかう責任」、SDG15「陸の豊かさを守ろう」といった課題につながる。

国内外の動向に目を向けると、SDGs 実現に向けて各大学独自の取り組みが進む一方、その質を測るための指標も提案され、大学評価として用いられている現状がある。以前から複数のランキングが存在しており、代表例としては Times Higher Education (THE) World University Rankings、Quacquarelli Symonds (QS) World University Rankings などが広く認知されており、大学評価や学生

募集に影響を及ぼしている。近年では、より広範な課題とより良い社会の実現に向けた大学の貢献度に着目した Times Higher Education (THE) Impact Rankings への関心が高まり、日本からの参加も増加している。

Impact Rankings とは、Times Higher Education が発表している世界の大学の SDGs への貢献度を評価するランキングである。2023 年に発表された Impact Rankings 2023 では、世界 115 か国、1705 の大学が参加している。SDGs の達成に向けた大学の取り組み状況を把握する上で、大学関係者だけでなく、政策立案者にとって役立つもの、また進学希望者が進学先を検討する上でも重要な判断材料となりうるものとして注目が高まっている。

この論文の目的は、サステナブルキャンパスの実現に向けて、他大学の取り組みを整理し、今後の取り組みへの示唆を得ることである。世界の動向、国内の動向を整理し、本学の位置を確認するとともに、世界的課題の解決に貢献し世界の幸せをカタチにする人材の育成（ハピネスクリエーター）のために効果的と考えられる取り組みを、本学の活動と特徴を踏まえて検討する。

具体的には、上位校の分析（Impact Rankings と事例）から、外部からの評価軸を明らかにし、現在の活動を再評価する。さらに、本学の理念と現在の活動の特徴を踏まえ、本学の持つ強み（アドバンテージ、潜在力）と今後の取り組みについて提言する。

2. Impact Rankings 分析からみた強みと課題

Impact Rankings では、SDGs の 17 の目標ごとに、研究、管理、アウトリーチ、教育の分野についての指標を用いて評価を行っている（評価指標の詳細は付録に示す）。評価は各大学から提供されるデータや公開情報（例えば、論文のデータベースなど）に基づいて行われる。各大学は 17 目標の中から任意の目標についてデータを提供できるが、総合ランキングには SDGs17（パートナーシップで目標を達成しよう）のスコアと残りの 16 目標のうち上位 3 つの目標のスコアが用いられる。

分析には、Times Higher Education の発行した報告書 Impact Rankings 2023（Times Higher Education, 2023）に記載されている総合ランキング 1 位～1000 位の大学のデータを用いた。だし、武蔵野大学についてはランキング 1000 位以

下であり報告書 Impact Rankings 2023 (Times Higer Education,2023) に記載されていないため、ウェブサイトに記載されているデータを用いた (Times Higer Education,2024)。

総合ランキング 1 位～1000 位の大学について地域別に大学数を集計した結果を表 1 に示す。1 位～1000 位には世界各地域の大学が含まれるが、そのうちアジアの大学は全体の 44.1%を占める。次に多いのはヨーロッパの大学である。しかし、1 位～100 位の上位大学をみるとアジアは 17.6%を占めるにすぎず、ヨーロッパ、北アメリカ、オセアニア（そのほとんどがオーストラリアとニュージーランド）の大学が大半を占める。日本は、100 位以内には北海道大学（22 位）、京都大学（49 位）の 2 校、1000 位以内に 47 校がランクインしており、武蔵野大学は 1001 位以下となっている。

表 1 総合ランキング 1 位から 1000 位にランクインしている大学数（地域別）

	アジア		ヨーロッパ	アフリカ	北アメリカ	ラテンアメリカ	オセアニア
		うち日本					
1-100位	18 17.6%	2 2.0%	35 34.3%	2 2.0%	23 22.5%	2 2.0%	22 21.6%
1-1000位	441 44.1%	47 4.7%	305 30.5%	54 5.4%	69 6.9%	97 9.7%	34 3.4%

先述の通り、Impact Rankings の評価では 17 の目標のうち、SDG17 とその他 3 つ以上の目標について報告を行うことになっているが、どの目標について報告を行うかや、いくつの目標について報告するかは各大学に委ねられている。報告を行っている目標数は、ある程度その大学における SDGs の推進・把握体制を反映していると考えられる。そこで、SDGs17 目標のうちいくつの目標を報告しているかを、順位カテゴリごとに集計し、分析を行った（図 1）。この図をみると、1 位～100 位の大学の報告目標数の中央値は 14.5（半分の大学は 14.5 以上の目標について報告を行っている）、第 3 四分位数は 17（3/4 の大学は 17 目標すべてに対して報告を行っている）。一方、801-1000 位の大学の中央値は 7（半分の大学は 7 つの目標のみしか報告していない）となっている。このことは、下位の大学はより少数の目標に特化した形で SDGs に取り組んでいるのに対し、上位大学は SDGs の多くの目標に対して包括的に取り組む傾向があるこ

とを表わしている。武蔵野大学は、17 目標すべてに対して報告を行っており、1001 位以下という順位からは質的に十分な取り組みを行っているとは言えないものの、包括的な取り組みを目指す姿勢が表れていると言える。

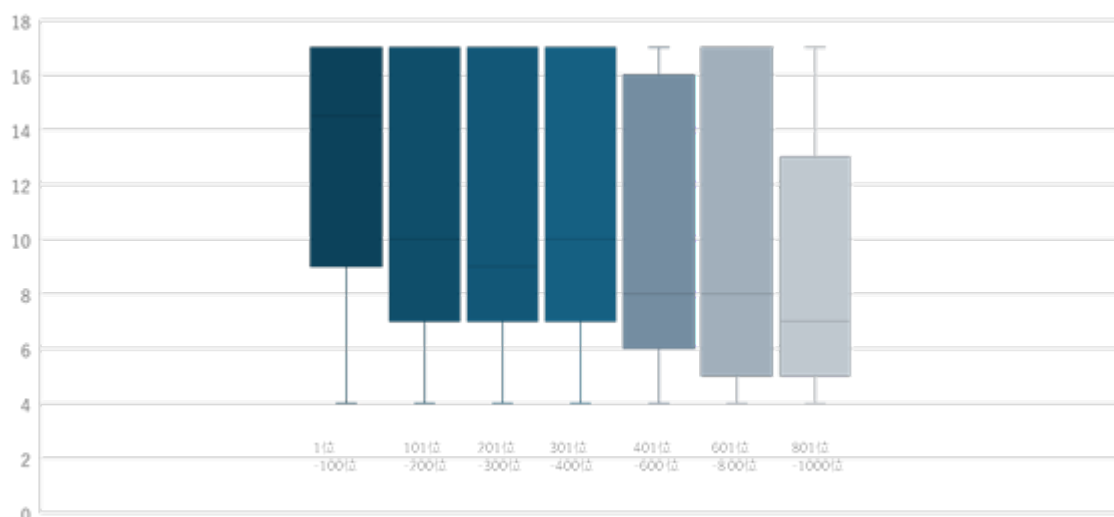


図1 SDGs17 目標のうちデータの報告を行っている目標数（順位カテゴリ別）

さらに、各大学の取り組みの質的な包括性を分析するため、各大学の各目標のスコアのばらつき度合いについて分析を行った（図2）。この分析において、目標間のスコアのばらつきが小さければその大学は比較的偏りが少なく SDGs の各目標に取り組んでいると言える。ここで、ばらつき度合いを表わす指標として変動係数を用いた。

この図をみると順位の高い大学ほど、目標間のばらつきが小さいことが分かる（例えば1位～100位の大学の中央値は0.12であるのに対し、801位～1000位では0.27となっている）。このことは、上位大学ほど偏りなく多くの目標に取り組んでいる、つまり特定の分野に偏ることなく包括的な取り組みを行っていることを示している。

武蔵野大学の変動係数は0.58であり、かなり目標間のばらつきが大きくなっている。先述の通り武蔵野大学は17すべての目標について報告を行っており包括的な取り組みに向う姿勢があるものの、目標間での成果のばらつきが大きく、強い分野とそうでない分野が分かれている状態であると言える。今後より上位

を目指していくためには、質的な面での目標間のばらつきを小さくし、より包括性を高めていく必要があることを表わしている。

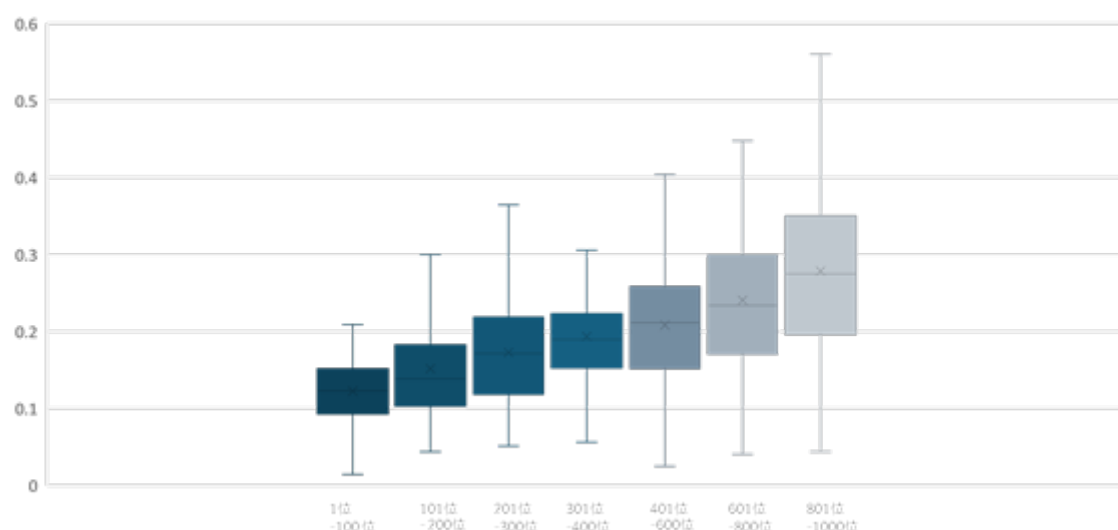


図2 各目標のスコアのばらつき度合い（順位カテゴリ別）

次に、上位の大学特徴と武蔵野大学の位置づけをより理解するために、世界トップ10、アジアトップ10、日本トップ10、日本私立トップ10の大学のスコアを比較した。表2に比較を行った大学のリストを示す。

図3に各大学カテゴリの目標別の平均スコアを示す。これをみると世界トップ10大学は全体的にスコアが高いことが分かる。しかし、SDG9（産業と技術革新の基盤をつくろう）においては、アジアトップ10、日本トップ10が世界トップ10を逆転している。このことは、アジア、日本のトップ大学においては技術革新のための研究開発や産業界との連携に重きが置かれていることを表わしている。しかし、日本私立トップ10はそれほど高いスコアとなっておらず、国立大学（日本のトップ10のうち9つは国立大学である）と私立大学で研究開発力に差があることが分かる。

日本のトップ大学（日本トップ10、日本私立トップ10）において共通する傾向としてSDG5（ジェンダー平等を実現しよう）のスコアが低いことが挙げられる。SDG5は、女性の教育へのアクセス、女性の上級研究員の割合、女性の地位向上施策（女性差別撤廃方針、トランスジェンダー差別撤廃施策など）などが評

価値基準になっている。こうしたジェンダー平等は日本社会全体の課題でもあり、大学においてこれらの取り組みを率先して行うことが求められる。武蔵野大学は全体的にスコアが低い傾向があるが、SDG3(すべての人に健康と福祉を)、SDG8(働きがいも経済成長も)については日本私立トップ10よりも高いスコアになっており、これらの項目は武蔵野大学の強みであると言える。

表2 比較を行った大学のリスト

世界トップ10

総合順位	大学名	国
1	Western Sydney University	Australia
2	University of Manchester	United Kingdom
3	Queen's University	Canada
4	Universiti Sains Malaysia	Malaysia
5	University of Tasmania	Australia
6	Arizona State University (Tempe)	United States
7	University of Alberta	Canada
7	RMIT University	Australia
9	Aalborg University	Denmark
9	University of Victoria	Canada
9	Western University	Canada

日本トップ10

総合順位	大学名	国
22	Hokkaido University	Japan
49	Kyoto University	Japan
101-200	Hiroshima University	Japan
101-200	Keio University	Japan
101-200	Kobe University	Japan
101-200	Osaka University	Japan
101-200	Tohoku University	Japan
101-200	University of Tsukuba	Japan
201-300	Kumamoto University	Japan
201-300	Kyushu University	Japan

アジアトップ10

総合順位	大学名	国
4	Universiti Sains Malaysia	Malaysia
14	Yonsei University (Seoul campus)	South Korea
17	Chulalongkorn University	Thailand
20	University of Indonesia	Indonesia
22	Hokkaido University	Japan
24	National Cheng Kung University	Taiwan
38	Mahidol University	Thailand
42	Kyung Hee University	South Korea
42	Kyungpook National University	South Korea
49	Kyoto University	Japan

日本私立トップ10

総合順位	大学名	国
101-200	Keio University	Japan
201-300	Ritsumeikan University	Japan
201-300	Waseda University	Japan
301-400	Tokyo University of Science	Japan
401-600	Ryukoku University	Japan
401-600	Sophia University	Japan
401-600	Teikyo University	Japan
401-600	Tokyo University of Agriculture	Japan
601-800	Chubu University	Japan
601-800	Tokyo City University	Japan

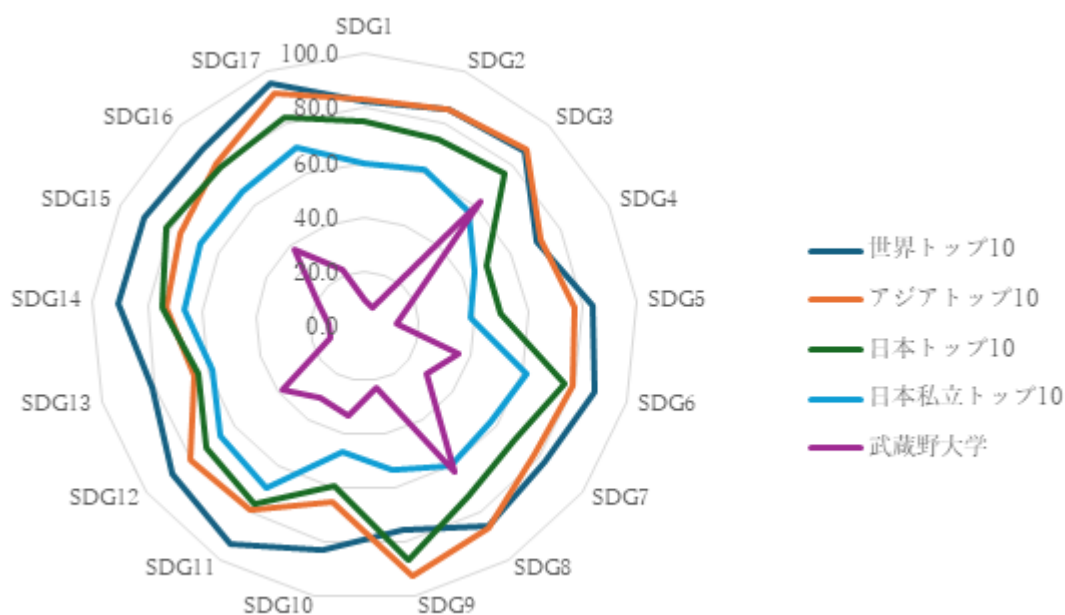


図3 上位大学および武蔵野大学の17目標のスコアの比較

武蔵野大学の強みや課題をさらによくみるために、17目標の各スコアについて、武蔵野大学の平均的スコアに比べてどの程度上回っているか（下回っているか）の分析を行った。具体的には、下記の式を用いて武蔵野大学の各目標の特化度を分析した。この数値が正であれば比較的強い分野、負であれば比較的弱い分野であることを表わす。

$$g_i = \frac{x_i}{\bar{x}} - 1$$

表3 SDGs の 17 目標

SDG1	貧困をなくそう
SDG2	飢餓をゼロに
SDG3	すべての人に健康と福祉を
SDG4	質の高い教育をみんなに
SDG5	ジェンダー平等を実現しよう
SDG6	安全な水とトイレを世界中に
SDG7	エネルギーをみんなに。そしてクリーンに
SDG8	働きがいも経済成長も
SDG9	産業と技術革新の基盤を作ろう
SDG10	人や国の不平等をなくそう
SDG11	住み続けられるまちづくりを
SDG12	つくる責任、つかう責任
SDG13	気候変動に具体的な対策を
SDG14	海の豊かさを守ろう
SDG15	陸の豊かさを守ろう
SDG16	平和と公正をすべての人に
SDG17	パートナーシップで目標を達成しよう

結果を図4に示す。

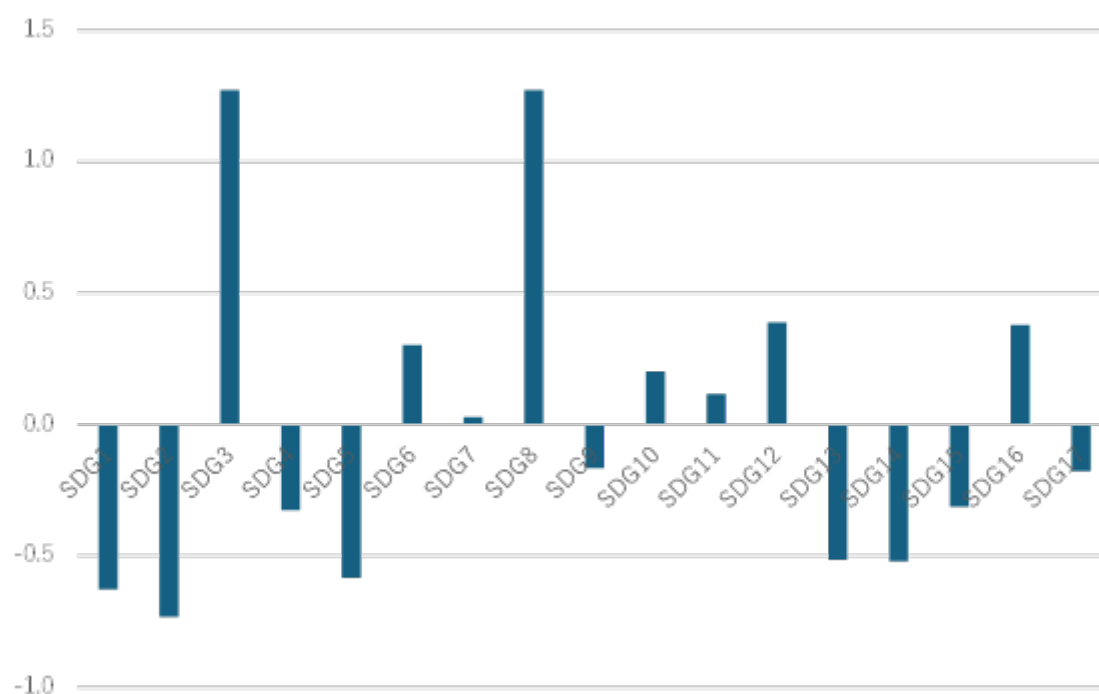


図4 武蔵野大学の 17 目標の特化指数

この図から武蔵野大学の特徴として下記のように整理できる。

- 比較的強い分野

SDG3 すべての人に健康と福祉を

SDG8 働きがいも経済成長も

- 比較的弱い分野

SDG1 貧困をなくそう

SDG2 飢餓をゼロに

SDG5 ジェンダー平等を実現しよう

SDG13 気候変動に具体的な対策を

SDG14 海の豊かさを守ろう

SDG15 陸の豊かさを守ろう

サステナブルな社会に向けての武蔵野大学の貢献をさらに高めていくためには、強みの分野を伸ばしつつ、対策が十分でない分野についてさらに取り組みを進めていく必要がある。現在、比較的弱い分野である SDG 1, 2, 5 は、国際的または地域的な社会課題に対する貢献、在籍する学生や教職員への援助、平等の推進など、SDG13, 14, 15 は、気候変動への対応や生態系保全といった環境問題への対応などが評価基準となっている。これらの分野についてさらに取り組みを進めることでよりサステナブルなキャンパスの実現に向うと考えられる。

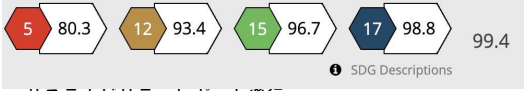
3. 事例からみた強みと課題

事例分析は、Impact Rankings（表 1）を基に世界上位 3 校、アジアおよび国内の上位校について、大学ホームページおよび SDGs 白書などの報告書から情報を収集、整理した。大学の戦略と活動および成果から、活動の特徴と成果につながる要因を抽出した結果を報告する。

（1）海外上位校の特徴

海外上位校（トップ 3）の基本情報、戦略、事例を表 4 に示す。

表4 海外上位校の特徴

順位	大学名	評価と戦略	主な事例（★は参考となる強み）
1	Western Sydney University	 ・サステナビリティレポート発行 ・「Sustainability and Resilience 2030」戦略として 相互接続的な9つの重点分野設定（先住民の知恵、生物多様性とウェルビーイングをつなげる再生的システム等） ・戦略的/優先的行動を実施調整するためのガバナンスフレームワーク「CORE」を設定 ・CORE：カリキュラム、運営、研究、エンゲージメント ・GRADUATE ATTRIBUTES（卒業生として身に付けるべき知識・能力）を改訂	・シニア職員（管理職）の女性比率45% ・リサイクル率91%。使い捨てプラスチックの全廃 ・クライメートポジティブの目標に向い、117ヘクタールの森林を保護 ・オーストラリア最大の全国的気候ユースイベントに400人が参加 ・炭素排出をゼロにすることを指すコンソーシアムに1500万ASD投資 ★同大学の「卒業生の資質」を更新し、中心にサステナビリティの能力を置く ・クライメートポジティブ、ネイチャーポジティブとなる目標掲げる ・2022年、再生可能エネルギー100%を達成し、間接排出部門で97%削減を達成 ・大学による先住民（ネイティブ）戦略2020-2025を策定し、先住民企業からの物品、サービス調達を実施 ・大規模山火事をきっかけに、5歳以下の子どもが参加する、生態系の回復を探索する学びの経験に参加 ★長期計画「サステナビリティとレジリエンス2030」策定、進捗を可視化 ★学生、教職員、コミュニティ間の協力関係強化のためデジタルプラットフォーム整備（89の活動が集まる）
2	University of Manchester	 ・サステナビリティレポート発行 ・研究、教育、Public Engagement、運営の4分野を通じて実施 ・SDGsの目標17を4つの分野ごとにマトリックス作成し、全分野で積極的に活動 ・研究分野では、SDGsに関連する論文数、引用インパクト、途上国の研究者との共同執筆比率などを発表 ・SDGsの目標ごとに、該当授業数を発表	★目標13：2038年までのゼロカーボン目標、大学戦略計画で炭素影響を戦略的意思決定の中心に位置づけ ★目標5：ジェンダー給与格差報告書作成、平均収入差を測定し目標設定 ★目標12：廃棄物総量3,980トン中1,600トン（40%）リサイクル ★目標2：学生がゼロ廃棄物ショップ「Want Not Waste」を利用して物資調達し、コミュニティの誰でもが取り出せる「コミュニティ冷蔵庫」運営 ★目標1：ホームレス意識を大学と学生ユニオンが締結、寄付により生活苦にある学生を支援 ★目標6：大学の建物内に41の無料給水機設置 ★目標12：2005年より「認定フェアトレード大学」 ★目標10：多様性と平等な雇用と学生：従業員の6.3%が障がい者であることを開示
3	Queen's University	 ・SDGsレポート発行 ・17の目標ごとに、研究とイノベーション、教育と学生生活、コミュニティへの影響、グローバルへの影響という4つの軸で活動をまとめて発表	・目標1：法学部学生による法的サービスの提供 ・目標2：地元のフードバンクに寄付 ★目標2：キャンパス内で養蜂とはちみつの提供 ★目標2：食品廃棄物の削減 ★目標2：気候フードの提供 ★目標4：女子中学生のためのSTEM 合宿 ・目標5：Women in Science at Queen's (WiSQ) という同大学でのキャリアを探索し、構築するための女性向けの従業員リソースグループの存在 ・目標5：女性およびトランスジェンダーの人々への非差別政策（ポリシー）の策定 ★目標5：女性スタッフのメンターシップ機会と教育支援 ・目標5：ファミリーフレンドリーな大学 ★目標5：学生も利用可能なキャンパス内の保育所 ★目標7：ボトル水の販売禁止 ★目標8：カナダ全国大学気候憲章への署名と報告 ★目標9：全学的な起業支援 ・目標11：キャンパスの脱植民地化と先住民化

1位の Western Sydney University（オーストラリア）は、サステナビリティレポートを発行し、「Sustainability and Resilience 2030」戦略として、9つの相互接続的な重点分野（先住民の知恵、生物多様性とウェルビーイングをつなげ

る再生的システム、都市のレジリエンス、気候アクション、エシカル経済への転換、サステナビリティのための倫理的 AI、食の安全保証と持続可能農業、気候的正義と不平等の解消、地域、国、国際的なコラボレーションの推進)を定めている。また、持続可能性の戦略的および優先的な行動の実施を調整し監視するための分散型ガバナンスフレームワークとして、以下の「CORE (カリキュラム、運営、研究、エンゲージメント)」を設定している。

カリキュラム：21 世紀のカリキュラム課題を提供し、SDG の能力を我々のカリキュラムに埋め込み、特定するために取り組むこと

運営：2030 年までにカーボンニュートラルの達成

研究：研究プロファイルの SDGs への影響を示し、ウェスタン大学の Times Higher Education Impact Rankings での地位を確立すること

エンゲージメント：明日のリーダー向けに SDGs2030 学校戦略を開発し、持続可能性の研究を進めるための道筋を開発し、コミュニティパートナーと意義ある関係を築くために CORE の専門知識を活用すること

特に、GRADUATE ATTRIBUTES (卒業生として身に付けるべき知識・能力)を改訂し、より持続可能な未来に有意義な貢献ができる卒業生を輩出すること、持続可能で多様で社会的に公正な世界に貢献できる卒業生を育成することを目指す内容としている。このような戦略的運営と教育の結果として、サステナビリティとレジリエンスに関する長期計画策定、女性管理職比率の向上、リサイクル率 91%/使い捨てプラスチックの全廃達成など多様な事例が実行されている。例えば、学生、教職員、コミュニティ間の協力関係強化のためのデジタルプラットフォーム整備は、89 の活動を集めることにつながっている。

University of Manchester (2 位、英国) は、サステナビリティレポートを発行し、研究、教育、社会貢献、運営の 4 分野を通じて実行している。マトリックスを作り、4 分野すべてにおいて積極的に活動しており、教育に関しては、SDGs の目標ごとに、該当授業数を発表している。多い順に、SDG9 は 1084 授業 (うち直接 268、間接 816)、SDG11 は 850 (直接 126、間接 724)、SDG3 は 820 (直接 505、間接 315) である。事例は目標ごとに整理されている。

SDG13：2038 年までのゼロカーボン目標、大学戦略計画で炭素影響を戦略的
意思決定の中心に位置づけ

SDG5：ジェンダーによる給与格差について、大学で働く男女の平均収入差を測
定し目標を設定

SDG12：廃棄物総量 3,980 トンのうち 1,600 トン（全体の 40%）のリサイクル
達成、学生がゼロ廃棄物ショップ「Want Not Waste」を利用して物資を調達し、
コミュニティの誰でもが取り出せる「コミュニティ冷蔵庫」を運営

SDG 6：大学の建物内に 41 の無料の給水機設置

SDG12：2005 年から認定フェアトレード大学

SDG10：多様性と平等な雇用に関して、職員の 6.3%が障がい者であることを開示

3 位の Queen's University（カナダ）は、SDGs レポートを発行し、17 の目標
ごとに、研究とイノベーション、教育と学生生活、コミュニティへの影響、グロ
ーバルへの影響という 4 つの軸で活動をまとめて公表する戦略を取っている。
主な事例として、以下が報告されている。

SDG 1：法学部学生による法的サービスの提供

SDG 2：地元のフードバンクへの寄付の他、養蜂とはちみつのキャンパス内で
の提供、食品廃棄物の削減、気候への負荷が少ない食事の選択を支援するため
にクールフードミール導入など

SDG 4：女子中学生への STEM 教育

SDG 5：Women in Science at Queen's（WiSQ）という大学でのキャリアを採
求し、構築するための女性向けの職員支援グループの存在、女性およびトランス
ジェンダーの人々への非差別政策（ポリシー）の策定、女性教職員のメンターシ
ップ機会と教育支援、キャンパスでの学術活動・仕事と子育て・介護の両立を支
援するためのリソース提供やキャンパス内保育所よりファミリーフレンドリー
な大学につながる活動

SDG 7：給水機の設置拡充とボトル詰めの水販売禁止

SDG 8：カナダ全国大学気候憲章への署名と報告

SDG 9：全学的な起業支援

SDG11：キャンパスの脱植民地化と先住民化

上述した上位 3 校に共通する点として、サステナビリティに関するレポートが発行されていること、気候変動への対策や、貧困とジェンダー不平等への対策が具体的かつ長期的計画的であること、大学独自のフレームワークや活動の軸を有していることが挙げられる。また、表現や力点は大学により異なるものの、研究、教育、運営、地域とのパートナーシップも共通していた。SDGs レポートは SDG17 の評価の 27.2%を占めており（付録参照）、かつ SDG17 は必ず計算に用いられる。このため SDGs レポートの作成や、地域とのパートナーシップに上位校ほど取り組んでいるのはある意味当然の結果であろう。一方、理念と行動という視点でみると、2 位、3 位の大学では事例（実行された内容）が SDGs の 17 の目標ごとにまとめられており、個々の活動を SDGs の枠組みにあてはめて整理している状況が伺え、Western Sydney University との違いが明確である。Western Sydney University は、GRADUATE ATTRIBUTES の改訂が示すように、大学教育を通じて世界の課題に貢献する知識・能力を身に着けた人材の育成を重視している点が抜きん出ている。すなわち、大学教育の基盤となる理念そのものが要素還元的ではなく包括的であり、その理念が学生の中で咀嚼されることは、世界の課題に目を向け個別の事例（学生自身の選択と実行）につながる。結果として、持続可能でより良い未来に貢献する「循環の仕組み」ができている点で、先進的であると言える。

脱植民地化や先住民族への支援、ジェンダー、社会的弱者や経済格差などの不平等に対する取り組みに重点が置かれている点は、先進国のこれまでのアフリカ・アジアなどから搾取・収奪という歴史的背景や文化的問題の影響が伺える。西欧の大学にとって SDGs とは、それらの歴史を評価し直し、その課題を乗り越えることがテーマとなっていると考えられる。

（2）アジア圏の事例

アジアの上位 3 校は、マレーシア科学大学（マレーシア）、延世大学（韓国）、チュラロンコーン大学（タイ）であるが、延世大学は英語での公開情報が乏しく今回はホームページやレポートからの情報収集が困難であった。

マレーシア科学大学は、ペナン州に位置する 1969 年設立の国立大学で、合計 27 の学部を有する総合大学である。学部・大学院合わせて約 3 万人の学生が在籍している。

マレーシア科学大学のサステナビリティ実現に向けた主要な戦略は、以下の 5 つが挙げられている。

- ・ ミッションまたは政策声明を通じて明確にされた持続可能性のビジョン
- ・ 持続可能性の行動計画を策定するための全体的なアプローチ
- ・ 大学の運営や制度のすべての側面における持続可能性の統合
- ・ 創造的で実践的な関与を通じて、形式的小および非形式の学習に持続可能性を組み込む
- ・ 社会の幸福の向上と向上のための持続可能性の文化

事例では、34,751 人の学生のうち、24,598 人の学生が低所得者層出身であり、大学からの奨学金は当然として、地域社会からのザカート（困窮者を助けるための義務的な喜捨）を通じた支援、大学内のイスラミックセンターと学生が主導しての学生同士のランチの支援、地域社会のホームレス支援、経済的困窮層出身学生への多様なケアなど、イスラム的価値観を通じて地域社会へ貢献する様子がみられる。戦略、組織づくりに力を入れ、サステナビリティへの動きを全学的に行うという特徴がみられた。

延世大学は学生数 4 万人、35 学部を有する総合大学であり、英語での情報公開がほとんどみられないが、Impact Rankings の評価は、SDG9（産業と技術革新の基盤をつくろう）が 99 点、SDG12（つくる責任、つかう責任）が 91 点であることが特徴的である。

チュラロンコーン大学は、戦略として教育そのものの SDGs との統合を掲げている。2017 年にチュラロンコーン大学の環境研究所と物理資源管理オフィスが主導する「チュラ・ゼロ・ウェイスト・イニシアチブ」を立ち上げ、第一段階（開始から 2021 年まで）は、大学キャンパスで発生する廃棄物を 30%削減するという目標を立て、廃棄物を減らすだけでなく、消費と廃棄に対する考え方や行動を再構築した。2018 年に発表された「大学における使い捨てプラスチック廃棄物の削減対策」ではキャンパス内のすべての店舗に対し、発泡スチロール容器と酸化型分解性プラスチック製袋（自然環境で分解できると考えられていた

が、最近の研究により分解が不十分であることが指摘されている)の不使用を義務化した。

2021 年から 2024 年までの第 2 段階では、2025 年までに廃棄物交換率 75% 削減を目標としており、実現のために学生や職員が参加し、周囲の人々、地域社会とのコラボレーションを通じて実施しようとしている。大学は、将来を見据えて学生団体やバンコク市、国連環境計画（UNEP）のような政府間組織と、より協力的な取り組みを行うことを計画しており、チュラロンコーン大学学生自治会（SGCU）は 2023 年に初めてサステナビリティ部門を設置した。SDGs に関連づけた論文の発表に重点が置かれており、産業と技術基盤づくり、SDG3 健康と福祉の評価点が高く、ゼロ・ウェイストに注力している。

アジア圏の上位校では、論文を通じた産業基盤の構築に力を入れている点が共通していた。マレーシア工科大学における経済格差への支援や、チュラロンコーン大学のゼロ・ウェイストへの取り組みはそれぞれ特徴的と考えられる。しかしながら、ホームページや公表されている報告書など確認できた情報には限りがあり、延世大学については英語で公開されている情報が限られている。このため何が各大学の取り組みに影響をしているかという問い、例えば西欧とアジアなど地域性や文化圏、経済発展の状況の違いが及ぼす影響などは、今後さらなる検討が必要と考えられた。

（３）国内の事例

国内の Impact Rankings に目を向けると、国立大学では北海道大学、京都大学などが上位であり、SDG9(産業と技術革新の基盤をつくろう)の評価が高い点は、他のアジア上位校と同じ傾向である。また、パートナーシップとして地域と連携した活動が多いことが特徴である。

私立では慶應義塾大学、立命館大学、龍谷大学、上智大学、東京都市大学などが上位校に名を連ねている。ここでは、武蔵野大学と同じく仏教精神に基づく大学である龍谷大学、首都圏にキャンパスを持つ慶應義塾大学、上智大学、東京都市大学を取り上げる。

龍谷大学の SDGs の理念は、誰一人取り残さないという SDGs の理念と、仏教精神を結び付けた「仏教 SDGs」である。基本コンセプトである「自省利他」

を示し、阿弥陀仏のはたらき「摂取不捨」に基づき、持続可能な社会の実現を目指して大学組織が位置づけられている（図4）。理念を基盤として、研究、社会貢献、国際連携、教育の軸で事例を展開し、仏教的な視点を通して大学構成員自らの自省と気づきを促し、全学的に循環型の社会貢献・人材育成の仕組みを構築しようとする点が特徴的である。SDGs 実践の取り組みは、「環境」「経済」「社会」「パートナーシップ」の4分野に分けて2022年度の主な活動を通じた成果と課題をまとめたリポートがあり、廃棄食品の活用やフェアトレード、和歌山県や滋賀県など地域の自治体とのパートナーシップに基づく活動が展開されている。

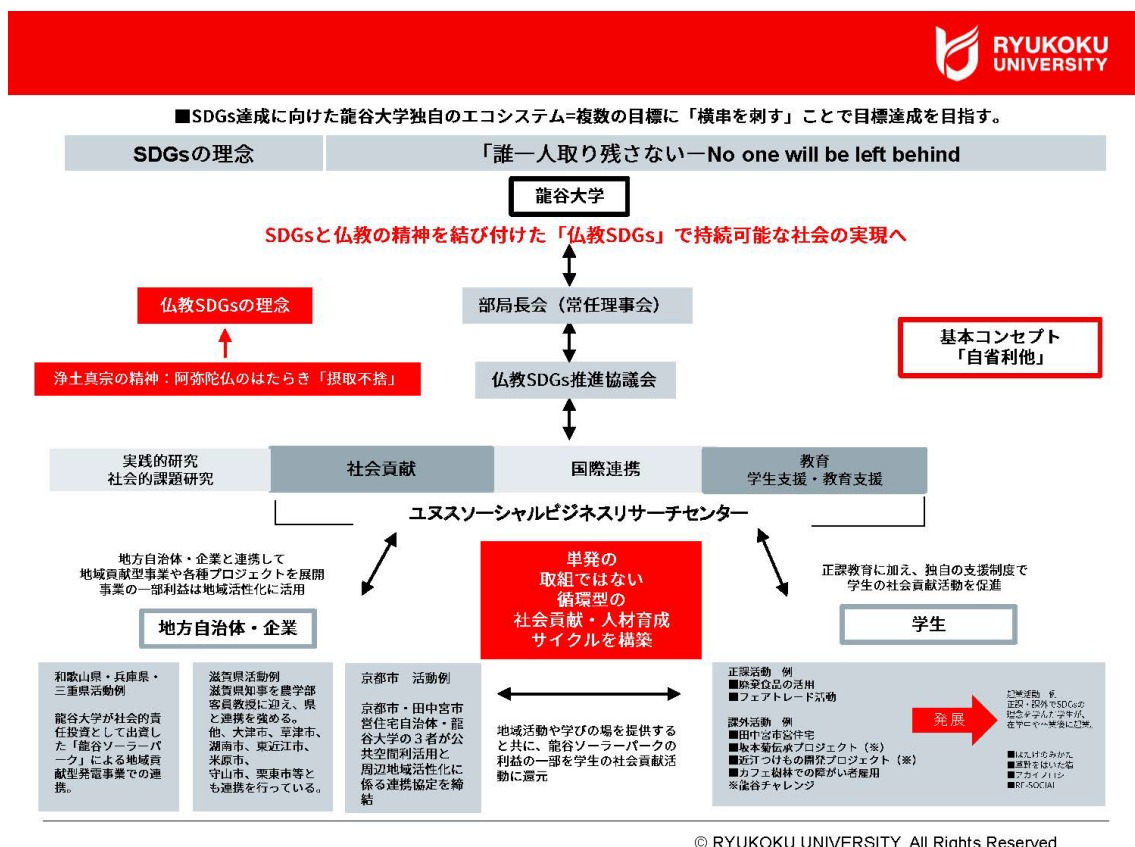


図4 仏教SDGsの理念と取り組みスキーム（龍谷大学 HP より引用）

慶應義塾大学では多様な活動に加えて、フランスやイギリスで行われている気候変動対策や温室効果削減対策を国民の側から提言する会議を基に、慶應義塾SDGsの一環として、学生の意見を本学のSDGsの取り組みに反映させる塾

生会議を開始し、SDGs を実現するための大学のビジョン・目標・ターゲットを提言することを目的として学生主体の活動に力を入れている。

上智大学では、2019 年に「和解と正義のミッションにおいて、排除された人々とともに歩む」「ともに暮らす家」である地球への配慮を協働して行う」などこれから優先的に取り組むべき方向性を UAPs (Universal Apostolic Preferences of the Society of Jesus)「イエズス会使徒職全体の方向づけ」として定め、これらは大学のサステナビリティ推進に一致し、SDGs とも合致するものとして、理念と教育、実践を統合した取り組みを行っている。「アクティブコモンズ」と呼ばれるアカデミックコモンズ(「学習」と「憩い」と「学生活動」をコンセプトとする、学生の学生による学生のための生きた学びの場)を活用したガーデニングワークショップの開催など、学生のための学びの場を活用しながら、脱炭素の取り組みや、学生組織づくり(ガイド作成など)につなげており、理念を基盤とした教育の展開から実践につなげていく活動は、Creative Learning Square (CLS) など武蔵野大学の取り組みにも応用可能であると考えられる。

また、東京都市大学では太陽光パネルや小型風力発電装置、蓄電池などを設置し、脱炭素の取り組みを進めるとともに、大学間の連携、高等教育における SDGs の取り組みや人財育成、ステークホルダーとのパートナーシップの強化を図っている。

目標 4 の教育に特化した取り組みとしては中部大学が挙げられる(図 5)。中部大学では、育成する人材として、SDGs と環境問題に造詣の深い学生を輩出し、社会で役立つ「あてになる人間」を掲げ、自治体や企業との連携に基づき、地域社会の課題解決に向けた取り組みを強化している。従来の ESD 教育を発展させ、全学を結ぶ SDGs 教育研究環と、3 つの教育圏を設置し SDGs 教育の実践を行っている点は、本学の教養教育の取り組みとも重なる。



図5 SDGsの取り組み（中部大学ホームページより引用）

4. Impact Rankings と事例研究からの示唆

武蔵野大学におけるサステナブルキャンパスの実現に向けて、国際的な評価軸と、国内外の上位校の傾向について、Impact Rankings を用いた分析により、武蔵野大学の強みと課題を検討した。

国際的な評価軸として、研究、卒業する人材の質、学生や職員に対する支援、地域社会とのパートナーシップの重要性が示され、該当する取り組みを確実に報告することの重要性が示された。

上位校の分析（Impact Rankings と事例）から、大学ごとに異なる特徴がみられたが、上位校はサステナビリティに関連するレポートを公表している点や、ホリスティック（包括的）な視点に立ち、原則・理念を日常生活に落とし込むところにまで至っている点が特徴的であった。

武蔵野大学が持つ理念でもある「四弘誓願」はまさにホリスティックな視点に

立つものであり、現在の教育研究活動の発展を通じて、上位校同様に理念を個別の活動展開として落とし込み、「いきとし生けるものが幸せになるために」その響創者を育成し、実現していくことが期待される。上位校の特徴に照らして考えると、大学としての理念、原則に関わる人々にわかりやすく伝える（確立する）ことは、教育・研究を含む学生および教職員の日々の活動、日常生活の中に組み込まれていくことにつながると考えられる。武蔵野大学で行われている事例には、実際に、食の多様性^{注2}や、包括的性教育^{注3}など学生発の問題提起や対話型のイベントを実施した活動例が多様に存在する。理念に基づく教育が学生個人の思考と行動につながっている好例と言える。それらが単発のイベントで終わらずに、例えば学生がフードロス削減の取り組みを学食に求める行動や、ベジタリアンレストラン（香港大学）など学生の食の選択の機会を確保する実効的な環境（スチュワードシップ、アウトリーチ）につながることで、学生主体でよりインパクトが高まることが期待できる。

この点については、すでに武蔵野大学には様々な事例が展開されており、西シドニー大学のようなデジタルプラットフォームの整備は、すでにある事例を有機的につなぎ、学生、教職員、コミュニティ間の協力関係強化につながることを期待できる。

また、SDG3(すべての人に健康と福祉を)、SDG8(働きがいも経済成長も)については日本私立トップ10よりも高いスコアを示し、これらの項目は武蔵野大学の強みであると言える。SDG3に関して、健康を人生の目的ではなく手段、資源として捉え、その先にある幸せ（ウェルビーイング）を高めていくヘルスプロモーションの視点は、国の取り組みとして重要視され、自然と健康になる環境づくりが求められている（厚生労働省, 2023）。加えて、持続可能な健康への取り組みには、地球環境と社会的要因が重要であるとするプラネタリーヘルスの視点への注目が高まっている。Myers (2017) は地球の自然システムの変化は、気候変動、大気や水および土壌の汚染、生物多様性の減少、地球の化学的循環の再構成による複雑な相互作用を通じて健康に影響を及ぼすことを示している。これは、感染症や自然災害への曝露も含まれ、健康への影響は複雑で未知数であるが、環境に働きかける重要性への認識は高まっている。

本学では、すでにしあわせ研究所によりウェルビーイングを高めていく研究

が学部学科の枠を越えて、また学外の研究機関や実践機関と連携しながら推進されている。さらに、教養教育において SDGs に着目した教育が行われていることにより、SDGs は表面的な知識・取り組みではなく大学の理念と結びついたものとして位置づけられていることは、本学の大きな強みと考えられる。SDG8（働きがいも経済成長も）に関しても、自分達を含む人々の未来をより良いものにする取り組みとして、学生や教職員が主体となって様々な実行方法を見出せる可能性がある。

一方、武蔵野大学に限らない、国内共通の傾向として見出された SDG5（ジェンダー平等を実現しよう）のスコアが低いことは、逆に捉えれば積極的に取り組むことで伸ばしやすい、取り組みやすい視点とも言える。武蔵野大学は、築地本願寺において女子教育を起源とした歴史を持ち、女性の教育へのアクセスについて取り組みを重ねてきた大学であり、日本社会全体の課題でもあるジェンダー平等やあらゆる平等にチャレンジすることは 100 周年の節目において人々の未来を拓く行動に他ならない。

他にも、2020 年に世界ランキング 41 位であった香港大学は、SDGs に貢献できるようなリーダーシップや持続可能な開発のための創造的な解決策を提供できる人材育成を教育目標の中に位置づけ、異文化理解や国際市民権に関する教育も含まれている。図書館とコアセンター、女性学研究センターが連携し、パーマカルチャーを用いた屋上庭園のデザインと実践、学生向けワークショップなどの実行につなげており、エディブルな庭園の創出は、SDG 2（飢餓をゼロに）にも関連するとされている。武蔵野大学においても、サステナブルキャンパスの取り組みとして、屋上庭園などの人々の居場所づくりの中で、パーマカルチャーデザインを用いている点は香港大学と同様である。環境への関心を高め、学生自身の関心や意思決定を支援する環境、すなわち対話の場を創り出すことは、学生が自ら問いを持ち、世界に関わる響創者となることを促すと考えられる。

循環を意識してデザインされた対話の場を通じて、あらゆるものはつながり合い、互いに生かし生かされ合っていると気づくことは、本学が取り組む響学スパイラルに基づく学びであり、自発的な活動につながり、最初は小さな気づきであっても、その蓄積こそが「世界の幸せを実現する」と期待される。

一方で、他大学の取り組みについては、ホームページやサステナビリティレポ

ートからの情報収集であり、現地での詳細な調査などに行っていないのが限界点である。本学に所属する海外にルーツやネットワークを持つ教員と連携するなど、本学が有する多様な資源を生かすことで、今後さらなる情報収集と協働的な取り組みを進めていきたい。

リサイクル率向上や炭素排出量の削減などは、国内の大学の多くが弱みとしている点であるが、北海道大学では、サステナビリティ推進機構を立ち上げ、サステナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）によるサステナブルキャンパス評価システム（ASSC）などを活用し組織的に取り組んでいる点が評価向上につながっている。全学的な取り組みとすることは簡単ではないが、既存の枠組みを活用することを視野に入れつつ、本学の強みを活かしていくことが重要である。例えば、武蔵野大学ではじゅんぐりセンターなどの新たな取り組みも広がっており、リサイクル率や資源循環の拠点としていくことが期待される。また、世界ランキング1位の西シドニー大学は武蔵野大学の協定校でもあり、すでにある関係性を活かしてサステナブルキャンパス実現に向けた共同研究・教育に発展させていくことが期待できる。SDGs を実現するために個人が持つべき力、コンピテンスとして23のスキルが提唱され、SDGs からIDGs へという流れもみられる。まだ完成形ではなく、アジアの視点が不足していることが言われており、アジアの視点からのフィードバックが求められている。今後は大学間の交流や現地でのフィールド調査などを企画し、互いの取り組みから学び合うことにより、相互作用を引き出し、武蔵野大学における教育研究と実践の取り組みを発展させていきたい。

謝辞

本論文は2023年度しあわせ研究費の助成を受けたものです。

注釈

- 1 2024年3月25日の検索結果による。
- 2 食を通して多様性と持続性を考える地域連携 SDGs イベント～サメ肉専門店・障がい者就労支援施設・学生養蜂プロジェクトチームと協働した取り組み～
<https://sdgs.musashino-u.ac.jp/product/20230301/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

3 武蔵野大学で健康づくりの輪を広げる取り組み 「むさしの健幸アンバサダー」とは～自分自身と周囲の大切な人の“健幸”を創り出す力を高めるために～

<https://sdgs.musashino-u.ac.jp/product/20220517/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

参考文献

Chulalongkorn University. Chulalongkorn University Sustainability Report 2022-2023.

http://www.sustainability.chula.ac.th/wp-content/uploads/2024/03/CU_SDG_Report2022_23_EBook.pdf

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Katherine Richardson, Will Steffen, Sarah E Cornell, …Johan Rockström (2023) Earth beyond six of nine planetary boundaries. Sci Adv. 9(37): DOI: 10.1126/sciadv.adh2458
eadh2458.

<https://www.science.org/doi/10.1126/sciadv.adh2458>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Myers, S.S., 2017. Planetary health: protecting human health on a rapidly changing planet. The Lancet, 390(10114), pp.2860-2868

Duff H., Faerron Guzmán, C., Almada, A., Golden, C., and Myers, S. “Planetary Health Case Studies: An Anthology of Solutions”. PHA, Boston, USA. 2020;

<https://doi.org/10.5822/phanth9678>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Quacquarelli Symonds (QS), QS World University Rankings

<https://www.topuniversities.com/university-rankings>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Queen's University. 2023 Queen's contributions to the UN Sustainable Development Goals.

https://www.queensu.ca/social-impact/sites/sdgwww/files/uploaded_files/Queen's_Contributions_to_the_UN_Sustainable_Development_Goals_2022-2023.pdf

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Times Higher Education (THE), The Times Higher Education (THE) World University Rankings

<https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Times Higher Education.(2023). Impact Rankings 2023.

Times Higer Education.(2024, March) . Impact Rankings 2023.

<https://www.timeshighereducation.com/impactrankings>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

The University of Hong Kong. HKU Libraries and SDGs.

<https://www.hkulsdg.hku.hk/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Universiti Sains Malaysia. Universiti Sains Malaysia Sustainable Development Goals 2022 Report.

<https://www.usm.my/images/sustainability/pdf/SDGREPORT2022.pdf>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

University of Manchester

<https://documents.manchester.ac.uk/display.aspx?DocID=57219>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

University of Manchester. THE UNIVERSITY OF MANCHESTER SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 2021/22 REPORT.

<https://documents.manchester.ac.uk/display.aspx?DocID=57219>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Western Sydney University

<https://www.westernsydney.edu.au/sustainable-development>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

Western Sydney University. Unlocking Impact Sustainability Report 2022.

https://westernsydney.edu.au/_data/assets/pdf_file/0009/1991736/2022_Sustainability_Report_Digital_23.pdf

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

慶應義塾大学. 学生の活動

<https://www.global-sdgs.keio.ac.jp/student-activities/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

厚生労働省 (2023) 第 1 回 健康日本 21 (第三次) 推進専門委員会. 参考資料 2, p7.

<https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/001158810.pdf>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

サティシュ・クマール (2017) 人類はどこへいくのか: ほんとうの転換のための三つの S 土・魂・社会.

上智大学. 取り組み事例.

<https://sophia-sdgs.jp/efforts/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

中部大学. SDGs の取組み

<https://www.chubu.ac.jp/academics/college-education/all-sdgs/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

龍谷大学. SDGs の推進体制

<https://www.ryukoku.ac.jp/sdgs/about/system.html>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

北海道大学. サステイナビリティ推進機構

<https://www.sustainability.hokudai.ac.jp/9050/>

(2024 年 3 月 25 日アクセス)

付録 Impact Rankings 2023 における評価基準と配点

SDG 1 貧困をなくそう

貧困に関する研究 (27%)

貧困に関する論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

貧困に関する論文数 (10%)

全研究論文のうち、低・中所得国との共著論文の割合 (7%)

学資援助を受けている学生の割合 (27%)

大学の反貧困プログラム (23%)

世帯収入下位 20%の学生の入学目標 (4.6%)

世帯収入下位 20%の学生の卒業・修了目標 (4.6%)

最貧困家庭の学生が大学を修了できような支援 (例えば、食費、住居、交通、法律サービスなど) (4.6%)

その国の世帯収入の下位 20%に入る学生が学業を無事修了できるよう支援するプログラム (4.6%)

低・中所得国からの貧しい学生を支援する制度 (例えば、無償教育や助成金の提供など) (4.6%)

地域社会の反貧困プログラム (23%)

地域社会における持続可能な事業の立ち上げを支援するための教育やリソース-例えば、メンターシップ・プログラム、トレーニング・ワークショップ、大学施設へのアクセスなど (5.75%)

地域コミュニティにおける持続可能なビジネスの立ち上げを支援するための資金援助 (5.75%)

すべての人が基本的なサービスを利用できるようにするための研修やプログラム (5.75%)

貧困をなくすためのプログラムや政策を実施するため、地域、国、世界レベルでの政策立案に参加する (5.75%)

SDG 2 飢餓をゼロに

飢餓に関する研究 (27%)

Citescore で定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに含まれる研究論文の割合 (10%)

論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

論文数 (7%)

キャンパス内の食品廃棄物 (15.4%)

学内の食品廃棄追跡 (7.7%)

一人当たりの学内食品廃棄量 (7.7%)

学生の飢餓 (19.2%)

学生の食糧不足に関するプログラム (4.8%)

学生や職員の飢餓を対象とした介入策-例えばフードバンクへのアクセスを提供する (4.8%)

ベジタリアンやビーガンを含む、キャンパス内のすべての人のための持続可能な食の選択 (4.8%)

健康的で手ごろな価格の食品を学内全員に提供する (4.8%)

持続可能性の側面を含む農業・養殖業における卒業生の割合 (19.2%)

国民の飢餓 (19.2%)

食料安全保障や持続可能な農業・養殖業に関する知識、技能、技術を地元の農家や食品生産者に提供する (4.8%)

地元の農家や食品生産者がつながらり、知識を交換するためのイベント (4.8%)

地元の農家や食品生産者が持続可能な農業慣行を改善するために、大学の施設を利用できるようにする (4.8%)

地元の持続可能な供給源からの製品を優先的に購入する (4.8%)

SDG 3 すべての人に健康と福祉を

健康と福祉に関する研究 (27%)

閲覧またはダウンロードされた研究論文の割合 (10%)

臨床指導に引用された研究論文の割合 (10%)

論文発表数 (7%)

保健学科卒業生の割合 (34.6%)

コラボレーションと医療サービス (38.4%)

禁煙政策 (8%)

健康と福祉の成果を向上させるための、地域、国、またはグローバルな保健機関との協力 (7%)

避難民や難民を含む、健康と福祉を向上させるための地域コミュニティにおける支援プログラム (7%)

学生のための性と生殖に関する保健サービスへのアクセス (7%)

学生や職員に対するメンタルヘルス支援 (7%)

大学スポーツ施設への地域社会のアクセス (2.4%)

SDG 4 質の高い教育をみんなに

早期・生涯学習教育に関する研究 (27%)

閲覧またはダウンロードされた研究論文の割合 (10%)

Citescore によって定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに掲載された研究論文の割合 (10%)

出版数 (7%)

教員資格を有する卒業生の割合 (15.4%)

生涯学習対策 (26.8%)

大学に在籍していない人のための教育資料への無料アクセス (5%)

講義や特定のコースなど、一般に公開されている教育活動 (5%)

大学で学んでいない人を対象に職業訓練を行う教育イベント (5%)

学校を含む地域社会における教育普及活動 (5%)

これらの活動が、民族、宗教、障害、移民の有無、性別に関係なく、すべての人に開かれていることを保証する方針 (6.8%)

第 1 世代学生の割合 (30.8%)

SDG 5	ジェンダー平等を実現しよう 研究 (27%)	大学の総研究業績に占める女性の著者の割合 (10%) Citescore によって定義された学術誌の上位 10%における男女共同参画に関する論文の割合 (10%) 男女共同参画に関する出版物の数 (7%) 第一世代の女子学生の割合 (15.4%) 女子学生の教育へのアクセス対策 (15.4%) 女性の出願率、合格率、入学率を組織的に測定・追跡する (1.6%) 女子学生の出願率、合格率、入学率、参加率に取り組む方針 (4.6%) メンタリングなど、適切な女性アクセス制度の提供 (4.6%) 女性の割合が低い分野への出願奨励 (4.6%) 女性上級研究員の割合 (15.4%) 学位を取得した女性の割合 (11.5%) 女性の地位向上施策 (15.3%) 女性差別撤廃方針 (1.95%) トランスジェンダー差別撤廃政策 (1.95%) 女性の参画を支援する出産・育児政策 (1.9%) 学生が利用しやすい保育施設 (1.9%) 職員が利用しやすい保育施設 (1.9%) 少なくとも 10%の学生が参加する女性のメンター制度 (1.9%) 女性の卒業率を男性と比較して把握し、その差を埋めるためのスキームがある (1.9%) 差別を報告した人を保護する方針 (1.9%)
-------	---------------------------	--

- SDG 6 安全な水とトイレを世界中に
- 清潔な水と衛生に関する研究 (27%)
- Citescore で定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに含まれる論文の割合 (10%)
- 論文の分野別重み付け引用指数 (10%)
- 論文数 (7%)
- 水消費量 (19%)
- 水消費量のトラッキング (9.5%)
- 一人当たりの水消費量 (9.5%)
- 水の使用とケア (23%)
- 廃水进行处理するプロセス (4.6%)
- 汚染水が水道システムに入るのを防ぐプロセス (4.6%)
- 学生、職員、訪問者のための無料の飲料水 (4.6%)
- 水の使用を最小限にする建築基準 (4.6%)
- 水の使用を最小限にするための景観の植栽 (4.6%)
- 水の再利用 (12%)
- 大学全体で水の再利用を最大化するための方針 (6%)
- 大学全体で水の再利用を測定する (6%)
- 地域社会における水 (19%)
- 地域社会が適切な水管理について学ぶ教育機会 (3.8%)
- 学内および地域社会で意識的な水の使用を促進する (3.8%)
- 学外での水保全の支援 (3.8%)
- キャンパス内外の関連する大学敷地内での持続可能な採水技術 (3.8%)
- キャンパス内外での持続可能な水採取技術 (3.8%)

水の安全保障に関して、地方、地域、国または世界政府と協力する (3.8%)

SDG 7

エネルギーをみんなに。そしてクリーンに

安価でクリーンなエネルギーに関する研究 (27%)

Citescore で定義されたジャーナルの上位 10%に入る論文の割合 (10%)

論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

論文数 (7%)

安価でクリーンなエネルギーに向けた大学の施策 (23%)

すべての改築・新築がエネルギー効率基準に従うことを保証する方針 (3.85%)

既存の建物をより高いエネルギー効率に改善する計画 (3.85%)

カーボンマネジメント及び二酸化炭素排出量削減のためのプロセス (3.85%)

エネルギー消費全体の削減計画 (3.85%)

エネルギーの無駄が最も多い地域を特定するためのレビュー (3.8%)

炭素集約的エネルギー産業、特に石炭と石油からの分離に関する方針 (3.8%)

エネルギー使用 (27%)

エネルギーと地域社会 (23%)

地域社会がエネルギー効率とクリーンエネルギーの重要性を学ぶためのプログラム (4.6%)

大学の枠を越えた再生可能エネルギー100%に関する公約の推進 (4.6%)

地域産業のエネルギー効率とクリーンエネルギーの向上を目的としたサービス (4.6%)

クリーンエネルギーやエネルギー効率の高い技術に関連する政策立案に関する政府への情報提供と支援 (4.6%)

低炭素経済・技術を育成・支援する新興企業への支援 (4.6%)

- SDG 8 働きがいも経済成長も
- 経済成長と雇用に関する研究 (27%)
 - Citescore で定義されたジャーナルの上位 10%に掲載された論文の割合 (14%)
 - 論文数 (13%)
 - 雇用慣行 (19.6%)
 - 教職員への生活賃金の支払い (2.45%)
 - 組合・労働者の権利の承認 (2.45%)
 - 職場における差別撤廃に関する方針 (2.45%)
 - 現代の奴隷制度、強制労働、人身売買、児童労働に対する方針 (2.45%)
 - 外部委託労働者の平等な権利の保証 (2.45%)
 - 給与水準の平等と男女間の賃金格差に関する方針 (2.45%)
 - 給与水準の男女平等の測定と追跡 (2.45%)
 - 従業員が権利や賃金に関する決定に異議を唱えるためのプロセス (2.45%)
 - 従業員 1 人当たりの支出 (15.4%)
 - 職場実習（ワークプレイズメント）を受ける学生の割合 (19%)
 - 安全な契約を結んでいる従業員の割合 (19%)
- SDG 9 産業と技術革新の基盤を作ろう
- 産業、イノベーション、インフラに関する研究 (11.6%)
 - 大学の研究を引用した特許 (15.4%)
 - 大学のスピノフ (34.6%)
 - 産業界からの研究収入 (38.4%)

SDG 10	人や国の不平等をなくそう	
	不平等削減に関する研究 (27%)	
	Citescore で定義されたジャーナルの上位 10%に掲載された論文の割合 (10%)	
	大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)	
	論文数 (7%)	
	第一世代の学生 (15.5%)	
	発展途上国からの留学生 (15.5%)	
	障がいのある学生とスタッフ (23%)	
	障がいのある学生の割合 (11.5%)	
	障がいのある従業員の割合 (11.5%)	
	差別への対策 (19%)	
	差別のない入学者受入方針 (1.9%)	
	社会的地位の低い人々の志願率と入学率を追跡調査する (1.9%)	
	学生や職員に差別的な扱いを受けているグループを採用するための計画的な行動 (1.9%)	
	職員・学生に対する差別・ハラスメント防止方針 (1.9%)	
	多様性と平等に関する委員会や役員の存在 (1.9%)	
	社会的地位の低いグループの学生や職員を対象としたメンタリングやその他の支援プログラムの提供 (1.9%)	
	障がい者のための利用しやすい施設 (1.9%)	
	障がい者のための支援サービス (1.9%)	
	障がい者のためのアクセス制度 (1.9%)	
	適切な資金提供を含む、障がい者のための宿泊施設方針または戦略 (1.9%)	

SDG 11 住み続けられるまちづくりを

持続可能な都市とコミュニティに関する研究 (27%)

Citescore で定義された学術誌の上位 10%における論文の割合 (10%)

大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

論文数 (7%)

芸術と遺産の支援 (22.6%)

大学内にある文化的に重要な建造物やモニュメント、自然遺産景観の一般公開 (3.75%)

大学図書館の一般利用 (3.75%)

大学の博物館やコレクションの一般公開 (3.75%)

オープンスペースや緑地への一般公開 (3.75%)

一般市民を対象としたコンサートなどの芸術的イベントの開催 (3.8%)

地域の遺産を記録・保存する (3.8%)

芸術と遺産への支出 (15.3%)

持続可能な慣行 (35.1%)

持続可能な通勤に関する目標 (3.9%)

持続可能な通勤の促進 (3.9%)

在宅勤務、リモートワーク、短時間勤務の奨励 (3.9%)

学生や職員に手頃な価格の住居を提供する (7.8%)

キャンパス内での歩行者優先 (3.9%)

計画的な問題について自治体と協力する (3.9%)

持続可能な基準で建設する (3.9%)

褐色地に建設する (3.9%)

SDG 12 つくる責任、つかう責任

責任ある消費と生産に関する研究 (27%)

Citescore で定義された学術誌の上位 10% における論文の割合 (10%)

大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

論文数 (7%)

運営上の措置 (26.7%)

商品の倫理的調達に関する方針 (4.8%)

有害廃棄物の適切な処理に関する方針 (4.8%)

埋立処分量とリサイクル量の測定に関する方針 (4.8%)

プラスチックの使用最小化に関する方針 (4.8%)

使い捨て商品の使用を最小限に抑える方針 (4.8%)

これらの方針が外部委託サービスにも適用されていることを示す証拠 (1.35%)

これらの方針が外部委託先にも適用されている証拠 (1.35%)

リサイクル廃棄物の割合 (27%)

大学全体で発生しリサイクルされた廃棄物の量を測定する (13.5%)

リサイクルされた廃棄物の割合 (13.5%)

サステナビリティ・レポートの発行 (19.3%)

SDG 13 気候変動に具体的な対策を

気候変動対策に関する研究 (27%)

Citescore によって定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに掲載された論文の割合 (10%)

大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)

論文数 (7%)	
低炭素エネルギー利用 (27%)	
低炭素エネルギー使用量の測定 (13.5%)	
低炭素電力の割合 (13.5%)	
環境教育対策 (23%)	
気候変動に関する地域教育プログラムやキャンペンの実施 (4.6%)	
自治体や地域社会と共有する大学の気候変動対策計画がある (4.6%)	
住民の移住を含む気候変動災害に備えて、地方政府または国家政府と連携して計画を立てる (4.6%)	
気候変動に関連する問題について、政府に情報を提供し支援する (4.6%)	
気候変動への適応について NGO と協力する (4.6%)	
カーボンニュートラルへのコミットメント (23%)	
カーボンニュートラルへのコミットメント (11.5%)	
達成期限 (11.5%)	
SDG 14 海の豊かさを守ろう	
水中の生物に関する研究 (27%)	
Citescore で定義されたジャーナルの上位 10% に入る論文の割合 (10%)	
大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)	
論文数 (7%)	
教育による水生生態系の支援 (15.3%)	
地域社会または国のコミュニティのための淡水生態系に関する教育プログラム (5.1%)	
漁業、養殖業、観光業の持続可能な管理に関する、地域または国のコミュニティ向けの教育または支援活動プログラム (5.1%)	
乱獲、無規制漁業、破壊的な漁業慣行についての認識を高めるためのアウトリーチ活動 (5.1%)	

行動を通じて水生生態系を支援する (19.4%)	
水域の保全と持続可能な利用を促進するためのイベントを支援または開催する (4.85%)	
学内の水産物が持続可能な方法で収穫されることを保証する方針 (4.85%)	
研究または産業界との関わりを通じて、既存の生態系とその生物多様性を維持・拡大する (4.85%)	
海洋産業が水生生態系へのダメージを防ぐための技術や手法に取り組む (4.85%)	
水に敏感な廃棄物処理 (19.3%)	
水質基準と排水ガイドライン (6.45%)	
学内のプラスチック廃棄物削減計画 (6.45%)	
海洋汚染を防止・削減する方針 (6.4%)	
地域の生態系を維持する (19%)	
水生生態系の物理的、化学的、生物学的変化を最小限に抑える計画 (3.8%)	
水生生態系の健全性を監視する (3.8%)	
水生生態系の管理を奨励するプログラムやインセンティブを開発し支援する (3.8%)	
共有の水生生態系を維持するために地域社会と協力する (3.8%)	
水生種の多様性に基づいた流域管理戦略 (3.8%)	
SDG 15 陸の豊かさを守ろう	
陸域生態系に関する研究 (27%)	
Citescore で定義されたジャーナルの上位 10% に入る論文の割合 (10%)	
大学で生産された論文の分野別重み付け引用指数 (10%)	
論文数 (7%)	
教育を通じて土地の生態系を支援する (23%)	
土地の保全と持続可能な利用を促進するためのイベントを支援または開催する (4.6%)	

キャンパス内の食品が持続可能な農法で生産されたものであることを保証する方針 (4.6%)

既存の生態系とその生物多様性を維持・拡大する (4.6%)

地域や国のコミュニティに対する生態系に関する教育プログラム (4.6%)

農業や観光のための土地の持続可能な管理に関する教育プログラムやアウトリーチ (4.6%)

行動を通じた土地生態系の支援 (27%)

大学に関連する土地生態系の保全、回復、持続可能な利用を確保するための方針 (5.4%)

大学の運営によって影響を受ける絶滅危惧種を特定し、監視し、保護するための方針 (5.4%)

新しい建物の建設など、あらゆる計画や開発プロセスに地域の生物多様性を含める (5.4%)

キャンパスにおける外来種の影響を軽減するための方針 (5.4%)

共有地の生態系を維持するために地域社会と協力する (5.4%)

土地に配慮した廃棄物処理 (23%)

水質基準および排水ガイドライン (7.7%)

学内のプラスチック廃棄物削減に関する方針 (7.65%)

有害物質を含む廃棄物処理に関する方針 (7.65%)

SDG 16 平和と公正をすべての人に

平和と正義に関する研究 (27)

Citescore によって定義されたジャーナルの上位 10 パーセントに掲載された論文の割合 (10%)

大学で生産された論文の分野別重み付け被引用指数 (10%)

論文数 (7%)

大学のガバナンス対策 (26.6%)

大学の運営組織における選挙による代表 (3.35%)

独立した学生組合の承認 (3.35%)

	地域のステークホルダーを巻き込む政策 (3.35%)
	地域のステークホルダーを巻き込むための参加型組織 (3.35%)
	組織犯罪、汚職、賄賂に関する方針 (3.35%)
	学問の自由を支援する政策 (6.6%)
	大学の財務データの公表 (3.25%)
	政府と協力する (23.2%)
	政府に専門的なアドバイスを提供する (6.4%)
	政策立案者や議員にアウトリーチを提供する (6.4%)
	政府部門と協力して政策に焦点を当てた研究を行う (6.4%)
	政治関係者が課題について議論するための中立的なプラットフォームを提供する (4%)
	法律・民事執行分野の卒業生の割合 (23.2%)
SDG 17	パートナーシップで目標を達成しよう
研究 (27.1%)	
	低・中所得国出身の共著者がいる学術出版物の割合 (13.55%)
	17 の SDGs に関連する出版物の数 (13.55%)
	目標を支える関係 (18.5%)
	SDGs 政策における地域 NGO や政府との関係 (3.7%)
	政府や NGO との SDGs に関するセクターを超えた対話 (3.7%)
	SDGs に関連するデータを収集するために国際的に協力している (3.7%)
	SDGs に取り組みベスプログラム、研究プログラムまたは教育リソースを通じて、SDGs に取り組むために NGO と協力する (3.7%)
	学生ボランティアプログラム、研究プログラムまたは教育リソースを通じて、SDGs に取り組むために NGO と協力する (3.7%)
	SDGs 報告書の発行 (27.2%)

SDGs についての教育 (27.2%)

【査読論文】

2歳児におけるリトミック活動の動きの分析 ー Aちゃんの行動変容に注目してー

高牧 恵里 (武蔵野大学 教育学部 准教授)

松井 いずみ (明星大学 教育学部 特任准教授)

荒金 幸子 (上野学園短期大学 千葉経済大学短期大学部 非常勤講師)

要約

本研究では、2歳児のリトミック活動について一人の子どもの動きを追い分析を行なった。その結果、表出と表現の間を行き来しながら徐々に主体的な表現へと変容していく様子や、身近な人との関わりによって、模倣の動きから意思を持った独自の動きが生まれていく過程が確認できた。

2歳児のリトミック活動は、発達過程と、「様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験となるようにすること」や「諸感覚を働かせることを楽しむ遊び」を十分に考慮したものであることが大切である。本研究からは、その上で身近な大人がどのように子どもの表出を受け止め、表現の芽生えに気づき寄り添っていくかが重要であることも確認された。

1. はじめに

一般的に2歳児は自己主張をすることが増え、自分の力でやりたいと思うことが増える。2歳児の姿として「段差や斜面などでの歩行や走行、飛び降りなどの運動機能が発達し、シールをはがしたり指先に力を入れて紙を折るなど手指の制御が進む。また、象徴機能の発達により、積木を食べ物に見立てるなどのあそびが盛んになり、それらを表現する語彙も増加する。単語から二語文、さらには『大小』『長短』などの二次元的な概念および自他を区別する二次元的認識を獲得する。この時期は、何でも自分でしようと強く主張するとともに、自分の気持ちが尊重され、自分を認めてもらうことを求める姿」¹などが挙げられる。また、表現の視点から見た発達過程としては「両足でピョンピョン跳ぶ。童謡に節をつけて部分的に歌う。赤、青などの色の名前がわかり、その正しい色をさす」²などがあげられる。

近年、3歳未満児を対象としたリトミック教室が盛んであり、インターネット上でもその様子を視聴することができる。しかし、そのほとんどが親と共に行うリトミックであり、講師と保護者が作る空間の中で、子どもと保護者が触れ合い

自体を楽しむものになっている。

一方、本研究で対象となる 2 歳の女児 A ちゃんは、1 ～ 2 歳児の子ども 12 名、保育者 3 ～ 4 名という保護者を伴わない環境の中で活動を行った。保育室は広いスペースとその横の区切られたスペースがあり、参加は自由であるため、保育者に寄り添われて見学している子どもや、両方のスペースを行き来している子どももいた。そのような自由で安心できる環境の中で、A ちゃんが自ら音を聴き、音楽を感じ、主体的に活動を行ったものを記録した。

保育所保育指針における 3 歳以上児の「表現」で留意すべきこととして、「様々な表現の仕方に親しんだり、他の子どもの表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」とあるのに対して、1 歳以上 3 歳未満児の「表現」で留意すべきこととしては、「子どもの表現は、遊びや生活の様々な場面で表出されているものであることから、それらを積極的に受け止め、様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験となるようにすること」や、「発見や心が動く経験が得られるよう、諸感覚を働かせることを楽しむ遊びや素材を用意するなど保育の環境を整えること」としている。³ 2 歳児の発達過程と、「様々な表現の仕方や感性を豊かにする経験となるようにすること」や「諸感覚を働かせることを楽しむ遊び」を十分に考慮し、活動の計画を立てた。

2 歳児のリトミック活動をテーマにした先行研究としては、保育者の表現が乳幼児の表現に影響を及ぼすことを明らかにした「保育の場における身体表現に関する研究動向 — リトミック活動を通して —」⁴や、リトミック活動の観察から模倣の分析を通して、子どもたちの心身の発達への影響を検討した「保育園におけるリトミック活動の実践と 1、2 歳児の模倣行動の発達的変化の検討」⁵、そして保育施設におけるリトミックの実践から、子どもが何を学び、何が育っているのかを論考した『子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの保育実践研究（第一報）：保育施設における 1・2・3 歳児学級の事例を中心に』⁶などが挙げられる。しかし、一人の子どもの動きを追い、分析した研究は管見の限り見当たらない。

2. 本研究の目的

2 歳児のリトミック活動の中で、特に A ちゃんの動きを分析することで、表出から表現へと変容していく様子や、模倣の動きから徐々に独自の動きが生まれていく過程を明らかにしていく。

3. 研究の方法

2023 年 10 月と 11 月に M 大学附属保育園 1 ～ 2 歳児 12 名の園児と行なった 2 回の活動について、参与観察と非参与観察を併用しながら複数の機器で撮影し、映像と写真をもとに動きの分析と考察を行なった。活動は自由参加で、子どもたちの発達や、保育における生活時間に配慮しながら 1 回につき 20 分程度として実施した。本研究では、その中で映像に多く写っていた A ちゃんに焦点を当てることとし、動きの傾向などを分析しながら動向を探っていく。本研究に関して、主旨を説明した上で園と保護者の同意を得ている。

4. 保育園と A ちゃんについて

M 大学附属保育園には 1 歳児 6 名と 2 歳児 6 名が在籍している。普段、特にリトミック活動は行っていないが、わらべうたを歌う機会が多く、子どもたちは音楽に慣れ親しんでいる。本研究の活動時には随時 3 ～ 4 名の保育者が同席し、子どもたちと程よい距離を保ちながら一緒に活動している。

A ちゃんは、普段からごっこ遊びや歌が好きで、季節の花などにも興味を持っている。また、戸外でも活発に過ごし、兄弟が頑張っているサッカーを「自分もやってみたい」と表現するような積極的な女の子である。

5. 活動の内容

筆者の一人である講師は、1 回目の活動の当日に初めて子どもたちと出会った。壁面に飾られていた子どもたちの「どんぐり」と「どじょう」の作品を一緒に見ながら、拾い集めてきた様々な大きさのどんぐりを見せたりして、会話をすることから始めた。次に、わらべうた《どんぐりころちゃん》で遊び、童謡《どんぐりころころ》と一緒に歌った後に、下記の活動へとつなげた。

（1）即時反応「散歩」

主な活動内容：講師の「お散歩に行きましょう」という声かけの後、子どもたちは 4 分音符の音楽で自由に歩く。音楽がランダムに停止し、少し待った後、再度 4 分音符の音楽で自由に歩く。途中で「どんぐり見つけたよ」という声かけがあり、合図の和音が鳴る。講師が頭の上で両手を合わせ、どんぐりのポーズをして示し、子どもたちが模倣をする。どんぐりの合図の音は、「大きいどんぐり」や「小さいどんぐり」を表すためのニュアンスの違いがあり、子どもたちは次第にそれを聴き分け、模倣ではなく自らポーズをするようになる。しばらくして、ど

じょうを表す《クネクネの音楽》が加わる。時々、音楽が止まるのみで合図の音が何も鳴らないこともある。講師は活動の最初のうちはポーズを示すが、途中から示すことなく、子どもの様子を見た後に一緒にポーズをする。また、子どもたちが表現する姿に近寄り、驚きや共感を伝える。

（2）わらべうた《こまんか》

主な活動内容：歌いながら、指や手、そして腕や全身を使って波の動きを表現する。最初は音楽のフレーズやダイナミクスを感じるように、講師が下向きの弧を描くように両手を左右に振る動きを示し、その後は、どのように動いたら良いと思うか子どもに問いかけ、子どもの動きを取り入れていく。曲に慣れてきたところで、スカーフを揺らして波を表現する。

（3）即時反応「おばけ」

主な活動内容：スカーフを持った子どもたちが遊びながら被り始めたため、講師は子どもたちの様子に合わせ、短調の音楽を用いて2分音符で《おばけの音楽》を演奏する。決まった動きはなく、子どもたちは自由におばけを表現する。しばらくして、長調の音楽で4分音符の《元気に歩く音楽》に変わる。

その後、スカーフを丸めてどんぐりを作ったり、リズムに合わせてスカーフを投げ上げたりする活動も行った。今回、観察・分析の対象とした活動は、10月、11月の2回とも同じ内容で行ったものから選択した。

6. リトミック活動における動きの視点による分析

活動内容とAちゃんの動きを示した「表1」の中で「表現」や「発達」の視点から特に注目したい箇所に下線を引く。さらに「音楽的要素」の視点から特に注目したい箇所には、文字を斜体にした上で下線を引く。また、講師の言葉かけは「 」、音や音楽については《 》で示す。

「表1」

1 回目の活動	
・活動内容 《音楽》 「言葉かけ」など	A ちゃんの動き・様子
(他の活動)	
・即時反応「散歩」 「お散歩に行きましょう」 《歩く音楽》 《音楽を止める》 《音楽を止める》 《歩く音楽》 《音楽を止める》 《歩く音楽》 《音楽を止める》 《歩く音楽》 《音楽を止める》 「どんぐり見つけたよ、これは大きいどんぐり」 《大きいどんぐりの音》 「どんなどんぐり？」 →少し間をあける。 →ポーズを見せる。 子どもたちの様子を見て「すごい！大きい！」 《歩く音楽》 《大きいどんぐりの音》 《歩く音楽》 「これは？」 《小さいどんぐりの音》 →少し間をあける。 座ってポーズを見せる。 《歩く音楽》 「これはなあに？」 《小さいどんぐりの音》 「あら、これは小さいわね」と A ちゃんに声をかけに行く。 《歩く音楽》 「これは？」 →《大きいどんぐりの音》 「すごい」 《歩く音楽》	保育者と手をつなぎ立ち上がる。腕を振り歩く。足取りは音楽の速さよりもゆったりしている。 ゆっくり止まる。ニコニコした表情で周りを見渡す。 周りを見ながらゆっくりと歩き始める。 体を横に揺らすようにしながら止まる。嬉しそうな表情で保育者を見る。その場で小さなジャンプを繰り返す。 保育者と腕を振りながら歩き出す。 音楽と共に止まる。声を出してその場で小さなジャンプを繰り返す。 手をつないだまま、両足でジャンプしながら前に進む。ジャンプは徐々に大きく力強くなる。 講師の様子を確認した後、周りの子の顔や動きの様子を見る。 つないだ手を離さず、その場でジャンプを続ける。ジャンプが細くなり数が増え始める。 口を大きくあけて手を添え、楽しい気持ちを出している。 ジャンプを止めずにいる。 膝を深く曲げながらジャンプで移動する。 両足を揃えて止まる。 講師に注目した後、背筋を伸ばし頭の上に両手で三角を作る。どんぐりのポーズを作りながら大きなジャンプ、小さなジャンプを繰り返す。 保育者の手を離し、一人で歩き始める。腕の振り、<u>足取りは音楽に合い始める。</u> 音楽が止まった後、5歩ほど多く歩いてから、どんぐりのポーズをする。両足を大きく広げ腰を落とした姿勢から、模倣以上の大きいどんぐりを表現する。周りを少し見る。 両手を口に当て、嬉しそうに前後にジャンプをする。 <u>ピアノの方を見ながら、腕を大きく振り力強く歩く。</u> <u>素早くしゃがみ込み、</u>講師をよく見て模倣をする。肩を縮めて顔の前で両手を小さく組み合わせ、小さいどんぐりを表現する。 講師がピアノの元へ動いても、背中をまるまめたまま、小さいどんぐりを表現している。 音楽が鳴り出して4拍ほどは、小さいどんぐりの形のままお尻を揺らして音楽を聴いている。 立ち上がり、両手を上にあげたり、膝を高くあげて細かいステップをしながら、踊るようにして歩き出す。 音楽と共に素早く止まり、次の音を待つ。小さい音を聴き、両手を口に当てた後、座って小さいどんぐりを表現する。 講師の動きを見て音楽が鳴るタイミングを予測し立ち上がり、合わせて歩き出す。足を後ろ側にあげるようにして歩き方に変化が見られる。4分音符の音楽よりも遅いステップ。 満面の笑み。音楽が止まると、少しよろけながらすぐに止まる。振り返るようにしてよく見ようとしている。 大きいどんぐりの音を聴き、一度大きくジャンプをしてから、<u>両足を広げ、膝を深く曲げる。</u> 両手は、講師の手や肘の使い方を模倣し、肘を曲げ頭の上で手を合わせる。肘を横に張って大きさを表す。<u>講師がそばまで見に来た時には、頭の上の手を少し離して揺らし、どんぐりの大きさを表現する。</u> しばらく大きいどんぐりの形を崩さず周りを見ている。

「どうしようかな？」 →少し間をあける。 →《大きいどんぐりの音》 《歩く音楽》 《音楽を止める》 →少し間をあける。 《小さなどんぐりの音》 《歩く音楽》 「クネクネどうする？」 《クネクネの音楽》 両手を合わせクネクネ動かして見せる。 《歩く音楽》 《クネクネの音楽》 《歩く音楽》 「これは？」 《大きいどんぐりの音》 「大きい！」 《歩く音楽》 「一番大きいのは？」 《一番大きいどんぐりの音》	膝を曲げて構えた状態で、ピアノの音を待つ。大きな音を聴き両手を口に当てる。講師の方を見てから、より大きなどんぐりを表現するようにジャンプし、伸びを大きくする。その後、足を徐々に横に広げ、更に大きなどんぐりになろうとする。 他の子どもの顔を見ながら、腕、足を大きく動かして歩く。リズムに合っている。 ピアノを見ず周りを見ながら音を聴いて止まる。次の音を待ちピアノの方を見て、小さな音を確認してから座り、小さいどんぐりのポーズをする。体を小さく丸めるようにしゃがみ込み、ひじを閉じて模倣に工夫を加えた表現をする。
・わらべうた《こまんか》 講師がピアノから離れ正座をして、《こまんか》を歌い始める。「お水がちゃぽーん、ちゃぽーん」と声がけしながら人差し指を出し、下向きの弧を描くように動かす。 小さい《こまんか》 大きい《こまんか》 両手を振り上げる。 「もっと大きな波は？」 →子どもの動きを取り入れる。→もっと大きい《こまんか》 ・スカーフを配る スカーフをかぶる子どもが多かったため、「みんなおぼけになるの？」 《おぼけの音楽》 《元気な音楽》 《おぼけの音楽》 「あれー、わあー、おぼけがたくさんいる」 《元気な音楽》 ・スカーフを使って《こまんか》 《こまんか》を歌いながら下向きの弧を描くようにスカーフを揺らす。 小さい《こまんか》 「大きいのは？」 大きい《こまんか》	肘を曲げてリズムをとるように歩く。歩き方が安定してくる。 足を前後に開き、膝を曲げて、音を待つ。音を聴き、「わ！」と声を出し、両腕を上にあげねじるように身体を左右に揺らす。 両手をクネクネさせている講師の様子を見て真似をする。 両手を振り、周りを見ながら足踏みをする。 足を止め、音を聴いて「こだ！」という声を出し、そばにいる保育者に笑いかけクネクネの動きを見せる。背中を丸めながらお尻まで動かす。 クネクネの手の形のまま止まり、周りを見ている。 音を聴き「きゃー」と声を出し直後に跳ね上がり、背筋をピンと伸ばした大きなどんぐりを作る。両足で数回大きなジャンプをし、足を大きく開いたまま止まる。 音に反応する時間が早い。 足の裏で強く踏みつけるように一人で歩く。音楽と多少のずれがある。 しゃがみ込んで音を待つ。音に反応し、素早く背伸びをして、つま先で立ち、胸を大きく張り、手を高く伸ばし、大きなどんぐりのポーズをする。バランスをとりなら大きなどんぐりのポーズを作り続ける。 同じように正座姿勢をとり、すぐに両手人差し指を出して真似をする。人差し指は上向きで、歌に合わせて左右に直線的に動かす。自分の指を見ながら、どのように動かせば良いか考えている様子。 正座のまま両手の小指を出し、肩をすぼめ顔に付けるようにしてじっと講師を見つめる。講師をよく見ており、「どうぞ」に合わせて両手を振り上げ準備をすることができている。講師が両腕を下向きの弧を描くように動かしているのを見て、片方の腕をあげ、もう片方の腕を胸の前に折り曲げることを左右で繰り返し、同じようにしようと試みているが、直線的な動きになる。指を開いて手のひらにも大きさが表れている。 講師の問いに対して、両腕をあげ、頭の上で大きなマルを作るようにして見せる。 講師と共に立ち上がり、両手を高くあげたまま指を大きく広げる。弧を描くことができず、片手ずつ高くあげ、もう片方を胸の前に折り曲げる動きを繰り返す。 自由に遊ぶ。 スカーフを被り講師に近づく。 音楽が鳴ると向きを変えて、周りを見ながら身体を左右に少し揺らし、少しずつ前に進む。 スカーフを被ったまま両手を振って歩く スカーフを被ったまま、他の子どもたちとゆっくりピアノの傍に近づく。 ピアノから1歩下がりが間隔をあけ、スカーフをかぶったまま、音楽を聴き、音楽に合わせて手拍子をする。 講師と同じように左右に振る。動きは直線的で音楽には合わない。 前屈みになりスカーフを顔前で小さく揺らす。音楽には合わない。 講師の問いかけに対し、スカーフを両手で高く持ち上げて見せる。 スカーフが大きく扱いづらいため、動きの方向は左右上下ランダムになり、音楽に合っていない。立った姿勢のまま、膝や足首は動かしていない。

「一番大きいのやってね」 →ピアノ伴奏をする。 小さい《こまんか》(ピアノ 伴奏) 大きい《こまんか》(ピアノ 伴奏) (他の活動)	スカーフを上下左右前後ランダムに大きく動かす。 スカーフを弧の形に動かすことができている周りの子どもを見る。他の子がスカーフを手の 中に丸めているのを見て真似をする。 スカーフを思い通りに動かす事ができず、広げて持ち、周りを見ながら何かを探しているよ うな様子。
スカーフをかぶっている子 どもを見て「おばけやりたいの？」 《おばけの音楽》 《元気な音楽》 《音楽を止める》 《元気な音楽》 《音楽を止める》 《元気な音楽》 《音楽を止める》 《おばけの音楽》 《元気な音楽》 《音楽を止める》 《元気な音楽》 《音楽を止める》 《元気な音楽》 →少し遅くして止める。 「またどんぐり来てもい い？」 →少し間をあける。 →《小さいどんぐりの音》 《元気な音楽》 《小さいどんぐりの音》 《元気な音楽》 《大きいどんぐりの音》 (他の活動)	講師の問いに対して「うん」と頷き自らスカーフを被ってヨロヨロと歩き出す。 <u>スカーフを頭から外し、音に合わせ踏みしめるように歩く。</u> 数秒後経ってから、音が止まったことに気づき、「止まった」と言って講師を見る。両足を止 め、膝を小さく上下に揺らし嬉しそうにする。 <u>スカーフを振り、下に降ろすタイミングで強めにリズムをとるようにしながら歩く。</u> 音と一緒にすぐ止まる。膝を少し曲げて次の音を待つ。 周りの様子を見ながら、腰を屈めて歩く。 「止まった！止まった！」と声を上げる。 手に持っていたスカーフを広げてゆっくりかぶる。両手を前に出して垂らし、他の小さな子 どもに向かって近づく。その後、両手を頬に添えて周りを見渡し、少し離れた保育者に「わ あ」と言って小走りで近づく。 保育者と笑顔でアイコンタクトをした後、スカーフを取り、周りの子どもの様子を見る。足を 後ろ側に蹴り上げるようにしながら両手を前後に振り、力強く満足気に歩く。リズムに合っ ている。 止まってから「きゃあー」と大きな歓声を上げる。 スカーフを持って手を高くあげながらジャンプを繰り返した後、リズムにのって歩き出す。 他の子どもの歓声に一度止まり一緒に笑う。 足を後ろ側に蹴り上げるようにしながら歩き出す。リズムに合っている。 <u>ピアノが少し遅くな ると足の動きを合わせる。</u> 音が止まり講師に注目し、問いかけに対してすぐにうなずく。小さい音が鳴ると、誰かの模 倣ではなく、自ら小さなどんぐりを表現する。腰をかがめ、背中を丸めてスカーフを体の前 でにぎりしめる。 <u>ピアノの方を見ず、音だけを聴いて歩き出す。</u> 音に気づき自ら腰を落とした後、ピアノの方を見て確認する。次の音が鳴り出すまで、小 さいどんぐりのポーズのまま、じっと待つ。 リズムに合わせて歩きながらピアノの方を見ている。 次の音を待ち期待している様子。 少し膝を曲げ溜めた姿勢から大きくジャンプする。歓声をあげながら丸めたスカーフを持 った腕を上にあげ高く伸びる。

2回目の活動	
・活動内容 《音楽》 「言葉かけ」など	Aちゃんの動き・様子
(他の活動)	
・即時反応「散歩」 《歩く音楽》 《音楽を止める》 《歩く音楽》 《音楽を止める》 《歩く音楽》	保育者を誘い出すように手を引き歩き出す。 保育者と手をつないだまま足を止める。 足の裏で床を強く踏みしめるようにリズムをとりながら歩く。 笑顔で保育者の顔を見ながら手を離し、嬉しそうに数回ジャンプして床に座り込む。 直ぐに立ち上がり一人で足を高く上げて歩く。

《音楽を止める》	<u>音が止まるとすぐに動きを止める。</u> 歓声をあげながら、足をパタパタさせる。
《どんぐりの音》 どんぐりのポーズを見せる。	講師の話聞き、歓声をあげながらどんぐりのポーズをした後に座り込む。
《歩く音楽》	両手を上にあげて歩き出す。
《どんぐりの音》	どんぐりのポーズを作りながら、膝を曲げ伸ばして体を上下に揺らす。
《歩く音楽》	<u>肘を曲げ動かしながらジャンプをするようにリズムカルに歩く。</u>
《音楽を止める》	止まった後周りを見渡す。
「ちっちゃいどんぐり！」	片手を大きく振り、足をあげて歩く。
《小さいどんぐりの音》	歓声をあげてジャンプをし、伸びあがるようにしてどんぐりのポーズをする。大きく背伸びをして、後ろによろめく。そのまま後ろに歩いて自転する。
《歩く音楽》	<u>片手を大きく振り、足をあげて音を立てて歩く。</u>
「これはどっちかな？」	音を確認した後、歓声をあげてジャンプをし、伸びあがるようにしてどんぐりのポーズをする。再び大きく背伸びをしてよろめき、バランスをとりながら5歩下がる。
→《大きいどんぐりの音》	保育者の顔を見たり周りを見たりしながら足を高くあげて歩く。
《歩く音楽》	音が止まると顔の横に両手を広げて「あ！」と笑う。
《音楽を止める》	しゃがみ、肩をすぼめ、顔の前で手を組み、小さなどんぐりを表現する。
《小さいどんぐりの音》	<u>小さいどんぐりのポーズのまま腰を屈めて前に進み、他の子供たちと関わろうとする。</u>
《歩く音楽》	小さいどんぐりの姿勢のまま数歩進んだ後、立ち上がり元気よく歩く。
「これはどじょうだよ」	「きゃー！」と声を出し、両手を上にあげ、小さく走る。
《クネクネの音楽》	その後、歩きながら両手を顔の前で合わせ、肘を張るようにしてクネクネさせながら歩く。
「こんにちは。どじょうが出てきました～」	保育者と目を合わせる。
《歩く音楽》	講師の真似をして、おじぎをするような「こんにちは」のポーズをする。
「これなんだ？」	片手を大きく振り、足をあげて音を立てて歩く。
《クネクネの音楽》	自主的にどじょうの表現をする。
「どじょうが出てきた～」	<u>クネクネする動きが音楽と合っている。</u>
《歩く音楽》	保育者と目を合わせ、どじょう同士（指先）をくっつけて「あはは！」と声を出して笑う。
《音楽を止める》	保育者ともう一度どじょうを合わせようとする。
→間をあける	<u>音が止まると同時に「あ！」と声を上げ、足を前後に開き歩く動作のまま止まる。</u>
「あれ、何もなかったね」	音を立てるようにして歩く。
《歩く音楽》	歓声をあげ、両手を合わせ上に大きく伸び、つま先で立つ。バランスをとるためにつま先のままヨロヨロ歩く。
《大きいどんぐりの音》	片手を大きく振り、楽しそうに足で音を立てながら強く歩く。
《歩く音楽》	すぐにどじょうの動きをしながら、先ほどの保育者の元へ駆け寄って行き、どじょう同士を合わせる。歓声をあげ、もう一度くっつけようとする。
《クネクネの音楽》	音に合わせて軽快に歩く。
《歩く音楽》	片足を後ろに大きく引き、膝をついて止まる。「なにもなかった」ことを表現している様子。
《音楽を止める》	両手を顔の横に近づけ、天井を見るように頭を上下させながら歩く。
→少し間をあける。	足踏みは力強いが、上体はリラックスしている。
→「なんにもなかったねー」	音を聴いてすぐに小さいどんぐりを作りしゃがみ込む。 <u>音に対しての反応が早くなる。</u>
《小さいどんぐりの音》	小さいどんぐりポーズのまま、しゃがんで歩き、保育者に近寄る。
《歩く音楽》	音にしっかり合わせて歩く。
《クネクネの音楽》	両手をでどじょうをつくり、手をしっかりクネクネさせる。
《歩く音楽》	膝で歩き移動する。
《大きいどんぐりの音》	保育士と手をつなぎ、支えてもらいながら、あいている方の手を高く上げ、体を反らせながらつま先立ちで伸びあがる。
→少し間をあける。	保育者と手をつなぎ、腕を元気よく振りながら歩く。
→「よく分かったね。今は大きいよね」	
《歩く音楽》	

《音楽を止める》 「一番大きいどんぐり！ せーのっ！」 《一番大きいどんぐりの音》 ・わらべうた《こまんか》 両手人差し指を揺らしながら歌う。 「お母さんさん指出してね」 →《こまんか》を再度歌う。 小さな《こまんか》を歌いながら動きを見せる。 「ちょっと大きくなりたいな」→ 子どもの動きを取り入れる。 →両手を開いて《こまんか》 「もっと大きいのは？」 →子どもの動きを取り入れる →もっと大きい《こまんか》 「もっと大きいのはどうすればいいかな？」→子どもの動きを取り入れる。 →立ち上がって《こまんか》 「一番大きいのは？」子どもの動きを取り入れる。 →ジャンプをして《こまんか》 ・スカーフを使って《こまんか》(立った姿勢) 小さい《こまんか》 大きい《こまんか》 もっと大きい《こまんか》	保育者と手をつないだまま止まる。 「あ～あ～！」と歓声をあげながら伸びあがった後、前に倒れこむ。 座って友達と体を寄せ合い、講師の動きに注目する。 正座をして、胸の前に人差し指を出し、集中して講師の真似をする。 人差し指を曲げ伸ばししたり、肘を使ったり首や上半身を小さく揺らしたりして左右に動かす。 下向きの弧を描くことはできず、直線的で複雑な動きをしながら探っている。 顔の前に小指を出し、肩をすぼめ動きを真似する。肘を小さく揺らして音楽によく合わせて振り始めるが、途中から自分の鼻の前に両手の小指を寄せて付け、更に肩をすぼめて動きを止める。 両手を指先まで大きく広げた状態で歌が始まるのを待つ。 両手で下向きの弧を描けるようになる。 動きが音楽によく合っている。 講師の問いに対して、指を広げた両手を前にまっすぐ伸ばして、自らの動きを見せる。 正座をしたまま、胸を広げ、歌に合わせて両手を高く大きくねじるように振る。 講師の問いに対して、両手をあげながら座った姿勢から膝立ちになる。 立ち上がり、両腕を高くあげたまま揺れる。 講師の問いかけに対して、両腕を高くあげたままジャンプをして見せる。 胸を張り、両腕をあげピョンピョンとジャンプを繰り返す。 歌を口ずさみながら、フレーズに合わせて左右にスカーフを振る。 スカーフの動きが音楽に合っている。 スカーフを短く持ち直し、前かがみの姿勢で短く持ったスカーフを左右に振る。 スカーフを広げじっと見ている。 再び、スカーフを動きやすいように持ち直し、左右にしっかりアクセントとりながらリズムと合わせ振る。
(他の活動)	
・スカーフを持って即時反応 《おばけの音楽》 《元気な音楽》 《おばけの音楽》 《元気な音楽》 《音楽を止める》 《元気な音楽》	スカーフを被りそりそりと歩く 明るい表情をしながら、両足で細かなジャンプを繰り返す。 音楽を聴き即時に判断をし、丸めて持っていたスカーフを広げ顔の上にのせて被る。 両手を顔の前に垂らし、おばけのポーズを作り、膝を曲げ腰を丸め、音楽に合わせて保育者の方へそっと進む。その後、向きを変えて周りの友達に向かって行く。再度向きを変え、つま先から静かなジャンプをして保育者に近づき、スカーフ越しに顔を寄せる。 頭からスカーフを取り、上下に大きく動かしながら足取り軽く進む。 膝の曲げ伸ばしやスカーフの動きが音楽に合っている。 音が止まるとすぐに体全体の動きを止める。 足踏みをしている。スカーフを持ち替えたり広げたりして、一度に多くの動作をしている。
(他の活動)	

7. 考察

(1) 即時反応「散歩」

1 回目の活動の冒頭で保育者と一緒に音楽に合わせて動き始めるが、保育者と一緒に行動しているため、安心して音楽に合わせた動きを楽しんでおり、音楽に合わせて歩いたり、止まったりすることの面白味を次第に感じ、動きとなって表出し始めている。2 歳児の社会性の発達とその目安「他の子と平行遊び」の項

目にもあるように、友達の様子も窺いながら行動しているが、「自分であそびを見つけ、取り組む」⁷の発達の視点で見ると、「散歩」の面白味を感じて、次第に保育者から離れて一人で音楽に合わせた動きを始めており、活動が変化している。

2 回目の活動では、音楽を聴いて感じた動きを表現しており、保育者を誘い出すように手をつないで歩きだす姿が見られ、他者と音楽の体験を共有しようとしていた。

1 回目の「どんぐり」の活動の際には、「大きいどんぐり」や「小さいどんぐり」を講師の動きの模倣から、自ら表現したい動きへと変化している様子が見受けられた。2 回目の活動では、音楽を全身で受け止めているようで、弾むような音楽のイメージからどんぐりのポーズがさらに変化してきた。「大きいどんぐり」「小さいどんぐり」の動きでは、歓声を上げてジャンプし、伸び上がるように体を使い、よろめきつつもバランスをとろうとする様子も見られた。

1 回目の《クネクネの音楽》の時は、音を感じ取り、講師の真似をして両腕を使ってクネクネした動きをした。さらに全身を使って本人の独自の動きに変化していき、動きと共に声を発して動く様子は、正に本人独自の表現であると考えられる。

2 回目は、講師の真似をして、どじょうがお辞儀をしているような様子を見せ、手先だけでなく、肘を使う姿が見られ、保育者にクネクネしている姿を伝えたいしぐさから、他者との表現を楽しんでいる姿が見受けられた。また、A ちゃんの表現したい気持ちが身体能力を超えた時に、保育者がそれを汲み取りそっと手を差し出し支える姿も見られた。

（2）わらべ歌《こまんか》

講師が《こまんか》に合わせて指先を動かす活動に対し、A ちゃんは人差し指や小指で左右に波を表現する動きを模倣しようとして一生懸命考えている様子が見られた。大きい《こまんか》の時は、両腕を左右に動かすところを片腕で左右に動かすところから取り組んでいる。両腕で弧を描くことが難しいようだが、その動きに対し集中して取り組もうとしている姿が見られた。その中で徐々にジャンプする姿も見られるようになった。

2 回目の活動では、1 回目と同じ動きができるか模索している様子が見られた。講師の声かけには、保育者の指示がなくても耳を傾け、動きの模倣をしようと準備を始めるような動きへ発展している。音楽も理解できるようになり、音楽

の強弱に合わせた動きへと変化してきた。もっと大きな動きを求めた時は、座った状態から、膝立ち、そして立ち上がって大きなジャンプを見せようとしていた。

活動の途中で、A ちゃんはスカーフを使用して《こまんか》の「波」を表現しようとした。スカーフは対角線が約 1m あり、1～2 歳児が端を持つと床についてしまうほど長いため、スカーフをどのように扱えばよいのか試行錯誤しているように見受けられた。スカーフを持って周りを見渡し、スカーフを滑らかに動かしている友達の様子を見た後、自分の手元を見ながら思考した結果、スカーフを短く持ち、音楽のフレーズに合わせながら振ることができるように工夫していた。音楽を聴きながらスカーフを使って表現する思考の芽生えが見られる。

（3）即時反応「おばけ」

A ちゃんは頭にスカーフを被せて、「おばけ」のしぐさを講師に示し、ヨロヨロと歩き出す。しかし《元気な音楽》に変わると、スカーフを外し、足の裏で踏みしめるように音を聴きながら歩くようになった。これは、音楽に対する興味を示す動きへと変化し、自主的に動きたい意志の表れであることが考えられる。さらに音楽を止めると数秒後に「止まった！」と言って講師を見たり、膝を上下に揺らし、ピアノの音に注目している様子が窺えた。《元気な音楽》に変わると、スカーフを手を持ち替え、ピアノの音に合わせて振り下ろすタイミングにアクセントをつけながら、リズムを取るように変化した。次にピアノの音が止まると「止まった！止まった！」と自ら言葉を発し、「止まる」ことへの喜びを体だけでなく言葉でも感じて表現している。《おばけの音楽》に変わると、持っていたスカーフをゆっくり被り、両手を前に出して他のお友達と近づき、関わりを求めている姿があった。そして保育者に「わぁ」と声を発しながら近づく、笑顔でアイコンタクトをとる等、自分が表現していることを受け止めてもらいたい、そして満足している気持ちを受け止めてもらいたい意思表示が見られる。

2 回目のスカーフを使った活動でも、スカーフを被って歩くところから始めており、スカーフの感触や色合いを楽しんでいる様子が見られる。《元気な音楽》の時は 4 分音符のリズムに合わせてジャンプをしているが、《おばけの音楽》に変わると「おばけ」のポーズを作り、膝を曲げ、腰を丸めながら音楽に合わせて動き、保育者のところへスカーフを落とさないように忍び足で歩く様子は、自分でおばけになりきって表現している姿と言える。

今回のリトミック活動では、活動経験を重ねることで、模倣の動きから自己表現に変化していく A ちゃんの様子があった。

また、《こまんか》の小さい波を表現する際には、講師がそっと小声で伝えることによって、A ちゃんは体も小さく見せようと自分の顔の前で小指を使った小さい波の動きをして楽しんでいた。さらに大きな波について話す講師の声は、決して大声ではないが、エネルギーを感じるようなニュアンスがあり、子どもが両手を指先まで広げ、自ら背伸びをしたり全身を大きく使う工夫のある動きへと発展し表現していた。このことから、講師のアプローチにも抑揚があることを受け止め、強弱に合わせた動きの変化など、音楽を感じる姿が確認できた。

子どもの遊びは、心身の発達をもたらす感覚・運動から刺激を受け、自己の遊びを発展させることにつながっていく。さらに新しい機能を獲得する学習では、相手と同じ動きをしたい意思のあらわれである模倣が動作中に表れ、次に見立て遊び、やがてごっこ遊びへと発展する。今回注目した A ちゃんは、この遊びのプロセスを日々の生活の中で積み重ねているからこそ、リトミック活動の中においても表現する力が大いに発揮できているのではないかと考えられる。

8. 終わりに

本稿では、歩く、走る、跳ぶなどの運動機能が発達し始め、動きの模倣を楽しむようになる 2 歳児に焦点を当て、主に A ちゃんの動きに注目をして分析を行った。今回、他の 2 歳児の様子について取り上げることができなかったため、今後は他の子どもの動きも引き続き分析していきたい。リトミック活動は、子どもが、内に秘めている能力や性質などを存分に表に出すことが可能であり、そのことが日々の健やかな子どもの成長につながり、しあわせな未来へ導くことができると思われる。

謝辞

本論文は、2023 年度しあわせ研究費（研究テーマ：子どものリトミックを通しての表現活動に関する研究—リトミック活動の身体的影響について—）の助成を受けたものです。

この研究を行なうにあたって、武蔵野大学附属慈光保育園の先生方に研究の趣旨をご理解いただき、1～2 歳の園児さんにご協力いただきました。

ここに深く御礼申し上げます。

〈引用文献〉

- ¹ 河原紀子・港区保育を学ぶ会(2018)『0 歳~6 歳 子どもの発達と保育の本 第 2 版』学研プラス,p.35.
- ² 無藤隆(2018)『事例で学ぶ保育内容 <領域>表現』萌文書林 新訂版,p.59.
- ³ 保育所保育指針 (平成 29 年厚生労働省告示第 117 号)
- ⁴ 中根佳江・瀧川光治(2021)「保育の場における身体表現に関する研究動向 ーリトミック活動を通してー」『大阪総合保育大学紀要 15 号』 pp.1-8.
- ⁵ 高牧恵里・今福理博(2021)「保育園におけるリトミック活動の実践と 1,2 歳児の模倣行動の発達的变化の検討」『武蔵野教育學論集第 10 号』 pp.77-84.
- ⁶ 小竹沙織・馬場訓子・高橋慧・渡邊祐三・高橋敏之(2020)「子どもの主体的な身体表現を引き出すリトミックの保育実践研究(第一報) ー保育施設における 1・2・3 歳児学級の事例を中心にしてー」『岡山大学教師教育開発センター紀要 10』 pp.183-197.
- ⁷ 湯汲英史(2018)『0 歳~6 歳 子どもの発達とレジリエンス 保育の本 ~子どもの「立ち直る力」を育てる~』学研プラス,p.20.

【査読論文】

我が国における道德教育と国際バカロレア教育の関係についての基礎的考察

田中 無量（武蔵野大学仏教文化研究所客員研究員）

要約

本稿は、我が国の道德教育と国際バカロレア教育（以下 IB）の関係を考察するものである。「道德科」の学習指導要領・解説の記述分析を中心に両者の関係を整理し検討すると、「IB の使命」およびそれを具体化する「IB の学習者像」と我が国の道德教育には多くの共通性がみられ、「IB の使命」には内在する道德教育がある。また学習者像は、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となっており、我が国における道德教育と整合する。そしてそれに基づくプログラムは、学校の教育活動全体で行う道德教育に収められ得るものであろう。また IBDP の TOK と CAS は IB の道德性を発揮する教育プログラムである。IB の他の各プログラムは分析的科学的手法が採用されるが、相互に補完することで IB の使命・学習者像を実現し、IB 全体の道德教育が実践される。これを他の学校教育に応用すれば、各教科における教科独自の科学的方法、分析に基づく真理探究の授業も可能である。

1. 序論 ―問題の所在―

本稿は、我が国における道德教育と国際バカロレア教育（International Baccalaureate 以下 IB）の関係について考察するものである。従来、十分に検討されてこなかった道德教育と国際バカロレア教育の関係について、「特別の教科 道德」（以下、道德科と略）の学習指導要領・解説の記述分析を中心に両者の関係を整理し検討してみたい。

教育基本法第一条には、「人格の完成を目指し平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた国民の育成を期して行われ」とある。この人格の完成及び国民の育成の基盤となるものが道德性であり、その道德性を育てることが学校教育における「道德教育」の使命である¹。

我が国の道德教育は、近代日本において明治期より様々な変遷があるが、2015

年の学習指導要領の一部改正において、小学校・中学校に「道德科」が明記された。道德科は各教科と横並びではなく、学校の教育活動全体で行われる道德教育の要としての役割を担う。そして新たな道德教育の目標は、「自己の生き方（人間としての生き方）を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者ととともによりよく生きるための基盤となる道德性を養うことを目標とする」（括弧内は中学校、傍線部は引用者による）である²。

人格の完成及び国民の育成の基盤となる道德性を育むのが「道德教育」であり、それは学校教育全体で行われるものであり、道德科はその道德教育の要となる。高等学校に道德科は設定されてないが、先に挙げた教育基本法第1条に基づき、学校教育全体のなかで「道德教育」が求められている。

一方 IB は、国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が提供する国際的な教育プログラムである。1968 年、世界の複雑さを理解して、そのことに対処できる生徒を育成し、生徒に対し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルを身に付けさせるとともに、国際的に通用する大学入学資格（国際バカロレア資格）を与え、大学進学へのルートを確保することを目的として設置された。これがディプロマプログラム（DP：Diploma Programme）である。その後、1994 年に「IB 中等教育プログラム」（MYP：Middle Years Programme）を、そして 1997 年に「IB 初等教育プログラム」（PYP：Primary Years Programme）を設置し、国際教育に取り組む、3 歳から 19 歳までの幼児および児童生徒を対象とした一貫教育プログラムを確立した。2024 年 6 月現在、国際バカロレアの認定を受けている学校は、世界 160 の国と地域において約 5800 校あり、そのうち、日本における認定校数は、173 校（候補校も合わせると 249 校）である。内訳として、PYP の認定校は 65 校、MYP の認定校は 39 校、DP の認定校は 69 校である。また 2012 年に新設された CP は、16～19 歳までを対象としたキャリア教育・職業教育に関連したプログラムであり、生涯のキャリア形成に必要なスキルの習得を重視する。我が国においても 1 校が候補校となっている。また国内の認定校のうち、学校教育法第一条によって規定される、いわゆる一条校としての IB の学校は 2024 年 6 月 30 日現在、78 校ある³。したがって IB 校においても学校教育法第一条によって規定される一条校ともなれば、当然、教育基本法第一条に基づく、我が国の「道德教育」が求められることになるだろう。そこで我が国に

における「道德教育」と「IB」の関係の一端について考察してみたい。

2. 我が国における道德教育と国際バカロレア教育に関する先行研究

まずは我が国における道德教育と IB の関係について先行研究を挙げておく。従来はほとんど研究がなされていない。従来の研究では、道德教育における様々な課題解決のために、IB を視野に入れた道德教育の意義と可能性について論じられた⁴。また IB の評価基準に照らして、我が国の道德教育について道德性の評価を明確にするべきとの指摘もある⁵。しかし前者は小学校・中学校に道德科が明記された 2015 年以前の論文であるため、道德教育は学校の教育活動全体で行われ、その道德教育の要としての役割を担うのが道德科であるという視点が欠落している。また後者は我が国の道德教育を評価によって固定する可能性があり、国家が主導してしまう危険性を孕んでいる。我が国における道德科は、個人の様々な価値観を認めていくものであり、道德性の評価を明確にする必要がないといえる。

このように直接的に道德教育と IB について論じたものは以上に挙げた通りだが、関連する先行研究についても以下に挙げておきたい。日本の教育と IB を比較した研究に垣間見られる。

例えば高等学校の国語科と IBDP の「言語 A：文学」の教育方針とが比較検討されている。「国語総合」⁶において目指すものとして「思考力や想像力を伸長させるとともに、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな感性や情緒をはぐくむこと、言葉の適切さや美しさについての感覚を磨」(傍線部、引用者)くとある。それに対し、DP の「言語：A」においては傍線部のような道德的内容や心情主義はなく、科学的な角度から捉え、具体的な力を提言する目標を設定しており、我が国の国語教育にも同様の方法を求める勝俣文子の研究がある⁷。勝俣は IB の学習者像にある「考える人」において、分析し、批判的、創造的に考えることが挙げられることに関連付け、その学習者像に基づき、「言語 A：文学」を科学的な方法によるものであることを指摘する。この方法論は、他の IBDP の教育方針においても同様であると考えられる。その場合、道德教育の立場からは、我が国の国語科に対応する IB の「言語：A」等にみられる IB 独自のプログラムは、我が国における学校教育全体で取り組むべき「道德教育」を実現するものか

という疑問が生じる。この問題については後述する。

また筆者は、拙稿⁸において、建学の精神を仏教とする仏教主義の学校を例にして、釈尊仏教の無我・縁起の思想と IB の学習者像の関係を論じた。この論考のなかで、筆者は、IB の中核となる使命（理念）および学習者像と、釈尊仏教思想とがどのように関連付けられるかを論じた。当稿は、この論考に類似する方法である。

以上の先行研究を踏まえ、IB のプログラム実施の核となる IB の使命（理念）と学習者像を、「道德科」の学習指導要領・解説の記述から分析する。それにより、IB の使命（理念）と学習者像について、我が国の道德教育（特にその目標）と合致するものかを検討してみたい。

3. IB の使命と学習者像

IB における中核は、その使命（理念）と学習者像である。IB の使命と学習者像について述べておく。

文部科学省（以下、文科省）IB 教育推進コンソーシアム「IB（国際バカロレア）とは」⁹によると、IB の使命（The IB mission）は、国際教育プログラムを推進し、発展させることの総体的な目的を示す。IB の使命（理念）の具体的な文言については後に検討する。IB プログラムでは、「国際的な視野」をより明確な言葉で定義づける試みと、実践を通じてその理想に近づこうとする努力を、IB 認定校の「使命」の中心として位置づける。

また「IB の学習者像」は、「IB の使命」を具体化したもので、「国際的な視野をもつとはどういうことか」という問いに対する IB の答えの中核を担う。具体的には、IB 認定校が価値を置く人間性を、10 の人物像として表す。「探究する人」「知識のある人」「考える人」「コミュニケーションができる人」「信念をもつ人」「心を開く人」「思いやりのある人」「挑戦する人」「バランスのとれた人」「振り返りができる人」である。この IB の使命（理念）と学習者像を実現するために、すべてのプログラムがある。参考までに文科省の IB 推進コンソーシアムにある IB の PYP、MYP、DP、CP の図を挙げておく（図 1）。

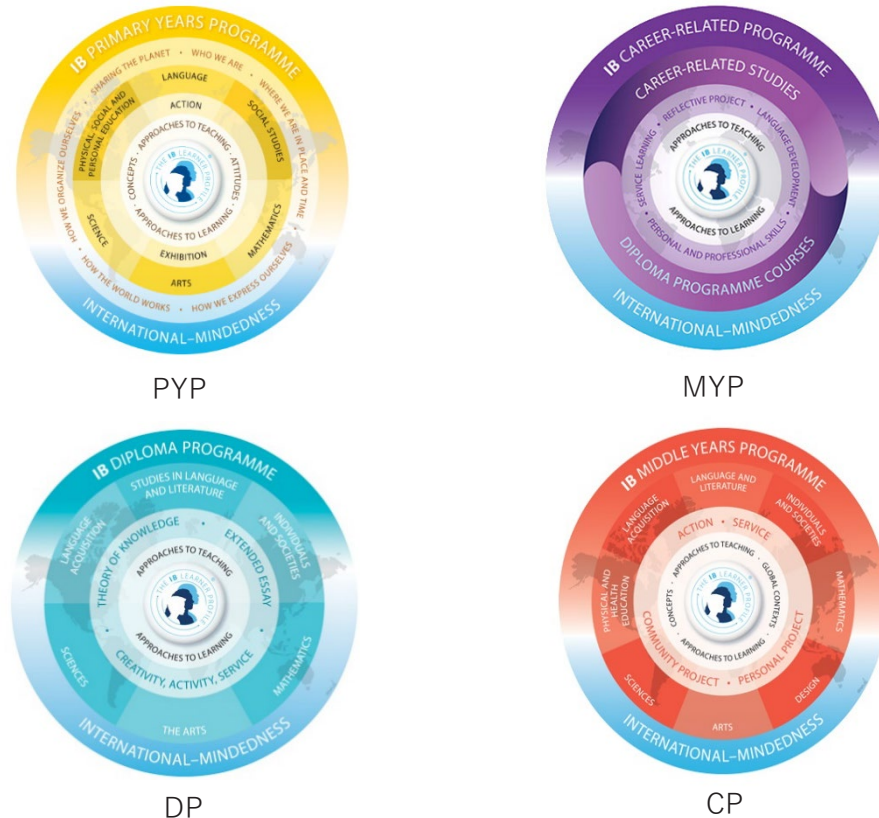
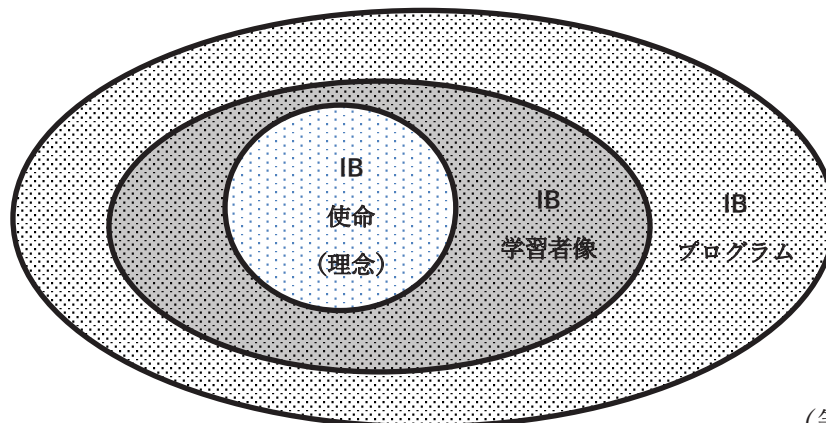


図 1

「IB（国際バカロレア）とは」より引用¹⁰

全ての中心に「IB の学習者像」があり、それに基づくプログラムであることがわかる。「IB の学習者像」は「IB の使命」を具体化したものであるから、4つの IB プログラムをまとめて図に表すならば以下の図 2 の通りとなろう。



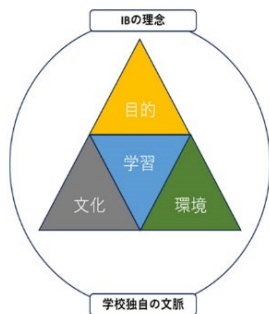
(筆者作成)

図 2 IB における使命・学習者像・プログラムの関係図

上図には、当然、我が国の道德教育が含まれておらず、IB との関係は浮き彫

りになっていない。我が国の道德教育がどこに含まれるかを考察する必要がある。しかし、IB のプログラムが IB の使命と学習者像を実現するものである以上、IB の使命と学習者像に我が国の道德教育がみられるかどうかを考察し、みられるとなれば、IB のプログラムにそれが反映されていることがわかる。したがって IB の使命と学習者像における我が国の道德教育を明かすことが、道德教育と IB の関係を論じる上で基礎となるといえよう。

なお現在、IB のプログラムの基準と実践については、目的、環境、文化、および学習という 4 つの主要カテゴリーに分類される。この 4 つのカテゴリーは、学習を中心に置き、IB の理念と「学校独自の文脈」をその周りに配置した枠組みの中に組み込んでいる。以下の通りに図示されている。



「IB（国際バカロレア）とは」より引用¹¹

図 3 IB の学習基準と実施の枠組み

そして IB ワールドスクールコミュニティにおいて期待されることの一つに、「IB の理念が各学校固有の文脈の中に上手に統合されること」を挙げる¹²。この「学校固有」や「学校独自の文脈」において我が国における「道德教育」を実施していくことも考えられよう。従って「学校固有」の教育において可能であると考えられるが、本論ではあえてこの「学校固有」の教育ではなく、IB 独自の教育（主に理念と学習者像）に注目することで、IB そのものにみられる道德教育について考察していくことにしたい。

4. 我が国における道德教育からみる IB の理念

我が国における道德教育から「IB の理念」について考えてみたい。文科省の『道德科中学校学習指導要領解説』¹³は、「第 2 章 第 2 節 道德科の目標」において「道德科の目標」について解説する。その中で、学校の教育活動全体を通じて行

う「道德教育」についても述べている。その道德教育について抜粋し以下に表にまとめ、(a)、(b)、(c)、(d)の四つに分ける。

(a)よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。
(b)多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道德的価値に向き合い、いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道德教育が求めるものである。
(c)道德科を要とした、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育が目指すものは、特に教育基本法に示された「人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成」(第1条)であり、「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道德心を培うとともに、健やかな身体を養う」(第2条第1号)こと、「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養う」(同条第2号)こと、「正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」(同条第4号)こと、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」(同条第5号)ことにつながるものでなければならない、
(d)「主体的な判断に基づいて道德的实践を行い、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養うことが道德科の目標である。このことは各教科等における道德教育でも同様である」

(以上、括弧英字は筆者の加筆による)

次に、「IB の使命」について確認してみたい。文科省「国際バカロレア (IB) の教育とは？」¹⁴によると、次の通りである。便宜上、3つの文言に分ける。

①IB は多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的とし

ています。

②この目的のため、IB は、学校や政府、国際機関と協力しながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。

③IB のプログラムは、世界各国で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。

(以上、丸数字は筆者の加筆による)

この IB の使命は、PYP、MYP、DP、CP の全てのプログラムに通じるものである。この「IB の使命」の文言を、上述の「道徳科」学習指導要領に照らして考えてみたい。まずは①の文言について考えてみたい。

① IB は多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的としています。(傍線、引用者による)

傍線部に「多様な文化の理解と尊重の精神を通じ」とある。これを「道徳教育」の目標に照らし、該当するものを抜粋して列挙すれば、以下の通りである。

(a)・物事を広い視野から多面的・多角的に考え

(b)・多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また国家・社会の形成者としてよりよく生きる

(c)・伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う

(d)・他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養う

また傍線部に、「より良い、より平和な世界を築くことに貢献する探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的」とある。これに該当する道徳教育の文言を挙げれば以下の通りである。

(a)・広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる

(b)・多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、(中略) 生きるべきかを自ら考え続ける姿勢

(c)・平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質
・幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度
・自他の敬愛と協力を重んずるとともに公共の精神に基づき、(中略) その発展に寄与する態度を養う
・他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う
(d)・他者と共によりよく生きるための基盤となる道德性を養う

①の箇所において、学校の教育活動全体を通じて行う道德教育との整合性が多く見られることがわかる。

続いて、②の箇所である。②は、①の目的のために取り組むことが述べられており、IB は①の目的を実現するためにあることを明記する。①は学校教育全体における道德教育と整合するのであるから、IB は道德教育と合致する「IB の使命」の目的のために取り組むものと考えられる。

最後に③の箇所について考えてみたい。これについて該当する道德教育の文言を列举したい。

(a)・自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める
(b)・多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として、また国家・社会の形成者としてよりよく生きるために道德的価値に向き合い、 ・いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢こそ道德教育
(c)・個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う ・正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき ・国際社会の平和と発展に寄与する態度
(d)・自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤

このよう対応して考察してみると、「IB の使命」と学校教育全体の道德教育には共通性が多くみられる。文科省の求める道德教育のすべてが網羅されているかどうかの検討やその必要性については今後の課題となるが、少なくとも「IB の使命」は我が国の道德教育にも整合するものと考えられる。「IB の使命」に内在する道德教育があるといえよう。

この「IB の使命」はプログラム全体の中核にある。IB の場合、各プログラムが科学的手法を持って各教育がなされたとしても、IB 全体の教育はその使命に基づくものである。それゆえに、科学的方法を用いる真理追究の教育においても、追究する限りにおいて道德性を離れたものであったとしても、それが「IB の使命」に基づくものであるから、「IB の使命」に内在する道德教育を為すものと考えられよう。以下において、さらに「IB の使命」を具体化した「IB の学習者像」についても考察していく。

この「IB の使命」と「プログラム」の考え方は、IB 以外の学校の教科教育に取り込み、応用していくことが可能であろう。つまり学校教育全体の道德教育を想定し、「道德科」を中核に据えていくことで、各教科においては、道德教育を一端離れて科学的方法を持って真理を追究したとしても、学校の教育活動全体において道德教育を実施できる方法を見いだし得るのである。

5. 我が国における道德教育からみる IB の学習者像

続いて、我が国における道德教育から「IB の学習者像」について考えてみたい。文科省¹⁵によると、道德教育の目標を達成するために指導すべき内容を、4つの視点に分けて示している。

A 主として自分自身に関すること（以下 A とする）

B 主として人との関わりに関すること（以下 B とする）

C 主として集団や社会との関わりに関すること（以下 C とする）

D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること（以下 D とする）

前節に挙げた文言からの検討に加え、この4つの視点も加味しながら、「IB の学習者像」と我が国の道德教育（その目標）と整合していくものか考察したいと思う。

IB は、10の学習者像¹⁶を挙げ、(1)探究する人(Inquires)、(2)知識のある人(Knowledgeable)、(3)考える人(Thinkers)、(4)コミュニケーションができる人(Communicators)、(5)信念をもつ人(Principled)、(6)心を開く人(Open-minded)、(7)思いやりのある人(Caring)、(8)挑戦する人(Risk-takers)、(9)バランスのとれた人(Balanced)、(10)振り返りができる人(Reflective)としている。それぞれ順に検討してみたい。

(1) 探究する人(Inquires)

私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・ 実践意欲と態度を育てる ((a))
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として ((b))
- ・ 自ら考え続ける姿勢 ((b))
- ・ 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い ((c))
- ・ 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う ((c))
- ・ 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずる ((c))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道徳教育の目標達成のための内容としては A、B、C に該当する。

上述の通り、(1) について道徳教育との整合性がみられる。

(2) 知識のある人(Knowledgeable)

私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・ 国家・社会の形成者としてよりよく生きる ((b))
- ・ 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い ((c))
- ・ 公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う ((c))
- ・ 他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う ((c))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道徳教育の目標達成のための内容としては B、C に該当する。

上述の通り、(2) について道徳教育との整合性がみられる。

(3)考える人(Thinkers)

私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・物事を広い視野から多面的・多角的に考え、((a))
- ・道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる ((a))
- ・いかに生きるべきかを自ら考え続ける ((b))
- ・幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い ((c))
- ・個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う ((c))
- ・正義と責任 ((c))
- ・主体的な判断に基づいて道徳的实践を行い ((d))
- ・道德教育の目標達成のための内容としてはAに該当する。

上述の通り、(3)について道德教育との整合性がみられる。

(4)コミュニケーションができる人(Communicators)

私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・実践意欲と態度を育てる ((a))
- ・多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人 ((b))
- ・平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた ((c))
- ・個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う
- ・男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき ((c))
- ・自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・道德教育の目標達成のための内容としてはA・B・Cに該当する。

上述の通り、(4)について道德教育との整合性がみられる。

(5) 信念をもつ人(Principled)

私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・ 人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる ((a))
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて ((b))
- ・ 平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質 ((c))
- ・ 正義と責任 ((c))
- ・ 公共の精神に基づき、(中略) その発展に寄与する態度を養う ((c))
- ・ 主体的な判断に基づいて道徳的实践を行い ((d))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道德教育の目標達成のための内容としては A・B・C に該当する。

上述の通り、(5) について道德教育との整合性がみられる。

(6) 心を開く人(Open-minded)

私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見いだし、その経験を糧に成長しようと努めます。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人 ((b))
- ・ 国家・社会の形成者としてよりよく生きるために ((b))
- ・ 自ら考え続ける姿勢 ((b))
- ・ 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う ((c))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道德教育の目標達成のための内容としては A・B・C に該当する。

上述の通り、(6) について道德教育との整合性がみられる。

(7) 思いやりのある人(Caring)

私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる ((a))
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人 ((b))
- ・ 平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた ((c))
- ・ 職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養う ((c))
- ・ 公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う ((c))
- ・ 主体的な判断に基づいて道徳的实践を行い、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道德教育の目標達成のための内容としては B・C に該当する。

上述の通り、(7) について道德教育との整合性がみられる。

(8) 挑戦する人(Risk-takers)

私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる ((a))
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として ((b))
- ・ 平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成 ((c))
- ・ 健やかな身体を養う ((c))
- ・ 正義と責任、男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずる ((c))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道德教育の目標達成のための内容としては A・B に該当する。

上述の通り、(8) について道德教育との整合性がみられる。

(9) バランスのとれた人(Balanced)

私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、

身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・ 人間としての生き方についての考えを深める ((a))
- ・ 道徳的な判断力、心情 ((a))
- ・ 多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、自立した個人として ((b))
- ・ 平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成 ((c))
- ・ 健やかな身体を養う ((c))
- ・ 男女の平等、自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う ((c))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる ((d))
- ・ 道徳教育の目標達成のための内容としては A・B・D に該当する。

上述の通り、(9) について道徳教育との整合性がみられる。

(10) 振り返りができる人(Reflective)

私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

文科省の解説から、関連付けられる文言を列挙したい。

- ・ 自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え ((a))
- ・ いかに生きるべきかを自ら考え続ける姿勢 ((b))
- ・ 個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う ((c))
- ・ 正義と責任 ((c))
- ・ 自立した人間として他者と共によりよく生きるため ((d))
- ・ 道徳教育の目標達成のための内容としては A・D に該当する。

上述の通り、(10) について道徳教育との整合性がみられる。

以上の検討から IB の学習者像は、全て「自立した人間として他者と共により

よく生きるための基盤」となっている。この文言は文科省の道德教育についての解説に、「自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる」ものとしての文脈で、「道德性」として明かされている。その文脈に基づくならば、IB の学習者像はそれ自体、「道德性」とも呼べるものであり、IB の道德性とも呼ぶべきであろう。

つまり、IB の使命、学習者像はともに、「よりよく生きるための基盤」となるものであるため、道德性でもある。文科省の解説では、「道德的諸価値についての理解を基に」ともあるが、この道德的諸価値は、IB の場合、「IB の使命」がそれに該当するのであろう。IB の使命、学習者像はともに、「よりよく生きるための基盤」として、我が国の道德教育を逸脱するものではないのである。IB のプログラムはそれに基づくものである以上、学校の教育活動全体で行う道德教育がなされるものと考えられよう。

6. IBDP の TOK と CAS にみられる IB の道德性

上述の通り、IB の使命・学習者像には、「よりよく生きるための基盤」となるものが示されており、IB の道德性が明かされている。我が国の道德教育は包括的なものであり、様々な道德教育が考えられ、IB の道德性もその中に収められるものである。

最後に、各プログラムについても若干、考察しておきたい。すでに述べた通り、IB は道德教育を打ち出すものではない。むしろ IB の学習者像の「考える人」を基盤にした「分析し、批判的、創造的に考える」プログラムは、科学的手法によるものであり、道德教育となるものを除く傾向にあるといえよう。しかし IBDP には、TOK(theory of knowledge、知の理論)と CAS(creativity, activity, service、創造性・活動・奉仕)という特徴的なプログラムがあり、これらは IB プログラムモデルの「コア」を形作り、IB の道德性も垣間見られる。他のプログラムと互に関連し合い、補完し合う関係になっている。そこでこの TOK と CAS について考えてみたい。

TOK は、事象を批判的に捉え「知」(知識)を分析していくものである。様々な人間の「知」のあり方を分析し考察していくことで、「知」(知識)自体の固定性を疑い、様々な人間の「知」を理解していく。これにより多様性を身につけ、

IB の学習者像を形成することになる¹⁷。この TOK は、「物事を広い視野から多面的・多角的に考え」((a)) ることになり、我が国における道德教育と整合するものである。

また IB の CAS は「「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き 2017 年卒業予定者から適用」¹⁸によると、CAS と TOK の関係が述べられる。TOK は経験を知識に変えていく道しるべという役割を担い、その経験には CAS 活動も含まれる。CAS では生徒は TOK の議論を応用して様々なコミュニティーや文化への理解を深めることができる。CAS のプログラムのねらいには、「地域や世界のコミュニティーの一員として、他の人や環境に対して責任を負っていることを理解する人」となるように生徒を育てることが挙げられる。CAS には 3 つの要素があるが、本論ではそのうちの「奉仕」(service) に注目したい。

「奉仕」(service) は、「コミュニティーの真のニーズに対応して他者と共に活動しかつ相互の取り組みに従事すること」とある。そしてそのねらいは、コミュニティーや社会に対して自分がどのように貢献できるか理解することである。奉仕は、CAS の要素の中でも最も生徒の人生観に大きな影響を与える要素の一つと見られている。自己認識を高め、さまざまなふれあいや経験の機会をもたらし、国際的な視野をもたらすためであるとする。また 4 種類の奉仕活動があり、「直接的な奉仕：他者、環境、または動物などとののかかわり合いをもちます。」「間接的な奉仕：間接的な奉仕では、生徒は受益者と直に接することはありませんが、自分の行動がコミュニティーや環境にとって有益であることを確認します。」などとある。CAS は、「自他の敬愛と協力を重んずるとともに、公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養う」((c)) ものであり、我が国における道德教育とも整合する。

TOK では多様性が理解され、CAS では助け合い、環境や動物などとの関わりが考えられており、TOK や CAS は IB の道德性が発揮された教育プログラムといえよう。IB の学習者像を実現しつつ、IB に内在する道德教育の実践も為されるものといえよう。

この IB のプログラムモデルに倣い、他の学校教育に還元すれば、道德科以外の教科が分析的科学的手法を用いて、道德教育から離れて真理を探究する教育を為したとしても、道德科が道德教育の補完をすることで、学校の「教育活動全

体」を通じて行う道德教育は可能であり、「よりよく生きるための基盤となる道德性」は養われよう。そうであれば、各教科が、道德教育に縛られることなく、各教科独自の特性を生かした真理探究の授業を実施することができよう。

また別の視点で考えてみると、仮に道德教育とは異なる科学的分析、手法の教科教育であったとしても、それは道德教育が求める、「個人の価値」の「尊重」としてその能力を伸ばし、創造性を培うものであり、「自主及び自律の精神を養う」ともいえる。従って各教科においてはあえて道德的に扱わずに、真理を追究しても、それは、個人の価値の尊重や自律の精神の尊重としての道德教育に整合し、やはり「学校の教育活動全体」を通じた道德教育は成立することになる。そのように考えれば、各教科において、教科独自の科学的方法、分析に基づく教育も道德教育の一つに収めて考えられよう。

7. 小結

我が国における道德教育と IB（主にその使命と学習者像）の関係について考察し、「道德科」の学習指導要領・解説に述べられる学校教育全体の道德教育に関する記述分析を中心に、両者の関係を整理し検討した。

「IB の使命」と学校教育全体を通じての道德教育には共通性が多くみられる。「IB の使命」に内在する道德教育があり、「IB の使命」は我が国の道德教育にも整合するものと考えられる。またその使命を具体化する「IB の学習者像」においても多くの共通性がみられ、我が国の道德教育と整合するものである。さらに全ての学習者像は、「自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤」となるものである。文科省の道德教育についての解説に、「自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる」ものの文脈で、「道德性」として述べられている。IB の学習者像はそれ自体、「道德性」とも呼べるものであり、IB の道德性とも呼ぶべきであろう。文科省の解説では、「道德的諸価値についての理解を基に」ともあるが、この道德的諸価値は、IB の場合、「IB の使命」がそれに該当し得る。IB の使命、学習者像はともに、「よりよく生きるための基盤」として、我が国の道德教育を逸脱するものではなく、それに基づく IB のプログラムは、学校の教育活動全体で行う道德教育がなされるものと考えられよう。

また IBDP 独自のプログラムに TOK と CAS がある。TOK では多様性が理解

され、CAS では助け合いが考えられており、TOK や CAS は IB の道德性を発揮する教育プログラムといえよう。IB の他の各プログラムは、分析的科学的手法が採用されるが、TOK・CAS が他のプログラムと関連し合い、相互に補完することで、IB の使命・学習者像を実現し、IB の道德性が発揮され、IB 全体の道德教育も実践される。

この IB のプログラムの考え方を他の学校教育に応用すれば、道德科以外の各教科が、道德教育を除いた各教科独自の分析的、科学的方法を用いて真理探究の授業を為したとしても、道德科が補完することで、学校の教育活動全体として道德教育は実現され则认为られる。各教科が、道德教育に縛られることなく、各教科独自の特性を生かした真理探究の授業を実施できよう。この一見、道德教育とは異なる手法の教科教育も、道德教育が求める、「個人の価値」の「尊重」としてその能力を伸ばし、創造性を培うものといえ、「自主及び自律の精神を養う」ものともいえる。つまりこの手法も道德教育に整合する。教育活動全体の道德教育は果たされていくことになり、各教科における教科独自の科学的方法、分析に基づく真理探究の授業による教育は、道德教育の一つに収められよう。

なお本論文は、主に学習者像という観点から分析を加えたが、道德教育の基軸となる道德的価値の側面から IB との関連性や異動を比較検討することや具体的な授業展開の視点から更に研究を深めることが今後の課題である。

注釈

- 1 文科省『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 特別の教科 道德編』教育出版、2018 年、1 頁。
- 2 押谷由夫・貝塚茂樹・高島元洋・毛内嘉威編著『道德教育の変遷・展開・展望（新道德教育全集第一巻）』学文社、2021 年、2、74 頁。
- 3 文科省の IB 教育推進コンソーシアム web ページ
(<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/school/>)、閲覧日 2024 年 9 月 10 日
- 4 福山文子「国際バカロレアを視野に入れた道德教育」(『お茶の水女子大学人文科学研究』12 号、2016 年)
- 5 張夢溪・柳沼良太「道德教育の評価に関する国際比較研究－日本、中国、国

- 際バカロレア(IB)に着目して」(『岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)』第72巻1号、2023年)
- 6 現在の学習指導要領では「国語総合」という名称はなくなり「現代の国語」と「言語文化」に再編されている。
 - 7 勝俣文子「高等学校国語科と国際バカロレア「言語A：文学」に関する一考察－学習指導要領と指導の手引きの比較検討－」(『東京学芸大学 平成27年度「特別開発研究プロジェクト」活動報告』2018年)
 - 8 拙稿「仏教からみる国際バカロレア教育の意義－釈尊仏教の無我・縁起とIBの学習者像－」(『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』36号、2020年)
 - 9 文科省のIB教育推進コンソーシアムwebページ
(<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>)、閲覧日2024年9月10日
 - 10 文科省のIB教育推進コンソーシアムwebページ
([https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/\(pyp/myp/dp/\)](https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/(pyp/myp/dp/)))、
閲覧日2024年9月10日
 - 11 文科省のIB教育推進コンソーシアムwebページ
(<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>)、閲覧日2024年9月10日
 - 12 文科省のIB教育推進コンソーシアムwebページ
(<https://ibconsortium.mext.go.jp/about-ib/>)、閲覧日2024年9月10日
 - 13 文科省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道德編』教育出版、2018年、13～14頁。
 - 14 文科省「国際バカロレア(IB)の教育とは?」「IBの使命」
(https://ibconsortium.mext.go.jp/wp-content/uploads/2024/02/about-ib_pdf_02.pdf)、6頁、閲覧日2024年9月10日
 - 15 文科省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道德編』教育出版、2018年、24～25頁。
 - 16 文科省「国際バカロレア(IB)の教育とは?」「IBの学習者像」
(https://ibconsortium.mext.go.jp/wp-content/uploads/2024/02/about-ib_pdf_02.pdf)、7頁、閲覧日2024年9月10日
 - 17 拙稿「国際バカロレアの Theory of Knowledge (TOK) と仏教における知」(日本アクティブラーニング学会予稿集、2016年)

- 18 「「創造性・活動・奉仕」(CAS) 指導の手引き 2017 年卒業予定者から適用」(「DP Creativity, activity, service Cat1 (Japanese)」2023 年 8 月 8 日～10 日実施のワークショップ資料) 7、10、12、25 頁。

【査読論文】

ウェルビーイング中心デザインによる社会装置の開発並びにそのソーシャルインパクトの特定: コロナ禍下でのエミー・ウォッシュ設置運動を事例として

保井 俊之 (淑啓大学 ソーシャルシステムデザイン学部 学部長・教授)

要約

本研究は、新型コロナウイルス感染症の流行期にウェルビーイング中心デザインの社会装置として開発及び実装された、笑顔センサー付き除菌液噴霧装置エミー・ウォッシュがもたらした社会インパクトを、ナラティブ分析により特定し、共起関係として可視化するものである。日本各地の学校及び事業所のエミー・ウォッシュ設置者が装置使用報告時に書き込んだ自由記述をテキストマイニングし、装置利用者がこの装置を感染防止対策に用いることで、笑顔、感謝、ケア及びコミュニケーションなどウェルビーイングと相関する要素を知覚していたことを示した。さらにこの装置を頻繁に使用した利用者がそうでない利用者に比べ、より高い主観的ウェルビーイングを感じていたことを定量的に明らかにした。

1. 背景と目的

ウェルビーイングはこれまで、ポジティブ心理学などの学術領域で、個人の心的状態を中心に研究されてきた。ウェルビーイングとは自らの人生に対する評価 (Diener 2000) であり、良好な心の状態を指す (OECD 2013)。しかし 2010 年代に入り、ウェルビーイング 3.0 (札幌 2023) と称される、集団及び組織など社会を対象とするウェルビーイング研究の時代が到来している (Lomas et al. 2021)。またウェルビーイング研究を行う学術領域も拡大し、システム思考及びデザイン思考の領域においても研究が展開されつつある (荻野 2020, 保井ら 2021a)。

システム思考及びデザイン思考に基づく社会システムデザインの学術領域で台頭している研究テーマのひとつが、ウェルビーイング中心デザインである。ウェルビーイング中心デザインは、ウェルビーイングを陽に考慮したシステムデザインの方法論 (前野ら 2021) である。

テクノロジーデザインの分野ではこれまで、デジタル・ウェルビーイング概念

をもとに、デザインの使用者にウェルビーイングを感じさせることを目指しており、ポジティブ・コンピューティングのユースケースとして社会実装されることが多かった（WIRED2019）。ポジティブ・コンピューティングは、主観的ウェルビーイングをテクノロジーの利用者に感じさせるインタラク션을デザインする方法論（Calvo & Peters 2014）で、コンピュータ・テクノロジーが人間の仕事と活動に影響する方法の研究を行うヒューマン・コンピュータ・インタラクション（Dix et al. 2004）から 2010 年代に派生した。拡張現実（AR）や仮想現実（VR）なども用い、テクノロジーを利用者の主観的ウェルビーイング向上のために使われる設計を行うところに特長がある（渡邊ら 2020）。

しかしウェルビーイング中心デザインは、社会のウェルビーイングを実現するために、テクノロジー利用に留まらず、さまざまな製品サービス、組織及び地域システムのデザインに、ウェルビーイングの構成要素を明示的に埋め込む設計を行う方法論である。したがって、システムの利用者にウェルビーイングの向上をシステム上のインタラクションとして明示的に感知させる構成要素が、テクノロジー以外の要素も含めて設計されることが要件となる。

システムの利用者にシステム上のインタラクションを明示的に感知させる仕掛けとして近年注目を集めているのが社会装置（Väänänen-Vainio-Mattila et al. 2013）である。社会装置は、人と人との間または人とテクノロジーとの間で場を共有したインタラクションを促進する、能動型のコンテキスト感知装置である（Aaltonen et al, 2013）。

筆者らはこれまでウェルビーイング中心デザインの立場に立ち、ウェルビーイング向上に資する地域通貨システムのデザインなど、システムの利用者が主観的ウェルビーイングを感じることを支援する社会装置をデザインする研究及び社会実装を進めてきた（保井ら 2021b, 高尾ら 2023）。ウェルビーイング中心デザインにおける社会装置はシステム上のインタラクションを通じて、利用者に主観的ウェルビーイングを認知させ、さらにコンテキストを共有させる。

これまでのウェルビーイング研究では、ウェルビーイングの社会的実現に資するデザインが社会装置を通じて、どのように利用者のウェルビーイングの認知に寄与し、さらにどのような社会インパクトをもたらすかについては研究の蓄積が待たれる状態にあった。

以上のようなウェルビーイング研究及びウェルビーイング中心デザインの学術研究の潮流を踏まえ、本研究は、新型コロナウイルス感染症の流行期にウェルビーイング中心デザインの社会装置として開発及び実装された、笑顔センサー付き除菌液噴霧装置エミー・ウォッシュがもたらした社会インパクトを、ナラティブ分析により特定し、共起関係として可視化することを目的とする。さらにこの装置を頻繁に使用した利用者が主観的ウェルビーイングをどのように感じていたかを明らかにする。

2. 分析対象の社会装置の概要

(1) エミー・ウォッシュの概要

エミー・ウォッシュは、2020 年に開発されたウェルビーイング中心デザインによる社会装置のユースケースであり、利用者の笑顔を検知して除菌液を噴霧するポット状の除菌装置である。日本語で笑顔を表すほほえみにちなみ、エミー・ウォッシュ（以下、EW と称する）と名付けられた。EW は、笑顔を増加することにより、利用者の主観的ウェルビーイングの感知に寄与することを目的とした社会装置である。EW の写真及び社会システムとしてのシステム概要図を、図 1 及び図 2 にそれぞれ示す。



図1 エミー・ウォッシュ

(出所) 筆者撮影 2022 年 2 月

EW には日本のシステム開発会社が提供する笑顔計測ソリューションが用いられており、画像内の顔検出及び表情認識のエンジンとして日本の電機大手企業が開発した顔画像認識技術が利用されている。このエンジンは笑顔度を 0 度から 100 度まで尺度でスコア化し、微笑程度の笑顔度が 50 程度になるよう正規化する。EW に用いられた笑顔計測ソリューションでは、単位時間あたりの平均笑顔度並びに最大及び最小笑顔度が算出され、EW 利用者の笑顔度が 50 度すなわち微笑レベルを超えた場合、または笑顔の変化量すなわち最高笑顔度と最低笑顔度の差が一定程度に設定された差分の閾値を上回った場合に、EW に埋め込まれたセンサーが笑顔と認識する。そして笑顔認識と同時に赤外線センサーで手指を検知した後、モーターが駆動され、除菌液タンクから除菌液を汲み上げ、接続したノズルから除菌液が噴霧される仕組みとなっている。

EW 開発の背景は、2019 年以來の新型コロナウイルス感染症の流行期に、総じてウェルビーイングの低下傾向がみられ (Knepple Carney et al. 2021)、学校等でコロナ感

染への不安が広く語られ、昼食時の談笑が禁じられて黙食することで笑顔が消え、感染防止対策と生徒のウェルビーイングのバランス保持が困難になったことが報告されたこと (Takahashi et al. 2023) にある。

笑顔とウェルビーイングは
相関する (Hasan & Hasan 2009,



図2 エミー・ウォッシュのシステム概要図

Papousek 2018)。EW を使用するために、人が前に立って手指をかざすと、笑顔を判別するセンサーが起動し、目や口の動き等から笑顔と判定されると除菌液が自動的に噴霧され、コロナ感染症防止対策に寄与する。EW はこの仕組みを通じて、ウェルビーイングと相関する笑顔と感染防止対策の両立を目指したウェルビーイング中心デザインの社会装置である。

(2) 社会運動としての EW 設置普及活動

EW の設置普及のために、一般社団法人エミーバンク協会が 2021 年 4 月に設立され、事業所への有償貸与及び学校への無償貸与を通じて、日本各地の学校及び事業所への EW 設置普及活動を行ってきた。

EW はハードとしてのシステムに留まらず、社会装置の EW がプラットフォームとなる社会システムとして構成される。ウェルビーイングと相関する笑顔が EW を通じて生成され、EW が笑顔数をウェルビーイングの代理変数として感知及び記録し、EW 設置者及び利用者が笑顔に関連する所感を報告書の自由記述欄に共有し、設置者及び利用者等をつなぐ社会システムとして機能する。人と人のつながりは主観的ウェルビーイングと相関する (Christakis & Fowler 2009)。したがって EW は EW 設置者及び利用者をつなぎ、主観的ウェルビーイングを感知させる社会システムとして機能する。

具体的な仕組みとしては、EW 利用者の笑顔数は EW の装置内で蓄積及び集

計され、エミーと呼ばれる地域住民のウェルビーイング向上を目指す地域通貨の通貨単位（保井ら 2017, 末吉ら 2018）に変換され、感染症対策プロジェクトへの支援や除菌剤の提供をはじめとする寄付活動に充てられることになる。

2024 年 2 月末時点で、日本各地の累計 241 か所の学校及び事業所に設置された EW は、累計 439,010 回の笑顔を検知し、同数のエミーに換算された。このことは EW 使用者の主観的ウェルビーイングがエミーを代理変数に用いることにより、439,010 単位計測されたことを意味する。

3. 分析の手法

EW の社会システムは、EW 利用者が笑顔を起点に社会インパクトを発生させるプロセスを、メッセージなど言語のつながりで媒介する機能を有している。具体的には、EW 設置者が笑顔に関連する所感を報告書の自由記述欄に共有し、設置者及び利用者等をつなぐシステムとして機能している。そのためまず、ナラティブ分析（Nasheeda et al. 2019）の方法論にもとづき、EW 利用者からの使用報告書及び次に述べるアンケート調査の自由記述欄への書き込みについて、テキストマイニング（樋口 2020）の手法¹を用い、書き込まれた文章を述語の単位でコーディングし、共起ネットワーク分析を行い、笑顔の述語の共起関係を可視化する。

第二にさらに EW 設置者に対し、EW の使用頻度及びウェルビーイングの度合いを問うアンケート調査を実施し、EW の使用頻度が EW 設置者のウェルビーイングにどう影響しているのかを定量的に分析する。また自由記述欄を設け、笑顔に関する所感を収集する。ウェルビーイング尺度については、人生満足尺度（Diener et al. 1985, 以下 SWLS と称する）、幸せの 4 因子（前野 2013, 以下幸せ 4 因子と称する）及びポジティブ・ネガティブ感情尺度（日本版, 佐藤・安田 2001, 以下 PANAS と称する）を使用する。

4. 分析の結果

(1) ナラティブ 分析

EW 設置者からの使用報告書及びアンケート調査の自由記述欄への書き込みのテキストから、テキストマイニングによる共起ネットワーク分析を行った。

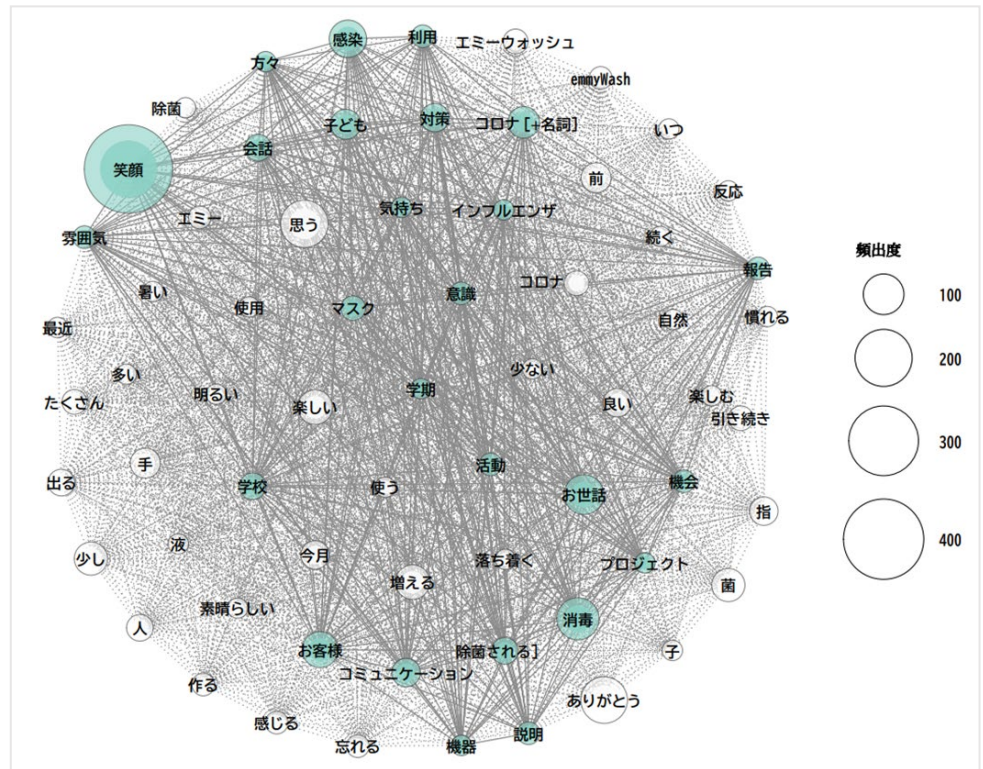


図3 EW 設置者の自由記述テキストによる共起ネットワーク図

テキストの収

集は 2022 年 5 月 1 日から 6 月 30 日の間に行われ、計 240 件のテキストが収集された。

共起ネットワーク分析の結果を図 3 に示す。図 3 のうち、バブルの大きさは述語の出現の頻出度を示し、バブルが有色であるものは、さらに密接な共起関係があり、有色のバブル同士でサブグラフが描けることを示す(樋口 2020:185-186)。述語は頻出度の高いものから順に、笑顔(出現回数 486 回)、思う(同 138 回)、ありがとう(同 132 回)、消毒(同 108 回)、お世話(同 96 回)などとなっている。

述語の共起関係については図 3 より、笑顔、会話、子ども、対策、方々、感染、利用、コロナ[名詞]、気持ち、インフルエンザ、マスク、意識、学校及び学期などに強く近い共起関係がみられる。さらに、笑顔は学校、お客様、活動、お世話、機会、コミュニケーション、除菌[される]、消毒、機器、説明などと強く近い共起関係にある。そして笑顔とありがとうは、同じ頻出述語でありながら共起関係は遠く、ありがとうは他の述語とさほど強い共起関係にはない。

この共起関係は、学校での感染防止対策として子どもが EW を利用する際に

笑顔が近く意識されたことを示す。また、事業所に来訪した顧客とのコミュニケーションツールとして EW の機器説明を通じて、笑顔が共起されたことを可視化している。学校での EW 使用と事業所での EW 使用の述語の共起関係を、楽しい、明るい、落ち着く、素晴らしいなどのポジティブな感情を表す述語がつないでいる。さらに感謝の気持ちは他の述語とは必ずしも共起せず、独立して出現している。

(2) アンケート調査によるウェルビーイング度分析

EW 設置者に対する主観的ウェルビーイングの度合い及び EW の使用頻度を問うアンケート調査を 2022 年 5 月 1 日から 6 月 30 日の間に行った。設置数 45 か所に対し有効回答は 38 だった。回答者の属性等に関する記述統計を表 1 に示す。

表1 アンケート調査回答者の主な属性分布(人数)

回答者のウェルビーイング度については、SWLS が 31.5、幸せ 4 因子が第 1 因子（自己実現と成長）20.5、第 2

アンケート回答者計 38 名
【性別】 男性 22 名、女性 14 名、答えたくない 2 名
【年齢】 20 歳台 6 名、30 歳台 6 名、40 歳台 12 名、50 歳台 7 名、60 歳台 5 名、答えたくない 2 名
【配偶者】 有 24 名、無 11 名、答えたくない 3 名
【子ども】 有 24 名、無 11 名、答えたくない・無回答 3 名
【世帯収入】 300 万円未満 3 名、300 万円以上 600 万円未満 11 名、600 万円以上 900 万円未満 6 名、900 万円以上 1,200 万円未満 4 名、1,200 万円以上 3 名、答えたくない 11 名
【職業】 正社員 22 名、自営業 5 名、公務員 3 名、教員 2 名、派遣・契約社員 2 名、団体職員 1 名、答えたくない 3 名

因子（つながりと感謝）24.0、第 3 因子（楽観性）17.0 及び第 4 因子（マイペース）20.0、並びに PANAS がポジティブ感情 31.2 及びネガティブ感情 26.6 となった。

日本人 15,028 名を対象にしたウェルビーイング度調査(前野 2024)によれば、日本人の SWLS の平均値は 22.5、幸せ 4 因子の平均値は第 1 因子 22.5、第 2 因子 17.9、第 3 因子 17.4 及び第 4 因子 19.0 である。さらに日本人 1,500 人を対象にした調査では、日本人の PANAS のポジティブ感情平均値は 24.4、及びネガティブ感情平均値は 22.7 である(前野 2024)。したがって、今回の調査対象の母集団は、統計上の比較有意性は不明であるが、一般的な日本人に比較して、長期的なウェルビーイング指標の代表とされる SWLS が高く、幸せ 4 因子の第 2 因子、すなわちつながりと感謝の因子が強く、さらに短期的なウェルビーイング指標の代表とされる PANAS については、ポジティブ感情もネガティブ感情もともに高い傾向にあることが観察される。

(3) EW 通常頻度利用者と頻繁な利用者との間のウェルビーイング度比較分析

アンケート調査で得られたデータをもとに、EW の通常頻度の利用者と頻繁な利用者の間でウェルビーイング度の比較分析を行った。通常頻度の利用者とは、EW 設置者のうち、EW を1日1回以下の頻度で使用する者を指す。また頻繁な利用者とは、EW 設置者のうち、1日1回以上さらに頻繁な頻度で EW を利用する者を指す。標本数は38、うち通常頻度利用者が28、頻繁な利用者が6である。

比較分析の結果を図4に示す。EW の頻繁な利用者は通常頻度の利用者 비해、SWLS、幸福の4因子第4因子（マイペース）、及び PANAS のポジティブ感情が有意に高かった。

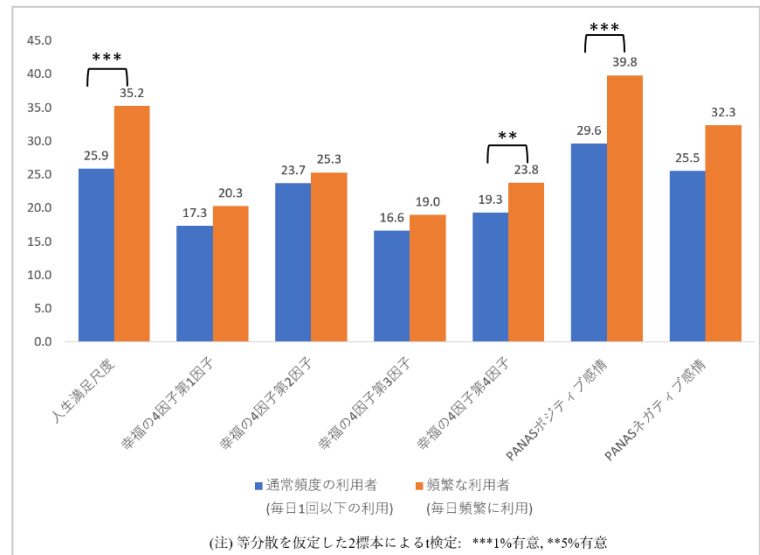


図4 EW 通常頻度の利用者と頻繁な利用者の主観的ウェルビーイングの比較

5. 考察

前章の共起ネットワーク分析の結果から明らかになったのは、EW がプラットフォームとなることにより、EW 設置者が笑顔の述語を含むメッセージによりつながり、学校及び事業所において新型コロナ感染防止対策として EW を利用することのみならず、EW の設置と利用により、笑顔、こども、気持ち、お世話、コミュニケーション、ありがとうなど、主観的ウェルビーイングに関連する述語を共有する言語空間を設置者と利用者が形成したことである。笑顔、感謝、ケア及びコミュニケーションはいずれも主観的ウェルビーイングに影響を与える要素である (Badri et al. 2022, Hall et al. 2023, Singh et al. 2023)。

EW 設置者及び利用者は新型コロナ感染症流行期に、移動制限、隔離及び黙食などコミュニケーションが制限された生活環境下にあつて、EW を通じた笑顔、感謝及びケアのナラティブを生成し、笑顔、思う及びありがとうを最頻出述語とする言語空間を形成した。

なお、笑顔とありがとうは共起ネットワーク分析で同じ頻出述語でありながら共起関係は遠かったことが、分析結果から明らかになったことについては、笑顔と感謝は、EW の言語空間において直結の関係ではなく、笑顔は楽しい、使う、落ち着く、及び消毒など他の様々な述語を通じて共起する言葉であることを示唆している。すなわち、笑うからありがとうと言う、あるいは、ありがとうと言うから笑顔になるという直接の関係ではなく、他の様々な感情や行為を介して両者がつながる関係にあるのである。また、ありがとうが他の述語とさほど強い共起関係にはなかったことは、感謝の言葉であるありがとうは、EW を利用した際に、他の述語を介さずとも独立で発出されやすい言葉であったことを示唆している。

また、EW の頻繁な利用者が通常頻度の利用者よりも主観的ウェルビーイングを高く感じていたことは、笑顔がウェルビーイングに相関 (Hasan & Hasan 2009, Papousek 2018) し、笑顔を生成する活動が主観的健康感を高め (Hayashi et al. 2015)、さらに主観的健康感は主観的ウェルビーイングと相関する (Monden 2014) という研究結果と整合的である。

6. 結論と今後の研究課題

(1) 結論

本研究は、新型コロナウイルス感染症の流行期にウェルビーイング中心デザインの社会装置として開発及び実装された、笑顔センサー付き除菌液噴霧装置 EW がもたらした社会インパクトを、ナラティブ分析により特定し、共起関係として可視化した。EW 設置者が装置使用報告時に書き込んだ自由記述をテキストマイニングし、装置利用者がこの装置を感染防止対策に用いることで、笑顔、感謝、ケア及びコミュニケーションなどウェルビーイングと相関する要素を知覚していたことを示した。さらにこの装置を頻繁に使用した利用者がそうでない利用者に比べ、より高い主観的ウェルビーイングを感じていたことを定量的に明らかにした。

(2) 今後の研究課題

今後の研究課題は二つある。

第一に、本研究は新型コロナウイルス感染症流行期におけるウェルビーイング中心デザインの社会装置の社会インパクトの特定を研究主題としており、限られた対象数での研究であったが、今後はさらに対象数を増やし、よりロバストな研究結果を導出することが期待される。

第二に、本研究の含意を踏まえ、ハードの機器を中心に構成されるウェルビーイング中心デザインの社会システムから、例えばまちづくりや地域通貨システムなど、ウェルビーイング中心デザインが同じく強く需要されている社会システムにおける社会装置の研究へと、研究の領域を広げていくことが期待される。その上で、一般性及び汎用性を有するウェルビーイング中心デザインの社会装置の社会インパクトモデルが開発されることが待たれている。

注釈

1 分析には KH Coder 3.Beta.03i (樋口 2020) を使用した。

謝辞

本研究の一部は、公益財団法人三菱 UFJ 信託奨学財団研究助成 (2022 年度)、JSPS 科研費 (JSPS KAKENHI JP22K04601) 及び JST 共創の場形成支援プログラム (JPMJPF2111) の支援を受けている。また研究の実施に当たり、一般社団法人エミーバンク協会、マイネム株式会社、クウジット株式会社及び合同会社 toki-doki から協力を得た。さらに査読に際して、編集委員 1 名及び査読者 1 名の先生方から極めて有益なコメントをいただいた。記して謝意を表する。

参考文献

- Aaltonen, T., Myllärniemi, V., Mäkitalo, N., Männistö, T., Pääkkö, J., Raatikainen, M. (2013). "The Social Devices Platform: An Infrastructure for Social Devices in a Mobile Cloud", in Porres, I, Mikkonen, T., Ashraf, A. (eds.) *Developing Cloud Software: Algorithms, Applications, and Tools*, Turk, Finland: TUCS General Publication, pp. 43-68.
- Badri, S.K.Z., Yap, W.M. and Ramos, H.M. (2022). "Workplace affective well-being: gratitude and friendship in helping millennials to thrive at work", *International*

- Journal of Organizational Analysis*, Vol. 30 No. 2, pp. 479-498.
<https://doi.org/10.1108/IJOA-04-2020-2148>
- Calvo, R.A., Peters, D. (2014). *Positive Computing: Technology for Wellbeing and Human Potential*, Boston: MIT Press (邦訳: ラファエル A. カルヴォ & ドリアン・ピーターズ著, 渡邊淳司・ドミニク・チェン監修, 木村千里, 北川智利, 河邊隆寛, 横坂拓巳, 藤野正寛, 村田藍子訳 (2017)『ウェルビーイングの設計論: 人がよりよく生きるための情報技術』 ピー・エヌ・エヌ新社)
- Christakis, N.A. and Fowler, J.H. (2009). *Connected: The Surprising Power of Our Social Networks and How They Shape Our Lives: How Your Friends' Friends Affect Everything You Feel, Think, and Do*, New York: Back Bay Books. (邦訳: ニコラス・A・クリスタキス, ジェイムズ・H・ファウラー著, 鬼澤隆訳 (2010)『つながり: 社会的ネットワークの驚くべき力』 講談社).
- Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., Griffin, S. (1985). "The Satisfaction with Life Scale", *Journal of Personality Assessment*, vol. 49, No. 1, pp.71-75.
- Diener, E. (2000). "Subjective well-being: The science of happiness and a proposal for a national index", *American Psychologist*, Vol. 55, No.1, pp.34-43.
- Dix, A., Finlay, J., Abowe, G.D., Beale, R. (2004). *Human-Computer Interaction, Third Edition*, Edinburgh Gate, Harlow, Essex: Pearson Education Limited.
- Hall, J. A., Holmstrom, A. J., Pennington, N., Perrault, E. K., & Totzkay, D. (2023). "Quality Conversation Can Increase Daily Well-Being", *Communication Research*, first on line, <https://doi.org/10.1177/00936502221139363>
- Hasan, H. Hasan, T.F. (2009) "Laugh Yourself into a Healthier Person: A Cross Cultural Analysis of the Effects of Varying Levels of Laughter on Health, *International Journal of Medical Science*, 6(4), 2009, pp.200-211.
- Hayashi K., Kawachi, I., Ohira, T., Kondo, K., Shirai, K., Kondo, N. (2015). "Laughter and Subjective Health Among Community-Dwelling Older People in Japan: Cross-Sectional Analysis of the Japan Gerontological Evaluation Study Cohort Data, *Journal of Nervous and Mental Disease*, Dec;203(12), pp.934-942, <https://doi.org/10.1097/NMD.0000000000000399>.
- Knepple Carney, A., Allyson, S.G., Hudson, G., Wilson, E. (2021). "Age Moderates

- Perceived COVID-19 Disruption on Well-Being, *Gerontologist*, Vol.61, No.1, pp.30-35.
- Lomas, T., Waters, L., Williams, P., Oades, L.G., Kern, M.L. (2021). “Third wave positive psychology: broadening towards complexity”, *Journal of Positive Psychology*, Vol.16 No.5, pp.660-674, DOI: 10.1080/17439760.2020.1805501
- Monden, C. (2014). “Subjective Health and Subjective Well-Being”, In: Michalos, A.C. (eds.) *Encyclopedia of Quality of Life and Well-Being Research*, Dordrecht: Springer, Dordrecht, https://doi.org/10.1007/978-94-007-0753-5_3957.
- Nasheeda, A., Abdullah, H. B., Krauss, S. E., & Ahmed, N. B. (2019). “Transforming Transcripts Into Stories: A Multimethod Approach to Narrative Analysis”, *International Journal of Qualitative Methods*, Vol.18, <https://doi.org/10.1177/1609406919856797>.
- OECD (2013). “OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being”, *OECD Publishing*, <https://doi.org/10.1787/9789264191655-en>, 2013, p.10.
- Papousek, I. (2018) “Humor and well-being: A little less is quite enough”, *International Journal of Humor Research*, Vol. 31, Nos. 2, pp.311-327.
- Singh, S., Kshtriya, S., Valk, R. (2023). “Health, Hope, and Harmony: A Systematic Review of the Determinants of Happiness across Cultures and Countries”, *International Journal of Environmental Research and Public Health*, Vol.20 Nos.4: 3306, <https://doi.org/10.3390/ijerph20043306>.
- Takahashi, R., Igei, K., Tsugawa, Y., Nakamuro, M. (2023). “The Effect of Silent Eating during Lunchtime at Schools on the COVID-19 Outbreaks”, *RIETI Discussion Paper Series* 23-E-068, September 2023, <https://www.rieti.go.jp/jp/publications/nts/23e068.html>, last access on March 6th, 2024.
- Väänänen-Vainio-Mattila, K., Olsson, T., Palviainen, J., Jarusriboonchai. P. (2013). “Social Devices as a New Type of Social System: Enjoyable or Embarrassing Experiences?”, *Workshop on Experiencing Interactivity in Public Spaces (EIPS), in conjunction with CHI'13*.

- 荻野晃大 (2020)「ポジティブ・コンピューティングとは:ウェルビーイング支援のための感性工学」『感性工学』 Vol.18(2), pp.55-62.
- 佐藤徳, 安田朝子 (2001)「日本語版 PANAS の作成」『性格心理学研究』 Vol. 9, p.139.
- 末吉隆彦, 保井俊之, 飛鳥井正道, 江上広行, 本條陽子, 前野隆司 (2018)「地域経済をめぐる二つの対立的貨幣観をテーマにした協創型ビジネスゲームにおける地域住民の内的活力の分析:主観的幸福の4因子モデルによる定量評価を通じて」『地域活性研究』 Vol.9, pp.174-183.
- 高尾真紀子, 末吉隆彦, 江上広行, 磯崎隆司, 保井俊之 (2023)「地域通貨の利用が利他とつながりを通じて主観的ウェルビーイングを向上させる経路:関係性志向の地域通貨プラットフォームを実証フィールドとして」『地域活性研究』 Vol.19, pp.11-19.
- 樋口耕一 (2020)『社会調査のための計量テキスト分析 [第2版]: 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 札野順 (2023)「社会の福利(well-being)を志向する技術者を育成する教育プログラムの構築: ポジティブ・エンジニアリング教育に向けて」『日本工学教育協会第71回年次大会・工学教育研究講演会 予稿集』 2023年9月8日, pp.160-161.
- 前野隆司 (2013)『幸せのメカニズム: 実践・幸福学入門』講談社現代新書.
- 前野隆司, 前野マドカ, 保井俊之 (2021)「ウェルビーイングを陽に考慮したシステムデザイン方法論: 第1報 設計論の基本概念とその適用領域」『日本システムデザイン学会誌』 Vol.2, No.1, pp.13-20.
- 前野隆司 (2024)「幸福度の推奨アンケート (SWLS、幸せの4因子など) について」 ヒューマンシステムデザイン研究室ウェブサイト,
<https://lab.sdm.keio.ac.jp/maenolab/questionnaire.html>, 最終閲覧 2024年3月7日.
- 保井俊之, 末吉隆彦, 飛鳥井正道, 岩波宏, 山川麻美, 前野隆司 (2017)「ありがとう最大化ともうけ最大化の対話原理の比較研究 (第一報): 協創型ビジネスゲームにおける幸福度・ポジティブ/ネガティブ感情・人のふるまいの関係解析」『対話支援研究』 第4号, pp.17-38.

- 保井俊之, 末吉隆彦, 本條陽子, 江上広行, 平野治, 前野マドカ, 前野隆司
(2021a)「ウェルビーイング中心システムデザインに基づく社会システムの
プラットフォーム設計の要件: 社会装置エミー・ウォッシュを事例として」
『日本システムデザイン学会第2回研究大会予稿集』2021年9月5日(日),
バーチャル開催.
- 保井俊之, 末吉隆彦, 磯崎隆司, 飛鳥井正道, 山川麻美, 江上広行, 本條陽子, 前
野隆司 (2021b)「主観的ウェルビーイングを向上させる地域通貨の社会シス
テムデザイン: 偏相関分析による貨幣使用と主観的ウェルビーイングの直接
的相関要素の特定を通じて」『日本システムデザイン学会誌』Vol.1, pp.43-57.
WIRED(2019)『VOL.32 「DIGITAL WELL-BEING」デジタル・ウェルビーイン
グ特集 (3月14日発売)』Wired Magazine 日本版、プレジデント社.
- 渡邊淳司監修, ドミニク・チェン, 安藤英由樹, 坂倉杏介, 村田藍子著 (2020)『わ
たしたちのウェルビーイングをつくりあうために: その思想、実践、技術』ピ
ー・エヌ・エヌ新社.

【査読論文】

コミュニティウェルビーイングへの持続可能な観光の貢献 ～農泊推進地における幸福度からの示唆～

岡田 美奈子（追手門学院大学 地域創造学部 教授）

要約

「住んでよし、訪れてよし」の国づくりを目指し、国をあげて、持続可能な観光の推進を通じた観光立国実現への取り組みが加速している。様々な社会課題や地域課題への対応として、観光による地域内好循環を創出する仕組みをつくり、持続可能な社会基盤の構築を目指す地域も少なくない。持続可能な観光の基盤は地域にあり、地域主体の観光の実現により、観光の効果が発揮され、地域のウェルビーイングにも貢献しうる。これまで、ウェルビーイングの視点での観光研究やウェルビーイングへの観光による効果の評価や測定方法は十分に検討されてきていない。本研究では、地域の幸福度と相関の高い「地域のつながり」と「多様性・寛容性」に着目し、観光とウェルビーイングの関係性を考察した。地域主体の観光が推進されている農村地域（農泊推進地）では、観光がウェルビーイング（コミュニティウェルビーイング）に貢献している可能性が示唆された。

1. はじめに

（1）研究の背景

コロナ禍を経て、これまで以上に「ウェルビーイング」や「幸福」への関心が高まっている。観光分野においても、観光客が地域を訪れることで地域内の好循環を高める仕組みをつくり、地域だけでなく、住む人々、そして、訪れる人々も再生する「リジェネラティブツーリズム」が注目されている。

「地球上の誰一人取り残さない」、経済・社会・環境の3つのバランスがとれた持続可能な社会の実現を目指して国連が設定している2030年までに達成すべき「17の持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)」は、あらゆる人々にとってのウェルビーイングを目指す目標である。SDGsには17の目標とそれをさらに具体化した169のターゲットがあるが、目標8（働きがいも経済成長も）目標12（責任つかう責任）目標14（海の豊かさを守ろう）

に関連するターゲットには、「観光」の言葉が明記されている。国連世界観光機関では、観光には、直接的・間接的にすべての目標に貢献する潜在力があるとし、政策立案者、国際組織、学術関係者、企業等、観光に関する全てのステークホルダーによる SDGs 達成への貢献・参画を促している。一方で、SDGs やウェルビーイングへの観光の貢献を客観的に評価する統一の基準や指標や関連の研究はほとんどなされておらず、観光の効果が十分に理解されていない。

ニュージーランドやフィンランドなど、サステナブルツーリズムへの取り組みが進む国や地域では、観光に対する住民満足度調査等を実施し、観光政策や方針等の検討に反映されている。観光庁の調査(2023)¹によると、日本全国の自治体・観光地域づくり法人(DMO)の7割以上が観光に対する住民満足度の目標設定およびデータ計測を実施していない。同様に、約7割が観光客の満足度の目標設定およびデータ計測を実施していない。京都市や岐阜県白川村など、主に観光客が集中する地域においては、住民の観光への感情や地域の課題把握のために住民調査を実施し、政策や課題への対応が検討されている。しかしながら、これらの調査は、地域の観光や観光政策に対する満足度を知ることが主目的であり、観光と地域・住民のウェルビーイングとの関係性やその貢献度を評価するための十分な情報は得られてはいない。

(2) 研究の目的

多様な社会課題を改善し、ウェルビーイングな地域づくりを実現する手段として観光への期待は高い。一方、ウェルビーイングの視点での観光研究やその観点も取り入れた観光効果の評価の検討も進んでいない。本研究は、持続可能な観光がウェルビーイング(コミュニティウェルビーイング)に貢献しうるのかを探るとともに、幸福度と観光の関連性についての仮説を見出し、ウェルビーイングを重視した観光効果の測定を検討する必要性についての示唆を得ることを目的とする。

(3) 研究の方法

国内外の先行研究から、幸福度とウェルビーイングの考え方について整理する。あわせて、国内外の幸福度やウェルビーイングの調査に活用されている測定

指標を概観する。その後、観光とウェルビーイングとの関係性について、全国の市町村を対象にデジタル庁が実施しているウェルビーイング調査の結果をもとに、地域のウェルビーイングと相関の高い因子に着目し考察する。なかでも、地域主体の観光を推進する農村地域における幸福度と観光との関係性に注目し、観光がどのようにコミュニティウェルビーイングに影響しているか示唆を得る。

2. 「幸福度」「ウェルビーイング」に関する先行研究

「ウェルビーイング (well-being)」は、1946 年、世界保健機関 (WHO) 設立時に、「健康」を定義づける言葉として使われたのが始まりである。WHO では、「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」²と定義づけている。幸福は「ハピネス」と訳されることもあるが、ハピネスは「瞬間的に感じる幸福」の意味合いが含まれるのに対し、ウェルビーイングは「持続的な幸福」を示す。一般的にウェルビーイングは、身体的・精神的な健康、社会的なつながり、経済的な状況などの様々な要素が含まれ、個人の健康や幸福の状態を包括的に表す言葉である。一方、幸福は、喜びや満足感などの主観的な感情や心理的状态を指すと理解されている。

(1) 「幸福」に関する研究の広がり

人間は何によって「幸福」を感じるのか。幸福の概念は、アリストテレス、エピクロス、プラトンなどの古代ギリシャの哲学者たちによって、様々な理論が提唱された。20 世紀初頭、心理学的側面からセリグマンやチクセントミハイなどによる「ポジティブ心理学」が発展し、幸福やポジティブな感情に焦点が当てられ、幸福の構成要素やその測定方法が研究されはじめた。社会学・経済学の分野からは、レイヤードなどにより、精神的健康と幸福や経済成長と幸福の関係などの視点から幸福に影響を与える要因が探求されるようになった。レイヤード (2006)³は、幸福に影響をもたらす7つの要因 (ビッグセブン) として、①家族関係、②家計の状況、③雇用状況、④コミュニティと友人、⑤健康、⑥個人の自由、⑦個人の価値観を紹介した。この発表以降、経済学以外の分野でも幸福度や生活満足度が注目され、心理学や社会学の知見を取り入れた幸福の概念、幸福

指標による効果評価などの科学的研究を政策提言に役立てる議論が広まり、現在では政策立案や決定において幸福に関わる研究は重要な役割を果たしている。

人生満足度尺度 (the Satisfaction With Life Scale : SWLS)

幸福研究の第一人者、ディーナーら (1997) は、「幸福」について、「生活に満足し、喜びを感じることが多く、悲しみや怒りといった嫌な感情をあまり感じないならば、その人の幸福度は高い、反対に生活に不満があり喜びや愛情をほとんど感じず、怒りや不安のような嫌な感情を抱くことが多いならば、その人の幸福度は低い」⁴という包括的な定義を提示している。1985年には、ディーナーの研究グループにより、自分の幸福度を簡単に測定する方法として、「人生満足度尺度」(Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985)⁵が開発された。同指標は、主観的なウェルビーイングの尺度として、①人生満足度、②ポジティブ感情、③ネガティブ感情がないことの3要素を開発し、様々な要因と合わせて測ることで、性格や社会環境との関係を調べるもので、個人幸福度や生活満足度を評価するツールの一つとして普及している。以下の5つの質問に対して7段階で回答することにより、「幸福」という言葉の曖昧さや直近の気分の影響を受けにくくし、「主観的幸福度」を測定する。

< 5つの質問 >

- (1) ほとんどの面で私の人生は私の理想に近い
- (2) 私の人生はとても素晴らしい状態だ
- (3) 私は自分の人生に満足している
- (4) 私はこれまで自分の人生に求める大切なものを得てきた
- (5) もう一度人生をやり直せるとしてもほとんど何にも変えないだろう

心理的ウェルビーイング理論

リフ (1989) によって、自分が生きていることに意味があり、人生の意義や目的意識から得られる満足感・幸福感を指す「心理的ウェルビーイング理論 (ユーダイモニック・ウェルビーイング)」が提唱された。人が幸せを感じる心理的ウェルビーイングに分類し計測する「6軸モデル」⁶が開発された。

- ① 自己受容 (Self-Acceptance) :
自分の良いところ、悪いところを受け入れていること。
- ② 環境適応力 (Environment Mastery) :
複雑な環境を的確に制御していると感じること。
- ③ 他者との良好な関係 (Positive Relations with others) :
他者との愛情、信頼、共感といったポジティブな関係を築いていること。
- ④ 自己の成長 (Personal Growth) : 成長して発達し進歩を実感すること。
- ⑤ 人生の目的の明確さ (Purpose in Life) :
人生の目的と自分の生きる方向性を自覚していること
- ⑥ 自律性 (Autonomy) : 自律して自己決定していること。

プロスペクト理論

1979 年、カーネマンとトベルスキーが共同で「プロスペクト理論」⁷を発表した。これは、「人は損失を回避する傾向があり、状況によってその判断が変わる」という意思決定に関する行動経済学の理論のひとつである。プロスペクト理論の柱として、意思決定にかかわる「確率加重変数」と「価値関数」の 2 つの要素があり、人は確率が低いときに大きく評価し、確率が高いときには小さく評価しているとうものである。人は、等しい量の利益と損失があった場合、損失によって感じる痛みの方が利益によって感じる幸福より大きいことを表し、価値を主観的に判断する人間の特性を示している。また、プロスペクト理論には「損失回避性」「参照点依存性」「感応度逓減性」という 3 つの心理作用がある；

・ 損失回避性の心理作用：

「手に入れる」ことよりも「損をする」ことを回避する心理作用

・ 参照点依存性の心理作用：

価値を「絶対的ではなく、相対的」に判断する心理作用

・ 感応度逓減性：

同じ損失額でも、母数が大きくなるほど鈍感になるという心理作用

カーネマンとデートン (2010) ⁸の研究では、「年収 7.5 万ドルまでは、収入が増えれば増えるほど幸福度は比例して大きくなるが、それ以上収入が増えても

幸福度はほぼ変わらない」ことを科学的に明らかにした。人間が感じる幸福の感情は、あるレベルまでは収入に比例して増えていくが、収入が一定水準を超えると幸福度は上昇しなくなり「収入と幸福感とは相関しない」というものである。

前野の研究（2012）⁹によると、人間の欲求を満たす「財」には、収入や物、社会的地位など周囲との比較で価値が決まる「地位財」と、自由や愛情、感謝、社会への帰属意識など他人との比較を前提としない「非地位財」の2つがある。

「地位財」による幸福は、欲望充足型で、保有量の増加に伴いその効用が低下する限界効用逓減の法則が働き幸福感が長続きしないが、愛情や感謝などの「非地位財」による幸福は、その状態に慣れても何も感じなくなることはないため長続きする。長続きするウェルビーイングは、収入のような地位財で得られるものではないことは数々の調査から示唆されているが、最新の研究（Killingsworth et al, 2023）では、幸福度が低いグループと高いグループに分けて分析した結果、「幸福度が高いグループの人々では、年収が7.5万ドル以上になっても、幸福度は伸び続ける」¹⁰という結果も示されている。

PERMA 理論

2000 年前後、セリグマンらによって「ポジティブ心理学」が創始され、ウェルビーイングが研究されてきた。セリグマンが提唱した PERMA 理論は、ウェルビーイングを高めるための 5 つの要素¹¹があり、これらの要素に積極的に取り組むことで、ウェルビーイングが高まり、心理的な苦痛も減少するというものである。これらの要素は、人々が自由に選択するものと位置付けられている。

<5 つの要素>

① ポジティブな感情 (Positive Emotion)	希望、興味、喜び、愛、思いやり、誇り、娯楽、感謝などがあり、幸福度の主要な指標。また、「ネガティブな感情を打ち消し、レジリエンス力を高める」「思考、行動の選択肢を広げる」などにより、ウェルビーイングを高める要素が創造される感情。
② エンゲージメント (Engagement)	時間を忘れて何かのにめり込み没頭している状態（フロー状態）のこと。現在の瞬間に生きる、目の前の仕事に集中し、没頭や没入の領域に入ると「集中力が高まる」「効率性が良くなる」「生産性が向上する」。ウェルビーイングな心理状態の一種。
③ 関係性 (Relationship)	パートナー、友人、家族、同僚、上司、指導者、監督者、そしてコミュニティ全体との相互作用を指す。社会において、利他

	的な関係、人と助け合う関係を持っている人は幸せであることが明らかにされている。また「自己と他者を比較しない」「他者に貢献する」なども、幸福をもたらすとされている。
④ 意味・意義 (Meaning)	自分自身よりも大きなものに所属し、または何かに奉仕することで、有意義な人生となる。人生の目的を持つことは、困難や逆境に直面した時に、本当に大切なものに焦点を当てる助けになる。人生の目的がある人は、より長生きし、人生の満足度が高く、健康問題が少ないことが知られている。
⑤ 達成 (Achievement)	目標に向かって努力し、その目標を達成した結果。自己動機付け・内発的動機から何かを成し遂げる、あるいはそのために一所懸命がんばっている状態の人は幸せである。個人が誇りを持ち自分の人生を振り返ることはウェルビーイングに貢献する。

フロー理論

1990 年、ポジティブ心理学の創始者の一人、チクセントミハイによって「フロー理論」が提唱された。フロー理論は、教育、ビジネス界のみならず、芸術、スポーツ他、あらゆる分野に大きな影響を与えている。フローとは、「時を忘れるくらい、完全に集中して対象に入り込んでいる精神的な状態」¹²で、人間がフロー状態に入ると雑念に囚われることなく集中し、その人の最大限の力が発揮されるというものである。目の前の課題に没頭することは自己成長を促し、その行為を心の底から楽しむことが、満足感や幸福感につながる。チクセントミハイは、フロー状態を導く 7 つの条件として、以下をあげている。

- ① 目標の明確さ：何をすべきか、どうやってすべきか理解している
- ② どれくらいうまくいっているかを知ること：
ただちにフィードバックが得られる
- ③ 挑戦と能力の釣り合いを保つこと：活動が易しすぎず、難しすぎない
- ④ 行為と意識の融合：自分はもっと大きな何かの一部であると感じる
- ⑤ 注意の散漫を避ける：活動に深く集中し探求する機会を持つ
- ⑥ 自己、時間、周囲の状況を忘れること：
日頃の現実から離れたような忘我を感じる
- ⑦ 自己目的的な経験としての創造性：
活動に本質的な価値がある、活動が苦にならない

幸福の4つの因子

前野らの研究（2012）から、幸福感と深い相関関係がある、以下の4つの因子¹³の存在がわかった。

やってみよう因子 (自己実現と成長の因子)	「自分の強みを活かしている」「自分が成長している実感がある」などの要素。人間は目標ややりがいを持ち、「なりたい自分」をめざし成長していくときに幸福を感じる。
「ありがとう」因子 (つながりと感謝の因子)	「人を喜ばせている」「感謝することはたくさんある」などの要素。多様な人とながらを持ち、人を喜ばせる、人に親切にする、感謝することが幸せをもたらす。
「なんとかなる」因子 (前向きと楽観の因子)	「ものごとが思い通りにいくと思う」「失敗や不安をあまり引きずらない」などの要素。いつも前向き。「自分のいいところも悪いところも受け入れる」自己受容ができていて、「なにがあってもなんとかなる」と楽観的な人は幸せになりやすい。
「ありのままに」因子 (独立と自分らしさの因子)	「自分と他人を比べずに生きている」「人目を気にせず物事を楽しめる」などの要素。人目を気にせず、自分らしく生きていける人は、他人との比較によらない非地位財を大切にする傾向があるため、長続きする幸せを手に入れやすい。

先行研究から、観光客を受け入れる地域の視点にたち、コミュニティウェルビーイングと観光との関係性を検討する。PERMA理論における「ポジティブな感情」「関係性」「意味・意義」は、観光客との交流により、影響を受ける要素として考えられる。また、幸福の4つの因子のうち、「ありがとう」や「ありのまま」因子は、観光とも関係が深い。なかでも、「ありのまま (Authenticity)」は、そのものが本物・真実であり、偽りや模倣ではないことを指す。また、自分の内面や価値観に忠実であることを指す。個人の真の自己を理解し、表現することに焦点を当てた心理学や哲学の概念でもある。観光地や観光事業においても、「本物感」「ありのまま」の議論はしばしば行われている。地域がもともと有する固

有の資源やそれらを活用した体験、すなわち「唯一無二の地域の価値」が観光を通して提供され、観光客からその価値が評価される。ありのままの地域の姿が外部から高く評価されることは、地域の観光関係者だけでなく、地域住民の誇りと満足度にもつながる。自分が暮らす地域に対する評価や尊敬は「非地位材」に相当する。観光を通して「シビックプライド」の醸成を目指す地域も増えている。

観光客側の視点では、様々な地域に訪れ、多様な人々と交流することで視野が広がる、自己成長につながる、地域の人々との関係性が生まれる、同行者との絆が深まるなど、観光を通じた効果は幅広く、心理的ウェルビーイング理論の「6軸モデル」のすべてに関連する。観光がもたらすと想定される効果について、科学的に評価・検証し、ウェルビーイングと観光との関係性を解明することにより、観光が貢献できる分野は、さらに広がるものと期待する。

3. 「ウェルビーイング」「幸福度」の測定指標

「ウェルビーイング」や「幸福」の概念や定義にもとづき、それらを測る様々な手法が研究されてきた。国際的には、「国の豊かさ」の測定指標として、GDP（国民総生産）があるが、GDPは、「一国の領土内で一定期間に政府、全企業、非営利組織、家計によって行われたすべての生産を、財・サービスの種類にかかわらず数値化したもの」¹⁴（OECD）であり、幸福度を測定するものではない。国単位では、イギリスの「ウェルビーイング・ダッシュボード」、フランスの「New Wealth Indicators」、イタリアの「公平で持続可能なウェルビーイングダッシュボード」、ニュージーランドの「ウェルビーイング・ダッシュボード」¹⁵など、それぞれの国で生活の質に関する評価の手法が検討され、設定された指標のもとで測定された結果が国の政策検討に活用されている。

OECDでは、2011年、GDPの数値とは異なる方法で幸福度を測る指標として、「より良い暮らし指標（Better Life Index：BLI）」¹⁶を開発した。本指標は、2008年に設立された「経済成果と社会進歩の計測に関する委員会（スティグリッツ委員会）」によって開発が進められた、人々が暮らしを計測、比較することを可能にするインタラクティブな指標である。OECDのウェルビーイングの枠組みやその指標は、内閣府「満足度・生活の質を表す指標群（Well-beingダッシュボード）」を検討する土台や諸外国における主観的ウェルビーイングの指標群

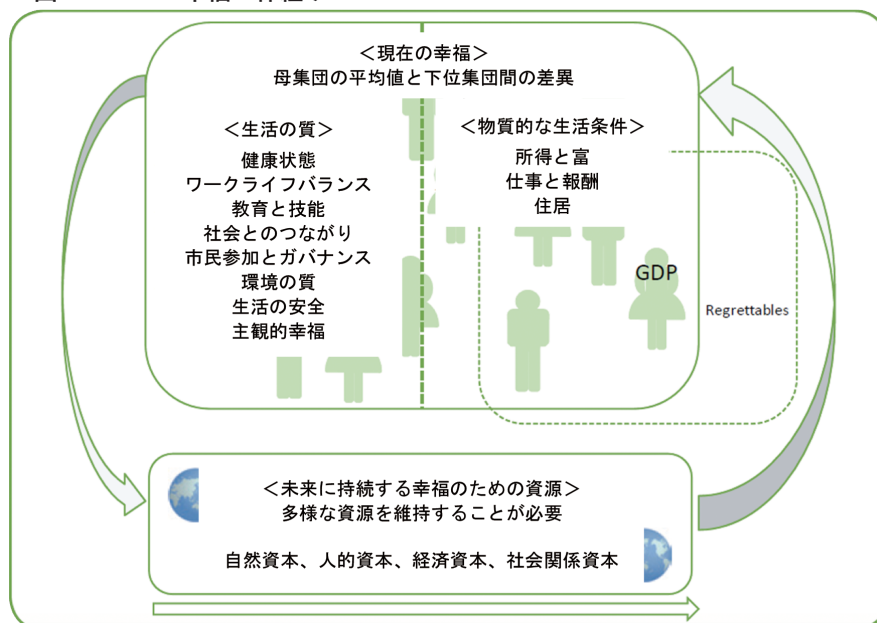
を策定する際にも参考とされている。

(1) OECD「Better Life Index（より良い暮らし指標、以降、BLI）」の概要¹⁷

BLI は、7 言語に対応、オンライン上で利用者が自分の生活の満足度を測り比較できる。現在、OECD 加盟 37 カ国とブラジル、ロシア、南アフリカの全 40 カ国の指標を比較できるが、国の環境や国民性などにより、幸福度指標の数値の現れ方には影響が出ると考えられ単純比較には留意を要する。各国と比較した自国の特徴や特定の国における項目ごとの経年変化などを把握する上では有用であり、国々の政策立案や改善のための重要な情報源として利用されている。

BLI は、主観的指標と客観的指標を組み合わせた 11 の要素から「現在の幸福」を示している。11 の要素は、人々の経済的選択肢を形成する「所得と富」「雇用と仕事の質」「住居」などの「物質的条件」、また「主観的幸福」「知識と技能」「環境の質」「健康」「安全」「ワークライフバランス」「社会とのつながり」「市民参画」などの「生活の質」で構成される（図1）。測定には、各国の平均値に、3 種類の不平等（人口集団間の格差、最上位層と最下位層の格差、技能や健康における下限の閾値未満の人口割合）を加えている。「現在の幸福」を持続可能なものにするためには、各国における資本・資源、投資状況、リスク、レジリエンスを把握す

図1 OECD 幸福の枠組み



出典：OECD2011 をもとに筆者作成

ることが必要であり、それらのデータを「未来の幸福の資源」として示している。

「未来の幸福の資源」は、「自然資本」「経済資本」「人的資本」「社会関係資本」の4つの要素から構成され、経済資本には人工資産と金融資産、自然資本には自然資産（自然資源のストック、土地被覆、生物多様性など）や生態系（海洋、森林、土壌、大気など）が含まれる。人的資本は個人の技能と未来の健康、社会関係資本は協働を促す社会的規範、共有される価値観、慣習的制度を指す（表1、表2）。

表1 現在の幸福のヘッドライン指標：現在の幸福の平均値、現在の幸福の不平等

幸福の側面	指標名	指標の内容
所得と富	家計の所得	家計の調整総可処分所得
	家計の富	家計の純資産の中央値
	所得の五分位比率	所得の平均等価可処分所得の分布の下位20%の所得に対する上位20%の所得の比
住居	住宅取得能力	住居費を除いた家計の可処分所得
住宅	過密状態の住居	過密状態の住居
仕事と仕事の質	就業率	就業率
	賃金の男女格差	賃金の男女格差
	長時間労働	長時間労働を行う有償雇用者
健康	平均余命	出生時平均余命
	平均余命の学歴格差	25歳時点での低学歴と高学歴の男性の平均余命の差
知識と技能	生徒の科学的リテラシー	15歳の生徒の認知技能（科学的リテラシー）
	低技能の生徒	数学的リテラシー、読解力、科学的リテラシーのスコアが低い15歳未満の生徒
環境の質	緑地へのアクセス	緑地へのアクセス
	大気汚染への暴露	WHOが定めた閾値を超える微小粒子状に曝されている人口
主観的幸福	生活満足度	生活満足度
	ネガティブな感情バランス	ネガティブな感情バランス
生活の安全	殺人率	加害による死
	安全感的男女格差	夜間の安全感的男女格差
ワーク・ライフ・バランス	余暇時間	レジャーとパーソナルケアに充てる時間
	労働時間の男女格差	15～64歳の男性と女性の有償労働と無償労働に費やす時間の差
社会とのつながり	社会的交流	主行動として友人や家族と過ごす時間
	社会的支援	社会的支援の欠如
市民参加	投票率	投票率
	政府への発言権	政府への発言権

出典：幸福の資源の指標（OECD2017a,2019）をもとに筆者作成

表2 現在及び未来の幸福の資源の指標

側面	指標名	指標の内容
経済資本	生産固定資産	生産固定資産
	一般政府の純金融資産	一般政府の調整純金融資産
	家計の負債	家計の負債
自然資本	温室効果ガスの排出	国内生産による温室効果ガスの総排出量
	マテリアルフットプリント	経済の最終需要を満たすために採取された天然資源量
	絶滅危惧種のレッドリスト指数	絶滅危惧種のレッドリスト指数
人的資本	若年成人の学歴（25～34歳）	若年成人における後期中等教育以上修了者
	未活用労働力	労働力の未活用率、不完全就業者が労働人口に占める割合
	若年死亡	疾患や死亡事故によって失われた可能性のある余命
社会関係資本	他者への信頼	対人信頼
	政府への信頼	中央政府への信頼
	政治におけるジェンダーパリティ	国会議員に女性が占める割合

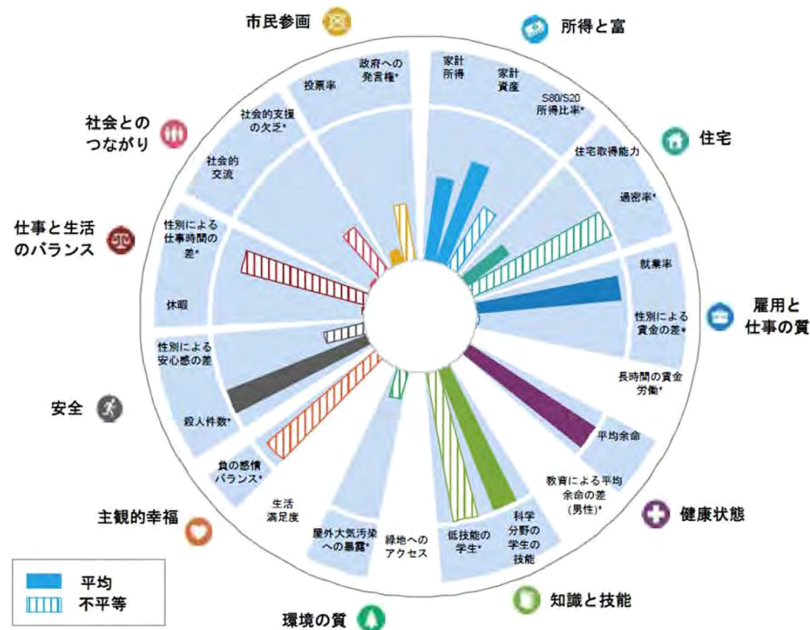
出典：幸福の資源の指標（OECD2017a,2019）をもとに筆者作成

(2) 日本の BLI の状況

BLI による分析結果は、2 年に一度、「How's Life」¹⁸ として公表される。2020 年の日本の結果は、コスタリカを除く OECD 加盟 37 カ国中 25 位だった。日本は、「安全」「雇用と仕事の質」「教育」でスコアが高いが、「ワークライフバランス」「市民参画」「社会とのつながり」などのスコアが劣っている（図 2）。

図 2 OECD how's Life 日本の幸福度（2020 年 3 月）

日本の幸福度（2018 年またはデータが利用可能な直近年）



（参考）日本の順位

就業率	平均余命	科学分野の学生の技能	殺人件数	投票率	社会的交流	休暇
5/41	1/41	2/41	1/41	37/41	24/24	22/22

出典：内閣府「内閣府における経済・財政一体改革、満足度調査の取組」

<11 分野のスコア>

ハウジング：6.1、所得：3.6、求人：8.3、コミュニティ：5.5、教育：7.7、環境：6.7、市民参画：2.0、健康：5.3、人生の満足度：4.1、安全性：8.4、仕事と生活のバランス：3.4

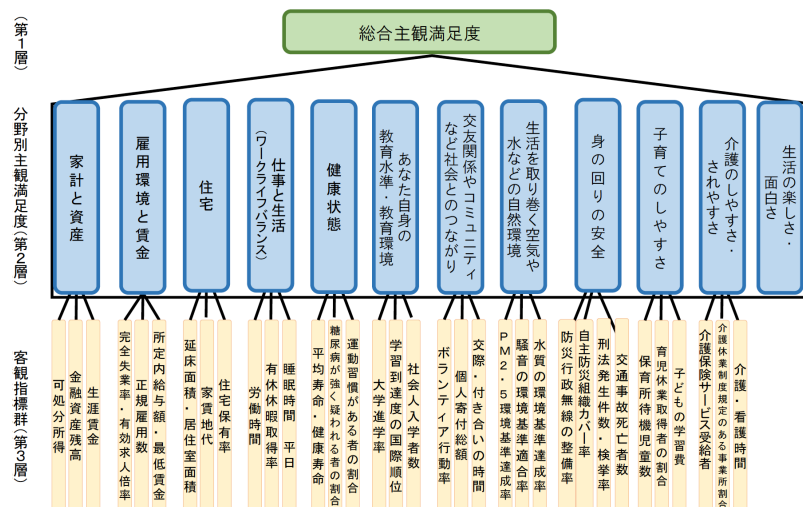
4. 日本におけるウェルビーイング指標に関わる動き

日本においても、国や地域レベルで、国民や住民のウェルビーイングや幸福度を測定するための様々な指標が策定されている。その多くは諸外国政府機関が採用している手法と同様に、主観的指標・客観的指標の双方を盛り込んでいる。

(1) 内閣府による「満足度・生活の質に関する調査」¹⁹

内閣府では、2019 年から国民が自己評価する主観的な生活満足度に関する意識調査を実施している。同調査では、主観的ウェルビーイングの代表的指標として「総合的な生活満足度」の計測と、これを客観的指標と紐づける分野別満足度を取り入れ、独自の指標群「満足度・生活の質を表す指標群 (Well-being ダッシュボード)」を策定している (図3)。第1層に、全体的な生活満足度 (総合主観満足度)、第2層に、「家計と資産」「健康状態」などの11の分野別満足度を位置付けている。11分野は、OECDのBLIをベースに「全体的な生活満足度」と「分野別満足度」の関係を統計的に分析して設定し、第3層には11分野別の客観指標群を位置づけている。総合的な生活満足度や各分野の満足度は、経済指標等の客観指標と紐付け、分野ごとの満足度と生活満足度との関係や分野ごと、あるいは総合的な生活満足度についての客観指標との対応関係も分析できる。本指標の策定の際には、OECDのBLIを参考としているが、OECDの指標と異なる点がある。たとえば、OECDでは「主観的ウェルビーイング」は、11領域のひとつだが、内閣府では「主観的ウェルビーイング」が第1層の「全体的な生活満足度」として最上位の指標として位置づけられ、第3層の「客観指標群」の上位に第2層の「分野別主観満足度」が位置付けられている。OECDの指標では、「状態の客観的な測定」に重点がおかれている一方、内閣府の指標では、「主観的な満足度」が重視されている。「ウェルビーイング」を、より多面的に理解し計測する海外に対して、主観的側面から理解し計測する日本との違いが示されている。こうした違いがウェルビーイングの実現に向けて、どのような影響をもたらすかは、研究を要するところである。

図3 内閣府「満足度・生活の質を表す指標群 (Well-being ダッシュボード)」の体系図

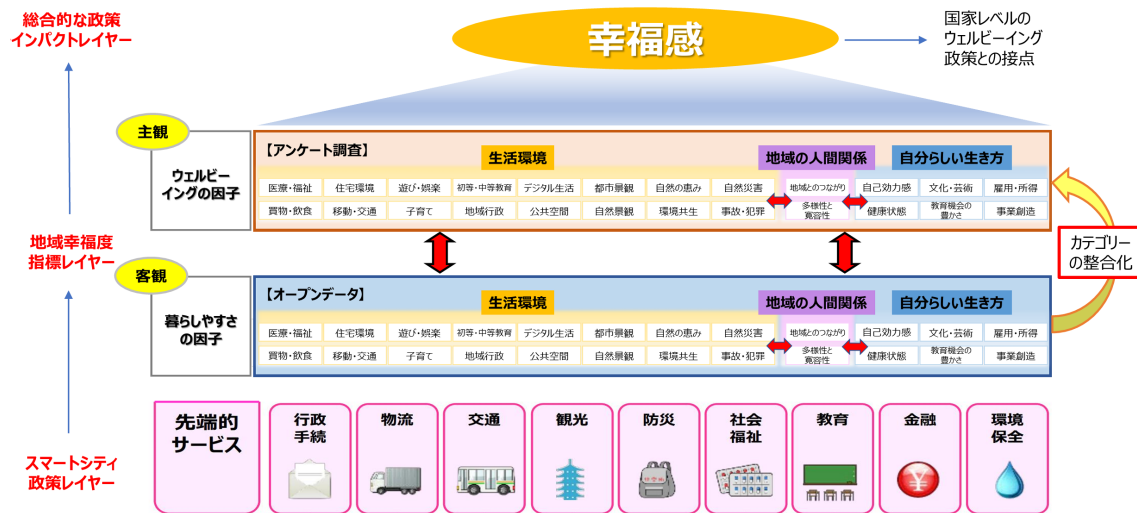


出典：内閣府「満足度・生活の質に関する調査報告書 2023～我が国の Well-being の動向～」

(2) デジタル庁「デジタル田園都市国家構想」²⁰

2021年、「デジタル実装を通じて地方が抱える課題を解決し、誰一人取り残されずすべての人がデジタル化のメリットを享受できる心豊かな暮らしを実現」する「デジタル田園都市国家構想」への取組が始まった。地域の個性や魅力を維持しながら、都市と変わらない利便性を実現し、地域で暮らす人々の心豊かな暮らしの向上と持続可能な環境・社会・経済の確保を目指す構想である。具体的な施策として、①デジタルの力を活用した地域の社会課題解決、②デジタル田園都市国家構想を支えるハード・ソフトのデジタル基盤整備、③デジタル人材の育成・確保、④誰一人取り残されないための取り組みが行われている（図4）。

図4 地域幸福度（Well-Being）指標の全体構成図



最先端サービスの図： https://www.chisou.go.jp/sousei/meeting/tihousousei_setumeikai/pdf/r02-07-21-shiryuu12.pdf

出典：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度（Well-Being）指標」

地域幸福度（Well-Being）指標

「デジタル田園都市構想」推進のために、客観指標と主観指標のデータをバランスよく活用し、市民の「暮らしやすさ」と「幸福感」を指標で数値化・可視化する「地域幸福度（Well-Being）指標」が、以下の基本概念・目的のもと開発・導入された；

基本概念	・ウェルビーイング（Well-being）： - 身体的・精神的・社会的に良好な状態にあること ・健康の社会的決定要因（Social Determinants of Health）： - 健康とは、病気ではないとか、弱っていないというわけではなく、肉体的、精神的、社会的にも、すべて満たされた状態（Well-being）にあること
------	--

目的	・スマートシティ・まちづくりにおける「人間中心主義」を明確化 ・市民の視点から「暮らしやすさ」と「幸福感」を数値化・可視化 ・ランキングではなく、自治体が「個性を磨く」機会を創出 ・WHO等の国際的な枠組みを導入 ・客観と主観データの両方を活用。無料でオープン化 ・まちづくりのEBPM・ワイズスペンディングに役立てる
----	---

地域幸福度指標は、地域における幸福度・生活満足度を計る4つの設問と、3つの因子群（生活環境、地域の人間関係、自分らしい生き方）から構成され、因子群は合計24のカテゴリーに細分化されている。地域幸福度指標は、各地域の政策とその政策のインパクトとして現れる市民の幸福感を紐づけて活用する。また、主観指標と客観指標を同じ因子構成とし、主観と客観の紐づけを簡素化することで、因子間の関連から各自治体が注目すべき因子が抽出できる。主観指標はアンケート調査から市民のウェルビーイングを、客観指標ではオープンデータから暮らしやすさを測定する（表3）。

表3 デジタル庁 主観（ウェルビーイング）評価指標 50問

No.	因子	設問
1	幸福度・満足度	現在、あなたはどの程度幸せですか。
2	幸福度・満足度	現在、あなたの住んでいる地域の暮らしにどの程度満足していますか。
3	幸福度・満足度	あなたの町内（集落）の人々は、大体において、どれくらい幸せだと思いますか。
4	幸福度・満足度	自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う
※	幸福度・満足度	今から5年後、あなたはどの程度幸せだと思いますか。※オプション設問：自治体にて判断し追加する
生活環境（16因子、27問）		
No.	因子	設問
5	医療・福祉	暮らしている地域は、医療機関が充実している
6	医療・福祉	私の暮らしている地域では、介護・福祉施設のサービスが受けやすい
7	買物・飲食	暮らしている地域は、日常の買い物にまったく不便がない
8	買物・飲食	私の暮らしている地域では、飲食を楽しめる場所が充実している
9	住宅環境	自宅には、心地のいい居場所がある
10	住宅環境	【逆】自宅の近辺では、騒音に悩まされている
11	住宅環境	私の暮らしている地域では、適度な費用で住居を確保できる
12	移動・交通	私の暮らしている地域では、公共交通機関で、好きな時に好きなところへ移動ができる
13	遊び・娯楽	私の暮らしている地域には、楽しい時間を過ごせる娯楽施設がある
14	子育て	私の暮らしている地域では、子育て支援・補助が手厚い
15	子育て	私の暮らしている地域では、子どもたちがいきいきと暮らせる
16	初等・中等教育	私の暮らしている地域では、教育環境（小中学校）が整っている
17	初等・中等教育	私の暮らしている地域では、通学しやすい場所に学校がある
18	地域行政	暮らしている地域の行政は、地域のことを真剣に考えていると思う
19	地域行政	暮らしている地域の公共施設は使い勝手がよく便利である
20	デジタル生活	私の暮らしている地域では、行政サービスのデジタル化が進んでいる
21	デジタル生活	私の暮らしている地域では、仕事や日常生活の場でデジタルサービスを利用しやすい
22	公共空間	暮らしている地域の雰囲気は、自分にとって心地よい
23	公共空間	私の暮らしている地域には、まちなか、公園、川沿い等で、心地よく歩ける場所がある
24	都市景観	私の暮らしている地域には、自慢できる都市景観がある
25	自然景観	私の暮らしている地域には、自慢できる自然景観がある
26	自然の恵み	暮らしている地域では、身近に自然を感じることができる
27	自然の恵み	暮らしている地域の空気や水は澄んでいてきれいだと感じる
28	環境共生	私の暮らしている地域では、リサイクルや再生可能エネルギー活用等、環境への取り組みが盛んである
29	自然災害	私の暮らしている地域では、防災対策がしっかりしている
30	事故・犯罪	私の暮らしている地域は、防犯対策（交番・街燈・防犯カメラ・住民の見守り等）が整っており、治安がよい
31	事故・犯罪	私の暮らしている地域では、歩道や信号が整備されていて安心である
地域の人間関係（2因子、10問）		
No.	因子	設問
32	地域とのつながり	私は、同じ町内（集落）に住む人たちを信頼している
33	地域とのつながり	私の暮らしている地域では、地域活動（自治会・地域行事・防災活動等）への市民参加が盛んである
34	地域とのつながり	暮らしている地域には、困ったときに相談できる人が身近にいる
35	地域とのつながり	私は、町内（集落）の人が困っていたら手助けをする
36	地域とのつながり	私は、この町内（集落）に対して愛着を持っている
37	多様性と寛容性	この町内（集落）には、どんな人の意見でも受け入れる雰囲気がある
38	多様性と寛容性	私は、見知らぬ他者であっても信頼する
39	多様性と寛容性	私は、町内（集落）の人が自分をどう思っているかが気になる
40	多様性と寛容性	私の暮らしている地域には、女性が活躍しやすい雰囲気がある
41	多様性と寛容性	私の暮らしている地域には、若者が活躍しやすい雰囲気がある
自分らしい生き方（6因子、9問）		
No.	因子	設問
42	自己効力感	自分のことを好ましく感じる
43	健康状態	私は、身体的に健康な状態である
44	健康状態	私は、精神的に健康な状態である
45	文化・芸術	暮らしている地域は、文化・芸術・芸能が盛んで誇らしい
46	文化・芸術	将来生まれてくる世代のために、良い環境や文化を残したい
47	教育機会の豊かさ	私の暮らしている地域では、学びたいことを学べる機会がある
48	雇用・所得	私の暮らしている地域では、やりたい仕事を見つけやすい
49	雇用・所得	私の暮らしている地域では、適切な収入を得るための機会がある
50	事業創造	暮らしている地域には、新たな事に挑戦・成長するための機会がある

出典：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度(Well-Being)指標」

本指標を用いて、2023年5月5日に85,000人を対象に実施された全国 Well-Being 調査の結果について概観する。

スコアは、①～④が11段階評価、⑤のみが5段階評価となっている。

① 幸福度	・全体平均：男性 6.35 女性 6.52、全般的に女性が高い傾向。 ・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が7.27で最高。 ・幸福度の分布はふたこぶ型、5と7～8が高い。
② 生活満足度	・全体平均：男性 6.53 女性 6.57、全般的に女性が高い傾向。 ・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が7.28で最高。 ・生活満足度の分布はふたこぶ型、5と7～8が高い。
③ 5年後の幸福度	・全体平均：男性 6.27 女性 6.57、全般的に女性が高い傾向。 ・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が6.89で最高。 ・5年後の幸福度の分布はふたこぶ型、5と7～8が高い。
④ 町内の幸福度	・全体平均：男性 6.28 女性 6.43、全般的に女性が高い傾向。 ・70代、60代、10-20代の順に高く、70代女性が6.82で最高。 ・町内の幸福度の分布は、ふたこぶ型、5と7が高い。
⑤ 周りも楽しい	・全体平均：男性 3.21 女性 3.28、全般的に女性が高い傾向。 ・70代、60代、10-20代の順に高いがスコアはほぼ変わらない。 ・70代女性が3.39で最高、次いで、70代女性の3.3。 ・スコアの分布は、3～4に集中。

市町村調査の結果から幸福度および生活満足度に影響を及ぼす因子をみる。

因子	幸福度に影響	生活満足度に影響
都市環境	どれも緩やかな相関を示すが、「公共空間」や「事故・犯罪対策」は幸福度との相関が高い。	ほぼ全ての都市環境の因子で相関性が高い。
自然環境	どの組み合わせも相関性が低い。	「環境共生」、「自然災害」は相関性が高い。
地域の人間関係	<u>「地域とのつながり」や「多様性と寛容性」は相関性が高い。</u>	「地域とのつながり」、「多様性と寛容性」は相関性が高い。
自分らしい生き方	「自己効力感」、「健康状態」、「文化・芸術」、「教育機会」は相関性が高い。	いずれも相関性が高い。

出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度（Well-Being）指標」²¹

(3) 考察

調査結果から、幸福度に影響をもたらす因子と観光との関連性を考察する。

- ① 生活環境：都市環境、自然環境は、観光客の集中や資源の観光利用等により、ポジティブ、ネガティブの双方の影響をもたらすことから、観光との相関性が想定される。
- ② 地域の人間関係：「地域とのつながり」、「多様性と寛容性」では、地域が、インバウンドを含む多様な観光客の受け皿となることから、地域内での連携した取り組みや受容性などの面で、観光との相関が想定される。

調査結果を通して「町の幸福度」と強い相関性が示唆された、「地域とつながり」と「多様性と寛容性」に注目する。町の幸福度とこの2項目との間に強い相関がみられた地域は20地域である。この20地域の共通点のひとつに、「農泊」や「グリーン・ツーリズム」など農林水産業・農山漁村地域を持続可能とするために観光を活用した地域づくりや地域活性化が推進されていることがあげられる。20地域の多くが、農林水産省により「農泊推進地」としての認定を受けている、あるいは、同省の「農山漁村の宝」に表彰され取り組みが評価されている、または、農泊を推進する主体があり取り組みが進んでいる（表4）。農林水産省では、「農泊」の実践に当り、自治体や観光協会をはじめ、地域の様々な組織や団体が参画する「地域協議会」などを設置し地域の意思統一を図り推進することが重要であると強調している。そのため、農泊推進地の多くでは、地域内での農泊活動推進のリーダーシップを担う地域協議会あるいは中核法人を立ち上げ、自立的ビジネスとしての「農泊」が継続運営できるしくみが構築され、農山漁村の所得向上と地域活性化の実現を目標とした持続可能な観光による地域づくりが実践されていることが想定される。

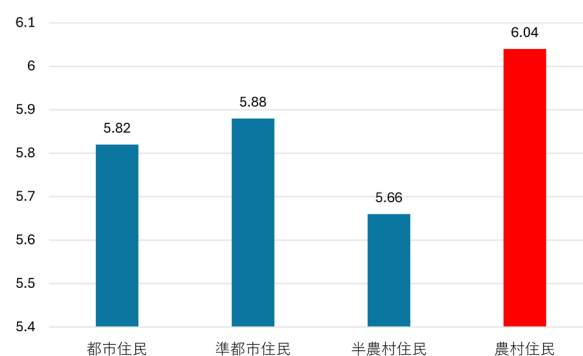
表4 農泊推進地における幸福度と「地域のつながり」「多様性・寛容性」との相関

地域	町内の幸福度	地域のつながり	多様性・寛容性	推進主体	備考
全国平均	0.57	0.36	0.23		
山形県 山形市	0.61	0.49	0.41	山形県グリーン・ツーリズム推進協議会	農泊認定地
栃木県 佐野市	0.62	0.47	0.43	さのアグリツーリズム推進協議会	農泊認定地
群馬県 高崎市	0.70	0.41	0.43	「榛名まちづくりネット」グリーンツーリズム推進委員会	その他
神奈川県 平塚市	0.55	0.54	0.42	平塚市漁業協同組合	農山漁村の宝表彰
神奈川県 厚木市	0.62	0.53	0.47	飯山農業校・飯山クラインガルテン	その他
神奈川県 伊勢原市	0.78	0.54	0.43	株式会社めぐりかぶしがいいやめ	農山漁村の宝表彰
富山県 高岡市	0.63	0.54	0.46	高岡市北部地域グリーンツーリズム推進協議会	その他
石川県 能美市	0.74	0.54	0.40	能美市国造地区ゆたかなくらし協議会（農産漁村振興交付金）→農村DXに発展	その他
岐阜県 下呂市	0.64	0.41	0.40	（一社）馬瀬地方自然公園づくり協議会	農泊認定地
静岡県 掛川市	0.49	0.59	0.44	かけがわ粟ヶ岳山麓農泊推進協議会	農泊認定地
愛知県 大府市	0.58	0.47	0.44	農業経営基盤の強化に関する基本的な構想	その他
滋賀県 栗東市	0.58	0.46	0.43	奥こんげ農泊推進協議会	農泊認定地
京都府 福知山市	0.59	0.41	0.45	海の京都農泊推進協議会	農泊認定地
京都府 京田辺市	0.46	0.52	0.43	一般社団法人京都山城地域振興社	農泊認定地
大阪府 大東市	0.65	0.46	0.40	—	その他
大阪府 羽曳野市	0.63	0.55	0.40	かわち夢楽 「河南町かうち地区農と自然を守る協議会」	その他
兵庫県 たつの市	0.55	0.53	0.42	ひょうごグリーンツーリズム 中播磨県民センター農泊	その他
広島県 福山市	0.63	0.54	0.45	瀬の浦農泊推進協議会	農泊認定地
山口県 防府市	0.74	0.56	0.51	山口防府地域農山漁村女性連携会議	その他
愛媛県 今治市	0.50	0.52	0.46	特定非営利活動法人シクロツーリズムしまなみ	農泊認定地
				桜井地区地域水産業再生委員会	

出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート「地域幸福度（Well-Being）指標 令和5年度 全国調査結果」をもとに著者作成²²

農林水産政策研究所の調査（2015）²³によると、都市住民に比べると平均所得が低い農村住民の幸福度が高いことがわかった（図5）。幸福度には、所得・経済環境や利便性以外の要因の影響を受けていることが示唆される。また、都市住民は所得が上昇するほど幸福度が上がる一方、農村住民

図5 居住地ごとの幸福度の平均



出典：農林水産政策研究所調査（2015）

は人とのつながりや信頼関係が豊かな人ほど幸福度が高いことも明らかにされている。数々の先行研究(田中 et.al 2013)²⁴からは、物質的に豊かな社会になるにつれて、経済的な豊かさが必ずしも人々の幸福を実現することはできないことや健康状態や社会的つながりなど複数の要因が複合的に人々の幸福に関連していることが示されている。また、国内の農村地域を対象とした調査(田中 et.al 2014)²⁵からは、農村地域の住民は個人的な要因に加え、その地域の社会関係資本などの地域的要因も幸福度に影響することや住民の幸福度そのものには地域差はないが、その構成要素の評価には地域差があることも示されている。

農村は水や気候などの環境面、精神的・文化的な背景から、地域固有の様々な

価値を提供している。地域固有の価値を有する農村には、「農村社会に継承されているルールを遵守する気風」や「農村社会に備わった合意形成力」を有する農村コミュニティが存在する（農林水産省、2017）²⁵。社会関係資本の基盤がある地域で、地域主体（コミュニティベース）による観光を推進することで、多様性に寛容な社会を育み、住民の幸福度を高めている可能性が示唆される。「多様性と寛容性」に満ちた社会は、「自己決定力」を支える。「自己決定度」は幸福度に大きく影響を与えることも先行研究から示されている。「多様性と寛容性」は、観光が大きく貢献できる分野であり、視野を広げることにもつながる。「視野の広い人は幸福感の高い人である」²⁶という研究結果からも「多様性と寛容性」を高める観光が幸福度に貢献しうるといえよう。

ここでの考察を支える利用可能なデータが不足していることから、今後は、「地域主体」に注目しながら、旅行者の満足度だけでなく、地域で観光推進に携わる人々の満足度の調査のほか、農村地域と農泊推進地との比較やその他のタイプの地域をとりあげ、生活環境・都市環境および地域の人間関係と観光の相関を検証していく実証的研究の積み重ねが必要である。

5. コミュニティウェルビーイングと持続可能な観光

～農泊推進地に学ぶ地域づくり

幸福度と観光との関係性が示唆される農泊推進地から、ウェルビーイングな地域づくりを学べる点は少なくない。農泊の定義や目的、日本における取り組みや推進の経緯を確認する。

（1）農泊の定義と目的

農林水産省では、「農泊」を、農山漁村に宿泊し、滞在中に地域資源を活用した食事や体験等を楽しむ「農山漁村滞在型旅行」²⁷と定義している。「農泊」の狙いは、古民家・ジビエ・棚田など農山漁村ならではの地域資源を活用した様々な観光コンテンツを提供し、農山漁村への長時間の滞在と消費を促すことにより、農山漁村における「しごと」を作り出し、持続的な収益を確保して地域に雇用を生み出すとともに、農山漁村への移住・定住も見据えた関係人口の創出の入り口とすることとしている。農林水産省により、以下の評価基準を満たす地域へ

の支援が行われ、令和4年度までに全国で621の農泊地域を創出されている。

＜農山漁村振興交付金事業実施提案書評価基準＞

合意形成の手法	農泊を実施のため、地域の課題や取組方針を関係者間で共有し合意形成を行っていくための適切な手法が取られている。
農泊実施のための実施体制の適格性	・農泊を継続的に実施のための法人を含む農泊実施体制になっている、又は今後の法人化に向けた具体的な検討されている。 ・ビジネス化に向けてノウハウを持つ人材、従業員等の確保、農泊の持続的な取組のための具体的な検討がなされている。
地域資源の活用	従来からの観光資源のほか、古民家、地域食材、地域特有の体験など地域資源を活かした観光コンテンツの磨き上げを含む。
マーケティング手法等の有効性	ターゲットの明確化、戦略的な広報や営業活動などマーケティングの手法が適切に検討されている。
農林漁業者等への裨益	農泊の取組を通じて参画する農林漁業者への所得向上又は雇用創出にどのように寄与するのかが明確にされている。
創意工夫等	事業の効率性や成果を高めるための創意工夫が見受けられ、他の地域へのモデルになり得る。
行政との連携の有無	市町村が事業実施主体に参画又は連携体として関わっている。 若しくは都道府県で行う広域ネットワーク推進事業において農泊実施地域として選定された団体である。

出典：農林水産省 農泊サイト「令和6年度農山漁村振興交付金 公募要項」より筆者作成²⁸

（２）日本における農泊に関わる動き

農山漁村地域の活性化の手段として農泊への注目が高まっていた1992年、農林水産省内にグリーン・ツーリズム研究会が設置された。当時、欧州では、農村に滞在しバカンスを過ごすという余暇の過ごし方が普及していた。英国ではルーラル・ツーリズムやグリーン・ツーリズム、フランスではツーリズム・ベール、イタリアではアグリツーリズムなどと呼ばれている²⁹。日本においても、欧州型の余暇活動の推進を目指して研究が進められ、「グリーン・ツーリズム」を「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」と定義づけた。1994年には、「農山漁村余暇法（農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律）」が成立、本格的な農山漁村地域における観光の取り組みが展開されはじめた。本法律の目的は以下である；

- ① ゆとりのある国民生活の確保と農山漁村地域の振興に寄与するため、農山漁村滞在型余暇活動のための基盤の整備を促進すること
- ② 農村滞在型余暇活動に資するための機能の整備を促進するための措置、農林漁業体験民宿業の登録制度を実施すること

農泊推進において重要な役割を担う農林漁業体験民宿の経営者は、当初、農林漁業者に限定されていたが、登録制度の一層の活用を図ることなどを目的に2005年6月に法律が改正され、農山漁村余暇法に定める登録基準を満たせば農林漁業・農山漁村文化等の体験を自らまたは地域の農林漁業者等と連携して提供できる宿泊施設も登録できるようになった。グリーン・ツーリズムの教育的効果への注目も高まり、2008年からは農林水産省だけでなく文部科学省、総務省も一体となり、子どもたちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心、規範意識などを育み、力強い成長を支える教育活動として、小学校では農山漁村での長期宿泊体験活動を推進する「子ども農山漁村交流プロジェクト」が始まった。

また、インバウンドの増加を背景に、2016年には、国を挙げて「観光先進国」を目指す「明日の日本を支える観光ビジョン」が発表され、「滞在型農山漁村の確立・形成」が施策の一つに盛り込まれた。このころからグリーン・ツーリズムに代わって「農泊」が「日本ならではの伝統的な生活体験と非農家を含む農村地域の人々との交流を楽しむ」滞在（農山漁村滞在型旅行）を指す形で使われるようになった。農泊が全国展開される中、違法民泊への対応を目的に、民泊新法が2018年に制定され、農家が宿泊を伴う「農泊」サービスを提供する場合は、「住宅宿泊事業法（民泊新法）」に定める届出を行う「農家民泊」、あるいは、「旅館業法」に基づく許可の取得が義務付けられている「農家民宿」のいずれかの形態を選択し営業することになる。2017年策定の「観光立国推進基本計画」では、2020年度までに「農泊地域」を500地域創出し、取組地域の自立的発展と農山漁村の所得向上を目指す目標が掲げられた。「農泊」をビジネスとして実施するための現場実施体制の構築、地域資源を魅力ある観光コンテンツとして磨き上げる取り組み（農林漁業体験プログラム等の企画、古民家等を活用した滞在施設等の整備）、優良地域の国内外へのプロモーション支援を行う「農山漁村振興交付金」に農泊推進対策が新設され、観光庁等とも連携しながら「農泊」の推進が

強化された。一方で、事業者の高齢化等、実施体制の確保・継続に課題がみられる地域も少なくない。コロナ禍を経て、農泊需要の復活を目指し、農山漁村地域の活性化・所得向上、移住・定住も見据えた関係人口創出の観点からの農泊の取組が進行中である。

農泊推進においては、数々の先行事例から、地域が目指す方向性（ビジョン）の共有、地域内連携・役割分担等、地域の合意形成のもとで、地域一体での持続可能な観光を推進する体制整備の重要性が示唆されている。ここでは、農泊先進事例として、兵庫県丹波篠山市と長野県飯山市に注目する。

兵庫県丹波篠山市の丸山地区は、2008 年当時、全戸 12 軒の小さな集落で、そのうち 7 軒が空き家だった。集落消滅の危機を回避するために、住民による年間 14 回にわたるワークショップを経て、古民家を再生し、「集落の暮らし」を体験する宿泊営業を行う方向性がまとまった。2009 年には、NPO 法人集落丸山が発足し、住民が主体となり、古民家 2 軒を宿泊施設として運営、その他の空き家でもレストランを運営するなど、有効活用を進めたことで宿泊者が増加した。村ぐるみの運営、おもてなしや集落環境の「居心地」の良さが高く評価され、稼働率も目標の 3 割程度を維持している。加えて、都市住民向けの田んぼオーナー制度による米作り、黒豆栽培等の交流事業の実施により、2.1 ヘクタールの耕作放棄地が完全に解消、移住者なども増え、2017 年には住民が 8 世帯まで回復、現在、12 世帯 26 人が暮らしている。丹波篠山市は現在、「人・自然・文化が織りなす食と農の都」の実現を目指しており、同市のまちづくりに対する市民意識調査（2019）³⁰では、半数以上が「住みよい」、約 6 割が「愛着を感じる」、7 割以上が「住み続けたい」と回答している。

長野県飯山市は、スノーリゾートとして人気が高く、かつてはスキー客で賑わっていたが、バブル崩壊後にスキー客が激減した。また、旅行者ニーズの変化、地域人材の高齢化や後継者不足などから、冬季以外のグリーンシーズンの経営が課題となった。滞在交流型の観光への転換を目指し、地域資源を生かしつつ、農業と連携したグリーン・ツーリズムに対応していくための拠点となる交流・体験施設の整備が急務となった。そこで、1994 年に「飯山市グリーンツーリズム推進協議会」が発足され、市・J A・観光協会が中心となり、それぞれが有する素材を生かし連携をしながら農泊事業が推進されてきた。農家民宿では首都圏

の小・中・高校の環境教育の一環として自然体験教室や農作業体験などを取り入れた修学旅行を受け入れ、当初の3校から2016年には65校に増えた。体験農園等の体験プログラムも充実し、都市間交流は年々盛んになり、グリーンシーズンの入込客がホワイトシーズンを上回るほどになった。近年はインバウンドの増加や移住先としての注目も高い。飯山市のまちづくり市民アンケート調査（2023）³¹では、暮らしやすいと感じる人は約56%、誇りや愛着を感じる人は約75%だった。また、30代の若者世代を中心に移住者が増加傾向で、2021年度の移住者数は過去最高の174人と人口減の改善につながっている。移住の理由には「生活環境が良い」「自然が豊か」「子育て環境の良さ」「飯山の人柄の良さ」「農産物」「利便性」などが挙げられている。

この2つの事例のほか農泊先進事例に共通する点は、地域のつながりと合意形成に基づく地域主体の持続可能な観光が推進されていることである。一過性の誘客ではなく地域内好循環が継続的に創出されるしくみが地域活性化につながっている。農村以外の地域にも持続可能な観光地域づくりの参考となろう。

（3）観光はコミュニティウェルビーイングに貢献するのか

観光は経済面だけでなく、環境保護、文化の保全、貧困の削減、自然遺産や文化遺産の保護・継承、地域社会のエンパワーメント、貿易の機会創出、平和と異文化理解の醸成などにおいても貢献する分野である（国連世界観光機関、2014、2021）³²。これらの分野は、幸福度と関連しうる因子である。近年では、観光による様々な効果が注目され、社会課題や地域課題に対応する解決策のひとつとしての観光が有する社会的役割への期待が高まっている。少子高齢化が進む地域では、地域活性化の手段として観光に取り組む地域も少なくない。一過性の集客手段としての観光ではなく、地域内の好循環を創出する「持続可能な観光」の視点が不可欠である。農泊事例からもわかるように、住民を含む地域関係者で合意された「地域の目指す姿」に向けて、地域一体となり、地域主体での持続可能な観光が推進されている場合に、観光によるウェルビーイングへの効果が発揮される。一部の地域では、観光客の集中に伴うオーバーツーリズムの課題が深刻化している。地域での本物体験や生活文化へと旅行者の関心が高まるほど、地域の暮らしや人々への観光の影響への注視が必要である。観光地を小さなコミュニ

ティ単位でモニタリングし、特定エリアでの課題の予兆を早期に把握し、その深刻化を未然に防ぐことで、「住んでよし、訪れてよし」の地域が実現しうる。観光推進地域における持続可能性のモニタリングシステムの導入と共に、ウェルビーイングの観点からの観光効果を測定することで、ウェルビーイングな地域づくりに向けた観光の活用や「よりよい観光」の広がりが期待される。

6. 今後の課題と展望

本研究では、先行研究や公表データに基づき、観光とウェルビーイングの関連性の考察を行った。主に以下が仮説として示唆された。

- ・活用されているウェルビーイング指標には観光に関連する因子が含まれる。
- ・農泊推進地では、幸福度と「地域のつながり」「多様性・寛容性」との相関が強い。「地域のつながり」「多様性・寛容性」は、観光との関係が深い。
- ・地域のつながりが強い農村地域において、地域主体の持続可能な観光を推進することで、地域のウェルビーイングへの貢献が期待される。
- ・農村地域以外の地域でも、地域主体の持続可能な観光を推進する地域では、観光によるウェルビーイングへのプラスの効果が期待される。

これまで、ウェルビーイングの視点からの地域にもたらす観光効果の研究やその測定についての検討は、十分に行われていない。また、観光とウェルビーイングの関係を解明するために利用可能な信頼できるデータが不足しているのが現状である。

日本では、2020年に持続可能な観光の国際基準に準拠した「日本版持続可能な観光ガイドライン（JSTS-D）」³³が策定され、持続可能な観光を推進するにあたっての指針が指標とともに提示されている。本ガイドラインの活用とあわせて、ウェルビーイング視点での観光の効果の測定を取り入れることで、地域や住民、そして、観光客にとっての「よりよい観光」、地域やそのコミュニティのウェルビーイングに貢献する観光の推進につながるものとなろう。

今後は、多様なタイプの地域をとりあげ、ウェルビーイングと持続可能な観光との関連性についての実証的研究と理論的かつ実践的な検討を積み重ねながら、観光、ウェルビーイング等、関係する分野の専門家、研究者や研究機関等と連携した継続的な研究が望まれる。

引用・参考文献

1. 観光庁 (2023)「地域における持続可能な観光の実現に向けた調査業務報告書の調査」(2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
2. 世界保健機関 (1948)「世界保健機関憲章」
3. Layard, R. (2006) *Happiness: Lessons from A New Science*, Penguin, London
4. Diener, E., Suh, E., & Oishi, S. (1997) Recent findings on subjective well-being. *Indian Journal of Clinical Psychology*, 24(1), pp. 25-41.
5. Diener, E., Emmons, R.A., Larsen, R.J., & Griffin, S. (1985) The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, pp.71-75.
(SWLS の日本語訳 角野 善司 (1995)「人生に対する肯定的評価尺度の作成(1)」 日本教育心理学会第 37 回総会発表論文集 95 から引用)
6. Ryff, C. D. (1989) Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *J Pers Soc Psychol*, 57(6), 1069.
7. Kahneman, D. & Tversky, A (1979) Prospect theory : An analysis of decision under risk. *Econometrica*, 47(2), pp. 263-269.
8. Kahneman D, Deaton A. (2010) High income improves evaluation of life but not emotional well-being. *Proc Natl Acad Sci U S A*.
9. 前野隆司(2012)「幸せのメカニズム 実践、幸福学入門」講談社
10. Killingsworth MA, Kahneman D, Mellers B. (2023) Income and emotional well-being: A conflict resolved. *Proc Natl Acad Sci U S A*.
11. Seligman, M.E.P., & Csikszentmihalyi, M. (2000). Positive psychology: An introduction. *American Psychologist*, pp. 55,5-14.
12. Csikszentmihalyi, M. (1990) *Flow: The psychology of optimal experience*. New York: Harper Collins. (チクセントミハイ,M.今村 浩明 (訳) (1996) フロー体験—喜びの現象学— 世界思想社)
13. 佐伯政男、蓮沼理佳、前野隆司(2012)「主観的ウェルビーイングとその心理的要因の関係」日本心理学会誌第 76 回大会発表論文集
14. 国土交通省(2021)「国土交通白書 2021」国土交通省
15. 松下 美帆(2023) ウェルビーイング指標の政策活用:海外事例と日本への示唆」一橋大学経済研究所世代間問題研究機構

16. OECD (2011) How's Life?: Measuring Well-being, OECD Publishing, Paris,
(邦訳：徳永優子，来田誠一郎，西村美由起，矢倉美登里訳「OECD 幸福度白書：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較」明石書店、2012 年)
17. OECD (2017a) How's Life? 2017: Measuring Well-being, OECD Publishing, Paris, (邦訳：西村美由起訳「OECD 幸福度白書 4：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較」明石書店、2019 年)
18. OECD (2019) How's Life? 2019: Measuring Well-being, OECD Publishing, Paris, (邦訳：西村美由起訳「OECD 幸福度白書 5：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較」明石書店、2021 年)
19. 内閣府政策統括官（経済社会システム担当）付参事官（総括担当）西崎 寿美（2020）「内閣府における経済・財政一体改革、満足度調査の取組」内閣府（2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果）
20. 内閣府政策統括官（経済社会システム担当）（2023）「満足度・生活の質に関する調査報告書 2023 ～我が国の Well-being の動向～」内閣府（2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果）
21. デジタル庁(2023)「デジタル田園都市国家構想」
(2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
22. 一般社団法人スマートシティ・インスティテュート(2023)「地域幸福度 (Well-Being) 指標」(2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
23. 一般社団法人スマートシティ・インスティテュート 専務理事 南雲岳彦 (2023)「地域幸福度 (Well-Being) 指標 令和 5 年度全国調査結果」一般社団法人スマートシティ・インスティテュート (2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
24. 農林水産政策研究所(2015)「2015 年度 研究ピックアップ 都市住民に比べて農村住民の幸福度は高い？何が人々の幸福度に影響を与えるのか」農林水産政策研究所 (2024 年 3 月 28 日 18 時最終検索結果)
25. 田中里奈、橋本禅、星野敏、清水夏樹、九鬼康彰 (2013)「居住地域の特性が住民の主観的幸福度に与える影響」農村計画学会誌, 32 (論文特集号)、pp.167－172
26. 農村におけるソーシャル・キャピタル研究会 農林水産省農村振興局

- (2007)「農村のソーシャル・キャピタル」～豊かな人間関係の維持・再生に向けて～ 農林水産省
27. Basso, M. R., Schefft, B. K., Ris, M. D., & Dember, W. N. (1996) Mood and global-local visual processing. Journal of the International Neuropsychological Society, 2, pp. 249-255.
28. 農林水産省(2024)「農泊の推進について」
(2024年3月28日18時最終検索結果)
29. 農林水産省(2024)「令和6年度農山漁村振興交付金 公募要領」別紙7-1
https://www.maff.go.jp/j/supply/hozyo/nousin/240209_301-7.html
30. 五艘みどり(2017)「持続的農村形成に向けたルーラルツーリズムの研究動向」立教観光学研究紀要 第19号 2017年3月, pp. 27-37
31. 京都府丹波篠山市 (2019)「市民意識調査」
(2024年3月28日18時最終検索結果)
32. 長野県飯山市 (2023)「飯山市第6次総合計画」
(2024年3月28日18時最終検索結果)
33. 国連世界観光機関 (UNWTO) (2014、2021)「世界観光倫理憲章および関連文書」国連世界観光機関 (UNWTO)
*2024年1月に略称を UNWTO から UN Tourism に変更
34. 観光庁・UNWTO 駐日事務所 (2020)「日本版持続可能な観光ガイドライン (JSTS-D)、観光庁・UNWTO 駐日事務所

エシカル・トランスフォーメーションと幸福度向上に関する 市民意識・行動についての研究

白鳥 和彦

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員
武蔵野大学 環境学研究科教授

薄羽 美江

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員
株式会社エムシープランニング 代表取締役

要約

令和2年度から4年度の3年間、大学生のSDGs意識・行動変容に関する調査を実施し、ミレニアル世代・Z世代の学生においてSDGsの重要性は認識されているが、その行動は経済的および生活上の制約から、直接エシカルな行動に移せる範囲が狭いことが判明した。そこで本年度は、実際に社会生産性を担い、地域コミュニティ活動を推進する30歳代から70歳の一般市民11名に対して、SDGs意識やエシカルに関わる意識・行動と幸福度の関係性について調査を行った。社会におけるSDGsを重要とする認識が実際のエシカルアクションに結びつき、幸福度との相関が得られるのか、社会生産活動に帰属してからの関心・行動の変容や幸福度に関して何がトリガーとなるのか、また、それは自らの幸福につながるのか、定量調査とともに個別インタビューを通じた定性調査を実施した。特に、幸福度に関わる身の回りの環境設定が、環境・社会・経済に直結する地方創生に繋がるであろうとの観点から、多様な社会課題についてインタビュー調査した。その結果、SDGsの課題認識や幸福の価値については個別最適の回答となったが、共通して、良好な人間関係構築の影響がトリガーとなっていることが確認された。これらのことから、エシカルアクションに向けた学習段階においても、経済的制約領域に狭められないプロジェクト推進の可能性、エシカル重要性を日常生活で自分ごととするため人間関係構築に向けたプロジェクトラーニングの可能性など、今後のSDGs意識・行動変容にむけた課題を得ることができた。

1. はじめに

(1) 背景

2015年に持続可能な開発目標（SDGs）とパリ協定が採択され、世界は持続可能な社会に向かって動き始めている。SDGsの採択文書には Transforming our world が掲げられ、現状からの修正レベルの変更（change）ではなく状況を一変させるような変革が求められている。そのような背景のもと、国、自治体や企業など、様々な主体が変わり始めている。自治体によるゼロカーボンシティ宣言や、大手企業の RE100 への加盟、ESG 経営などがその表れであり、この流れは今後加速していくと考えられる。つまりサステナビリティへの取り組みは、地球環境問題や社会課題への解決につながる。個人レベルでのサステナビリティへの取り組みとしては、「エシカル・トランスフォーメーション（意識・行動変容）」が代表的なものと言える。

令和2年度から4年度までの3年間のしあわせ研究では、大学生の SDGs 意識・行動変容について調査を行い、SDGs やエシカルに対する個人の意識・行動変容を促していくことの重要性があらためて確認できた。しかしながら、学生の行動は経済的および生活上での制約から、直接エシカルな行動に移せる範囲が狭いことも判った。いっぽう、これまでの SDGs Survey では、学校教育現場の SDGs 評価については闊達にデータが取得されているが、一般市民に対しては十分な調査データが少ない。また、市民がエシカルな行動を志向するための CPI や、志向されない制約などの評価はまだ十分に研究されていない。さらに、エシカルな行動に変容することは、自らのしあわせなどを感じられるものでなければ定着しないはずである。

そこで本研究では、市民レベルでの SDGs やエシカルな意識や行動としあわせの関係性についての研究の必要性に着目した。

持続可能な社会づくりとともに、SDGs が人々（特に一般市民）のしあわせにどのように寄与するのか。その SDGs のパーパス（目的）に立ち戻り、環境・社会・経済の三軸における SDGs が目指す変革において、社会を構成する人々の市民レベルのエシカルな意識や行動が、地球上の誰も取り残さない人々のしあわせ向上に寄与し、それが実感されないと、サステナビリティの社会変革への取り組みが進まないのは言うまでもない。

幸福 (Well-being) に関する指標は幾つか公表されており、その一つに (一社) スマートシティインスティテュートの LWC 指標などがあるが、それらは地域や市民の状態を測る指標が多く、また地域への応用としては政策立案に用いられている。

(2) 本研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究では、エシカルな意識・行動変容を促すこと (エシカル・トランスフォーメーション) により、一般市民の幸せの向上を図ることを狙いにし、今年度は、エシカルへの意識・行動変容の指標としあわせ (Well-being 指標) が連動するとの仮説にのみに、エシカル・トランスフォーメーションとしあわせの関係性の検証を行うことを狙いとする。

個人レベルのエシカル・トランスフォーメーション (エシカルな意識・行動変容) が、しあわせの向上に連動するとの仮説を置き、SDGs もしくはエシカルに関係する学習や行動を促す機会を設定し、それらを行う前後の意識・行動、しあわせ度 (個人の主観) の関係性を分析し、また KPI となる行動因子の抽出を行う。

対象としては、共同研究者 (薄羽) の活動拠点であり、SDGs 未来都市に向け行政の取り組みや市民の意識が向上しつつある静岡県伊東市市民を対象とする。

なお本市は、東京都心部から列車で二時間程度の距離に位置する観光地方都市である。6 万 8 千人ほどの人口ながら、地方創生の取り組み課題が喫緊であることは他の多くの地方都市と同様である。伊東市内地域において特に伊東市民自らの課題認識として、①若い世代の人口流出、②超少子高齢化、③環境意識の不足、④観光の国際標準視点の不足、⑤地域子ども教育の不足について声があがっている。ここには SDGs 達成に資するグローバル・シチズンシップの醸成によるインバウンドからも魅力的な幸福なまちづくりが要諦となっており、世界の幸福を実現するための視野・視座・視点について市民ベースのボトムアップ型調査の機運も高まっており、本研究の対象として相応しく、また他地域での取り組みの参考に資すると考え選定した。伊東市は SDGs 未来都市への取り組みが市民のボトムアップ型ではじまっており、昨年度はインバウンド (海外からの旅行者) を含む持続可能な観光について、市民を対象にした SDGs 市民研究会

が連続して定期開催され、持続可能なまちづくりについては地域協議会も立ち上がっている。

2. 研究の方法

(1) SDGs Survey、幸福度診断の実施

市内の各まちづくり団体に属するリーダーである市民 11 名を対象とし、令和 5 年 10 月中旬から 11 月初旬に、①「SDGs Survey¹」、②「幸福度診断 (Well-being Circle)²」を実施し、web にて回答した結果を収集した。「SDGs Survey」については、JEI のシステムより 50 問の回答を抽出³、「幸福度診断」については、対象者がそれぞれ当該 Web サイトに入力し診断結果として表示された得点を収集した。

(2) インタビューの実施

上記(1)の回答後に、当該市民全員を対象に、収集した個人の結果をもとに、一人ひとりの SDGs 実践に関わる意識・行動並びに幸福度について、令和 6 年 1 月末から 2 月初旬に、個別に一人あたり約一時間のインタビューを実施した。回答後からインタビューまでの間に、市内 SDGs に関わるセミナー、ワークショップも推進された。その参加印象も含め、回答者 11 名の差異や特徴点となる要因分析に向けたインタビューは、他回答者の内容については知らされない。インタビュー方法は対面（一部 Zoom を利用したハイブリッド）により行った。インタビュー結果の取りまとめにあたり、内容の再確認のため再度意見交換も行なった。

(3) SDGs Survey、幸福度診断、インタビューの解析

SDGs Survey および幸福度診断の結果、インタビュー内容から、SDGs やエシカルに関する意識・行動、しあわせ度（個人の主観）の関係性分析、KPI となる行動因子の抽出の検討を行った。特に、SDGs Survey の 50 問の設問回答のなかから「幸福度」に関わる回答に注目した。

3. 調査結果

(1) 調査対象

調査対象者の属性などは下記の通りである。なお、今回の調査対象数は少なく、個人を特定できないように属性や集計結果のみ記載し、SDGs Survey および幸福度調査の個別結果の掲載は割愛する。

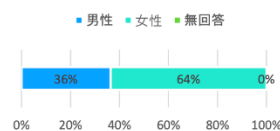
年齢構成は 30 歳台から 70 歳台までと広い年齢層であった。男女比は、男性 4 人（36%）、女性 7 人（64%）であった。

有効サンプル

名前	性別	年齢	職業	回答回数
ITO - 1	男性	35~39歳	自営	はじめて
ITO - 2	女性	35~39歳	自営	3回目
ITO - 3	女性	40~45歳	自営	はじめて
ITO - 4	女性	70~74歳	自営	2回目
ITO - 5	女性	40~45歳	医療機関	はじめて
ITO - 6	男性	65~69歳	自営	はじめて
ITO - 7	女性	50~54歳	自営	はじめて
ITO - 8	男性	75~79歳	その他	はじめて
ITO - 9	男性	70~74歳	その他	はじめて
ITO - 10	女性	46~49歳	その他	はじめて
ITO - 11	女性	55~59歳	教育機関	3回目

性別構成

	n数	構成比
男性	4	36%
女性	7	64%
無回答	0	0%
合計	11	100%



年齢構成比

2023年	n数	構成比
22歳以下	0	0%
23~29歳	0	0%
30~39歳	2	18%
40~49歳	3	27%
50~59歳	2	18%
60~69歳	1	9%
70歳以上	3	27%
合計	11	100%

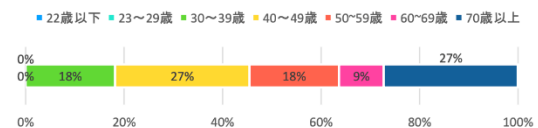


図 3.1 調査対象とした市民の属性

SDGs Survey については、今回の調査前にも回答をしたことがある経験者を含んでいる。また、SDGs に関する認識や実践については、「学習したのでよくわかって行動している」が 5 名、「学習したのでわかっているが行動していない」が 4 名、「聞いたことがあるがよく知らない」が 2 名の回答者構成であった。

(2) SDGs Survey 回答結果

SDGs Survey においては、想像力ー情報力ー学習力ー行動力ー達成力の 5 つの SDGs 達成のためのコンピテンシーを設定し評価を行っているが、11 名の回答者の傾向としては、全体として、学習力-なぜ世界の問題が起きているかとの

システムを理解しようとする力において強い傾向を示すメンバー特性があった。
SDGs Survey 11 人の平均回答結果を、図 3.2～3.4 に示す。

5 つのコンピテンシー（レーダーチャート）において、過去 3 年間の学生を対象とした調査に比べ、行動力が高めに出ているのが特徴的である。

回答者における、日頃の SDGs 達成に資する行動傾向においては、特に「目に見えにくい子どもの貧困問題」や「資源ごみの分別回収の実践」「国ごとの人種差別問題」「科学的研究の必要性とその論文が世界に発信される重要性」「畑の栄養成分への関心」「フードロスに関わる野菜の形が整わないと流通価値がないという課題」について、「とてもそう思う」という 10 ポイント満点中 8 ポイントを超える認識の高さが示され、「幸福度について考えることがある」という回答にも 8 ポイントを超える関心を持つメンバー構成比が示された。この点からも個別インタビュー調査に繋ることとなった。

いっぽう、「SDGs 達成が 2030 年までに達成できる」ことへの否定的観測や、「買い物をするときには安いものをたくさん買える方が良い」とする経済観念を支持する傾向、「カーボンフットプリント」「MSC/ASC の認証海産物」「地球一個分の資源消費を超過している地球環境の現状」「生物多様性に関わるレインフォレスト・アライアンス」については、初めて聞く言葉であるという状況や、多くの情報を保ち得ない、グローバルな「恵まれない世界の子どもたちの成長支援への寄付や援助」行動に結びつかないという状況にあるメンバー構成であることも事前に確認された。

伊東市市政においては SDGs 普及啓蒙を推進しており、SDGs 未来都市を目指すプロセスにおいて市民のボトムアップ型の活動を推奨している。本回答者においては、この SDGs への積極的な活動推進リーダーを含み、いっぽうで SDGs については多くの情報を有さないが、日々の活動において持続可能なまちづくりやひとづくり、ことづくりに資する、他者へ伝搬力をもつリーダー素養の強いメンバーに回答を依頼したということもあり、結果、SDGs 17 のゴールへの関与する回答傾向としては「Goal 8 - 働きがいも経済成長も」に高い傾向が見られる結果を得た。すべての人のための継続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用及びディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進することに関与する設問への肯定的回答が強いメンバー構成比を成

していることとなった。

準じて、「「Goal 2－すべての人に安全で栄養のある食料を確保する」というあらゆる形での栄養不足を解消し、持続可能な農業を進めることへの関心、「Goal 11－住み続けられるまちづくりを」の、誰もが安全で快適に暮らし続けられるよう、気候変動や社会課題に適応したレジリエントなまちづくりを実現する目標に資する目標への関心の高さが続いた。「レジリエント」は、災害などの衝撃を吸収し、元の状態に回復できる力を指すが、本回答メンバーにおいては、地域のまちづくり協議会や子どもの教育支援活動、移住促進に関わる推進活動のリーダーを務めるメンバー、また、そのような慈善に資する公的活動ではなくとも、市民の健康を守る医療に関わる職業や、教師、企業人、観光ホスピタリティに関与してきたメンバー構成による。日常、自分ごととして仕事や生活を営む中に、自ずと SDGs のゴールに関わるエシカルアクションや他者配慮のためのコミュニティアクションに対する傾向も、市民生活の中に定常化されている傾向が得られた。

伊東市は「出会い つながり みんなで育む自然豊かな優しいまち いとう」をステートメントとし、「～行ってみたい 住んでみたい 住んでいたい まちづくり～」と題した2021年から2030年に向けた伊東市総合計画を有している。市民生活において、人と人のつながりを自然豊かな環境の中で重視するまちづくりに、市内外からの人と人の交流についてもどのような知見があるかをインタビューとして確認した。後述の(3)今回の対象者(伊東市民)の特徴・傾向において記すこととする。

SDGs 5つの力

	n 数	SDGs想像力	SDGs情報力	SDGs学習力	SDGs行動力	SDGs達成力
2023年	11	56.7	54.2	66.3	38.9	49.5

	n 数	SDGs想像力	SDGs情報力	SDGs学習力	SDGs行動力	SDGs達成力
学習したのでよくわかって行動している	5	75.9	64.8	86.5	70.8	65.3
学習したのでわかっているが、行動していない	4	42.6	52.3	51.4	0.3	35.5
学習したことはあるが、よくわからない	0					
聞いたことがあるが、よく知らない	2	36.8	31.5	45.8	36.3	38.3
関心がもてない	0					
聞いたことがない、知らない	0					

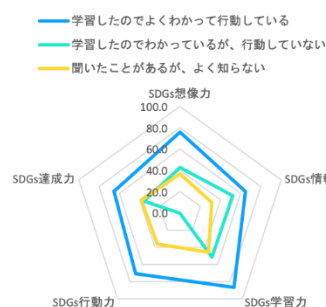
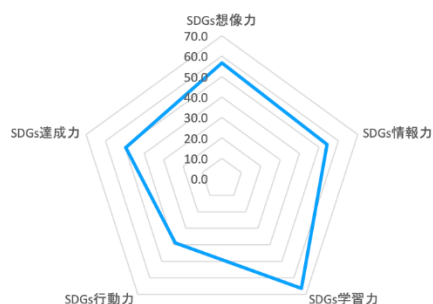


図 3.2 SDGs Survey 5 つのコンピテンシー別 回答平均値

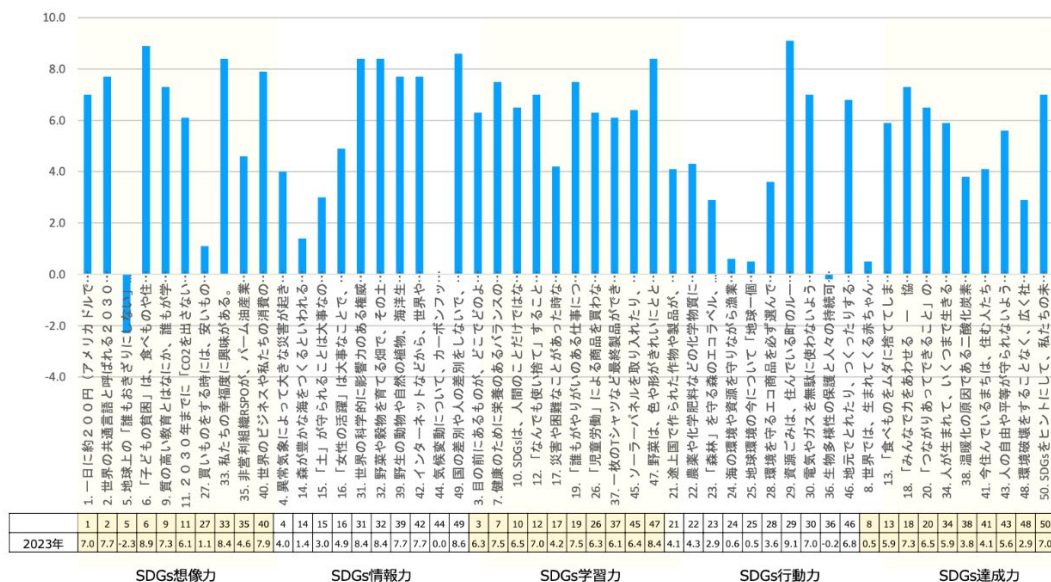


図 3.3 SDGs Survey50 の質問別 回答平均値

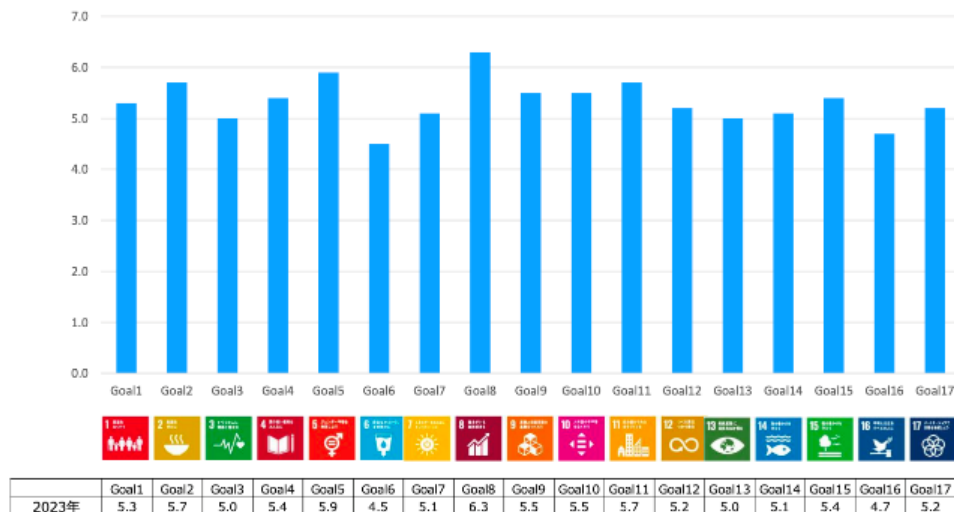


図 3.4 SDGs Survey 17 の目標別 回答平均値

(3) 幸福度診断の状況

幸福度診断 11 人の回答結果を図 3.5～3.7 に示す。なお、幸福度診断 (Well-being Circle) の Web サイトでは、レーダーチャートとして表示されるが、比較容易性のため折線グラフとした。

図 3.5 では、対象 11 人の回答平均を、一般回答 (Web サイトで公表されている) データとともに示す。比較のため、図 3.6 では、診断結果で総合が 85 ポイント以上と高得点の 5 人を、図 3.7 では、今回の調査で比較的得点が低くなった総合 70 ポイント未満の 3 人を、それぞれ図 3.4 から分けて示す。

調査対象となった 11 人全員の幸福度総合ポイントが 77.2 と、幸福度診断 Web サイト上の一般回答平均値 63.0 を上回っていた。ありのまま力、ストレスの低さが、一般平均もそうであるように、今回の調査でも全体的に低い傾向を示している。図 3.6 に示すように、総合ポイントが高い 5 人は多くの項目で高いポイントであるが、ポイントが高い項目と低い項目の差が顕著に表れている。いっぽう、総合ポイントが比較的低かった 3 人については、ポイントが高い項目と低い項目のポイント差がさほど大きくなかった。

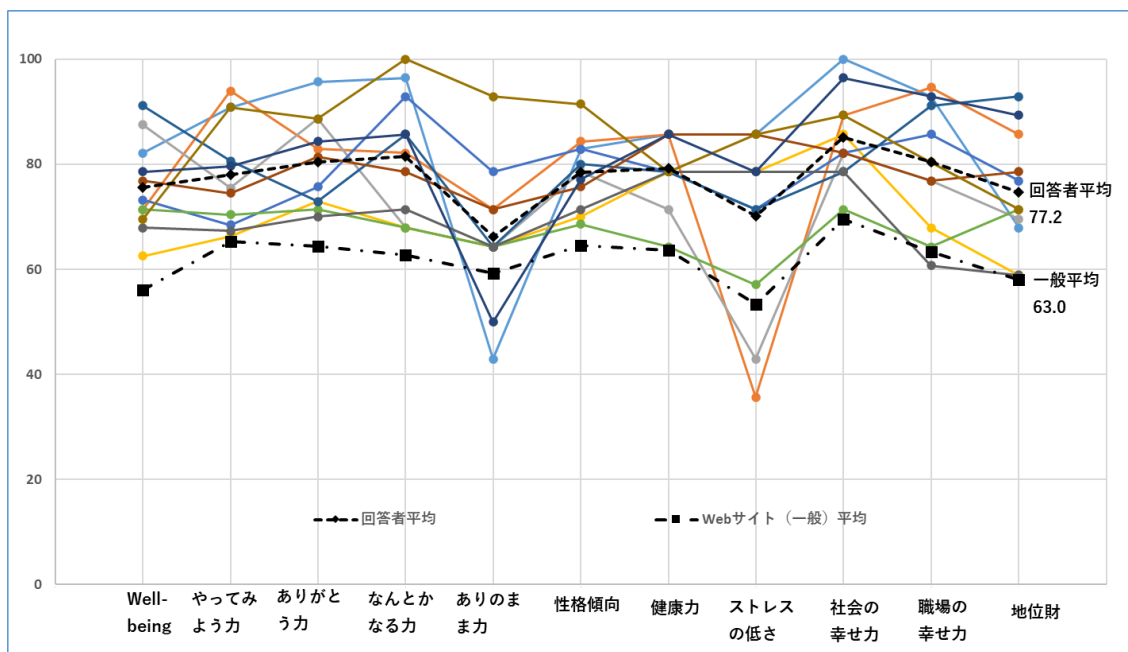


図 3.5 幸福度診断 回答者全員

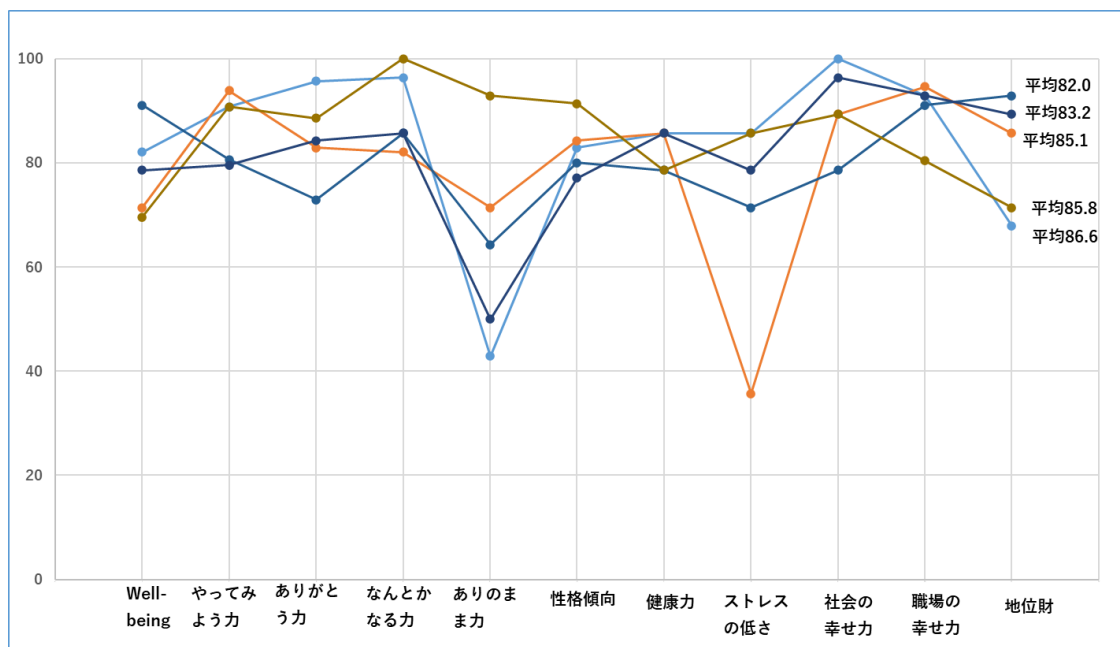


図 3.6 幸福度診断 総合点高得点回答者

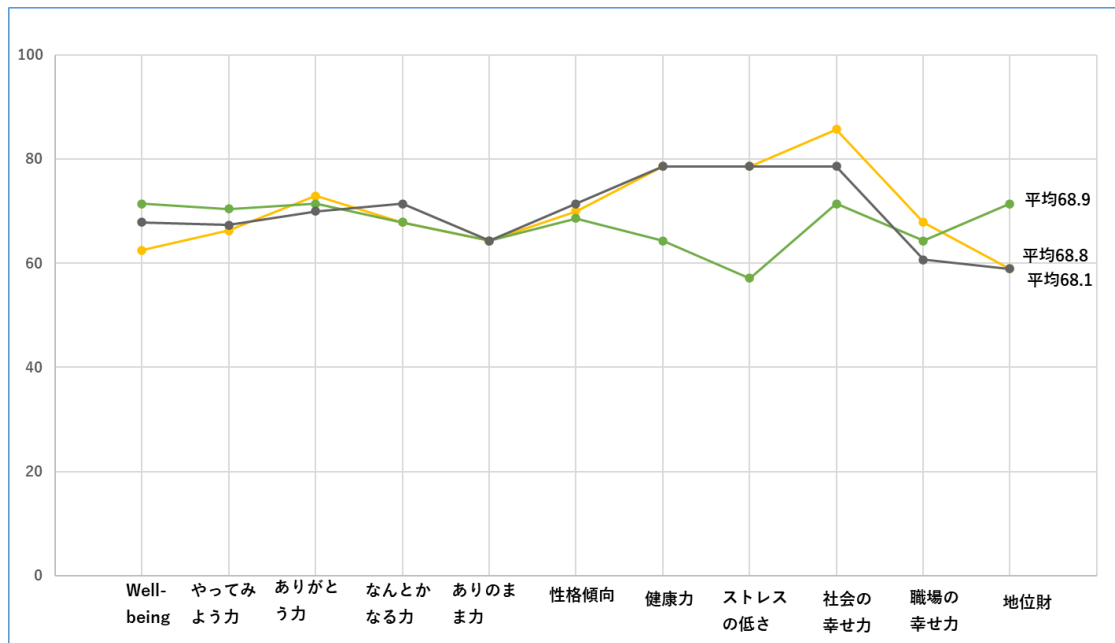


図 3.7 幸福度診断 総合点 70 点未満回答者

(4) 幸福度と SDGs Survey 回答の関係性について

SDGs Survey 50 問のうち「幸福度に興味関心がある」という回答の高低と「幸福度」の高低の関係性は、

- ①「幸福度に興味関心がある」という回答が 10.0 であった 7 人のうちの 5 人が 83.2～86.6 ポイントの高い幸福度総合点を示していた。
- ②「幸福度に興味関心がある」という回答が 5.0 であった 3 人のうちの 3 人が 68.1～82.0 ポイントの幸福度総合点を示していた（全体一般収集されている幸福度総合点は 63.0 ポイント）。
- ③「幸福度に興味関心がある」という回答が 5.0 であった 3 人うちの 1 人は幸福度総合点 82.0 ポイントの幸福度総合点を示していた。
- ④「幸福度に興味関心がある」という回答が 7.5 であった 1 人の幸福度総合点は 77.8 ポイントの幸福度総合点を示していた。

4. インタビュー結果および考察

SDGs Survey および幸福度診断の結果を踏まえ、調査対象者それぞれの回答で特徴ある点を主としてインタビューを行い、SDGs 意識や行動、幸福度に関する意識に関して、インタビューから得られた結果を含めた考察は次のようなものであった。

(1) SDGs やエシカルアクションの取り組みのきっかけに関して

- ・SDGs やエシカルアクションに対するきっかけとしては、自己の経験の振り返りから「人と人の関わりによる影響がある」との回答：11 人
- ・SDGs に関係する情報の入手経路としては、エシカルアクションを実践している人や、その良い指向モデルを自らが肯定的に評価した人が「SDGs を学習したのでよくわかって行動している」という回答：5 人
- ・信頼関係よりも批判的文脈の中で情報入手をしている場合は「学習したのでわかっているが行動していない」という SDGs に関わる否定的、または興味関心を得にくい回答：4 人

これらのことから、人と人の関係性から共同体としての取り組みに至るコミュニティ形成が成立すると考えられ、「SDGs を学習したのでよくわかって行動している」との回答が 5 人と実践に向かっているが、人間関係性が作用しない場合には、SDGs に関わるエシカルアクションへの取り組みに対するアクティブさは伴いにくく、「学習したのでわかっているが行動していない」が 4 人、「聞いたことがあるがよく知らない」2 人という回答に至っており、SDGs の取り組みに限って言えることのみではないが、「良好な人間関係を構築できうる場合」に自らの「肯定的な行動を高める可能性」があるといえる。

(2) 幸福度と SDGs の相関について

幸福度に興味関心がある回答がある一定の幸福度総合点を高めていること、幸福度に興味関心を自らは示していない回答者の幸福度総合点は低くなっていること、興味関心の中間回答者においては幸福度総合点も中間点が示された傾向を得ることとなっている。いっぽう、3 人においては幸福に興味関心への回答は「わからない」という回答であり、この 3 人の回答共通項は社会性に関わる活

動の強度が高く、地域活動において人との連携に熱心である回答者であり、社会的活動側面の強度が強いプロファイルがある。幸福に興味関心への回答が 10.0 ポイントであっても、幸福度総合ポイントが 68.9 ポイントであった 1 人も社会的活動側面の強度が高い人物であった。高い幸福度総合点を得られていて幸福に興味関心への回答が 5.0 ポイントであっても幸福度総合ポイントが 82.0 ポイントであった 1 人も「わからない」という回答でありながら、社会的には作家としての活動評価を世界的に得ているステイタスを得ている人であった。

これらのことから、社会的収入やステイタスを得ている人たちが、自己探究においては幸福度に満たされるよりも、さらに自己満足のために評価を求めている傾向があり、幸福度総合点が高い人たちは社会的収入やステイタスを高く得ていなくても、自己探究において何かしらの満足を得る他者関係性を語っており、自らが自らのまま自然に生きていく選択を肯定的に語り、自らの幸せが他者の幸せを作り出していることへの経験や実感についての文脈が回答の中に共通して得られた。

このことは、「幸福」の尺度については個人差があり、その人固有の価値観があるため、回答者のインタビュー発言にも「一概に幸福というのは一定の尺度はなく個人個人の感じ方によると思う」という「幸福」素養についても個別最適が認められる結果となっている。

このなかでは、回答者 11 名中、「人の幸せに貢献できることが自らの幸せにつながる」という回答が取得できており、家族に対して、パートナーに対して、両親に対して、子供に対して、また、友人に対して、地域住民に対してなど、具体的な関係性を有する対象者を得た回答となっている。

また、幸せを感じるという回答に付随する「一人ではない」や「幸せを感じる時、そこに自分以外の人が存在している」など、幸せを得る際の環境設定として、幸せを想起するきっかけにおいて、人と人との間の関係性構築が全員に影響していることがわかった。他者とのベンチマークが一つの自己指標を与えること、意識化させることへのトリガーとなっていることが顕現している。

(3) 今回の対象者（伊東市民）の特徴・傾向について

今回調査対象となった伊東市民の Well-being Circle の回答は、11 人全員の幸

福度総合レーティングが、Well-being Circle Web サイト上の一般回答平均値を上回っていた。特徴として、収入や仕事環境における経済的な素養によるものではなく、経済力が低くても幸福度は高く評価されており、自然が豊かな環境、自らを安心・安全に守ることができる環境に、現在の納得感を得ていることと回答されている。

これに関しては、インタビューの結果から、自らがその納得をしていくプロセスに二種類の回答が得られた。

- ①自らが身を置いている現在の環境の他の環境について経験を有しており、例えば、海外経験により日本を比較することができたり、国内都市部の生活経験により伊東の良さを比較して実感することができている：5人
- ②自らがずっと伊東に生まれ伊東に育ち伊東に暮らしているが、その伊東の良さについて外から来た人に言われて、初めて自らの環境を認識することがある。自らの環境を当たり前と思っていたことが、伊東の外では当たり前ではない、自然の豊さを有していることに気づくことができたという認識が語られている：5人

このことより、幸せを感じるという回答に付随する「一人ではない」や「幸せを感じる時、そこに自分以外の人が存在している」などと同様に自らが幸せや豊さを得る際の環境設定として、幸せや豊かさを想起するきっかけにおいて、自らがいる場所とそれ以外の場所との環境比較や、世界観比較、異質なもののとの関係性構築が影響することが顕現しているといえる。

他者環境とのベンチマークが一つの自己指標を与えること、意識化させることへのトリガーとなっていることが確認できる。

これらより、人の幸せや豊かさを付与するには、自らが肯定的に受容できる環境設定や人間関係設定が有用であること、そのようなコミュニティに自らを置くことの納得性、または、そのようなコミュニティ創造が鍵となり、そこから価値共有・感情共有・さらには憧憬共有のような自らが自らを認識し、他者との関係構築が望ましくあることへの「理解関係」「共有関係」「肯定関係」の創造が鍵となる結果が得られた。

5. まとめ・今後に向けて

令和2年から3年間のSDGs Survey調査を通じて、大学生のSDGs意識・行動変容に関する調査を継続実施し、ミレニアル世代・Z世代の学生において、コロナ勃発時期の人と人の直接接触の関係性が失われた時期においても、環境経営の授業の事前事後調査において、SDGsの重要性が認識されていたという学習効果は得られていたが、その重要性からSDGs達成に向けた具体的なエシカル行動は、経済的および生活上での制約を理由に、エシカルな行動に移せる範囲が狭いことが判明していた。特に、環境・人権配慮の行き届いた認証商品を求めるエシカル消費については、その価格帯が高額であるという認識から積極的な購買に向けたハードルがあることも結果づけられていた。それは「自分ごと」として社会課題を捉えることへの困難さにも通じる結果となっていた。特に、そのことは、SDGs Surveyの「達成力」のコンピテンシーに設定している「世界の未来のために良いことを周りの人や社会へ伝える影響力」という他者との協働機会を自らが掴む不足・未達の結果に帰結していた。

そこで、本年度、地方自治体でSDGsを推進しようとする静岡県伊東市において、実際に社会生産性を担い地域コミュニティ活動を協働推進する30歳代から70歳代の一般市民リーダー11名のSDGs意識やエシカルに関わる意識・行動と幸福度の関係性について調査を行うこととしたのは、生活や人生に密着した「自分ごと」としての社会におけるSDGsを重要とする認識へと、その因子分析の領域を拡張するためであった。

自らの日々の営みが、意識的にも無意識的にも、実際のエシカルアクションに結びつき、幸福との相関を得られるのかどうか、社会生産活動に帰属してからの関心・行動の変容や幸福度に関して、何がトリガーとなるのか、また、それは自らの幸福につながるのか、定量調査とともに個別インタビューを通じた定性調査を実施した結果は、特に、幸福度に関わる身の回りの環境設定が、個別最適の回答を伴うこととなった。「幸福」については、個人ごとの価値観や倫理観、道德感等が、その個別の人生経験により差異を示す。しかしながら、共通して回答確認されたのは、「良好な人間関係構築」の影響が「幸福感」を自らが認識する「自分ごと」へのトリガーとなっていることであった。これにより、エシカルアクションに向けた学習段階においても、経済的制約領域に狭められないプロジ

エクト推進の可能性、エシカル的重要性を日常生活で自分ごととするためには、「人間関係構築」に向けたプロジェクトラーニングの可能性について、今後の課題設定を得ることができた。

SDGs に向かって、そのゴールのためにエシカルアクションを行うことが個人の幸福をもたらすことは、個別最適の結果となるが、個々に他者関係性において「理解」「共有」「肯定」の関係創造に幸福を実感することは、SDGs が達成を目標としている包摂性や協働性につながるという結果が得られた。「SDGs と言わずとも、日頃から次世代がより良くなるための想像をすれば、自ずと SDGs に繋がる行動となっている」という回答が、インタビューにおいて 11 名中全員から発言されていたことがそれを裏付けている。

SDGs は一つのツールであり、Think Globally, Act Locally.のグローバルアジェンダに向けて 17 のゴール・169 のターゲットから構成されているが、その内容は全てが因果的につながり合っていることは、すでに 2015 年 9 月の国連サミットで全会一致の採択以来、年月を経て認識されつつあることであろう。SDGs は、「持続可能な開発」に向けて地球上の「誰一人取り残さない (leave no one behind)」を誓った SDGs は発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル (普遍的) なチャートである。

本研究は、この SDGs の普遍性が個人レベルのエシカル・トランスフォーメーションをもたらし、人の普遍的幸福の向上に連動するとの仮説を置き、調査分析を進めたが、SDGs もしくはエシカルに関与する学習や行動推進機会の行動因子は「人と人の良好なコミュニケーション」に起因することを捉えることができた。

その良好なコミュニケーションを創出するための「場」や「機会」の重要性を取得できたところから、今後は、その創造的プロジェクト・オペレーションについて研究を継続して行きたい。それは、アルファ世代、Z 世代からシニア世代プラチナ世代まで普遍的な関係創造に至るものと想定する。

そのためにも、今後、学校教育における個人の幸福に行き届く ESD (Education for Sustainable Development) 研究や、市政運営が細やかに行き届くオペレーションについて普遍的課題と相関分析について研究を重ねたい。それは、人と人のコミュニケーション力に関わる普遍的な「人間研究」に向かう、SDGs が目指す

「21 世紀のマインド・イノベーション（意識改革）」によるエシカル・トランスフォーメーションに資するものとなることを目指したい。その因子については、今後、（一社）スマートシティインスティテュートの LWC 指標なども参考とし、政策立案に関わり地域や市民の状態を測る指標も参考として、普遍的幸福へのプロジェクトデザインなども研究していく必要があると考える。そのようなことが、世代を超えたすべての包摂的な市民生活の幸福に資する取り組みとなれば幸いと考える。

謝辞

本研究は 2023 年度しあわせ研究費の助成を受けたものです。

本研究を進めるにあたり、協力頂いた伊東市民の皆さまに感謝申し上げます。

注釈

¹ SDGsSurvey は、一般社団法人日本エシカル推進協議会のエシカル教育ワーキンググループが開発したプログラムである。SDGs に関する 5 つのコンピテンシーのレベル（想像力、情報力、学習力、行動力、達成力）を評価する一つのツールである。エシカル推進協議会が Web サイトで一般公開している。

<https://www.jeijc.org/topics/jei-sdgs-online-survey/>

² 幸福度診断は、一般に公開されている幸福度 web 調査である well-being-circle を利用した。34 項目の評価を 12 項目（Well-being、やってみよう力、ありがとう力、なんとかなる力、ありのまま力、性格傾向、健康力、ストレスの低さ、社会の幸せ力、職場の幸せ力、地位財）で得点付けされる。回答平均も一般に公開されている。

<https://www.lp.well-being-circle.com/>

³ 一般に公開されている SDGs Survey では 50 問それぞれの回答内容は得られない。

参考文献

薄羽美江（2022）「JEI SDGs Survey -持続可能な開発目標の評価と EX -エシカル・トランスフォーメーション・考」『産業と教育』No.831, pp.14-19

加渡いづみ・薄羽美江(2020)「SDGs 学習の視点から考える持続可能な能力開発のステップ：キャリアデザインのためのコンピテンシーの開発」『消費者教育』40, pp.47-57。

白鳥和彦（2021）「SDGs 意識・行動変容調査―（その 1）学習効果によるコンピテンシーの変化―」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 4 号, pp.58-74

白鳥和彦（2022）「SDGs 意識・行動変容調査―学習効果によるコンピテンシーの変化―（その 2）」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 5 号, pp.123-137

白鳥和彦、薄羽美江（2023）「SDGs 意識・行動変容調査―学習効果によるコンピテンシーの変化―（その 3）」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』第 6 号, pp.55-72

日本エシカル推進協議会(2017)「JEI SDGs online Survey」。

(<https://www.jei-jc.org/topics/jei-SDGs-online-survey/> 最終アクセス 2024 年 3 月
20 日)

前野隆司、太田雄介（2023）『実践！ ウェルビーイング診断』2023 年 5 月、ビジネス
社

保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因と保育者の同僚性の構築を目指す試み ー保育者の幼少期の経験との関連性を手掛かりにー

小川 房子（武蔵野大学 教育学部 幼児教育学科）

石田 由紀子（武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員）

兼間 和美（武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員 認定こども園 IZUMI 保育アドバイザー）

要約

保育者一人一人の保育場面の読み取りや幼児の心情理解にみられる多様な捉え方の根底には、その保育者の幼少期の経験が存在し「子ども理解に保育者の幼少期の経験が影響を及ぼす」ことが示唆され、昨年度の研究では、保育における多様な読み取り、つまり「多様性」の要因のひとつと言えるのではないかという結論に達した。この研究を基盤として、引き続き保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因の追求と保育者の同僚性の構築を目指す試みに取り組んだ。

同じ保育場面を視聴した後に質問紙調査を実施し、その捉え方を区分ごとに分類し、多様な捉え方に焦点を当てるとともに、保育者同士の相互理解と同僚性の構築を可能にする方策を追究した。その結果、同僚性を構築する方策として、一緒に保育をすることのない園外の第三者の保育場面を用いて、場面の捉え方や心情理解について自己開示をする方法が有効ではないかという結論に至った。

1. はじめに

乳幼児一人一人が保育者に理解され安心・安全な居場所を確保することを乳幼児の「しあわせをカタチ」にするうえで必要不可欠な事項として昨年度の研究に取り組んだ。研究を進める過程で早期離職や不適切保育が社会的問題となる現在の幼児教育・保育において、乳幼児のしあわせのためには、保育者のしあわせが不可欠であると考えに至った。今年度も引き続き幼児教育・保育の多様性に焦点を当て、保育者が相互理解を図り、心理的安全性と同僚性を構築することが保育者の「しあわせをカタチ」にすることであり、それが乳幼児の「しあわせをカタチ」にすることにもつながると考えて研究に取り組みたい。

2. 研究の目的

(1) これまでの研究と新たな仮説

保育場面やその子の心情の読み取りは答えが一つとは限らないことから、その様々な読み取りが幼児教育・保育での多様性であると捉えられる傾向にある。しかし、その様々な読み取りの要因は明確にされていない。そのため、多様性に焦点をあて、研究に取り組もうと考え、2022年度にしあわせ研究所の助成を受けて取り組んだ研究（論題：子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察-保育場面の読み取りと幼児の心情理解の分析から-）においては、保育者一人一人の保育場面の読み取りや幼児の心情理解にみられる多様な捉え方の根底には、その保育者の幼少期の経験が存在し「場面の読み取りと子ども理解に保育者の幼少期の経験が影響を及ぼす」という仮説の検証に取り組んだ。その結果、幼少期の経験は、少なからず保育場面の読み取りや幼児の心情理解に影響を及ぼすということが示唆される結果が得られた。

研究の過程では、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に幼児期の経験が影響を及ぼすということは、保育者一人一人の子ども観や保育観にも影響を与えると捉えるべきではないかという考えに至った。そして、幼少期の経験が保育歴の短い保育者の子ども観や保育観の形成に影響を及ぼし、保育歴を重ねることにより経験から導き出されたその保育者の子ども観・保育観の確立につながり、保育場面の読み取りや幼児の心情理解にみられる「多様性」の要因になるという新たな仮説が生まれた。また、保育場面の読み取りや幼児の心情理解の力量形成は、保育者のキャリアと同時にスタートすると捉えがちであるが、保育者の子ども観や保育観の形成に影響を及ぼすということは、同時にスタートするのではなく、子ども観・保育観の根底にある無自覚な要因が力量形成の土台になると捉えるべきではないだろうか。保育者が自己を発揮して生き生きと保育をするためには、その無自覚な要因を自己認識するところからはじめ、自覚された要因として相互理解を図ることに組織的に取り組む必要があるのではないかと考えるようになった。そこで、今年度は引き続き、昨年度の研究を基盤としながらも発展させ、保育者の幼少期の経験との関連性を手掛かりにしつつ、保育場面の読み取りと幼児の心情理解に関する「多様性」の要因と保育者の同僚性の構築を目指す試みに取り組みたい。

（２）保育における同僚性と本研究の同僚性について

令和４年度東京都保育士実態調査結果（報告書）によれば、保育士を辞めた理由（全体）について、「職場の人間関係」は2013（平成25）年の調査では24.9%、2018（平成30）年の調査では37.1%と上昇したものの、2022（令和4）年の調査では30.1%と減少している。しかし、「給料が安い」「仕事の量が多い」「労働時間が長い」に次いで多い結果となっている。減少はしたものの離職理由の上位に位置している。筆者らは、この減少を問題が解決されつつある、望ましい状況とは考えていない。背景には、保育者同士の相互理解の欠如や同僚性が築かれていない現状があり、保育者が人間関係の難しさを抱えながら保育をしている現状は改善されていないと考えているためである。相互理解を図り、同僚性を構築することが必要不可欠であると考えている。保育所保育指針には、職員が日々の保育実践を通じて、必要な知識及び技術の修得、維持及び向上を図るとともに、保育の課題等への共通理解や協働性を高め、保育所全体としての保育の質の向上を図っていくためには、日常的に職員同士が主体的に学び合う姿勢と環境が重要であり、職場内での研修の充実が図られなければならない。（第5章 職員の資質向上 3 職員研修等（1）職場における研修）と明記されている。本研究では、この「協働性」を同僚性と置き換えて研究を進めたいと考えている。「同僚性とは、簡単に言えば、保育者同士が互いに支え合い、高め合っていく協働的な関係²」と説明できるためである。かえで幼稚園（広島県・私立幼稚園）園長である中丸元良氏は、特集記事^{*1}の中で「保育者が自分の専門性を高めようとするときには、同僚の保育者と自らの保育を振り返る作業が欠かせません。保育者同士が互いに学び合えば、こんな見方もあったのか！と、自分の子ども理解を根幹から問い直し、保育者として大きく成長を遂げる場面にも出合えるかもしれません。」と保育者の学び合いの必要性を述べている。また、同座談会^{*2}において広島大学の中坪史典氏は、「育ち合える人間関係をつくるためには、一人ひとりの自己開示が大切です。園内研修などで、ひとりの保育者が素朴な疑問を率直に打ち明けたことをきっかけに、保育者全員が「自分の言葉で素直に語っていいのだ」と理解し、それ以降、保育者間のコミュニケーションが活発になることがあります。」と述べている。

一方で、「同僚性という概念は学校教育の分野で生起し、基本的には学校の内

側での営みを表す概念であり、現代の保育に求められる様々な機能を鑑みた場合には、園内の同僚性を超えた拡大された新しい同僚性の検討が必要であると言える¹⁾ことから、保育の実情に合う拡大された新しい同僚性の検討を行う研究もある。本研究では、上記の下線部に注目して研究に取り組みたい。「同僚の保育者と自らの保育を振り返る作業」においては、園外の第三者の保育を観て語り合うことにより、活発な議論が可能となり、相互理解が深まることに期待している。また、その相互理解のためには、場面や心情理解の捉え方の根底にある自身の幼少期の経験を自己開示し、子ども観・保育観の源泉を同僚に理解してもらうことが必要であると考えている。

保育者は学び続ける職業である。養成課程を修了し制度の上では専門家としての歩みを始めるが、実践の中に学ぶべきことがあり、保育者として実践を積みつつ、本当の意味での学びが始まるという点は保育者という職業の特徴と言えるであろう。また、離職防止策や保育の質向上のための同僚性への期待が大きい。が、本研究では、拡大された同僚性ではなく、保育者一人一人が自分らしく職務を遂行するための園内の営みとしての同僚性構築の実践的方法を追究したい。

(3) 保育における相互理解と同僚性研究の必要性

幼稚園教育要領解説には、教師の役割③教師間の協力体制において「教師同士が日ごろから連絡を密にすることが必要である」と明記している。また、「教師が相互に様々な幼児に関わり、互いの見方を話し合うことで、幼児理解を深められる」と明記しており、これを保育者同士が連絡を密にとることの良さとしている。さらには、「教師は自分と幼児との関係の中で一人一人の幼児を理解している。しかし、同じ幼児について別の教師は違う場面を見ていたり、同じ場でも異なって捉えていたりすることもある。したがって、日々の保育を共に振り返ることで、教師が一人では気づかなかったことや自分とは違う捉え方に触れながら、幼稚園の教職員全員で一人一人の幼児を育てるという視点に立つことが重要である。」としている。このように幼児理解を図る過程でこの多様な捉え方の要因に焦点を当てて、その要因を含め保育者同士が相互理解を図り、互いに支え合い、高め合っていく協働的な関係を構築することが現代の幼児教育・保育においては特に重要と考え、同僚性を構築するための方策を追究したい。また、多様な捉

え方に焦点をあてて、保育者の相互理解を図り、同僚性の構築を目指し研究に取り組むことは、幼児教育・保育における質の向上やキャリア形成を図るためにも意義があると考えている。さらには、幼児教育・保育の実務経験がある研究者が共同研究者としてチームを作り、保育者の質問紙調査やインタビュー調査を分析し、研究を通して課題解決を図り取り組むことや相互理解を図ることと同僚性の構築の難しさを体感している研究者がそれらを構築する試みをし、幼児教育・保育に還元するために研究に取り組むことにも意義があると考えている。なぜなら、表1のように保育所における例を挙げれば、職員構成は年齢も幅広く、多様な雇用形態とシフトの中で保育が行われている実態があり、このことが相互理解と同僚性の構築の妨げになっている現状がある。

「同僚性」(collegiality)とは、「教育実践の創造と相互の研修を目的とし、相互に実践を批評し高め合う同僚関係」である²。本論文でいう同僚性とは、グループではなく、チームである。共通の目的の有無がその集団のグループであるか、チームであるかの岐路となる。保育者の職務が複雑化し多重な役割を担う現代の幼児教育・保育においては「チーム」で取り組むことが注目されている。また、保育の質向上を目的とし、保育を見直すための外部連携・多職種連携など多くの情報が発信されている。しかし、筆者らは、保育の質向上を共通の目的として幼児教育・保育に取り組む「チーム」として機能するためには保育者の相互理解と同僚性の構築が最優先と考えている。まずは保育者の相互理解と同僚性の構築ができなければ、外部連携・多職種連携も実現が難しいと考えているためである。

本研究の共同研究者の一人である石田は、2015（平成27）年より、保育者のストレスの要因や職場の人間関係の課題について研究を進め、2017（平成29）年には、同僚性構築の必要性を提起している。高口（2021）らは、離職要因とともに離職を防ぐ協同性の形成のための手立てとして、保育観の共有においては立場を超えた職員全体で行うこと、その時間の確保には職員間で業務を分担し特に正規職員の負担を減らすことが示されたという研究結果を報告している。また、良好な同僚性を形成することで、保育観のずれから生じるストレスの減少や仕事の負担減につなげることが期待できる³と述べている。このことは、保育者が相互理解を図り、同僚性を構築することが保育者の「しあわせをカタチ」にすることであるという本研究の目指す方向と同様の結果であるといえる。

表1 A県 B保育所 ある年度の0・1歳児クラスの職員構成

	年齢	身分	役付	シフト
A保育士	30代後半	正規	主任保育士	早朝遅番保育 土曜勤務あり
B保育士	30代半ば	正規	主任保育士	早朝遅番保育 土曜勤務あり
C保育士	60代前半	再雇用	主査保育士	土曜勤務あり
D保育士	30代半ば	8H嘱託	臨時保育士	土曜勤務あり
E保育助手	20代後半	8H臨時	保育助手	土曜勤務あり
F保育士	40代後半	4H臨時	臨時保育士	木曜日のみ 午後勤務
G保育士	50代後半	4H臨時	臨時保育士	午後のみ勤務 土曜勤務あり
H保育助手	50代後半	4H臨時	保育助手	月水金午後勤務 土曜勤務あり
I保育士	60代前半	4H臨時	臨時保育士	午前のみ8時～ 土曜勤務あり
J保育士	60代後半	4H臨時	臨時保育士	8時30分～
K保育士	30代後半	正規	主任保育士	早朝遅番保育

※該当クラスの園児数 0歳児11名 1歳児23名 計34名

(4) 本研究の課題

- 1) 第1回および第2回の質問紙調査を総合的に考察し、保育場面の読み取りと心情理解における多様性の要因を追究する
- 2) 保育者のチームとしての同僚性構築のための方策を検討する

3. 研究方法

(1) 質問紙調査自由記述の分析

同じ環境、状況、情報量で読み取ることと当事者が身近にいない環境下での調査を目的とし、本研究では許可を得て、市販の映像教材を用いることとした。視聴の対象は、対象児(4歳男児)が昼食を食べない約5分に編集された場面である。その場면을視聴した後で回答する流れで行った第1回質問紙調査(2022年12月～2023年1月実施)と第2回質問紙調査(2023年6月～2023年9月)を以下の手順で同様に分析する。

1) 手順1 捉え方の分析

第1回質問紙調査の調査協力者27名、第2回質問紙調査の調査協力者25名への質問紙調査の「動画の場면을視聴し、その場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？」の自由記述を①肯定的、②否定的、③批判的、④どちらと

も言えない（触れず）に区分する。また、各区分の該当者数、該当する調査協力者の保育経験平均年数を求める。

区分の基準については以下の通りである。肯定的は、保育方法に同調できる・称賛するなどの記述があるものとする。否定的は、保育方法に肯定できない理由の記述があるものとする。批判的は、肯定できない理由を記載することにとどまらず、その調査協力者が考える最善の方法に言及し、食べる手立てや食べない原因の記述があるものとする。

2) 手順2 場面の読み取りと調査協力者の幼少期に関する記述との関連性

質問紙調査の「どのような幼少期を過ごしたか？」の項目の記述と、場面の読み取りに関する共通点・相違点を挙げ、場面の読み取りと調査協力者自身の幼少期に関する記述との関連性を考察する。

3) 手順3 心情理解と調査協力者の幼少期に関する記述との関連性

質問紙調査の「どのような幼少期を過ごしたか？」の項目の記述と心情理解に関する共通点・相違点を挙げ、心情理解と調査協力者自身の幼少期に関する記述との関連性を考察する。なお、調査協力者の自由記述を①肯定的、②否定的、③批判的、④どちらとも言えない（触れず）に区分し結果は全区分を記載したが、考察については相違点・共通点を考慮する観点から④どちらとも言えない（触れず）を除き、①肯定的 ②否定的、③批判的の3区分に重点を置いて考察する。

（2）保育場面の選定結果

数場面を視聴し共同研究者で検討した結果、担任保育者と幼児が心を通わせながら過ごしている場面や幼児の情緒が安定していると見て取れる場面では各共同研究者の言語記録には共通点が多く見られた。一方で幼児が課題に直面している場面では、担任保育者との関係性に焦点を当てる、対象児が抱える不安に焦点を当てる、情緒の安定に焦点を当てる、など抽出されるキーワードに幅がみられた。そのため、調査協力者の保育場面の読み取りや心情理解との関係性を考察するために、幼児が課題に直面する場面の中から、4歳男児が昼食を食べない約5分に編集された場面を選定することとした。

（３）本研究で取り上げる保育場面の概要

２学期開始直後の４歳児クラス。対象児は、３年保育で入園した男児（以後、対象児と表記）。４歳児クラスに進級し、１学期は保育者との関わりと３歳児クラスから関わりが多かった特定の男児との関わりを中心に過ごしていた。２学期に入り、担任保育者は友達との関わりを広げてもらいたいと考え、対象児とは１学期よりも距離を置いている。そのため、対象児は一人で過ごす時間が増えることとなった。そのような個別指導計画が背景にある夏休み明けの一場面である。

登園時に母親から「お弁当を食べない」と言っていることが担任保育者に伝えられていた。対象児は数日間、昼食を食べずにいる。この日も昼食の時間にお弁当を広げること、出すことさえもせず、座っている。時には他児が食べ物を口に運ぶのを目で追う姿が見られる。

（４）倫理的配慮

日本保育学会倫理綱領に則り、調査協力園の園長に研究の趣旨を伝え、研究協力の承諾を得た。その上で調査協力者へ文書で調査趣旨を説明するとともに口頭にて補足説明を行った。個人情報保護を遵守し実施することを伝え、調査協力の同意を得て、提出については任意とした。本研究における調査協力園と調査協力者はすべて仮名で記載し、人権に配慮した。研究に用いた市販の映像も、研究での使用許可を得て使用し、映像に登場する園や対象児についても仮名とした。

４．第１回質問紙調査の結果と考察

（１）第１回質問紙調査の自由記述の区分ごとの分析に関する結果

１）各区分の人数に関する結果

第１回調査協力者は２７名（経験年数の内訳は図１参照）である。表２の通り①肯定的に区分される調査協力者は２７件中６件、②否定的に区分される調査協力者は２７件中１０件、③批判的に区分される調査協力者は２７件中９件、④どちらとも言えない（触れず）に区分される調査協力者は２７件中２件という結果であった。割合は図２の通りである。肯定的、否定的、批判的に捉えた調査協力者は、わずかな差はあるものの分散しており、多様な捉え方があることが立証

される結果となった。

2) 経験年数に関する結果

調査協力者 27 名の経験年数の平均は 11 年であった。表 2 の通り、①肯定的に区分される調査協力者の経験年数の平均は 8 年、②否定的に区分される調査協力者の経験年数の平均は 9 年、③批判的に区分される調査協力者の経験年数の平均は 12 年、④どちらとも言えない（触れず）に区分される調査協力者の経験年数の平均は 32 年である。各区分の割合は図 2 の通りである。肯定的に捉えた調査協力者と否定的に捉えた調査協力者の経験年数の平均が全体の経験年数の平均を下回り、批判的に捉えた調査協力者と自由記述の内容からは④どちらとも言えない（触れず）に区分される調査協力者の経験年数の平均が全体の経験年数の平均を上回った。

図 1 第 1 回質問紙調査 調査協力者の経験年数の内訳

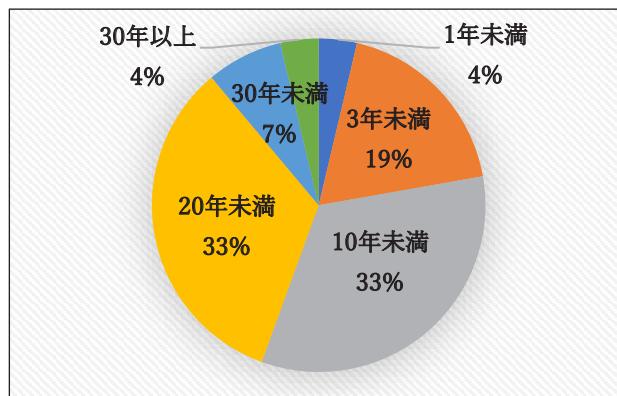
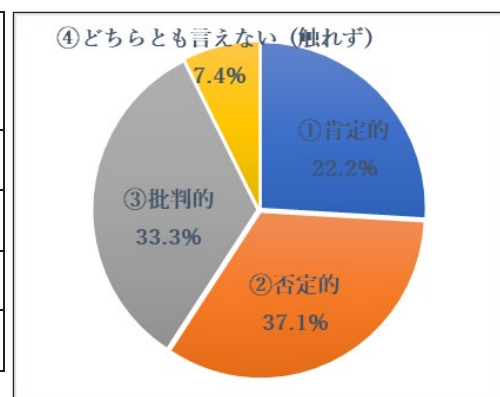


表 2 第 1 回質問紙調査

4 つの区分の件数・保育経験年数の平均

捉え方の区分	件数	経験年数の平均
①肯定的	6 件/27 件	8 年
②否定的	10 件/27 件	9 年
③批判的	9 件/27 件	12 年
④どちらとも言えない	2 件/27 件	32 年

図 2 第 1 回 4 つの区分の割合



※ 調査協力者 27 名の経験年数の平均は 11 年

注) 経験年数の平均は、小数点以下第 1 位で四捨五入した

（２）第１回質問紙調査自由記述の分析に関する考察

１）各区分と人数の比較に関する考察

肯定的６名、否定的１０名、批判的９名。このことから、同じ保育場面とその時の幼児の心情の読み取りに多様性がみられると言える。また、場面の読み取りや心情理解については、保育者の内面に潜在する、幼少期の経験が多様性の要因となるということではないかという仮説を検証するため、より多くの保育者への調査を行う必要性が高まったと言える。

２）経験年数との関連性に関する考察

質問紙調査の回答内容を区分ごとに読み解くと、次のような捉え方の違いがみられた。①肯定的に区分される記述には「信頼関係ができて」「素敵だと思った」などの記述がみられる。②否定的に区分される記述には、原因を推察する「対象児の葛藤が感じられる」「距離を置いた」「もっとかまってほしい」がみられる。③批判的に区分される記述には「〇〇すべき」「楽しい雰囲気を作ってあげてほしい」「〇〇しても良かったのではないか」「疑問に思った」の記述がみられる。これらは、すべて対象児（４歳男児）が昼食を食べない約５分に編集された、同じ場面を視聴した直後に回答されたものである。保育経験年数との関連で考えると、①肯定的に区分された調査協力者の経験年数の平均は８年、②否定的に区分された調査協力者の経験年数の平均は９年、③批判的に区分された調査協力者の経験年数の平均は１２年という結果から、経験年数が比較的短い保育者は、少しずつ自分の保育を確立しようとする時であるが、まだ自信のなさがあり戸惑う場面では先輩保育者の保育方法を学び、より知識を重ねようとする。日頃から子どもとの関わりを大切にしたい気持ちが根底にあり、何とか今できることを模索しようとするのが、対象児の気持ちを代弁することにつながっている。また、担任保育者の関わりに同感や同調する傾向にあることが伺われる。その一方で、経験年数の長さは、子どもの気持ちに寄り添った自分なりの関わりを見出す力になると考えられる。さらに経験を積むことによって、保育の概念が固定化され自分のカラーになりつつあり、自分の保育を基準として関わり方を提案していると考えられる。自信を持ち、子どもの最善を考えて対応を模索したいと強い気持ちが伺われる。

経験を積むほど、子どもの気持ちを受け止め、問題を長引かせずに解決に向か

いたい気持ちが生じるため、経験年数が長いほど自分の読み取りとは異なる他者の読み取りを批判的に捉えると考えられる。保育経験の積み重ねが保育場面や心情の読み取りの多様性の要因となるのではないか。それに加え、幼少期の経験が少なからず影響を及ぼしている場合には、想像の範囲を超えた捉え方と見なされることにもつながり、幼少期の経験を語る組織でなければその読み取りの根拠を他者が理解することは難しいのではないだろうか。これらの場合、多様な読み取りの要因が見えず、経験年数での上下関係において上からの否定的・批判的な意見に直面し、保育者としての肯定感を削がれる結果となることが推察される。また、相互理解や同僚性の構築には、幼少期の経験の影響が負の働きを及ぼすことも推察できる。

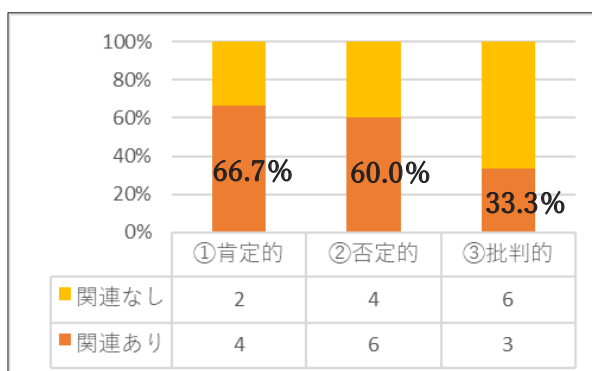
(3) 保育場面の読み取りと幼少期の経験との関連性の結果

質問紙調査の自由記述の記述を分析すると、場面の読み取りに関して幼少期の経験と関連ある記述がみられた各区分の人数(表3)と割合(図3)は、①肯定的に区分される調査協力者6名のうち4名で割合としては66.7%である。②否定的に区分される調査協力者10名のうち6名で割合としては60.0%である。③批判的に区分される調査協力者9名のうち3名で割合としては33.3%である。④どちらとも言えない(触れず)に区分される2名のうち0名、0%である。

表3 第1回質問紙調査
場面の読み取りの記述の有無

	記述 あり	関連 あり	経験年数 の平均
①肯定的	6名	4名	8年
②否定的	10名	6名	9年
③批判的	9名	3名	12年
④どちらとも	2名	0名	32年

図3 第1回質問紙調査 場面の読み取りと
幼少期の経験との関連性がみられる割合



※図3は①②③のみ表示

（４）保育場面の読み取りと幼少期の経験との関連性の考察

①肯定的→②否定的→③批判的の順に経験年数の平均が上がることで照らして考えると、経験年数の短い保育者ほど幼少期の経験が読み取りに影響を及ぼし、経験年数が長いほど幼少期の経験以上に保育経験に裏付けられた読み取りになるという予測とは異なる結果となった。経験年数が短い保育者は、同僚の声を自分の実践に取り入れながら保育をするが、経験を積むにつれ自分の中にある知識によってその場面を読み取ろうと試みるため、自己の幼少期の経験も読み取りに必要な情報としていることが推察された。その後、保育経験を積むほど、場面を読み取る際に自己の幼少期の経験は、関連性が薄れていくと言える。経験から得られる保育者としての情報が豊富であること、その場の状況を見て的確に判断する力量を獲得していることが示唆された。一方で自分の幼少期の経験と関連性が強い場合には、より強い批判となることが推察される。

①肯定的に捉えた調査協力者の幼少期は、信頼できる保育者との出会いや保育所に行きたくないという気持ちを受け止めてもらった経験、活発に遊んだ思い出など様々であったが、場面の読み取りに共通するのは、「保育者に優しく寄り添ってもらった」が挙げられる。気持ちに寄り添った対応や無理強いせずに思いを尊重していることに共感する記述が目立ったのは、幼少期の経験が場面の読み取りに少なからず影響を及ぼしている結果と言えるのではないだろうか。また、そのことから考えて担任保育者の対応を自分の保育の引き出しとして取り入れようと考えているように推察できる。

②否定的に捉えた調査協力者の幼少期は、幼少期に活発に遊ぶ、マイペース、引っ込み思案、人見知りなどの記述が多くあった。特に他の区分と比較して、幼少期の対人関係で「うまくいかなかった経験」をしたのではないかと推察できる記述が目立った。対象児の辛さを感じ取っているが、担任保育者がなぜ読み取れないのかという疑問が否定的な記述につながっていると考えられる。

③批判的に捉えた調査協力者の幼少期は、５歳になるまでは園に行くのを嫌がり、泣く日がとても多かったことや自分のしたいこと、思いは、はっきり言っていたなど、正反対の記述がみられた。自分が泣いていた経験をもつ調査協力者は、泣き出しそうな対象児の心情を想像し保育者が適切に対応すべき場面であるという考えが批判的に捉えることにつながっているのではないだろうか。ま

た、思いをはっきり伝えていた経験を持つ調査協力者は、自分の姿と同様に当時の保育者を思い浮かべていることが推察される。自分が保育者に思いを受け止めてもらったように、自分の気持ちを言葉で伝える対象児には、受け止めてくれる保育者を必要とする場面と読み取っているのではないだろうか。

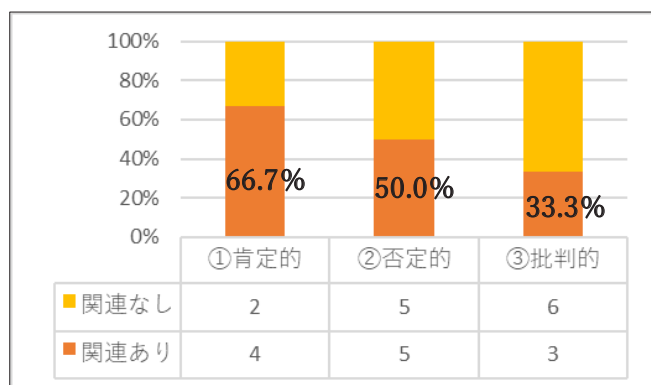
(5) 心情理解と幼少期の経験との関連性の結果

質問紙調査の自由記述の内容を分析すると、心情理解に関して幼少期の経験と関連ある記述がみられた各区分の人数(表4)と割合(図4)は、①肯定的に区分される調査協力者6名のうち4名で割合としては66.7%である。②否定的に区分される調査協力者10名のうち5名で割合としては50.0%である。③批判的に区分される調査協力者9名のうち3名で割合としては33.3%である。④どちらとも言えない(触れず)に区分される調査協力者2名のうち1名で割合としては50.0%である。

表4 第1回質問紙調査
心情理解の記述の有無

	記述 あり	関連 あり	経験年数 の平均
①肯定的	6名	4名	8年
②否定的	10名	5名	9年
③批判的	9名	3名	12年
④どちらとも	2名	1名	32年

図4 第1回質問紙調査 心情理解と
幼少期の経験との関連性がみられる割合



※図は①②③のみ表示

(6) 心情理解と幼少期の経験との関連性の考察

①肯定的→②否定的→③批判的の順に経験年数の平均が上がることで照らし考えると、保育経験が浅い保育者ほど、その子の心情を理解する際に自己の幼少期の経験と関連させている可能性が高く、保育経験を積むほど関連性が薄れていくと言える。経験から得られる保育者としての情報が豊富であることから、

見えないものを可視化する力量を獲得していることが示唆された。

①肯定的に捉えた調査協力者の幼少期の経験と心情理解に関連する記述としては、内気で人見知り、わがまま、負けん気が強い、友達をつくることや人前で話すことが苦手などである。無理強いをせずに 対象児の気持ちを大切に寄り添う担任保育者の対応は、自身の幼少期の記憶や心情に繋げた記述が比較的多く、かつて自分が担任保育者に求めていたことと同じまたは近いと感じ、対象児の心情と重ね理解しようとしているのではないかと考えられる。

②否定的に捉えた調査協力者の幼少期の経験と心情理解に関連する記述としては、人前では大人しい、内弁慶、人見知りなどである。対象児の心情に理解を示し成功体験を増やす試みから自信につなげる取り組みの提案は、かつての自分に必要だったのではという意識とも見受けられる。

③批判的に捉えた調査協力者は、対象児の心情の理解度は高いと考えられる。幼少期の経験と心情理解に関連する記述としては、話を聞かなかった、自分の思いをはっきり言うなどの記述がある。対象児の言動を認め、つらい気持ちを代弁していることも共通している。一方で映像の保育者に対する怒り、気持ちに寄り添う大切さを訴えている。対象児に自分の幼少期の姿と重なる部分に焦点を当て、心情を理解しようとしていることが推察される。

5. 第2回質問紙調査の結果と考察

(1) 第1回質問紙調査の自由記述の区分ごとの分析に関する結果

1) 各区分の人数に関する結果

第2回調査協力者は25名（経験年数の内訳は図5参照）である。表5の通り①肯定的に区分される調査協力者は25件中6件、②否定的に区分される調査協力者は25件中16件、③批判的に区分される調査協力者は25件中1件、④どちらとも言えない（触れず）に区分される調査協力者は、25件中2件という結果であった。肯定的、否定的、批判的に捉えた調査協力者は、偏りはあるものの分散している。第2回質問紙調査の区分ごとの分析で特筆すべきことは、否定的に捉える調査協力者が全体の6割強である結果（図6）といえよう。同じ場面を視聴しても賛否が分かれる捉え方があることが立証される結果となった。

2) 経験年数に関する結果

調査協力者 25 名の経験年数の平均は 17 年であった。①肯定的に区分される調査協力者の経験年数の平均 23 年、②否定的に区分される調査協力者の経験年数の平均は 14 年、③批判的に区分される調査協力者の経験年数の平均は 28 年、④どちらとも言えない(触れず)に区分される調査協力者の経験年数の平均は 19 年(表 5)である。①肯定的・②否定的・③批判的の区分の中では否定的に捉えた調査協力者の経験年数の平均だけが全体の経験年数の平均を下回った。肯定的に捉えた調査協力者と批判的に捉えた調査協力者の経験年数の平均が全体の経験年数の平均を上回った。

図 5 第 2 回質問紙調査 調査協力者の経験年数の内訳

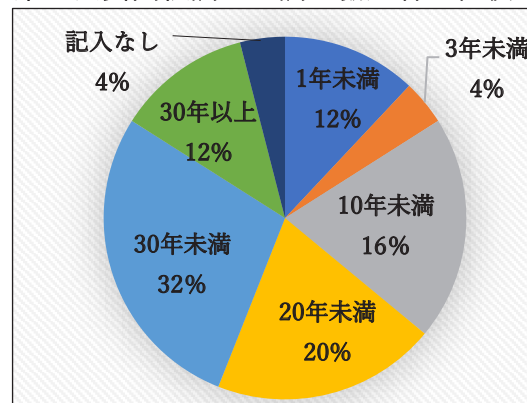
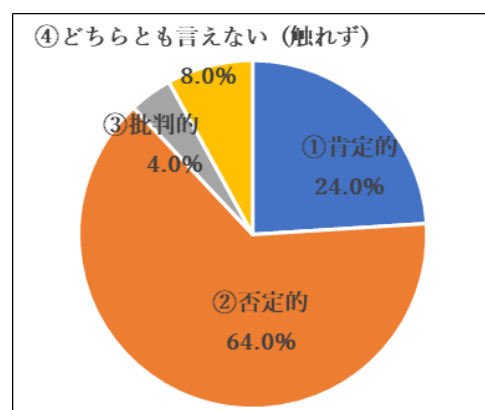


表 5 第 2 回質問紙調査

4 つの区分とその件数および保育経験年数の平均

捉え方の区分	件数	経験年数の平均
①肯定的	6 件/25 件	23 年
②否定的	16 件/25 件	※14 年
③批判的	1 件/25 件	28 年
④どちらとも言えない	2 件/25 件	19 年

図 6 第 2 回 4 つの区分の割合



※ 調査協力者 25 名の経験年数の平均は 17 年

②否定的に区分されている調査協力者の中に経験年数未記入 1 名あり。

注) 経験年数の平均は、小数点以下第 1 位で四捨五入した

（２）第２回質問紙調査自由記述の分析に関する考察

１）各区分と人数の比較に関する考察

①肯定的６件、②否定的１６件、③批判的１件という結果から考えると、同じ場面であっても、多様な捉え方があることが２回目の質問紙調査でも分かった。この２５名を一つの保育者集団として捉えると、同じ場面を肯定的に捉える保育者と否定的・批判的な捉え方をする保育者がおり、否定的・批判的に捉える割合が７割近い（図６）ため、なぜそのような捉え方をしたかという理由を他の保育者に伝える、幼稚園教育要領解説に明記されている「連絡」がより一層必要となるのではないだろうか。それがうまく機能しない場合には対象となる場面を肯定的に捉える見方があたかも間違えているかのような受け止め方も生まれるのではないだろうか。そのような判断基準が生まれると、ともに保育をする他の保育者に対しても批判的考察をすることが保育者としてのキャリア形成の証という保育者集団へと進んでいく可能性もある。また、このような状況においては、心理的安全性が確保されず保育者同士にも遠慮や緊張から意見を言えないことが推察され、相互理解と同僚性の構築は期待ができないと考える。結果として、否定的・批判的に捉えることが常態化することにより、保育者と子どもの関係性にも摩擦が生じやすくなることが推察される。

２）経験年数との関連性に関する考察

第２回の経験年数の内訳（図５）からわかるように、第２回については経験年数の比較的短い調査協力者と長い調査協力者とに分かれており、中間層が目立って少ないことが読みとれる。①肯定的２３年、②否定的１４年、③批判的２８年と考えると、経験年数が長いほど、独自の見方ができるようになり、否定的・批判的な捉え方をする確率が上がるという順序性があるという予想に反する結果となった。第２回の質問紙調査からは経験年数と捉え方の順序性は一致しない結果が得られた。経験年数の短い保育者は、保育経験から導き出される情報が乏しいことから、自己の幼少期の経験を判断材料として肯定的に捉え、経験を積むにつれ独自の見方ができる力を培うという第１回質問紙調査の結果に基づく予想も当てはまらいということになる。②否定的に捉えた調査協力者の経験年数の平均は最も短いにもかかわらず、保育場面について担任保育者の保育を容認もするが「自分ならこうする」という意見をきちんと述べている。幼少期の経験

にとどまらず、自身の保育者としての経験の中に、研究対象となる映像の担任保育者の対象児への関わり方に共通点や類似点を見出し肯定する一方で、自身の保育経験の豊富さから自分であればこのようにするという内容の記述が多い。これらから、経験年数の長い保育者がおおらかなまなざしで同僚の保育方法や心情理解を受け止める環境が相互理解と同僚性の構築を実現する条件と言えるのではないだろうか。③批判的に区分されている調査協力者の記述内容は対象児の心情を多方面から推察し、担任保育者に対象児の不安を取り除く手立てを提案している点に着目したい。第2回質問紙調査では経験年数が最も長く、保育経験の豊富さが心情理解に大いに反映されていると考えられる。

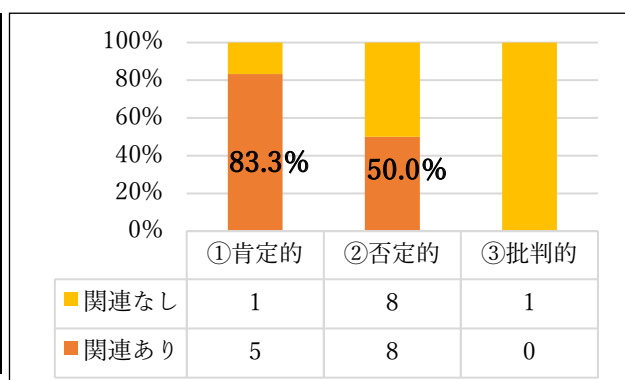
(3) 保育場面の読み取りと幼少期の経験との関連性の結果

質問紙調査の自由記述の記述を分析すると、場面の読み取りに関して幼少期の経験と関連ある記述がみられた各区分の人数と割合(図7)は、①肯定的に区分される調査協力者6名のうち5名で割合としては83.3%である。②否定的に区分される調査協力者16名のうち8名で割合としては50.0%である。③批判的に区分される調査協力者には、幼少期の経験と関連性がみられる該当者はなかった。④どちらとも言えない(触れず)に区分される調査協力者2名のうち1名で割合としては50.0%である。

表6 第2回質問紙調査
場面の読み取りの記述の有無

	記述 あり	関連 あり	経験年数 の平均
①肯定的	6名	5名	23年
②否定的	16名	8名	※14年
③批判的	1名	0名	26年
④どちらとも	2名	1名	19年

図7 第2回質問紙調査 保育場面の読み取りと
幼少期の経験との関連性がみられる割合



※図7は①②③のみ表示

※②否定的に区分されている調査協力者の中に経験年数未記入1名あり。

（４）保育場面の読み取りと幼少期の経験との関連性の考察

図 7 からわかるように①肯定的に捉えた調査協力者の 83.3%が自己の幼少期の経験と関連性がみられ、②否定的に捉えた調査協力者の 50.0 %が自己の幼少期の経験と関連性がみられる。どちらも幼少期の経験と関連する割合が高く、担任保育者の関わりをポジティブに捉えるなど、自分の幼少期にこのような機会を期待していたとも考えられる記述も散見される。自分の幼少期の記憶の中にいる保育者と映像の中にいる保育者との姿に近い、または、自分が幼少期に求めていたことを担任保育者が対象児にしている場合には肯定的に捉えている。一方で、重なり合う部分が少ない、自分が幼少期に求めていたことをしていない、してほしくないと考えていたことをしている場合には否定的に捉える傾向になるのではないかと考える。

①肯定的に捉えている調査協力者の自由記述には幼少期の経験として「困ったり、傷ついたりするほど言えなかった。」「一人で行動が苦手だった。人という事で安心できる。」「嫌いなこと、拒んだり、言葉でも態度でも人に伝えられなかった。」の記述がみられる。このことから、対象児に対する担任保育者の関わりを自分の幼少期の経験と重ね合わせて捉え、対象児の意思を尊重し丁寧に気持ちに寄り添う姿に共感していることが推察できる。対象児の食べないという意思を尊重する担任保育者に共感し自分も見習いたいと思った調査協力者や対象児の健気に乗り越えようとする姿を認め、担任保育者なりに試行錯誤しながら真剣に向き合っていると感じた調査協力者もいた。食べないと反発しながらも友達とその場を共有している対象児の姿を前向きに捉え、担任保育者が丁寧に向き合う姿や対象児のやるせない気持ちを安心してぶつけられる担任保育者との関係性に言及する記述からも関連性が読み取れる。

②否定的に捉えている調査協力者は、対象児のやるせない気持ちを理解していないなど焦点のズレを感じている記述が比較的多く、中にはいら立ちも感じられる記述もある。それは、担任保育者を困らせていたことや担任保育者が大好きという記述の他「泣きながら給食をたべさせられた」「やりたい気持ちがあっても、言い出せない子どもだった」などの記述からも読み取れる。幼少期に自分の気持ちを分かってもらえなかったという記憶と繋がっており、対象児が気持ちとは反する行動で担任保育者の関心を向けたいと捉えている点と一致してい

る。担任保育者が距離を置くことに対して時期的に早すぎる、低い目標から達成感を増やしていくなどの関わり方の必要性に言及する記述もある。

③批判的に捉えた調査協力者については、1名であった。この調査協力者は長年の保育経験から、対象児の行動から気持ちを推測し、「気持ちが落ち着いていないのに友だちと遊ぶ、関わるどころではないのではないか」と記述している。自分の経験と重ねているようだが、幼少期の経験との関連性が見られない。

(5) 心情理解と幼少期の経験との関連性の結果

質問紙調査の自由記述の内容を分析すると、心情理解に関して幼少期の経験と関連ある記述がみられた各区分の人数と割合(図8)は、①肯定的に区分される調査協力者6名のうち3名で割合としては50.0%である。②否定的に区分される調査協力者16名のうち9名で割合としては56.3%である。③批判的に区分される調査協力者には、幼少期の経験と関連性がみられる該当者はなかった。④どちらとも言えない(触れず)に区分される調査協力者2名のうち1名で割合としては50.0%である。

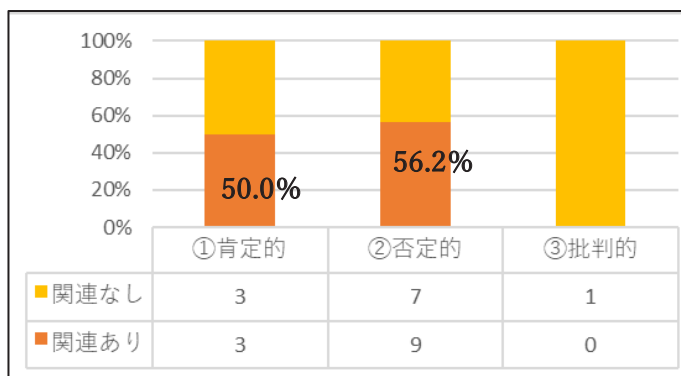
表7 第2回質問紙調査

心情理解の記述の有無

	記述 あり	関連 あり	経験年数 の平均
①肯定的	6名	3名	23年
②否定的	16名	9名	※14年
③批判的	1名	0名	26年
④どちらとも	2名	1名	19年

図8 第2回質問紙調査 心情理解と

幼少期の経験との関連性がみられる割合



※図8は①②③のみ表示

※②否定的に区分されている調査協力者の中に経験年数未記入1名あり。

（６）心情理解と幼少期の経験との関連性の考察

①肯定的に捉えた調査協力者の 50.0 %が自己の幼少期の経験と関連性がみられ、場面の読み取りを肯定的に捉えた調査協力者の割合に比べ 33.3%低くなっている。理由としては、場面とは異なり、心情は可視化できないために幼少期の自己の心情と比較して判断することもあるが、その場面（映像）にある情報から検討して心情を読み解こうとしているというためではないだろうか。それは記述内容からも読み取れる。幼少期の経験と照らして考察すると関連性がある調査協力者の記述には「どうしていいのか、わからない」「乗り越えたい」「不安な気持ちでいっぱい」など、対象児の姿から心情の根底を読み取ろうとする意図がみられる。また、担任保育者の関わりについては、「最後まで、丁寧につき合っている姿が印象的で素敵だと思った。」と称賛し、保育者としての誇りと自信、経験の豊富さゆえに安心して自分の弱みを見せられる関係性に着目し、保育者の言動を通して対象児の心情を理解しようとする事が読み取れる。

②否定的に捉えた調査協力者の 56.3%が自己の幼少期の経験と関連性がみられる。第2回の調査協力者は、幼少期に「不安だった」「素直に表現できない」などの経験があり、担任保育者の対象児への関わりと自分の幼少期の姿を重ね合わせて心情を理解しようとする記述が目立った。幼少期の経験は、心情の読み取りに影響を及ぼすことが示唆された。

③批判的と捉えている調査協力者については、幼少期の経験については「静かな子だった」としか記述がないことから関連性が見られないとした。

6. 総合考察

（１）第1回質問紙調査のまとめ

保育者の幼少期の経験との関連性を手掛かりに保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因を検討してきた。第1回質問紙調査の自由記述から調査協力者を区分ごとに分析すると、幼少期の経験は、場面の読み取りも心情理解も経験の短い保育者の方が影響は大きいという結果になった。保育における情報を蓄積するまでは、幼少期の経験も読み取りの情報として活用しているのではないだろうか。それが多様性の要因のひとつであると考えられる。

結果的に、保育場面の読み取りと心情理解を幼少期の経験と関連した記述が

みられた割合から考察すると、場面の読み取りより心情理解の方が早い段階で力量を獲得するとは言えるのではないだろうか。研修などで同じ保育場面での読み取りをテーマとして心情理解を取り扱うにあたっては、日ごろの保育での経験をもとに保育者同士が相互理解を図ることはそう難しいことではないが、場面の読み取りではやや難しいのではないだろうか。なぜなら、その場面を読み取ろうとするときには、幼少期も含めた経験など多岐にわたる情報源をもとに読み取ることが多様性の要因となることが推察されるためである。場面の読み取りでは幼少期の経験も含めて保育者同士が相互理解を図り、同僚性の構築につなげることが必要といえるのではないだろうか。

また、保育場面の読み取りにしても心情理解にしても、経験年数が長い保育者が自分の幼少期の経験と重ねて読み取りをする場合には、批判的な見方をする傾向は、経験年数が短い保育者以上に高くなることが推察される。多様な保育場面の読み取りやさまざまな心情理解が存在することを理解し、お互いを認め合い、「連絡」を密にしながら保育を展開することによって、保育者の心の安定が図られていくと考えられる。

（２）第２回質問紙調査のまとめ

第２回質問紙調査では、経験年数が長くなるにつれ保育の場面や心情理解の力量が培われ肯定的→否定的→批判的に捉えるようになるという順序性はみられなかった。第２回質問紙調査では、経験年数の平均が最も短い否定的に区分された調査協力者が対象児の安定した生活を重視し、気持ちに寄り添って関わりを考察している点が特筆すべき点である。場面の読み取りにおいて幼少期の経験と関連性が最も高いという結果になったのは①肯定的に区分された調査協力者の 83.3%で経験年数は２番目に長い 23 年であった。また、心情理解において幼少期の経験と関連性が最も高いという結果になったのは②否定的に区分された調査協力者の 56.2 %で経験年数は最も短い 14 年であることから、対象児の気持ちに寄り添って最善の方法を見つけ出そうすることに経験年数による順序性はなく、キャリア形成の道筋が見えない。そのため、保育者集団として相互理解を図ることと同僚性を構築することが必要であると言える。その際に第三者の保育を見て語り合うことにより、相互理解され、同僚性が構築されると言える

のではなだろうか。

(3) 2回の質問紙調査からみえたこと

1) 保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因について

第1回の調査結果と第2回の調査結果から、保育場面の読み取りと心情理解には様々な捉え方＝多様性が存在するという結果を得た。本研究の二回の調査からはその要因として、少なからず幼少期の経験が影響を及ぼす可能性も示唆されたが、それだけでなく保育経験から得られる知見が要因であることも示唆された。多様性の要因として挙げられる、幼少期の経験も保育経験も保育者それぞれが異なる経験をしていることから、保育者が心理的安全性を確保しながら安心して保育をするためには、捉え方の根底にあるものを自己開示して相互理解を図る必要があるという結果と捉えることができる。また、相互理解を図るためには、心理的安全性が確保された環境での自己開示が効果的であると考え。保育の質を評価するために自分たちが見出した場面や明らかにしたい場면을園内の保育実践から選定して検討するこれまで幼児教育・保育の場で一般的に行われてきた方法ではなく、一緒に保育をすることのない園外の第三者の保育実践から互いに意見を述べ合い検討することにより、心理的安全性が確保され自己開示しやすい環境をつくるのが有効な方法といえるのではないだろうか。そして、本研究において少なからず場面の読み取りや、心情理解に関連性があるという結果が得られた幼少期の経験を自己開示することが、相互理解には必要ということである。

2) 保育者の同僚性の構築を目指す試み

本研究に取り組む過程で多様性の実態に直面することにより、幼少期の体験を振り返り、保育の様々な手段、考え方、受け止め方、方向性を保育集団の中で保育者一人一人がそれぞれの考えを出すことはとても大切であることがこれまで以上に切実に感じ取れた。第1回の調査協力者27名と第2回の調査協力者25名それぞれを二つの保育者集団として捉えるとき、経験年数の幅も経験年数の平均も違い、それぞれの集団としての個性は異なっていた。しかし、どのような個性がある集団であっても、保育者集団としてすべきことは、保育者それぞれの思いを大切に受け止めつつ多様な視点で保育を提案し、同じ方向を見て全員で

問題解決に取り組むことである。それにより同僚性の強みが増すと考えることができる。第1回・第2回と研究を重ねてきた結果として、保育という職場においては、お互いを認め合い、それぞれの多様な捉え方を容認するという同僚性は必要不可欠であり、保育者一人一人が「しあわせをカタチ」にするということにつながると確信した。その際、本研究で行った、保育を一緒にすることのない園外の第三者の実践を観て、場面や心情の捉え方を保育者自身の言葉で語り、その根底にある幼少期の経験を自己開示することは同僚性の構築の基盤となる相互理解を図ることに有効であるという可能性を見出すことができた。

7. おわりに

本研究は一考察に過ぎず、同僚性構築の必要性及び一つの方法の有効性が示唆されたに過ぎない。調査終了後に保育者同士が自主的に調査対象の5分間に編集された場面を語る姿がみられたこと、今回の方法を園内研修で取り入れ継続的に取り組むという声が協力園から届いたことから、引き続き試みとしての有効性を追究し、保育者の「しあわせをカタチ」にするための成果を実証することが課題と言える。保育者が相互理解を図り同僚性を構築し、心の安定をもって保育をすることを目指し、今後も検証に取り組んでいきたい。

謝辞

本論文は2023年度しあわせ研究費（研究テーマ：保育場面と心情の読み取りにおける多様性の要因と保育者の同僚性の構築を目指す試み）の助成を受けたものです。また、多忙な日々の中、質問紙調査にご協力いただきました協力園の園長先生はじめ保育者のみなさまにお礼申し上げます。

注釈

- ※1 中坪史典（2014）同僚性とは何か？インタビュー「先生同士の『同僚性』を高める」 これからの幼児教育 ベネッセ次世代教育研究所 P.20
- ※2 前掲

引用文献

- 1 黒沢祐介 (2012)「保育における拡大された同僚性の検討」『大谷学報』pp.72-82
- 2 中坪史典 (2014) 同僚性とは何か？インタビュー「先生同士の『同僚性』を高める」 これからの幼児教育 ベネッセ次世代教育研究所 P.20
- 3 古賀三紀子 世良田静江 世良田邦彦 関聡 (2011)「同僚性にもとづく保育のふり返りと保育者の育ちーより豊かな保育の質を求めてー」『久留米信愛女学院短期大学研究紀要』第 34 号 pp.131-136
- 4 高口知浩 伊勢慎 古橋啓介(2021)「公立保育所における同僚性の形成に関する質的研究ー離職保育者の語りからー」『福岡県立大学人間社会学部紀要』vol. 3 0 ,No. 1 , pp. 1 -20.

参考文献

社会福祉法人美樹和会(2023)『保育園に心理士がやってきた 多職種連携が保育の質をあげる』クリエイツかもがわ

樋口隆弘 (2024)『心理と保育の専門家が伝える 保育がもっとうまくいく方法 子どもの発達・保護者支援・セルフケア・外部連携』誠信書房

麻野耕司 (2019)『THE TEAM 5つの法則』幻冬舎

BERT を用いた保育士の感情分析

佐々木 多希子（武蔵野大学 工学部 講師）

小川 房子（武蔵野大学 教育学部 准教授）

要約

現代の保育の現場では、長時間化と多重役割による過重労働、慢性的な人材不足という実情があり、労働環境が要因のひとつと考えられる不適切保育や重大事故が社会的問題となっている。加えて、乳幼児理解、職場の同僚との協働、保護者との相互理解の観点から多様なコミュニケーションが求められることが、保育の難しさとして挙げられる。乳幼児の「しあわせをカタチ」にするために心身の発達を支える安心・安全な生活を確保すること、保育士の「しあわせをカタチ」にするために働きやすい環境を整備すること、が求められている。複雑かつ多様な保育における問題を的確に判断し、問題解決に導く方策の確立が期待される。本研究では、保育士のインタビュー内容を自然言語処理を用いて分析する。自然言語処理を用いて自動的に感情の分析をすることで、先入観にとらわれることなく、問題の所在を客観的に分析することが期待できる。本稿では、自然言語処理の事前学習モデルである BERT を用いて 7 名の保育士の感情分析を行った結果と考察について述べる。

1. はじめに

現在、保育士に関する問題の一つに離職率の高さが挙げられる。主な退職理由としては、給料の安さ、労働時間や仕事量の多さ、そして人間関係の問題などが挙げられている。給料の安さに関しては、仕事量に対して給料が見合っていないと感じる保育士が多いこと、労働時間や仕事量については、保育士の仕事量の多さや労働時間の長さが離職につながっていること、人間関係では、職場内のパワハラや女性が多い職場特有の問題が離職の一因となっていることが指摘されている[1]。

平成 29 年 4 月から令和 4 年 3 月までの東京都保育士登録者等 52,856 人が回

答している令和4年度東京都保育士実態調査結果（報告書）[2]の過去に保育士就業経験がある者の実態においても、保育士を辞めた理由として、「職場の人間関係」が3割強(31.5%)、次いで「仕事量が多い」(23.1%)、「給与が安い」(22.1%)、「健康上の理由」(20.6%) < (6) 保育士を辞めた理由 (BQ9) >と報告されている。

同調査の現在保育士就業中の者の実態においては、以前の職場を辞めた理由として「職場の人間関係」(38.1%)が最も多く、次いで「仕事量が多い」(25.2%)、「労働時間が長い」(20.9%)、「給料が安い」(20.6%)という結果が報告されており、退職の理由として労働環境が大きいことが推測される< (10) 以前の職場を辞めた理由 (AQ12) >と明記されている。職場を辞めた理由の4割弱が職場の人間関係を挙げている一方で、仕事の悩みを相談する相手は「家族」が6割強(62.2%)で最も多く、次いで「職場の同僚」(61.3%)、「友人(保育士)」(47.9%) < (13) 仕事の悩みを相談する相手 (AQ15) >という結果が報告されている。

保育の職場内で生じた労働環境に関する問題の解決を求めて相談をする相手も6割強が職場内ということになる。不適切保育、労働条件や労働環境の改善、人材不足など、解決する問題が山積みの保育の現場において、保育士の新たな負担にならずに解決するための方策を検討する必要があると考えている。

近年、労働環境の改善に、自然言語処理(Natural Language Processing, NLP)が用いられている。自然言語処理は、人間の言語をコンピュータが理解し、解析できるようにする技術やプロセスのことを指し、テキストや音声データからの情報抽出、言語生成、翻訳、感情分析など、さまざまな応用がある。例えば、従業員からのフィードバックやコミュニケーションを分析し、職場のウェルネスを向上させる取り組みがある[3]。自然言語処理を用いて、従業員の感情やストレスレベルを分析し、メンタルヘルスの問題に対処するための洞察を提供している。また、「Woebot」というチャットボットがメンタルヘルスサポートに自然言語処理を活用している[4]。このAIベースのチャットボットは、日々の会話を通じてユーザーの感情をモニタリングし、認知行動療法(CBT)に基づくサポートを提供している。また、企業内のコミュニケーションを分析し、生産性を向上させるプロジェクトも進められている[5]。[5]は、自然言語処理を利用して、メールや会議の議事録からコミュニケーションのパターンやボトルネックを特定

し、改善策を提案するものである。

このように、自然言語処理は労働環境の向上に役立てられており、保育の現場でも、自然言語処理を活用することで労働環境の向上につながることを期待できる。本稿では、7名の保育士のアンケートを、BERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers) とよばれるモデルを使って解析を行い、結果について考察を行った。本稿の構成は以下の通りである。第2節で、BERT と BERT を用いた分析の流れを紹介する。第3節では分析結果と考察を述べる。

2. 研究手法

(1) BERT

BERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers) は、Google によって 2018 年に発表された自然言語処理のための機械学習モデルである。BERT はテキストの文脈を深く理解することに特化しており、従来のモデルよりも高い精度で言語の意味を捉えることが期待されている。BERT の特徴は、テキストを双方向から同時に学習することである。従来のモデルがテキストを一方向からしか考慮しなかったのに対し、BERT は全ての単語を文脈の中で相互に関連付けて学習する。BERT は大量のテキストデータ (Wikipedia など) で事前学習され、幅広い言語理解タスクに対して高い性能を発揮するため、企業や研究機関から注目を集めている。BERT は様々な分野で応用されている。例えば、質問応答システムやテキスト中の人名、地名、組織名などの固有名詞の特定、テキストのカテゴリ分類や、テキストが肯定的 (positive)、中立的 (neutral)、否定的 (negative) など、どのような感情を表しているかの分析に用いられている。本研究では、BERT を用いて保育士7名のインタビューの感情分析を行った。

(2) 研究の流れ

今回は7名の保育士にインタビューを行った。インタビュアーとインタビュイーの発言はまとめ、インタビュー結果を発言ごとに分割し、モデルに入力する。本研究では、Hugging Face が公開している日本語の感情分析に適用できる事前学習済みモデルを用いた。事前学習済みの感情分析モデルには bert-japanese-finetuned-sentiment、トークナイザー学習済みモデルには東北大学 乾研究室

の bert-base-japanese-whole-word-masking を使用し、[6]を参考に実装を行った。

3. 分析結果

(1) テキスト毎の分析結果

以下に、インタビューA-I, インタビューF の分析結果の一例を述べる。以下は、「positive」と判断された文章の一例である。

番号	テキスト	ラベル	点数
(P1)	その場面を見てすごくそれを感じて、この子は1回食べたくないと言ったら何を言われてもやらない子だと思った。	positive	0.7439
(P2)	自分の意思がはっきりしていて言葉で伝えることができる、意思表示と言葉両方ともしっかりしている子だと思っている。保育者の関わりも丁寧に声をかけて、話をしっかりと聞いていると感じているのですね。	positive	0.9534
(P3)	その子が言葉でやりたくないと言っていたし、行動も食べたくないから何々しなさいと保育者に言われてもしないし、自分の意思表示と言葉が一致しているから、自分の思っていることと保育者に伝えていることが一致していたので、しっかりしている子だと思った。	positive	0.9685

(P2) は問題なく感情の判定ができていると思われるが、(P1), (P3) に関しては、感情ラベルや点数の解釈に、以下に述べる課題がある。

(P1) に関して:「この子は1回食べたくないと言ったら何を言われてもやらない子」という発言に着目して対象児の育ちを考えると、頑固さや他者の意見を受け入れない姿が思い描かれ、保育士の心情を推察するとネガティブな印象がある。一方で、保育士の発言を対象児の芯の強さとして捉えるとポジティブな印象になる。「positive」と判断されるのは、前後の文脈を BERT が解析した結果なのか、解析の範囲を明確にしたい。また、この文章が「positive」と判定され

るのに違和感があるのは、乳幼児の発達を的確に捉えて適切な指導をするという保育者の専門性から生まれる主観によるものなのか、明らかにしたい。この「positive」という結果がBERTを用いて客観的に分析することの有効性ならば、新たな方策として期待できるのではないだろうか。ただし、保育士が問題を把握するためには「positive」「negative」の根拠が明確にできることが重要ではないだろうか。これらの分析が今後の課題である。

(P3) に関して：この発言は、前半は、「何々しなさいと保育者に言われてもしない」という発言からもわかるように、保育者の考えと対象児の思いが対立している場面についてのものである。そのため、保育士の捉え方としては保育の停滞場面や困り感がある場面と捉えるのが一般的といえ、発言にも「negative」な印象をもつ。後半は「自分の思っていることと保育者に伝えていることが一致していたので、しっかりしている子だと思った」という発言から推察すると、対象児の長所を捉えていると読み取れる。そのため、「positive」という判定にも納得できる。このように「positive」「negative」が混在する発言と考えるが、文章全体は「positive」と判定され、点数も高い点に疑問がある。

そのため、前半と後半で二つの部分に分かれていたら前半と後半で違う判定がなされるのか、分析を行った。

テキスト (P3)	ラベル	点数
(文章前半部分) その子が言葉でやりたくないと言っていたし、行動も食べたくないから何々しなさいと保育者に言われてもしない。	neutral	0.5456
(文章後半部分) 自分の意思表示と言言葉が一致しているから、自分の思っていることと保育者に伝えていることが一致していたので、しっかりしている子だと思った。	positive	0.9768

この分析結果から、文章の前半と後半の点数の線形和で文章のラベルや点数が判定されているわけではないようである。前半を「neutral」と捉えているのは、事実を客観的に捉えていると判定されてということだろうか。

以下は「neutral」と判断された文章の一例である。

番号	テキスト	ラベル	点数
(NT1)	食べたくないとはまでは思わないかもしれないけ	neutral	0.5984

	れど、今日は苦手なもの入っているなと思うことは自分自身もあるかもしれないと思います。		
(NT2)	朝はお母さん、お迎えはおばあちゃん。母にその話を聞くと、離れるのが嫌でよく泣いていたけど保育室に入るとケロッとして結構泣き止んで遊んでいたと母から聞きました。だから先生に、「おいて行って大丈夫ですよ」とよく言われていたと聞きました。	neutral	0.7368

現段階では、「neutral」と判断された文章をどのように解釈すべきかは分かっていない。

以下は「negative」と判断された文章の一例である。

番号	テキスト	ラベル	点数
(NG1)	食べたくないって言っていたけど保育者に「座ってって」言われたら座っていたから、本当に食べたくなかったら、椅子にも座らないと思った。座ったってことはおなかが少しでもすいているのか、みんなと食べたい気持ちが少しでもその子の中にあるのかなと思って。保育者の「お茶だけでも飲もう、コップを取っておいで」と言われて、コップを取りに行くのではなく水を飲みに行ったので、のどは乾いているのかと思った。言い方はあれなんですけど、意地を張っているのかなと思った。一回食べないといったからそれを貫ているのかと思った実際はみんなと食べたい気持ちが心のどこかにあるのではないかと思った (NG1-1)。	negative	0.534
(NG2)	食べたい気持ちや飲みたい気持ちはあるけれど、お弁当の中身が嫌なのではないかと質問紙調査に書いてあるけれど、それは？	negative	0.9249

(NG2) は問題なく、感情の判定ができていると思われるが、(NG1) に関しては、感情ラベルや点数の解釈に、以下に述べる課題がある。

文章 (NG1-1) は、「positive」と判断された発言 (P1) と似ているが、ここではネガティブと判断されている。保育をする上では、「みんなと食べたい気持ちがあるのではないか」という保育の停滞や困り感を解消する対象児の言動から糸口を見出しているという意味では「positive」と判断できそうな部分が見えるが、ここでは「negative」と判断されている。前半の対象児の言動の捉え方が「negative」の判定の要因だろうか。(NG1-1) だけ抜き出して分析した結果は以下のとおりである。

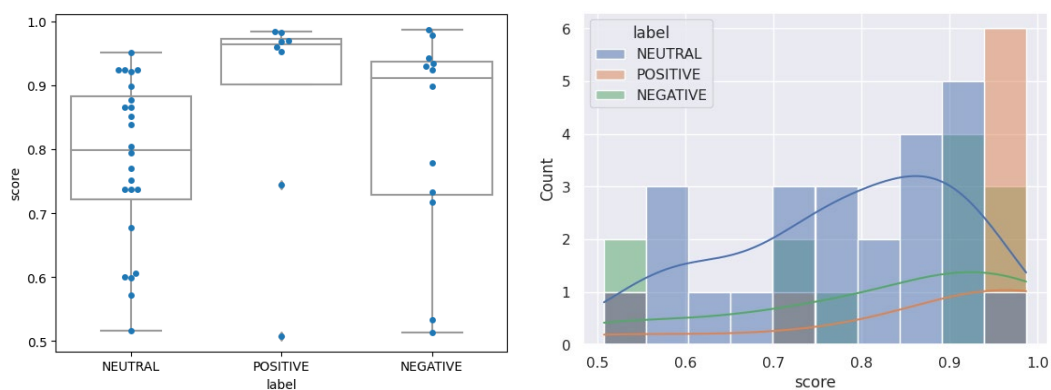
テキスト (NG1-1)	ラベル	点数
一回食べないといったからそれを貫ているのかと思った。 実際はみんなと食べたい気持ちが心のどこかにあるのではないかと思った。	neutral	0.8442

「positive」とは判断されなかったが、「neutral」と判断された。おそらく「意地を張っている」という文言にラベルや点数が引っ張られていると思われる。

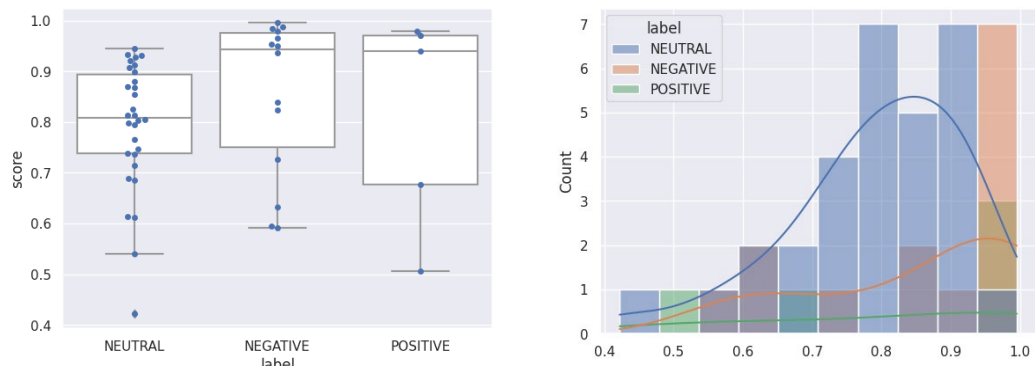
このように、感情ラベルの判断は実際の感覚と異なることが多く、その理由も不明瞭である。教育関係研究者や現場の保育士との話し合いなどをおして、保育の現場に特化したモデルの構築が必要と思われる。

(2) 感情ラベル毎の点数の可視化

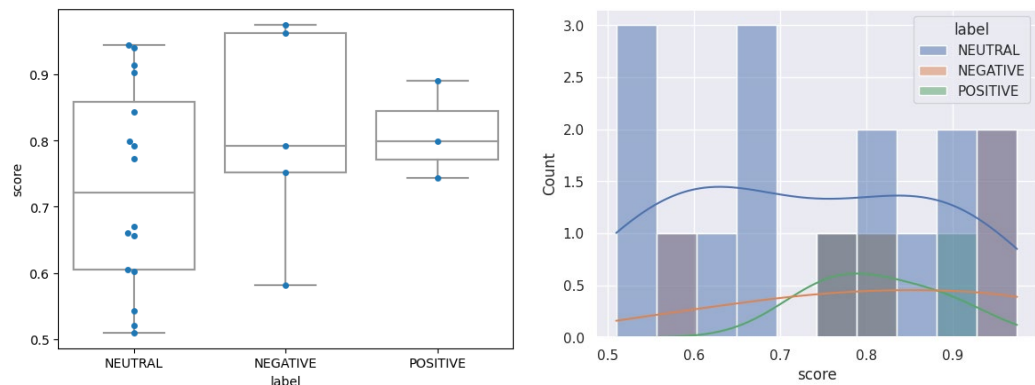
以下は、7名の保育士のインタビュー結果のラベルと点数を箱ひげ図とヒストグラムにした結果をまとめたものである。



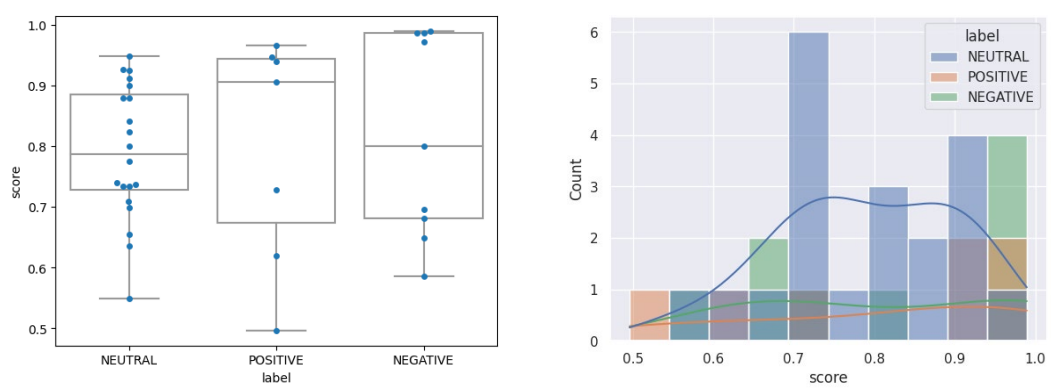
インタビューA-I, インタビューFの結果



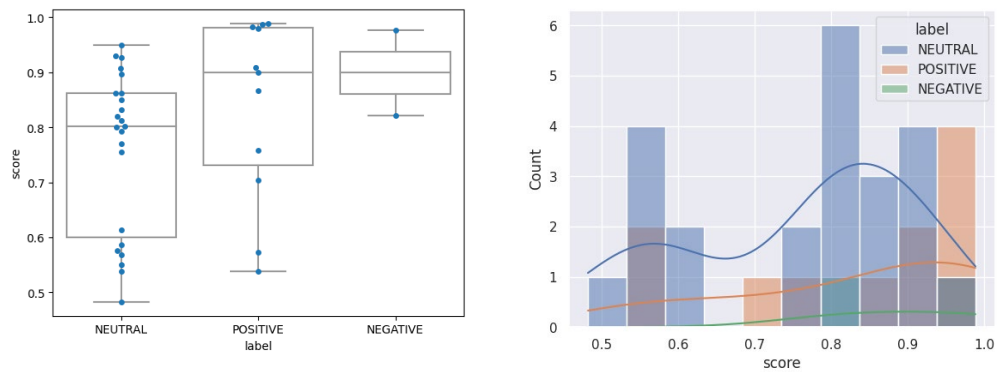
インタビューアーI, インタビュイーMの結果



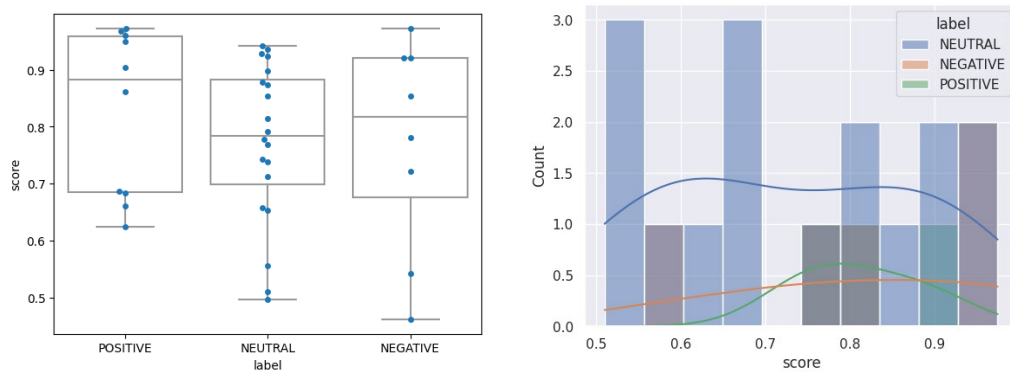
インタビューアーI, インタビュイーYの結果



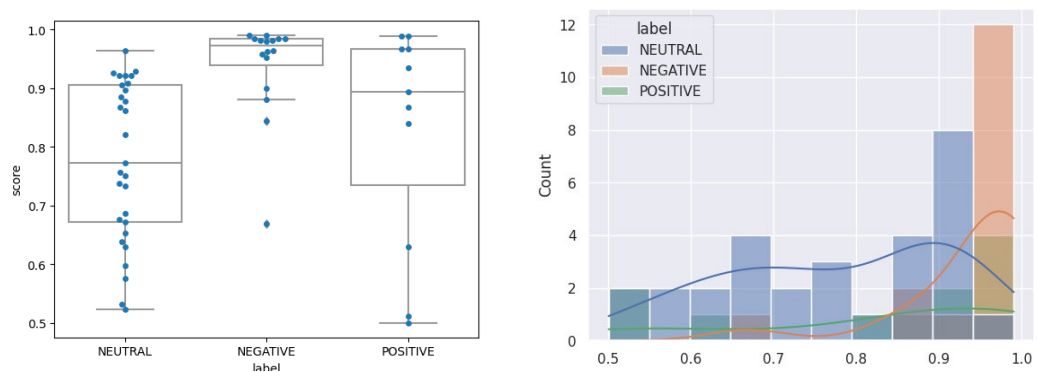
インタビューアーI, インタビュイーHの結果



インタビューアーK, インタビュイーNの結果



インタビューアーK, インタビュイーAの結果



インタビューアーK, インタビュイーIの結果

インタビューイーFのインタビューは、インタビューアーIとその他のインタビューに比べ、positiveな発言が多く、そのスコアも高いがnegativeな発言も多い。また、インタビューアーI、インタビューイーMの対談はnegativeな発言が多い。イ

インタビュアーK, インタビュイーIのインタビューは, negative な発言回数が多く, そのスコアも高い. インタビュアーKとのインタビューは, positive な発言の回数はどれも似ているが, 比較的スコアが高く, negative な発言も少ない.

しかし, ここの文章の分析結果に違和感があるように, 分析結果全体としても, 印象に違和感がある部分も少なくない. 例えば, インタビュアーI, インタビュイーMの対談では, インタビューの中で潜在的な感情と出会えてすっきりとポジティブに終えた印象であった. 印象と判定されたラベルの違いの解析, 現場に合わせたモデルのチューニングが今後の課題である.

5. 今後のしあわせ研究の展望

本研究では, Hugging Face が公開している日本語の感情分析に適用できる事前学習済みモデル (BERT) を用いて, 保育士7名のインタビューの感情分析を行い, 結果の考察を行った. 以下の課題が挙げられる.

(1) インタビューの課題

保育士の感情を分析する場合には, インタビューをする側、される側という立ち位置ではなく, 対話しながら内面になるものを自己開示することにより, 精度の高い分析が可能になるのではないかと考える. その点からいえば, 語る相手との相性も、少なからず判定に影響を及ぼすものなのであろうか. 内面を引き出すような問題設定, インタビューされる側の個性やコミュニケーションスタイルの理解も今後の課題である.

(2) 機械学習結果の理解と応用に関する課題

複数のタイプの人には話し方の癖, 言い回しの癖がある. また, 話し手の間, 呼吸, 目線, 身振り手振り, 声の強弱や抑揚などが加わり, 人間が話を聞き感情を分析するときには, それらすべてが「印象」という主観が聞き手の捉え方を左右すると考える. 事前学習済みモデル (BERT) が感情を分析する場合には, このような「印象」に左右されることなく, 客観的に判定するだろう. 今回の分析で筆者が抱いた違和感が文章から得る「印象」により生まれるものであるとすれば, より客観的に問題をあぶり出す事前学習済みモデル (BERT) を保育の現場

に取り入れることにも期待を抱く。その一方で「自分の捉え方」を大事にしながら乳幼児、同僚、保護者と向き合うことが重要視される保育において、この違和感をどのように扱うか検討すべき課題である。

（３）機械学習モデルの精度に関する課題

本研究ではモデルそのものや、保育の現場に合わせたファインチューニングを行っていない。今後は、保育のデータでモデルをファインチューニングすることで、保育特有の言語表現や感情表現をモデルに学習させること、損失関数をカスタマイズし、イタンビューのような不均衡なデータセットに対応できるようにすること、複数のモデルを組み合わせて個々のモデルの弱点を補うこと、ハイパーパラメータの最適化などを行い、より保育の現場に特化したモデルを構築することが今後の課題である。

6. おわりに

保育の複雑化、多様化する問題解決のための新しい方法を試みた。新たな一歩となる本研究では多くの課題を明確にすることができた。一人の保育者が「私の声は届かない」という悩みを自己開示した場合、保育者本人の資質、同僚との関係性をはじめとする職場環境、実践者である保育者の考えが尊重されないトップダウンの経営体制、など様々な可能性が考えられる。保育現場での問題解決には対話から改善策を見出すことが理想である。しかし、本研究の試みのように先入観にとらわれることなく、問題の所在を客観的に分析する新しい方法を取り入れることは、乳幼児の育ちを傍らで支える保育者が安心して保育に注力できるという「しあわせをカタチ」にすることにつながると期待できる。今後も新たな方法の確立に向けて研究に取り組みたい。

謝辞

本論文は2023年度しあわせ研究費（研究テーマ：自然言語処理を用いた幼児の感情分析）の助成を受けたものです。

参考文献

- [1]. 【2023 年最新】 保育士の離職率（3 年以内）と退職理由、なぜ離職率が高いといわれる？保育士人材バンク
<https://hoiku.jinzaibank.com/column/86> 2024 年 3 月 25 日閲覧
- [2]. 令和 4 年度東京都保育士実態調査結果（報告書）
<https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/kodomo/shikaku/r4hoikushichou sa.html>
- [3]. Desmet, B., & Hoste, V. (2020). Emotion Detection in Text to Enhance the Well-being of Employees. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 17(7), 2468. <https://www.mdpi.com/1660-4601/17/7/2468>
- [4]. Fitzpatrick, K. K., Darcy, A., & Vierhile, M. (2017). Delivering Cognitive Behavior Therapy to Young Adults With Symptoms of Depression and Anxiety Using a Fully Automated Conversational Agent (Woebot): A Randomized Controlled Trial. *JMIR Mental Health*, 4(2), e19.
<https://mental.jmir.org/2017/2/e19/>
- [5]. Arora, P., & Dey, L. (2019). Analyzing the Dynamics of Communication in Online Social Networks. *Heliyon*, 5(2), e01166.
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S2405844018342238>
- [6]. 簡単！ 事前学習済モデルを利用したテキストデータのネガポジ分析
<https://qiita.com/hima2b4/items/b6cd93937916bc2401f0>

日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その5）

―伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操制作の試み（その2）―

森田 ゆい

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員

東京立正短期大学 准教授

特定非営利活動法人 日本伝統芸能教育普及協会<むすびの会>事務局長・理事

大室 弘美

Musashino University Creating Happiness Incubation 客員研究員 武蔵野大学 客員教授

三浦 裕子

Musashino University Creating Happiness Incubation 研究員 武蔵野大学 文学部教授

武蔵野大学 能楽資料センター長

要約

本研究は、「幸せをカタチにする」ための基礎となる心身の健康維持・増進を目的に、日本の伝統芸能を活用する可能性を探求するものである。2017年度より研究を開始し、これまでに伝統芸能の実演家など計19名にインタビュー調査を行なった。その結果、「呼吸」と「足裏への刺激」が健康維持・増進に役立つ要素として活用できる可能性を導き出した¹⁾。そこでこれらの要素を取り入れたオリジナル体操の開発を目指し、2021年度に試作2種類 Ver.1 を制作し²⁾、2022年度に体操用の伴奏音楽（沖縄民謡）を収録した³⁾。

2023年度は、体操指導の現場で使いやすい形に整えた試作体操 Ver.2 を制作、動画コンテンツを作成し、公開した(<https://www.youtube.com/@musashinokenkou>)。加えて沖縄のデイケアサービス施設2ヶ所において対面で体操指導を行い、利用者の反応を観察した。本稿ではこれらの内容について、また体操開発の意義についての検証、そしてオリジナル体操の完成版に向けて新たに明らかになった必要な要素などについて報告する。

1. 本研究で開発した健康体操とその位置づけ等について

本研究では、健康寿命の延伸に寄与するために伝統芸能等の動きや音楽を取り入れ、誰もが楽しく容易に行える健康体操を開発した。その詳細は、「2. 試作体操 Ver.2 の制作、動画コンテンツの作成および公開」に述べた。

健康とは「身体的にも精神的にも社会的にもすべての要素がそろった生きがいのあるプロセスを大切に、様々なできごとを大きく捉えた心豊かな状態のこと（ウェルビーイング=幸福）をいい、単に疾病や虚弱でないということではない」（WHO 憲章、1999 年）。健康体操とは、身体活動〔運動と日常生活での動きのことであり、生活習慣病等の予防や治療、生活の質（QOL）及びウェルビーイングの改善に効果がある。また、身体活動に対する政策措置は 17 の SDGs のうち 13 の SDGs と相互に関連する。（GAPPA：身体活動に関する世界行動計画 2018-2030、「健康的な世界に向けて一人一人よりアクティブに」 2016 年）〕に関する健康教育の 1 つである。

健康教育の目的は健康の維持・増進であり、広義には「個人、集団または地域の健康を達成するのに最も役立つような全ての経験及びそうした影響を人々に与えるための努力や過程」であり、多岐にわたる（WHO「健康教育に関する研究」報告書。1969 年）とされている。健康体操は、本邦では健康づくりのための運動（体操）であり、健康増進を目的とした運動の総称として用いられる。有酸素運動、筋肉トレーニング、ストレッチ（柔軟性）、バランス運動及びラジオ体操等の種類があるが、その強度はあまり強くなく（1.5 メッツと 3 メッツの間。後述）、難易度も低いものである。椅子に座って実施するもの、上半身や下半身だけの動きのものもあり、年齢、体調、体の不具合等を考慮して、自分にあったものを選ぶこともでき、また、楽しんでもできるように音楽と共に実施するものもある。

健康体操は、厚生労働省による「健康づくりのための身体活動・運動ガイド 2023」（健康・医療・介護分野における身体活動を支援する関係者が対象。身体活動・運動に関する推奨事項及び参考情報等をまとめたもの。2024 年 1 月公表。<https://www.mhlw.go.jp/content/001194020.pdf>）においては、身体活動（運動）の 1.5 メッツ（運動強度）以上から 3 メッツ未満の強度の運動にあたるものである（図 1 参照）。

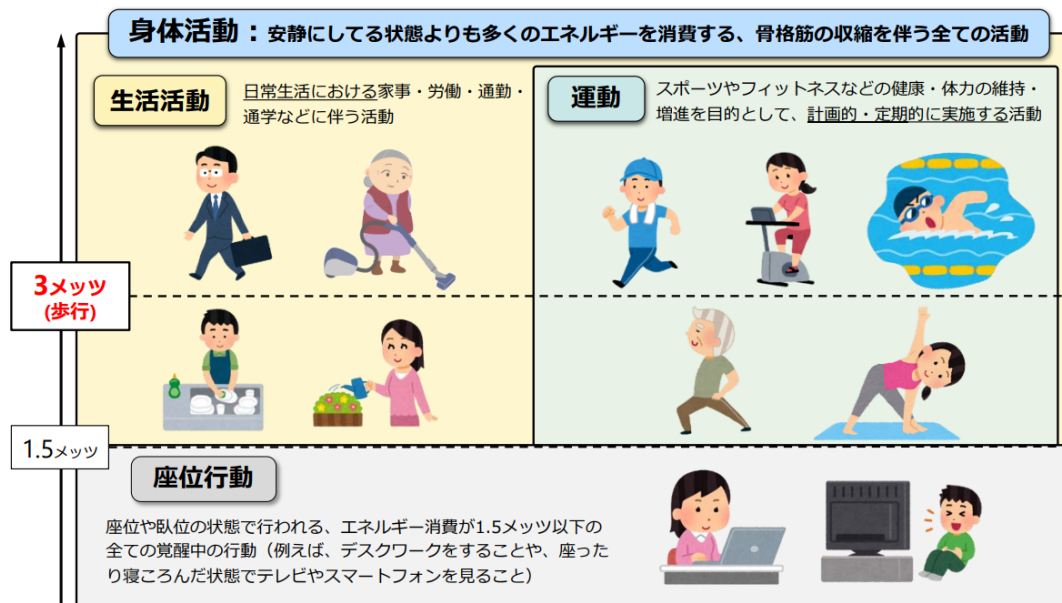


図１：身体活動（生活活動・運動・座位行動）の概念図

<https://www.mhlw.go.jp/content/001194020.pdf> より引用

メッツ（強さの単位）：運動の強さを、安静時の何倍に相当するかで表す単位。座って

安静にしている状態を1メッツ、普通歩行又はそれと同等が3メッツである。

メッツ・時（量の単位）：身体活動の量を表す単位。身体活動の強度(メッツ)身体活動の実施

時間（時）をかけたもの。

一般的な運動の効果として、生理的效果（体力向上、生理的機能の正常化、運動機能の維持・増進、生活習慣病の予防等）、精神的効果（気分転換、ストレス解消、メンタルヘルスの不調の解消等）及び社会的効果（人間関係の改善、新たな人間関係の構築等）があげられる。

本研究において、沖縄の音楽とこれまでの研究成果で見出した伝統芸能等において重要と考えられる要素（「呼吸の長い呼吸」「足裏への刺激」。2-1 参照）を取り入れて開発した健康体操は、沖縄民謡に合わせ、場合によっては歌いながら実施することができる。難易度も高くなく強度も強くない体操であるため、高齢者も楽しんで参加できる。運動強度も、座らずに立って行う、音楽の速度を上げる等により、適宜変えることができる。たとえば、運動強度については3メッツ未満を基本としたが、より運動強度を上げた体操を希望する方のために5～6メッツ程度にもなる体操も含めた。さらに、身体と精神の両方に働きかけ、運動

機能の維持・増進、気分転換や精神の活性化等を図ることができると考えられる。
また、皆と一緒に実施することによるコミュニケーションを図る等の社会的効果も期待できる。

本健康体操の運動強度は低いが、高齢者が安全に実施するためには通常の健康体操と同様の注意が必要である。参考までに、「健康づくりのための身体活動・運動ガイド 2023」における運動前及び運動中の確認事項を示す。

3 毎回の運動前の体調確認

- 毎回の運動前にも、体調確認を行う習慣をつけることが重要です。運動をする当日、家を出る前に行う体調確認のチェックリストを表3に示しました⁴⁾。1つでも「はい」がある場合は、無理に運動をせずに、休養をとり、必要に応じて医療機関を受診するなどの対処をしましょう。血圧が高めの方は、体調を確認するとともに、血圧（脈拍も）を測り、記録することを習慣化しましょう。

血圧は、5分以上安静にしてから測定します。過度の高血圧時に、運動実施によりさらに血圧が高くなり、心血管疾患イベントのリスクになることがあるため、運動前の血圧が160/100mmHg以上のときは、運動を行う場合であっても、散歩程度の軽い運動にとどめます。180/110mmHg以上のときは、運動は控えて休養をとります。

表3 運動前の体調確認

チェック項目		回答	
1	足腰の痛みが強い	はい	いいえ
2	熱がある	はい	いいえ
3	体がだるい	はい	いいえ
4	吐き気がある、気分が悪い	はい	いいえ
5	頭痛やめまいがする	はい	いいえ
6	耳鳴りがする	はい	いいえ
7	過労気味で体調が悪い	はい	いいえ
8	睡眠不足で体調が悪い	はい	いいえ

チェック項目		回答	
9	食欲がない	はい	いいえ
10	二日酔いで体調が悪い	はい	いいえ
11	下痢や便秘をしていて腹痛がある	はい	いいえ
12	少し動いただけで息切れや動悸がする	はい	いいえ
13	咳やたんが出て、風邪気味である	はい	いいえ
14	胸が痛い	はい	いいえ
15	（夏期）熱中症警報が出ている	はい	いいえ

4 運動中の注意

- 運動中に次のような症状を自覚するなど、体調に異変を感じたら、直ちに運動を中止しましょう。
 - 胸痛
 - 強い空腹感やふるえ
 - 冷や汗
 - 動悸
 - いつもと違う強い疲れ
 - めまいやふらつき
 - 関節や筋肉の強い痛み
- 肥満である場合は、運動により運動器障害が起こりやすいので注意しましょう。
- 水分・ナトリウム補給も重要であり、運動中も15分に1回程度は補給しましょう。
- ある程度の強度の運動を行う際には、ウォームアップ（準備運動）を必ず行うようにしましょう。ウォームアップの目的を要約すると、次の4点になります⁹⁾。
 - ① 運動中の傷害、内科的事故の発生・発症の予防
 - ② 運動パフォーマンスの向上
 - ③ 運動に対する心理的準備
 - ④ 運動実施者の体調の把握
- 気温（室温）や湿度に対する配慮も必要です。

<https://www.mhlw.go.jp/content/001194020.pdf> より引用

高齢者が体操等を行うことにより身体活動を少しでも増やすことは、介護予防につながる。市町村で行われる適切な介護予防の体操の要件として、①初めての人でも簡単にできる体操、②虚弱高齢者でも安全にできる体操、③虚弱高齢者から元気高齢者まで誰もが一緒にできる体操、④地域住民が体操の効果を実感できる体操、⑤介護予防の効果が実証されている体操が挙げられている（地域づ

くりによる介護予防を推進するための手引き（厚生労働省）。
<https://www.roken.or.jp/archives/10563>）。①、②及び③を満たす楽しく実施できる本健康体操は、介護予防にも役立つ可能性を持つと考えられる。将来的には④及び⑤を実証し、適切な介護予防の体操として、多くの高齢者の楽しい健康づくりに寄与したいと考える。

2. 試作体操 Ver.2 の制作、動画コンテンツの作成および公開

筆者らはこれまでの研究成果から¹⁾、伝統芸能の要素より「呼吸の長い呼吸」「足裏への刺激」が一般の人々の健康延伸に役立つ可能性を明らかにした。そこで、これらの要素を取り入れた健康体操を制作し、一般の方にも活用していただくことで国民の健康延伸に役立つことを目指した。

この課題に対して 2021 年度にオリジナル体操 2 種類 Ver.1 を試作し²⁾、2022 年度には体操用伴奏音楽（沖縄民謡）を収録した³⁾。2021 年度の体操の試作における報告において、今後の計画として以下をあげた²⁾。

- ① 本試作を実演可能な形に改訂・改善する
- ② ①のオリジナル体操の動画を制作する
- ③ ②を一般の方に実施して頂く機会を設ける
- ④ ③の効果を検証し、①をさらに改訂・改善する
- ⑤ オリジナル体操応用編を制作する
- ⑥ 試作したオリジナル体操およびその動画に関する著作権などの権利関係についての処理を行う

本稿では、このうち①～③および④の検証までを実施した内容を報告する。

2-1. 試作体操 Ver.2 の内容

これまでのオリジナル体操 Ver.1 を実施現場で使いやすい形に整えた。

「呼吸の長い呼吸」「足裏への刺激」を効果的に取り入れることを考え、全体を下に示す5つの流れを取り入れて全5曲の構成とした。

- 1) 導入と上半身ほぐし
- 2) 足裏への刺激と下半身ほぐし（足裏への刺激）
- 3) 全身を緩やかに動かしほぐす

4) アップテンポで全身を動かす

5) クールダウンで長い呼吸を行う（呼気の長い呼吸）

以上の本体操を『体ほぐし健康体操』と仮称した。

本体操に用いた音楽は、これまでの研究成果²⁾から、癒し効果が期待できる沖縄の民謡とした。沖縄の民謡のうち、沖縄の地元でよく知られ（ゆいレールの駅で使用されている等）人気の高い作品4曲（うち1曲はテンポを変えて2パターンで録音）を取り上げ、第一線で活躍する琉球古典音楽演奏家に演奏を依頼して2022年度にレコーディングを行った録音を用いた。収録に際しては、曲の長さやテンポを本体操に合わせて演奏していただいた³⁾。

5曲の曲名、bpm、目的、説明（公開動画の中で用いた言葉かけ）、姿勢、動作は次のとおりである。

（1）〈ていんさぐぬ花（ていんさぐぬはな）〉 bpm65

目的：導入として自分の体に対して労わる意識を持つ。

上半身の首まわり、肩まわりをほぐす。

説明：「最初に首まわり、肩まわりをほぐしていきましょう。」

姿勢：座位スタート（⑤以降は立位）

動作：① 片方の手で肩を撫でる × 2回（左右）

② 片方の手で肩をつまむ × 2回（左右）

③ 片方の手を耳に添えて首を倒す × 2回（左右）

④ 首を回す × 2回（右回り、左回り）

⑤ 頭の後ろで両手を組み、肩甲骨を寄せ、戻す × 4回

⑥ 腰に両手を添え、肩甲骨を寄せ、戻す × 2回

⑦ 両手を頭の上で組んで左右に倒す × 4回

⑧ 両手を頭の上で組んで、左右にひねる × 2回

（2）〈月の美しや（つきぬかいしゃ）〉 bpm65

目的：足の裏を意識する。

足の裏のうち母指の下、小指の下、踵の3部位別に刺激をする。

下半身を動かしてほぐす。

説明：「伝統芸能の達人の方々に健康に役立つヒントをくださいとお願いし

ましたら、足裏への刺激が健康に良いのではないかというお話がありました。そこで私たちも足裏に刺激を与えてみましょう。」

「親指の下、小指の下、踵を意識する動きが出てきます。」

「できる方は、裸足でチャレンジしてみてください。」

姿勢：座位／立位 両方の提示

動作：① 片方ずつの足裏を地面に押す ×左右4回ずつ

② 片方ずつの足裏を地面に押す ×左右2回ずつ

③ 両足の指を縮めてから、広げる ×2回

④ 両足の親指の下を意識して、地面を押す ×4回

⑤ 両足の小指の下を意識して、地面を押す ×4回

⑥ 両足の踵を意識して、地面を押す ×4回

⑦ 片方ずつの足裏を地面に擦る ×左右4回ずつ

（3）〈赤田首里殿内（あかたすんどぅんち）〉 bpm82

目的：全身をリズムに合わせて穏やかに動かす。

この民謡には、沖縄でよく知られた「手あそび」（人差し指で頬を触る、両耳を両手で触る、肘を掌で受ける、手のひらをさす）が含まれる。そこで、この「手あそび」を1番のみ8小節分行い、音楽を楽しみながら全身を動かし、全身をほぐす。

説明：「立ち上がり、左右に揺れたり、ひねったり、片足で立つ、屈伸をする、また「手あそび」（頬を触る、耳を触る、肘をトントン、手のひらを指でツンツン）も出てきます。」

「不安な方は椅子を持って一緒にやってみましょう。」

姿勢：立位／立位に不安のある方は、椅子などを支えにして実施する。

動作：① 上半身を左右に揺らす

② 上半身を後ろに捻る

③ 上半身を左右に揺らす

④ 「手あそび」

⑤ 片足立ちに挑戦 ×左右で2回

⑥ 両膝の屈伸×4回

（４）〈安里屋ゆんた（あさどうやゆんた）〉 bpm132

目的：運動強度を高くして全身を動かす。

説明：「思い切り全身を動かしてみましよう。元気に膝を高く上げて歩いたり、膝を思い切り高く上げたり、横に上げたり、音楽に合わせて動いていきます。その場でできるような運動です。」
「テンポアップに挑戦！」

姿勢：立位／立位姿勢に不安のある方は、椅子などを支えにして実施する。

動作：① 音楽のテンポに合わせて歩く
② 音楽のテンポに合わせて、膝を高く上げて歩く
③ 音楽のテンポに合わせて、跳ねながら膝を上げて歩く
④ 音楽のテンポに合わせて、跳ねながら交互に上げた膝に上げた膝と反対側の肘を付けて繰り返す
⑤ ④の動作に上半身のひねりを加える
⑥ ④の動作を行う
⑦ 音楽のテンポに合わせて跳ねながら、膝を交互に前方に蹴る
⑧ ⑦の動作に片腕ずつ前方にパンチをする
⑨ ⑦の動作に片腕ずつ前方に物を投げる動作をする
⑩ 音楽のテンポに合わせて跳ねながら膝を横に開げる
⑪ ⑩の動作に加え、片膝ずつ横に膝を伸ばして上げる
⑫ その場で走る動作をする

（５）〈ていんさぐぬ花（ていんさぐぬはな）〉 bpm98

目的：息を整え、長い呼吸をして全身をリフレッシュさせる。

説明：「伝統芸能の達人の先生方に健康へのヒントをお伺いしたところ、息を長く吐くことが健康に良いとお聞きしました。そこで息を長く吐く呼吸を試してみたいと思います。」
「体を整えましょう。」

姿勢：座位

動作：① 音楽に合わせて左右に揺れながら、４カウント息を吸う
② 音楽に合わせて左右に揺れながら、４カウント息を吐く

- ③ ①と②を繰り返す
- ④ 体（好きな部位：肩、ふくらはぎ、もも）をさすりほぐす
- ⑤ 音楽に合わせて左右に揺れながら、８カウント息を吸う
- ⑥ 音楽に合わせて左右に揺れながら、８カウント息を吐く
- ⑦ 大きく息を吸い、できるだけ長く息を吐く

２－２．動画コンテンツの作成

２－２－１．工夫

動画コンテンツの作成にあたり、以下の工夫を行った。

- １）指導者１名とパフォーマンスを専門とする大学生アシスタント２名が、見本動作を行う。その際には、座位と立位を同時に示し、立位が不安な方に椅子を支えに保持するパフォーマンスも示し、さらに動作が視覚的にわかりやすいように画面に対して正面と横向きでの動きを同時に示す。
- ２）動画を見た方が運動に意欲が出るような言葉掛けを、３人が適宜行う。
- ３）できるだけ３人の動きが大きく見えるような画角とする。
- ４）指導や意欲的になる言葉掛けの内容は、テロップで表示する。
- ５）テロップ表示は、内容によって字体や文字サイズ、画面の提示場所などを変えるなどの工夫をする。
- ６）指導者とアシスタントは、澁刺とした印象になるような服装をし、また、話し方のトーンなどを工夫する。

２－２－２．公開

無料動画共有サービスである YouTube のプラットフォームを用いて、「武蔵野大学しあわせ研究所 健康寿命の延伸研究プロジェクト」という名称のアカウントを作成し、以下の５本の動画を公開した。

(<https://www.youtube.com/@musashinokenkou>)

- １）「体ほぐし健康体操 その１ ♪ていんさぐぬ花」
- ２）「体ほぐし健康体操 その２ ♪月の美しゅ」
- ３）「体ほぐし健康体操 その３ ♪赤田首里殿内」
- ４）「体ほぐし健康体操 その４ ♪安里屋ゆんた」

５）「体ほぐし健康体操 その５ ♪ていんさぐぬ花」

2023 年 11 月 2 日に公開し、各タイトル画面に、「健康への第 1 歩」「じぶんの身体をご自愛しましょう」「沖縄民謡の音楽に合わせて体ほぐし」とコメントを入れた。（視聴回数は 2024 年 3 月 7 日時点で述べ 271 回）

３．体操指導と指導対象者の反応の観察、並びにアンケート調査

本体操を効果的に使用して頂く主な対象者として、心身の健康維持・増進に日々取り組んでいるデイケアサービスの利用者を考えた。本体操では伴奏音楽に沖縄民謡を用いていることから、沖縄のデイケアサービス施設 2 か所に研究協力を依頼し、対面での体操指導を行い（指導者：森田ゆい）、対象者の反応を観察し、また、体操実施後にアンケート調査を行った。

３－１．体操指導対象者

デイケアサービス施設 A：沖縄県南城市 2024 年 2 月 22 日 14 時 30 分開始

16 人の利用者を対象（全員 80 代）

座位及び立位姿勢（3 名）への指導を行った。

デイケアサービス施設 B：沖縄県那覇市 2024 年 2 月 23 日 14 時 30 分開始

22 人の利用者を対象（全員 90 代）

座位姿勢のみでの指導を行った。

どちらも指導時間は、導入、振り返りを含めて 30 分程度となった。

３－２－１．音楽について

どちらの施設においても歌を歌う人が数名おられ、また、音楽を聴くことを楽しんでいる様子を見せる利用者もいらした。このため、耳馴染みのある音楽が用いられている効果は、とても大きいように見受けられた。また、２－１．（３）〈赤田首里殿内〉に含めた手遊びについては、ほとんどの方がご存知で、皆で行なってくださった。

３－２－２．運動について

自発的に参加していただける動き（内容）と運動強度、適度な所要時間であったことを確認できた。２－１．（２）〈月の美しゅ〉の靴を脱いで足裏の特定の部位を意識する運動は、初めて行う動作であったとのことで戸惑いも見られたが、問題なく行なってくださった。

３－３．アンケート調査

施設Ａで５人、施設Ｂで１人を対象に、聞き取り形式でアンケート調査を行った。アンケート調査の項目は、「動きの強さ」「動きについて」「音楽について」「またやりたいと思うか」であり、５段階評価で回答して頂いた。

アンケート調査の結果は、次のとおりであった。

＜動きの強さ＞ 普通：４人、少し大変だった：１人、少し足りなかった：１人
（大変、足りなかったの回答はなし。）

＜動きについて＞ とてもやりやすかった：３人、やりやすかった：１人、普通：２人
（やり難かった、とてもやり難かったの回答はなし。）

＜音楽について＞ とても良かった：５人、良かった：１人
（普通、良くなかった、非常に良くなかったの回答はなし。）

＜またやりたいと思いましたか？＞ とてもやりたい：６人
（やりたい、どちらでもない、やりたくない、絶対にやりたくないの回答はなし。）

いずれの項目についても高評価が得られたが、デイケアサービス利用者は要介護認定を受けた方々であるため、認知機能がおとろえている方が含まれる可能性があり、また、対面の聞き取り形式の調査であることから本音をいえない場合もあることから、本回答は参考として扱うこととした。

３－４．施設管理長からのアドバイス

施設管理長から指導の内容および利用者の反応を観察の上、以下のようなアドバイスを受けた。

１）体操の導入部分において、利用者の参加の気分を盛り上げることが非常に大切。（施設Ａでは施設の職員が導入を行なってくださった。施設Ｂでは指導

者が行った)

- 2) 立って行う動作は、職員が補助に入らなければいけなくなるので、デイケアサービス施設で体操を行う際には人員の確保の問題等があり、実施のハードルが高くなる。このため、デイケアサービスでの体操は座位を基本とした方がよい。(この指摘を受けて、施設 B では座位のみで行なった)
- 3) 靴を脱ぐ動作や足裏の部位を刺激する動作は非日常的なものなので、脳への刺激にもなり、とても良いと思う。また、音楽のテンポを上げる前に改めて靴を履き、気分を整えて再び大きく動く気持ちに持って行くのが良いと思う。
- 4) 同じ動作を繰り返し行う要素を加えても良いのではないか。(音楽をととても楽しんでいらしたので。)
- 5) もう少し見た目にトレーニングを行なった感を抱かせる要素を加えるのも良いかもしれない。例えば、ゴムバンドを使用する筋トレ的な要素を含めるのはどうか。運動を行うことで、利用者が自己肯定感を高めて帰宅してもらうのも良いと思う。

施設 A は日常的に活動の中で運動を多く取り入れており、本研究にも積極的に協力してくださった。一方の施設 B は介護老人施設と併設のため、自宅から通う人の多い施設 A の利用者とは生活スタイルが異なる利用者であることが推察された。しかし、指導を行なった際には、両施設の利用者の参加態度に大きな違いは見受けられなかった。また、利用者の年齢も 80 代と 90 代の違いがあったが、両施設で同程度の楽しみ参加する様子が観察された。歌いながら参加される方も両施設で観察された。

以上から沖縄におけるデイケアサービス利用者の本健康体操に関する反応を総合的に判断すると、本体操はデイケアサービス現場で今後活用していただける可能性が高いと考えられた。

4. 完成形の「体ほぐし健康体操」制作に向けて

前章で述べたようにデイケアサービスでの本体操の指導への反応に手応えがあった。また、デイケアサービスでは日常的に体操の動画を使用している現状を知り、体操動画のニーズがあることを確認できた。そこで、本健康体操をデイケ

アサービスの利用者を主な対象とし、上記3等から得られた以下の要素を踏まえて、改善・完成させることを目指すこととする。

- ・デイケアサービスで実施する運動の要素：① 全て座位での運動とする。 ② 繰り返しの動作を含む。 ③ ゴムバンドを用いた筋トレの要素を加える。
- ・動画コンテンツの要素：① 画面の作りを大写しとする。 ② 定位置に大きなテロップを入れる。

5. 沖縄における沖縄民謡の普及に関する聞き取り調査

沖縄における沖縄民謡の普及に関して、沖縄国際大学日本文化学科教授・琉球芸能文学研究会顧問 田場裕規先生に聞き取り調査を行なった。（2024年2月21日沖縄国際大学にて）以下にその内容を記載する。

まず沖縄での民謡の普及には、下記の2つの民謡を放送するラジオ番組の影響が大きい。

1) 「民謡で今日拝なびら」（みんようでちゅううがなびら）

琉球放送 月～金曜日 16:00～17:00 1963年より現在

2) 「暁で～びる」（あかちちで～びる）

ラジオ沖縄 月～土曜日 5:00～6:55 1986年より現在

また1)の番組からの提唱で3月4日を「ゆかる日 まさる日 さんしんの日」とし、1993年の第1回「さんしんの日」以来、毎年公開生放送が行われ、正午から午後8時まで9回の正時の時報音に合わせて「かぎやで風」（沖縄でお祝いの席の幕開けに演奏される曲）の演奏の放送がある。そして、この放送は沖縄のみならず日本国内（福岡、長野、大阪、神戸、名古屋、神奈川、東京、札幌）、海外（国：アメリカ、ブラジル、南アフリカ、インド、イギリス、フランス、中国、タイ、ドミニカ等⁴⁾）でも「さんしんの日」として中継が繋がれ、沖縄民謡を用いた一大イベントになっている。

本健康体操で用いている沖縄民謡のうち〈ていんさぬぐ花〉は、「沖縄の心を伝える親や年長者の教えに従うことの重要性を説く教訓歌」として知られ、沖縄の幼稚園、小学校では広く歌われている作品である。

また、この教訓の元となっているのは程順則（1663-1735）という清国に渡って儒教を学び、六諭（「孝順父母、尊敬長上、和睦郷里、教訓子孫、各安生理、毋作非為（父母に孝順にせよ、長上を尊敬せよ、郷里に和睦せよ、子孫を教訓せよ、各々生理に安んぜよ、非為をなすなかれ）」の教えを解説した『六諭衍義』を（清国で）出版して琉球に持ち帰った人の影響があると考えられる。なお、『六諭衍義』とは薩摩藩を通じて徳川吉宗の手に献上され、吉宗の命により荻生徂徠が訓訳本（1721 年）を、室鳩巢が大意を日本語訳して『六諭衍義大意』（1722 年）を出版した。これが各藩に流布して民衆道徳（寺子屋などで文章作法や手習いの教本としても印行された）に大きな影響を与えたと言われている⁵⁾。

沖縄古典音楽において、沖縄の精神性を伝える役目をもつ楽器担当は歌・三線である。歌・三線は伝承の厳しさにおいても他の楽器とは異なる要素を持つ。琉球における三線音楽の始祖として、「歌と三線の昔始まりや犬子ねあがりの神の御作」と琉歌（読み人知らず）に詠まれる「赤犬子（あかいんこ）」⁶⁾ という伝説上の人物がおり、歌・三線の継承においては、この赤犬子からの伝承が意識されている。

「赤犬子」が祀られている読谷村の赤犬子宮では、前述の「さんしんの日」にも琉球古典音楽と舞が奉納されるが、特に秋の「読谷村まつり」では、奏者、踊り手 200 人あまりが赤犬子を讃える「赤犬子琉球古典音楽大演奏会」が行われ、現代においても琉球古典音楽の祖として沖縄の人々の中で大切にされている。

6. まとめ

本稿では、まず心身の健康維持と延伸に体操を活用する意義について述べた。そして、日本の伝統芸能を活用したオリジナル健康体操を開発する目的に向けて試作体操 Ver.2 を制作し、動画コンテンツの作成と公開した内容を説明した。加えて、デイケアサービス施設利用者を対象として対面での体操の指導を行い、その際の利用者の反応の観察結果について報告した。また、本体操の伴奏音楽である沖縄民謡が沖縄でどのように普及されているのかについて情報収集した。

デイケアサービス施設で対面指導を行なったことなどをもとに、本オリジナル健康体操の対象者をデイケアサービス利用者に特定することが適切と判断す

ることができた。その上で、対象をデイケアサービス利用者に特定した場合に必要な要素を明らかにした。

付記

本稿は、2023 年度しあわせ研究所の助成を受けた研究「幸せをカタチにするための基礎となる心身の健康の維持・延伸に関する研究—伝統芸能の活用および健康教育の普及—」により得られた成果を報告したものです。ここに、同研究所に感謝いたします。

インタビュー調査にご協力下さった田場裕則先生、対面での体操指導の機会を与えて下さった施設長の山原ゆかり氏および興那嶺将氏に感謝申し上げます。

なお、本研究は武蔵野大学のしあわせ研究所研の研究倫理委員会の承認を得て、実施されました。本研究を行なった森田ゆい、大室弘美、および三浦裕子には、申告すべき利益相反はありません。

引用文献

- 1) 森田ゆい, 大室弘美, 三浦裕子(2019)「日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る—実演家へのインタビュー調査を通じて—」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』vol.2,pp.1-12.
森田ゆい, 大室弘美, 三浦裕子(2020)「日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（２）—伝統芸能の実演家と曹洞宗僧侶へのインタビュー調査を通じて—」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』Vol.3,pp.1-21.
- 2) 三浦裕子, 森田ゆい, 大室弘美(2022)「日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その３）—伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操制作の試み—」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』Vol.5,pp.1-17.

- 3) 三浦裕子, 森田ゆい, 大室弘美(2023)「日本の伝統芸能を活用して健康寿命の延伸を推進する可能性を探る（その４）—伝統芸能が継承する知恵に基づくオリジナル体操創作における伴奏音楽の役割について—」『武蔵野大学しあわせ研究所紀要』Vol.6,pp.1-17.
- 4) RBC 沖縄放送さんしんの日 HP より <https://www.rbc.co.jp/34day/>
2024 年 3 月 7 日午前 1 時の検索結果による。
- 5) 田場裕規(2022)「憂鬱なことばの教育 —『琉球板本六論衍義大意』をめぐって—」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』Vol.26-2,pp.31-46.
- 6) 泉恵得(2012)「琉球伝統音楽に於ける歌い出し(アインザッツ)の研究—『古典音楽工工四』編」『琉球大学教育学部紀要』Vol.81,pp.384-371.

プロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験はアイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成にどのように影響するのか

林 佳祐（ヴィッセル神戸） 渡辺 英雄（武蔵野大学教育学部教育学科 准教授）

要約

サッカーは世界中で最も多くの国・地域で行われているスポーツの一つであり、多くの国・地域がプロリーグを有している。各リーグには多くの外国籍選手が異国の地でプレーしているが、これまでプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がどのように選手に影響を与えるかの研究は多くない。

本研究はプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験が、アイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成の観点からどのように選手達に影響を及ぼすかを明らかにすることを目的に行われた。この目的のために、プロサッカー選手として海外移籍を経験した3名に半構造化インタビューを用いて調査を行った。

研究結果として、プロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がアイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成に大きく影響することがわかった。異文化体験はサッカー選手のキャリア形成において重要な要素である「自己不安」、「代替キャリアの模索」に対して良い影響を与えることがわかった。また、異文化体験により、職業的アイデンティティは変化しやすいが、国家的アイデンティティは変化しにくいことが明らかになった。海外移籍による異文化体験が、プロサッカー選手に肯定的な影響を与えた理由として、サッカーという集団スポーツでのチーム内活動時間が長いことにより、異文化に触れる時間が通常よりも濃く、幅広い異文化に触れる事が出来たことが大きな要因だと考えられる。

1. 本研究の背景

サッカーは世界中の一番多くの国・地域で行われているスポーツの一つである。また多くの国・地域がプロリーグを有している。そのような状況の中で、多

くのプロサッカー選手が海外移籍を行う。CIES Football Observatory (2023) が 135 リーグに行った調査では、全 62,610 選手中 14,405 選手が外国籍であった。そして外国籍の選手の人数は増加傾向である。ただこれまでプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がどのように当人たちに影響を与えるかについての研究は多くはない。

一般的に他国での異文化体験は、体験者の異文化コミュニケーション能力やキャリアへの考え方を変えることがわかっている。たとえ短期間での異文化体験であっても、異文化コミュニケーション能力は向上するという研究報告は多い (e.g., Ra et al., 2022; Shiri, 2015; Tajeddin et al., 2020)。また異文化体験はキャリアに影響を与えることもわかっている (e.g., Kronholz & Osborn, 2016; Valls-Figuera et al., 2023)。

アスリートに関する研究において異文化体験はこれまで十分に研究が進んでいない。日本国内の研究では、阿部他 (2021) が行った日本におけるアスリートのキャリアに関する研究動向をまとめた調査がある。多くの研究はアスリートの「競技引退」、「支援制度」、「雇用・就職」、「キャリア発達」の 4 つの分野を中心に行われてきたことがわかった。阿部他 (2021) は 1996 年から 2020 年までの研究の動向をたどり、アスリートのキャリアはアスリートを取り巻く環境が影響していると分析した。1996 年から 2002 年までは J リーグが発足して、プロサッカー選手のセカンドキャリアについての研究が盛んであった。また 2011 年から 2020 年まではアスリートの職務、能力の汎用性を模索するようなキャリア形成についての研究が顕著であった。前述の通り、プロサッカー選手は自国を離れて競技を行う数が増えている。海外移籍に伴う異文化体験がどのように選手たちに影響を及ぼすかは注目に値すると考える。

2. 先行研究

アイデンティティ

アイデンティティとは国籍、人種、性別による区別だけでなく、人々がそれぞれをどのように認識することも含まれる (Lawler, 2014)。またアイデンティティとは自分を他人に対してどのように示すのか、また同時にどのように自分が他人に認識されるかも含む (Paltridge, 2022)。大沼 (2003) は、ナショナル・

アイデンティティとスポーツの関係をアイルランドに焦点を当てて、議論している。スポーツには国籍、民族、宗教の影響が大きく見られるという。アイルランド島の大部分を占めるのがアイルランド共和国であり、北部分が英国領である。そこではキリスト教のカトリックとプロテスタントの対立が続いており、サッカーチームもそれぞれのコミュニティを基盤としている。サッカーチームが宗教の特定のグループに関連付けられる状態が続いており、対立構造が如実に表れる。

スポーツ選手とアイデンティティの関係は、競技にどれ程継続的に関わる心理的状况かというスポーツ・コミットメントという観点からも研究されてきた。スポーツ選手の競技者アイデンティティは、このスポーツ・コミットメントの形成に大きな役割を果たすと考えられている（萩原・磯貝、2014）。競技者アイデンティティは他者との関わりや環境に関係する「社会的要因」と個人の感情や志向性に起因する「心理的要因」の2つの要因によって形成される（溝上、2008）。

異文化コミュニケーション能力

異文化コミュニケーション能力は複数の要素から成り立っていると考えられている。Byram (2020) によれば、異文化コミュニケーション能力は知識（自文化、他文化に関する知識）、態度（自文化、他文化を偏見なく理解する姿勢）、手法（自文化、他文化に関する事柄について深層的に理解する術を持つこと）の3つから構成されている。

この異文化コミュニケーション能力は異文化体験により向上する。それが短期間の異文化体験でも異文化コミュニケーション能力は高まると先行研究は示している。Shiri (2015) は8週間アラブ圏に滞在した大学生 352 人に調査を行った。研究対象者は、現地の歴史、政治を有したり、日常的ではないコミュニケーション場面で適切に振る舞ったり、中級程度の異文化コミュニケーション能力を得たと評価された。Ra et al. (2022) の調査では、タイから英語圏へ短期留学した際に、学生の異文化への態度がどのように変化するかを調べた。異文化体験により、英語の多様性への寛容度が高まったことがわかった。

キャリア形成

サッカー選手においてキャリア形成はキャリアのどの段階でも重要である。それはサッカー選手の平均引退年齢が約26歳と若いうちに引退をしないといけない状況があるからである。また引退後8割以上のJリーガーはサッカー界から離れずにいる（上代・野川、2013）。このような状況をキャリアトランジションの観点から研究することができる。Drahota & Eitzen（1998）はRole Exit Model という枠組みを考案し、スポーツ選手のキャリアトランジションを理解しようとした。Role Exit Model では4つの段階があるとされている。第一段階は「自己不安」である。次の段階が「代替キャリアの模索」であり、第三段階が「転換期」である。転換期では、引退に焦点をあて、能動的な引退であるか、それとも受動的な引退であるかの2つに分けられる。最後に「新たな役割の創造」がある。ここでは未練やあきらめ、社会からの反応、家族などの重要な他者への影響が重要な要素となる。

上代・野川（2013）はJリーガーにインタビュー調査を行い、「転換期」にどのような行動パターンがあるのかを明らかにした。研究の中で、「転換期」のキャリアトランジションは、解雇通告を受けて、次のキャリアを紹介してもらう「受動型」、解雇通告を受けて、自ら次のキャリアに移行する「半受動型」、自ら引退を決め、自ら次のキャリアに進む「能動型」の3つのパターンに分類された。そして、解雇通告を受けて、自ら次のキャリアに移行する「半受動型」が一番多いパターンであった。

3. 研究課題

本研究では下記の研究課題を明らかにする。

- （1）海外移籍に伴う異文化体験はサッカー選手のアイデンティティにどのように影響するのか。
- （2）海外移籍に伴う異文化体験はサッカー選手の異文化コミュニケーション能力にどのように影響するのか。
- （3）海外移籍に伴う異文化体験はサッカー選手のキャリア形成にどのように影響するのか。

4. 研究方法

本研究は、インタビュー調査法を用いて行われた。インタビューデータの信頼性を維持するために、インタビューは文字起こしが行われた。分析の妥当性を高めるために、この研究ではインタビュー中に追加の質問を組み込み、インタビュー対象者から提供されたコメントについての説明を求めた。

インタビューデータを分析するために、この研究では Ritchie and Spencer (1994) によって開発された分析枠組みを使用した。分析は3つの分析段階に従った。枠組みのコーディングとその開発、データの枠組みへの当てはめ、そして解釈を行った。まず、文字化されたインタビューデータは内容のまとまりごとにパッセージに分割された。その後分割されたパッセージごとにコーディングが行われ、ラベルが割り当てられた。次に、ラベルに基づいてフレームワークが開発された。次に、各パッセージに枠組み内のカテゴリが割り当てられた。最終的にデータは、著者によって解釈された。

5. 研究対象

研究対象は日本国籍のプロサッカー選手2名（大輔、悟）、オーストラリア国籍のプロサッカー選手1名（マイク）である。研究対象者3名はプロサッカー選手としてのキャリアを過ごしている間にそれぞれ複数年の海外移籍経験がある。大輔はアメリカで3年間、悟はオーストラリアで5年間、マイクはクウェートで2年間、その後ベトナムにて1年間プレーした。悟は既に引退し、大輔とマイクは現役プロサッカー選手としてのキャリアを継続しているが、どちらも海外移籍を経て現在はそれぞれの国内プロリーグで競技を続けている。

6. 結果

インタビュー調査結果では、枠組み分析により分類されたカテゴリに分け、研究対象者3名（大輔、悟、マイク）ごとの分析結果を示す。

アイデンティティ（国家的・職業的アイデンティティ）

大輔は日本とアメリカにおける文化の違いから異文化で自身のアイデンティティを確立することに戸惑いを見せた。ただ異文化に触れ自ら考えることにより、自分なりのアイデンティティを確立していった。大輔には日頃から自分が悪

くなくても『ごめん、ごめん』と謝る癖があったと言ひ、現地でもトレーニングや試合中に先に謝ることが多かった。ある日、大輔は自分に非がない場面でごめんと謝ったところ、プレーに対しての議論がしたかったチームメイトからとても怒られたと話す。『日本人特有の揉めたくない、ことなきを得ようと当たり障りないようにすると逆にキレられた』と語った。さらに『日本人は相手から褒められた時にそんなことないですよ。って返答する人が多いですよ』と大輔が言うように、日本の謙遜する言動に対して、アメリカでは私生活やプレー等で褒められた際には『ありがとう、嬉しいよ』と相手の褒め言葉に対して素直に受け入れる姿勢があることに気付いた。これらの経験から大輔はそれぞれの国でのコミュニケーションの取り方、考え方、行動に大きな違いがあると感じた。しかし大輔は自国とは異なる環境に身を置いても、『時間を守るとか挨拶をする、さぼらないとか、日本人の勤勉さみたいな部分は海外では強みになる』と考え、日本人としてのナショナル・アイデンティティを保持した。その結果、人としての信頼感はアメリカでプレーしていても感じる事ができたと話す。

大輔はプロサッカー選手としてのアイデンティティについてアメリカでの経験に影響を受けた。プロサッカー選手として、『アメリカでプレーする選手は結果が全て。もちろんチームを勝たせたいと思っているけど、一番は自分が活躍出来ればそれでオッケーと思っている選手ばかり』とチームメイト達の個人至上主義な一面を見たと言う。大輔は日本でのチームを重んじるサッカー文化を持ちながらも、個人で結果を残すことが大切だと考えるアメリカの職業的アイデンティティにも影響を受けた。さらにアメリカではプロサッカー選手に対する周りの反応や対応にも驚いたという。『空港とかでも普通に話しかけられる。長々と会話をしてくる一般人もいて、向こうではプロサッカー選手はただ単に職業の1つっていう感じ』と周囲の扱いに日本でプレーしていた時との差を感じた。それは、周囲だけでなくアメリカのプロサッカー選手自身の振る舞い方にも差があると大輔は話す。『自分がプロなんだっていう雰囲気は別に出さないし態度で示したりもしない。逆に日本のサッカー選手の中にはプライドが高くて偉そうな人もいますしね』と違いを語った。

悟はオーストラリアのチームメイト達とのアイデンティティの違いを発見しながらも、幼少期から続けているアイデンティティを貫くことがあった。それは、

時間に対する考え方や、ロッカールーム等の集団で使用するスペース時での行動だったと話す。日本で生まれ育った悟には日本的な考え、習慣が染みついており、『時間を守る、ロッカールームのごみを片付けて帰る、洗濯してもらうユニフォームや靴下は裏返しにしない。だって、日本でしていたことを違う国に来たからってしなくなるのは気持ち悪いじゃないですか』と自身の行動に関しては日本ではこうするべきと考えられる行動を意識していたと話す。

次に悟はオーストラリアと日本、二国間によるファン・サポーターのプロサッカー選手への扱い方の違いに気付いたという。『オーストラリアではブーイングが少なく、負けてもよく頑張ったという感じ。日本ではＪリーガーは一目置かれている。持てはやされるというか神みたいな扱い。あれはプロ意識が芽生えるだろうなって思いますね』と話すように、日本ではファンサービスにおいてサインや写真を撮って終わりということが多いことに対し、オーストラリアではファンがフランクに話かけてきて会話をする場面が多いことも日豪の差ではないかと悟は考えた。

マイクは異なる文化や宗教の国に身を置きながらも、マイクのアイデンティティが変わらない部分があった。クウェートでプレーしていた時に一番驚いたことは、『多くのイベントが男性のみで行われ、スポーツは男性のものといった雰囲気。特にスタジアムは男性の場所といった感じで試合の時、女性は僕の妻しかいなかった』と話す。オーストラリアでは家族が試合を観戦することは自然なことで、そこに『性別の差はない』と話す。クウェートでのスタジアムにおける習慣は理解していたが、マイクはチーム側に家族席の用意をお願いした。マイクの妻はスタジアムでの観戦は許可されたものの、『妻が用意された席は普通の観客席。外国籍選手の妻でも決してVIPシートに座れるとは期待しない方がいい』と、その国でのハイアラキー、男女間の差を感じたと語る。

マイクは自国とは異なるクウェートやベトナムのアイデンティティにプレッシャーを感じることはあったが、多様性を認めて異なるサッカー文化でも現地の価値観に適応しようと努力した。『ベトナムやクウェートではサポーターから外国籍選手に対して執拗に違いを生み出すことを期待されていた』と話す。それはチームスポーツとしてチームの一員として扱われていた母国オーストラリアで戦う外国籍選手のチームメイトが受けていた扱いが自分とは異なっていたと

語る。『ファンからはプレーの内容ではなく、ゴールを決めたか、アシストをしたか数字を問われ、結果が出なければ SNS で厳しく非難されることもあった』とクウェートやベトナムでの経験を語る一方で、オーストラリアでは『選手は勝利の為、全てのプレーヤーには役割があり、それを遂行する。それがオーストラリアで習い育ってきたサッカーの考え方』と、サッカーの考え方、文化が違う事がプロサッカー選手に対する周りの振る舞いや扱い方に違いがあるのではないかとマイクは考える。マイクは海外移籍により異なるアイデンティティに触れながらも、『海外ではいつも結果に追われてプレッシャーを感じる事が多かったが、それぞれの国で違ったサッカー観がある。常にオープンマインドでその国のサッカー文化にも適応したいと思っている』と異国のアイデンティティにも理解を示し、マイク自身のアイデンティティにも影響を与えた。

異文化コミュニケーション能力（知識・態度・手法）

大輔は異なる文化の言動や相手との距離感に対して違いがあると知り、現地の人々との言動や相手との距離感に適応した。またそのように振る舞う背景についても考えようとした。大輔はアメリカでプレーする中で監督、チームメイトとの距離感が日本でのプレー時と比べて凄く近かったと話す。『アメリカでははっきり物事を言っても後腐れないし、断られても全然引きずらない。でも、仲良くなったら凄い深い付き合いが出来る。距離感が全然違う』と日本とのコミュニケーションの違いを見つけ、それ以降大輔は現地での言動の仕方に適応する努力をして、彼らとの距離感を縮めた。大輔ははっきり言葉として伝えようとする現地の人々の言動や距離感の近さについて『移民が多いので、裕福な人が多くなかったと思うから、育ちというか環境で、みんなで助け合う事が凄く多かったのかな』と語る。

また大輔はアメリカでの人々のコミュニケーションの取り方を知り、自国の年齢や経歴を意識する文化と比較し、自身の経験と照らし合わせた。アメリカのチームメイトが大輔と接する際に年齢を気にするという事はなかったと話す一方で、大輔は『逆に日本に帰ってより周りがすげ一年齢を気にしているなって感じる時が増えました』と違いに気付いた。大輔は年齢だけではなく経歴についても日米間のチーム内での違いを経験した。大輔が語るように『アメリカも経歴は

気にするけど、日本の方が強いなって印象かな。アメリカはプレーを見て良ければすぐに経歴はひっくり返し、認めてもらえる。日本だと契約を勝ち取る時に経歴がかなり影響したし、過去どこでプレーしていたとかは気にされて認められるまでに時間がかかりますね』と違いを話した。

悟はオーストラリアでの人々の言動に影響を受けた。そしてそのような現地の人々の言動は文化的背景が影響しており、悟自身も著名人と話す時のフランクな関わり方を自国のそれと比較した。『日本では年齢による上下関係はどこのチームでもあったけど、オーストラリアではどのチームでも監督やチームメイトとの上下関係はほぼないに等しかった』と話す。そして、悟自身もオーストラリアでは年齢や上下関係に関わらず、フランクな言葉遣いや行動で監督やチームメイトと接することを意識した。しかし、悟は『でも、トレーニングの準備とか雑用系、ボール回しの鬼は若い選手が率先して最初入っていた。あと、面倒くさいことは若い選手って決まっていた感じ。全然対等なんだけど、どこかに境目はあったと思う』と、全ての状況で上下関係がないとは考えていないようだった。また、悟は『オーストラリアは多民族な国だからこそ、年齢や地位で人を判断したり、言動を変えたりしないのではないかな』と考えていた。一方で『日本では年齢や肩書き、社会的地位とか過去の実績が凄く大事で、そういう人達を上に見てしまうところは確かにあると思う』と悟は感じていた。『オーストラリアのチームメイトのお父さんが超有名なニュースキャスターで本当なら絶対緊張するような人なのに、凄くフランクで話しやすかった。もし日本だったらあんな風には話せないなって思った』と、悟はオーストラリアでの経験談を語った。

悟は異文化でのコミュニケーションの取り方に影響を受け、チーム内での振る舞いにも変化させた。『日本でのキャラクターとは全く別の自分でチームメイトと関わっていたと思う。しっかり溶け込めるように日本では絶対言わないような事も言ってたし、それで笑ってくれて嬉しかったりもした』と、現地ではオーストラリア人っぽい振る舞いを見せる等、異文化間で態度を変えていたと話す。『他文化でみんな違ったバックグラウンドを持っている中でしっかりとその人を見て尊重している感覚はあった』と悟がとった行動に対しての監督やチームメイトの反応にも考えを述べた。

マイクは自国とは異なるコミュニケーション方法と言動に気付き、現地で受

け入れられる為には、自身の言動を変化させる必要があると気付いた。また、そのような異なる言動はその国の歴史的背景が影響していると考えた。マイクはクウェート、ベトナムと計3年間海外でプレーをして気付いた点があった。『クウェートもベトナムも僕が育ったオーストラリアに比べてオープンでカジュアルな国ではないことはわかっていたけど、会話する相手との関係性によって敬語の使い方や敬意を示すジェスチャーがあることには驚いた』とマイクは話す。マイクが『チームメイトが誰かに挨拶しているところを見ると、その人との関係性やその人が権力を持っているかもわかる』と話すように、クウェートやベトナムではオーストラリアで交わっていた他者への挨拶や言動に大きな違いがあることに気付いた。そしてマイクは『そのようなふるまいの文化はその国での歴史からきているのではないか』と考えるようになったという。一方で、オーストラリアでのカジュアルな挨拶や上下関係を気にしない言動に対してマイクは『いくら外国人でもクウェートやベトナムでは年齢や地位が上の人に対しては受け入れられないのではないか』と考えた。

マイクは現地で言動を意識的に変化させた。『現地の人々のようになることを目指す必要はないけど、カルチャーバリアを克服する方法は、彼らの文化に溶け込むこと、彼らの生き方や言動、働き方を学んで努力することが文化に適応する近道だと思う』とマイクは話す。マイクはそれ以降、チームの代表や監督と握手を交わす時は、チームメイトが行う握手の仕方と同じ方法で敬意を示すようになった。マイクは『外国人の僕がする必要はなかったのかもしれないけれど、現地では正しいとされる行いをすることによって、相手からも文化に馴染もうと努力している事が伝わるんじゃないかと思ってしていた』と考えがあったことを話した。

キャリア形成（不安・職業選択）

大輔は将来のキャリアに対する不安はあったものの、海外移籍を経て考え方に影響を受けた。大輔は海外移籍前から常に不安を抱えながら選手を続けてきたと話す。『不安があるかないかでいうと常に不安です。特にサッカーを終えた後の不安が一番強いですね』と大輔は語っているが、『何しようっていうより、なにがしたいんだろうっていうのが一番大きい』と話すように競技を終えた後

のキャリア形成に不安を持っていた。しかし移籍に伴う渡米後、チームメイトが空いている時間に様々なことに興味を持っている姿を見て、大輔は考えさせられる部分があったという。大輔はチームメイトの行動を見て、『選手をしながらブロックチェーン、NFT（非代替性トークン）の勉強をしたり大学院で勉強したり、いろんな事をしている人が多い。そういう環境に居たことで、自分も選手をしているうちから興味を持っていることにもっと手を出していった方がいいのかなと感じるようになったんです（NFTの説明を著者が追記）』と話す。

大輔は渡米後、キャリア選択の考え方に大きな影響を受け、サッカーだけではない新たな興味を見つけ、選択肢を広げた。大輔は海外に行くまでは一般会社が保有しているサッカー部に所属していた為、引退後は正社員としてその一般会社に雇用してもらうか、教員免許を保持している事もあり体育の先生になるかの2択しか考えがなかったという。海外移籍の経験を経て、チームメイトのキャリアに関する考え方に触れた大輔は、『サッカー以外で興味のある事を見つけてそれを仕事にしてみたいと思っています。今だと日焼け止めの制作に興味があるんです』と、多くのチームメイトがサッカー以外の自分の好きなことを見つけ選手をしながら勉強し、仕事にしている姿を近くで見たことで、『こちらの人は引退後にサッカー以外の事で何か楽しんでやってるなっていう憧れはある』と話し、『海外に行かなければ、少なくとも自分で日焼け止めを作りたいとはならなかったと思う』と、大輔は海外移籍を経た事で新たな興味が見つかったと話す。

悟は将来のキャリアに大きな不安を持っていたが、オーストラリアの人々の働き方や考え方に影響を受け、不安が減少した。悟も大輔同様に大きな不安を抱えながら選手生活を過ごしていた。大学卒業後、日本でプロのサッカー選手になれないと分かった時が悟の1つのターニングポイントだった。『あの当時が一番不安だったのと、その不安を消し去るっていう意味でも英語を身に付けたいとオーストラリアを選んだんです』と悟は海外移籍を決断するが、オーストラリアでチームメイトの働き方、生活スタイルを見て悟の不安が緩和されたと語る。悟は引退し日本に帰国後、収入や生活水準は選手時代よりも下がったと言う。それでも悟は、『オーストラリアの人々は幸せのハードルが低いと感じた』と語るように、収入やどんな仕事に就いているか等、他人と比べることなく身軽な考え方

をオーストラリアでの環境に触れて手に入れる事が出来たと話す。悟は『日本に帰国して今も不安はありますが、たとえ収入や生活水準が下がっても幸せを感じられる感覚がある。そう感じれるのは間違いなくオーストラリアでの5年があったから』と断言する。

悟の帰国後の職業選択は海外移籍での経験が大きく影響している。現在、悟は、サッカーとは全く関係のない公務員を本業としながら、週に1回友人のサッカースクールで指導を行っている。悟が大学を卒業した頃はサラリーマンの道を選んだら終身雇用、サッカーを選んだらサッカーで生計を立てるしかないという考えだった。オーストラリアのチームメイトの働き方、考え方を見た時に悟の中で考えが変わる感覚があったという。悟は、『日本は0か100という考えで、両方は出来ないでしょという考えがある。自分もそう育ってきた』と話すように2つの事を同時に行ったり、一度決断したら辞めて違う道を選ぶことは難しいと考えていた。しかし、悟が『サッカーしたければやればいいし、駄目だったら他の事をすればいい。最悪オーストラリアに行って何かしてもいいし』と今はもうどこでも行けるような心の軽さを持っていると悟は話す。『凄く柔軟に考えられるようになった』と悟は語り、このような心にゆとりと持てるようになった背景には悟のオーストラリア時代のチームメイト達の存在があった。悟のチームメイトにはサッカー選手とそれ以外の仕事、所謂ダブルワークで働く選手が多くいた。彼らの他にも家族との時間を大切にする選手、休みをしっかりとって仕事と余暇を上手く分けている選手など、個々のライフスタイルを確立している人々の環境に悟は素敵だと思い憧れを抱いた。日本に帰国した悟がそのオーストラリアのチームメイトと似た生活スタイルは何かと考えた時に浮かんだのが『就業時間、就業日数が決まっており、残業も少ない公務員だった。』と悟は考えたとのことである。『公務員が一番サッカーから遠いように感じるけれど、一番オーストラリアっぽい自分らしく生活が送れると思い決めました』と話す。働いてみてイメージと違えば辞めて違う事をすればいいと、その心の余裕もオーストラリアで影響を受けた思考ではあるが、『今のところストレスなく働けている』と、海外移籍での経験が悟のキャリア形成に大きな影響を与えている。

マイクも大輔や悟同様に自身のキャリアに関して常に不安はあったが、2人とは違い異文化体験を経ても、マイクのキャリアに対する不安は軽減されなか

った。マイクがプロサッカー選手として特に不安を感じる理由は、契約の短さだった。『一生懸命プレーして、契約を勝ち取っても1年や10か月、短い時は6か月の時だってあった』とマイクが話すように、契約を終えてチームと契約更新が出来なかった後の事を考えると常に『さあでは次は？どこのチームと？どの人と話をしようか？と気持ちが休まる時がなかった』と当時の葛藤を語った。『もちろんみんながそうではなかったけど、僕の場合は6ヶ月～1年で契約更新していかなければならなかった。そこで判断されるのはいつも何ゴール決めたか、何アシストしたかっていう数字がほとんどだった』と、マイクがプレーしたクウェートやベトナムの外国人選手に対する契約期間の短さ、評価基準が更にマイクのキャリアの不安を増幅させたと話す。

海外移籍による他国でのプレー経験は、マイクの職業選択には大きく影響を与えなかったものの、人生における優先順位を再認識させ、働き方に影響を与えた。マイクは21歳当時、プロ契約ではなくセミプロ契約だった。周囲には同年代でプロ契約がいる中で、自身が契約出来ていない不安から大学進学を視野に入れていたが、『自分がこれからもずっと関わっていききたいことはサッカーだと気付いた』と語るように、その後もサッカー中心の生活を送ってきた。その後、海外に渡りプロ契約として3年間過ごしたが、マイクが21歳の時に確信した『サッカー中心の生活を送る』考えに変化はなかった。ただ、引退後にどうサッカーに関わっていくかには変化があったと話す。『昔はチームを持ったり、監督になろうと思っていたが、今は自分のサッカーアカデミーを持ちたいと思っている』と考えを述べた。その考えの裏には、土日に試合がありイレギュラーな予定が多いチームを持つことや、どこの国・チームの指揮を執るか分からない監督業は、『場所や時間の制限がかかる』という事が大きな理由だった。自身で運営するサッカーアカデミーであれば、『どこで、いつ、何を教えるかは全部自分で決められる』という事もマイクの引退後のキャリア形成を後押ししている。マイクは妻と話をする中で、『海外移籍を経験して家族と離れて暮らし、僕自身の生活で何を求めているかも変わった』と答えるように、マイクはもっと自身の人生をコントロールしたいと考えるようになった。今後引退しても、指導者としてサッカーには関わり続けたいが、海外移籍を経て人生の優先順位を再認識したマイクがどうサッカーと関わるかに変化があった。マイクは海外移籍が大きな分

岐点だったと語る。

7. 考察

海外移籍とアイデンティティ

海外移籍に伴う異文化体験は、自国と他国のナショナル・アイデンティティを十分理解した上で、適切に自国の言動や価値観を異文化環境で発揮出来る能力の向上に影響するといえる。具体的には、大輔が周囲から認められ、信頼感を感じることができたと話す『さぼらないことや日本人の勤勉さ』を強みとして現地で実践したこと、悟が『時間を守る、ロッカールームのごみを片付けて帰る』といった現地の人々とは異なる価値観に対しての振る舞いを評価されたことは、両者ともに異なる文化を持つ環境でも自国のアイデンティティを保持したといえる。特に興味深い点は、異文化コミュニケーション能力も異文化体験により向上した中で、態度を柔軟に変化させる術を知っているうえで状況に応じて判断し、自国のアイデンティティを貫いて、異なるアイデンティティを持つ人々と適切に生活を送っていたことである。つまり、異文化体験により、どちらのナショナル・アイデンティティを選択しても良い場面で、他国の異文化に適応するだけでなく、自国の文化的背景を忘れずに、日本人としてのアイデンティティを選択する術も身に付けたといえる。ただ、大輔や悟のように自国と他国のナショナル・アイデンティティを理解し、柔軟に選択できる能力を身に付けるために、どれほどの期間を要するかは、さらに研究していく必要がある。

またインタビュー調査結果から、ナショナル・アイデンティティとスポーツには関連性があり、特にプロサッカー選手の地位や扱われ方、外国籍選手に求められているものはプレーする国によって違いが見られた。大輔はアメリカでプレーする選手達は日本人選手よりも結果を求めて、チームよりも個人の活躍を重視する傾向があると語ったように、移民の国であるアメリカの人々はスポーツを通して成功を収めたいというその国のルーツや文化的背景から来ている可能性がある。また、選手に対する周囲の扱い方について、悟はファンや一般人からフレンドリーでカジュアルに扱われた経験から、オーストラリアのフランクな文化がこのような扱い方に影響していると考えられる。これはプロサッカー選手が『Jリーガーは一目置かれている』と分かる日本での周囲からの扱いとの比

較から、プロサッカー選手という職業的地位が、日豪間で異なるといえる。一方、マイクがクウェートやベトナムで経験した外国人選手に結果を強く求めるアイデンティティは、自国で各選手達にチームプレーを求めるオーストラリアのスポーツカルチャーとは異なっておりスポーツ内においても文化の違いが見て取れる。インタビュー結果からのナショナル・アイデンティティとスポーツとの関連性は大沼（2003）の先行研究に類似する結果となった。一方で、今回のインタビュー調査から、参加者3名ともに自身の国家的アイデンティティを異なる国で保持する場面が目立ったことに対して、プロサッカー選手としての職業的アイデンティティに関しては、大輔がアメリカでの経験を経て、より結果を意識するようになり、マイクが異国のサッカー文化や価値観を理解しようとしたことから、職業的アイデンティティは国家的アイデンティティよりも異文化体験の影響を受け、比較的柔軟且つ変化を受けやすいのではないかと推測できる。異文化体験が与える双方のアイデンティティへの影響に関しては、さらに継続的な調査が必要だと考える。

海外移籍と異文化コミュニケーション能力

海外移籍に伴う異文化体験は異文化コミュニケーション能力の「知識」、「態度」、「手法」に大きく影響するといえる。インタビュー調査で分かったことに、海外移籍の経験から、自文化と他文化、双方の価値観や考え方を評価し、その言動の背景や考え方を理解し異文化環境下で適切な振る舞いをしようとする能力が向上した。大輔はアメリカでの海外移籍から帰国後、改めて日本人々は『すげ一年齢や経歴を気にしながら』相手との関わり方を変化させると日米の文化の差を見つけた。悟はオーストラリアのチーム内で『上下関係はほぼないに等しかった』と監督、チームメイトに対して年齢や肩書きではコミュニケーションの仕方を変えていないと語る。大輔は『移民の人々が多いから、育ちとか環境で助け合う事が多かったのかな』と話し、悟はその背景に『オーストラリアは多民族な国だからこそ、年齢や地位で人を判断したり、言動を変えたりしないのではないかな』と考えた。マイクはクウェートやベトナムで経験したハイアラキーや肩書きによる言動の変化は『その国の歴史的背景から来ているのではないかな』と考えを述べた。興味深い点は、3名とも自文化と他文化の価値観や考え方を理解し

たうえて、それぞれの環境下で適切にコミュニケーションの形を変化させていたことだ。例えば、マイクは自国のオーストラリアでは監督や年上のチームメイトに対しても、『相互にオープンでカジュアルな会話を好む』と理解しているうえで、クウェートやベトナムでプレーした際は、チームメイトや人々の歴史や文化を受け入れて、現地の挨拶や振る舞いをマイクも実践した。『彼らの文化に溶け込むこと、現地で正しいと思われる行いをする』がカルチャーバリアを克服する近道だと考え、異文化の環境下に適切な振る舞いを見つけた。つまり、異文化コミュニケーション能力の「知識」や「態度」が向上するだけでなく、「手法」も海外移籍による異文化体験で身に付いた可能性があると言える。Byram (2020) の提唱する異文化コミュニケーション能力の3つの構成要素が向上した理由としては、サッカーという集団スポーツでのチーム内活動時間が長いことにより、異文化を観察する時間が通常よりも濃く、幅広い異文化に触れる事が出来たことが要因だと考える。そして、異文化体験が異文化コミュニケーション能力の向上に関係することは、Ra et al. (2022)、Tajeddin et al. (2020)、Shiri. (2015) の先行研究とも一致する。

海外移籍とキャリア形成

海外移籍に伴う異文化体験はキャリア形成に大きな影響を与えるとインタビュー結果から考えられる。特に「現役中の引退後に向けたキャリア形成への行動」、「キャリア形成への意識の変化」、そして「将来の仕事との関わり方」は、異文化でプレーする中で、異文化環境や人々との出会い、考え方に触れて大きく影響を受けていることが分かった。インタビュー結果により、3名とも『現役中から引退後のキャリアは常に不安だった』を語る。大輔は『なにをしようではなく、何がしたいかわからない』と話し、悟は『当時一番不安だった時に、その不安を消し去る為に英語の勉強を』と、海外移籍を決めた。前述の通り、現役中からのキャリア形成の不安は、現役中に引退後の明確なキャリア計画が出来ていない事が要因の一つだと分かる。海外移籍により大輔はチームメイトが空いている時間に積極的に興味のあることや将来のキャリアについて考え勉強している姿に影響を受け、悟はチームメイトがサッカー選手という仕事だけでなく、違う職業も同時に行うダブルワークという働き方を間近で見てキャリアの考え方

が大きく変わった。この調査結果から、解雇通告を受けて、自ら次のキャリアに移行する「半受動型」が一番多いパターンであった（上代・野川、2013）と先行研究にはあるが、異文化体験をすることにより、より能動的にキャリアトランジションをする傾向にあることが本研究の分析から言える。

職業選択においても異文化体験が大きく影響していることも非常に興味深い。大輔はチームメイトや引退した選手がサッカー以外の事で何か楽しんでやっている姿を見て憧れを抱き、大輔自身も興味がある事について勉強をするようになった。悟は現在引退して公務員として働きながら、サッカーの指導者というダブルワークで生計を立てているが、その働き方は異文化体験により獲得したキャリアの考え方である。マイクは引退後もサッカーに関わっていくことに変化はなかったが、長い海外生活で家族と離れて暮らす日々が続く、マイクの価値観や考え方に変化があった。マイクがどのようにサッカーと関わっていくかは「家族等の重要な他者への影響」が大きく関係している。悟はオーストラリアで職業や収入に関して、周囲の人々が『他人と比べることなく身軽な考え方』を持っていたことに影響を受け、悟自身も引退後は「社会からの反応」を気にすることが減り、悟自身の『幸せのハードル』を下げた。3名によるインタビューの分析結果から、Drahota & Eitzen (1998) の Role Exit Model が示す4つの段階である、「自己不安」、「代替キャリアの模索」、「転換期」、「新たな役割の創造」は3名のインタビュー対象者の重要なキャリアトランジションの段階と一致している。さらに、海外移籍に伴う異文化体験はこれら4つの段階全てでキャリア形成に肯定的な影響を与えると見える。

8. 結論

本稿ではプロサッカー選手の海外移籍に伴う異文化体験がアイデンティティ、異文化コミュニケーション能力、キャリア形成に大きく影響することがわかった。具体的には、異文化体験は職業的アイデンティティに大きく影響することが明らかになった。またキャリア形成において異文化体験以前に保持していたキャリア観を変えることがわかった。それによりサッカー選手のキャリア形成の過程で起こる「自己不安」や「代替キャリアの模索」に影響を与えた。海外移籍による異文化体験が、自他国のアイデンティティの理解を深め、異文化コミュニ

ケーション能力3つの構成要素に肯定的な影響を与えた理由としては、サッカーという集団スポーツでのチーム内活動時間が長いことにより、異文化に触れる時間が通常よりも濃く、幅広い異文化に触れる事が出来たことが要因だと考える。また、海外移籍はキャリア形成にも大いに影響を与えられとされる。海外でプレーしながら異文化環境や人々との出会い、異なる考え方に触れることで、キャリアに大きく影響を与えていることがわかった。

今後は、本研究では明らかにならなかったキャリア形成において「自己不安」が解消されないケースの要因、国家的アイデンティティが異文化体験でも変化が少ない要因について研究が進められる必要がある。

謝辞

本論文は2023年度しあわせ研究費（研究テーマ：異文化体験が及ぼすキャリアアビリーフ（職業的信念）への影響）の助成を受けたものです。本研究のインタビュー調査に協力して下さった3名の方々に礼申し上げます。

参考文献

- 阿部拓真, 木村和彦, 醍醐笑部, & 作野誠一. (2021). アスリート・キャリアに関する国内研究の動向と課題: スコーピング・レビューを通じて. 体育・スポーツ経営学研究, 34, 1-23.
- 大沼義彦. (2003). アイルランドにおけるスポーツの背景: エスニシティとナショナル・アイデンティティとの間. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 89, 89-103.
- 上代圭子, & 野川春夫. (2013). 日本人元プロサッカー選手のキャリアプロセスに関する研究 自主的な引退と非自主的な引退に着目して. 生涯スポーツ学研究, 9(1-2), 19-31.
- 萩原悟一, & 磯貝浩久. (2014). スポーツにおける個人・社会志向性と競技者アイデンティティの関連を基軸としたスポーツ・コミットメントモデルの検討. スポーツ産業学研究, 24(1), 1_7-1_15.
- 溝上慎一. (2013). 自己形成の心理学: 他者の森を駆け抜けて自己になる. 世界

思想社.

- Byram, M. (2020). Teaching and assessing intercultural communicative competence: Revisited. Multilingual Matters. *The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 27, 70-84.
- CIES Football Observatory. (2023). Global study of football expatriates (2017-2023) <https://football-observatory.com/MonthlyReport85> (最終閲覧 2024 年 2 月 14 日)
- Drahota J. A. T. & Eitzen, D. S. (1998) The role exit of professional athletes. *Sociology of Sports Journal*, 15, 263-278.
- Kronholz, Julia F. & Osborn, Debra S. (2016). The Impact of Study Abroad Experiences on Vocational Identity among College Students. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 18. 70-84.
- Ra, J. J., Boonsuk, Y., & Sangiamchit, C. (2022). Intercultural citizenship development: a case of Thai study abroad students in EMI programs. *Journal of English as a Lingua Franca*, 11(1), 89-104.
- Ritchie, J. and Spencer, L. (1994). Qualitative data analysis for applied policy research. In A. Bryman and R. G. Burgess (Eds.), *Analyzing qualitative data*, 173-194. London: Routledge.
- Shiri, S. (2015). Intercultural communicative competence development during and after language study abroad: Insights from Arabic. *Foreign Language Annals*, 48(4), 541-569.
- Tajeddin, Z., Khanlarzadeh, N., & Ghanbar, H. (2022). Learner variables in the development of intercultural competence: A synthesis of home and study abroad research. *Studies in Second Language Learning and Teaching*, 12(2), 261-301.

付属資料

インタビュー質問項目

同僚（チームメイト）、指導者、ファン、地域の人々とのコミュニケーションの仕方において

- ① 自文化、他文化についてどのような発見をしたり、自身のこれまでの考え方に変化はありましたか。
- ② 現地の人々の言動のような見える文化はどのような考え方や価値観から生まれているか考える機会はありましたか。
- ③ 同様に日本での人々の言動の仕方についてのその裏側にある考え方や価値観を考えることはありましたか。
- ④ 異文化体験を経て、文化の違いに迷う事はありましたか。（どちらの文化を選んでもいいような場面で）迷った時にどのような選択をしてきましたか。
- ⑤ サッカー選手として、自文化と多文化で共通している文化、または違う文化はありましたか。
- ⑥ 現役中に将来のキャリアについて不安を感じることはありましたか。（あった場合）どんな時に、どのような不安を感じる事がありましたか。異文化体験後に何か自己不安に変化はありましたか。
- ⑦ サッカー以外のキャリアを考える事はありましたか。異文化体験後、それまで持っていた考えに変化はありましたか。
- ⑧ （引退した選手への質問）能動的か受動的な引退どちらでしたか。引退を決定した時に異文化体験は影響しましたか。
- ⑨ （現役の選手への質問）プロを終えたら何をしたいか考えていますか。（あった場合）なぜそれをしたいですか。その考えに異文化体験が影響していますか。
- ⑩ （引退した選手への質問）プロを引退して今は何をされていますか。今されている仕事に何か異文化体験が影響していますか。

通信制大学での充実した学び方のための授業実践～「教育心理学」メディア授業の構成と学習者の振り返りから～

川島 哲（武蔵野大学 通信教育部人間科学部 助教）

要約

通信制の大学では、学びや成長を実感することで幸福感を得るために、深く学ぶ方法を身に付けることが有効と考えられた。それをねらいとする教育心理学のメディア（映像）授業の内容と学習者への質問紙調査から、ねらいに沿った学びが生じていることを明らかにすることを本研究の目的とした。認知主義的学習観をもって概念的知識を身に付けるような自己調整学習をすることが深く学ぶ方法とされたが、分析の結果、その有効性を学べる内容で授業が構成されており、その深く学ぶ方法は授業中の活動や授業前後の日誌で体験できるようになっていることが明らかになった。また質問紙調査から、活動や日誌への参加を教員が毎回確認する形式の授業ではないものの、学習者の8割ほどがそれらに参加していた。学習者の自由記述から学習者は、受動的になりがちな映像授業ではあるが能動的に学び、自らの学びをメタ認知する機会にしていたことが示された。

1. 問題

学校では、授業を積極的に受けること等で有能感が高まり、自尊感情を得ることと主観的幸福感が高まることが想定される（須崎・中須賀・谷本・杉山, 2018）。露口（2017）は、学習意欲と主観的幸福感の相関を指摘しているが、家庭や地域、教師との関係でも同程度の相関があり、学級での人間関係が最も大きな相関を示していることを明らかにしている。

ところが、通信制の学校では、学校を介した人間関係が築きにくいいため、幸福感を得るためには充実した学びの経験が求められる。しかも、他の学習者が学ぶ姿をモデルにして効率のよい学び方を知る機会も通学制の学校に比べて少ない。そのため、学び方を学ぶための授業は特に有用であることが期待できる。

学習者が学びの主人公になる1つの方策として、自己調整学習（Zimmerman & Schunk, 2011）がある。「学習者達が自分たちの目標を達成するために、体系

的に方向づけられた認知、感情、行動を自分で始め続ける諸過程のこと（邦訳 p. 1）」と定義される。つまり、メタ認知・学習方略・動機づけといった教育心理学の概念を実践して、自らの学びを意図的にコントロールし、洗練させながら目標に向かって学び続ける方法である。

本研究においては通信制大学の学習者を対象とした分析を行うが、通信制大学の社会人学生を対象とした自己調整学習の尺度が開発されている（石川・向後, 2017）。石川・向後は、学び方を学ぶ科目を受講する学生に対する質問紙調査から、「学習方法を振り返る」「学習を工夫する」「大学の友人にたずねる」「学習計画を立てる」「自分にご褒美を与える」という自己調整学習に関する 5 因子を同定した。また、半年間あけて行われた 2 度の調査で尺度への回答に大きな変化がないことが、単純に大学で学ぶだけで学生が自己調整学習をするようにならないことを示している。一方で、まずは「学習方法を振り返る」ことを促すことが他の因子の実践へ波及する可能性を指摘している。

石川（2019）では、学び方を学ぶ授業で自己調整学習を知識として学ぶ授業をしているが、市川（1993）が指摘するように、学習方略を自分で使うようになるには、実際に有効性を体験することが重要である。そのため、自己調整学習に関する教育心理学の知見を学ぶだけでなく、それを自己調整学習を体験する形で学ぶことが有効だと言える。

そこで、本研究では、自己調整学習について学ぶ教育心理学の授業が学習者に自己の学習方法を振り返る機会を与え、自己調整学習に必要な知識とスキルを獲得せしめるか明らかにしたい。学習材に対する分析と、質問紙調査の回答に対する分析を照らし合わせることで、学習内容と体験する活動と学習者の認識の 3 つの要素のつながりを確かめることとする。

2. 目的

本研究の目的は、教育心理学の授業で提示された自己調整学習のために必要な知識と学習者に取り組まれた活動、それらに対する学習者による認識が一致することを明らかにすることとする。

これにより通信制大学に在籍する学習者が、成長を実感しながら幸せに学べる状態になるために、教育心理学の授業が資するのか検討する。

3. 方法

(1) 対象

武蔵野大学通信教育部の「教育心理学」のメディア授業を対象とした。教職課程コアカリキュラムに沿って構成された教職科目ではなく、学部2年生以上の主に心理学専攻の学生が受講する科目であった。他学部からの参加も可能だった。メディア授業とは、スクーリングの代替となる学習方法で、授業時間24時間分の映像を動画として配信し、そこで用いられる紙資料を pdf や Word の電子ファイルで配布する形であった。100分14コマの授業が基本であり、視聴しやすさに配慮して動画は30分前後を目安に分割されていた。

質問紙調査の対象は最後まで授業に参加した学生に限られた。11月から翌年1月中旬までアンケートが62名に提示された。回答は30件で、48.38%だった。

(2) 手続き

授業デザインの分析 分析は、学習内容と学生が体験する活動に分けておこなわれた。学習内容は、映像と資料を元に各授業で学ぶ概念を抽出した。活動は、授業においては「考えて書く活動」と「教育心理学メディア受講日誌」（以下「日誌」と呼ぶ）と呼ばれ、何を経験するかを抽出した。分析にあたっては、自己調整学習に必要な概念が心理学的知見の積み重ねにより学べるようになっているか、「考えて書く活動」や「日誌」が自己調整学習で使う方法を用いて取り組むようになっているかという視点を用いた。

質問紙調査 ウェブ上で単位認定のためのレポートを提出する際に、末尾に回答をつけてもらう形だった。質問内容は、「日誌」への書き込みの頻度、「考えて書く活動」への参加の頻度を「いつもできた」「しばしばできた」「ときどきできた」「全然できなかった」の4件法で回答してもらった。さらに、「このメディア授業を終えてみて、どのような感想を持ちましたか。率直に述べてください。」と感想を自由記述で求めた。字数の制限はなかった。

倫理的配慮 質問紙調査にあたっては、回答が任意であること、回答内容が成績に影響を与えないこと、匿名化した上で教育内容の改善と学術研究に用いられることを明記し、回答を持って承諾と見なすことを伝えた。

4. 結果

(1)「教育心理学」メディア授業の学習内容

①各授業の内容

表1:「教育心理学」メディア授業の各授業のタイトルと学習内容

授業 番号	タイトル	学ぶ概念・内容
1	教育心理学の概要	教育心理学の枠組み、教育心理学講義の構成
2	心のモデルとアナロジー	心のモデル、アナロジー思考、学習の転移
3	記憶と知識	記憶の過程、処理水準説、意味ネットワーク、概念的知識
4	学習者の熟達	注意、トップダウン・ボトムアップ処理、定型的熟達者、適応的熟達者、生産的失敗
5	認知的発達	発達区分、視覚的断崖、発達の最近接領域、ピアジェの発達段階、未分化・分化・統合
6	さまざまな学習観	行動主義・認知主義・状況学習アプローチ、正統的周辺参加、素朴理論、概念変化
7	学校での学び方	学級の歴史、有意味受容学習、ジグソー学習、相互教授法
8・9	インクルーシブ教育 のために 上・下	インクルーシブ教育、発達凸凹、学習障害、注意欠如・多動症、自閉スペクトラム症、二次的障害
10	行動主義の学習	古典的・オペラント条件づけ、スモールステップ、学習性無力感、潜在学習、洞察、観察学習
11	動機づけ【動機論】	内発的動機づけ、マズローの欲求階層説、自己決定理論
12	動機づけ【認知論】	原因帰属、自己効力感、達成目標理論、マインドセット
13	メタ認知と学習方略	メタ認知、メタ認知的活動（モニタリング・コントロール）・メタ認知的知識、学習方略、認知主義的学習観
14	自己調整学習	自己調整学習、読解の・ライティングの自己調整学習、日誌法による自己調整

各授業のテーマは、表1に示した通りだった。以下、括弧中に1から14の数字を入れたものは、その数値の授業番号を指すこととする。また、授業において学ばれた概念は、その数と紙幅の都合から基本的に引用文献を示さない。

科目の流れとしては、まずこの科目の学び方と教育心理学という学問領域の

概要を学び (1)、こころとは何かをテーマに、モデルを利用した思考、アナロジーを用いた精緻化、学習の転移を学ぶ (2)。次に記憶の授業で概念的知識を (3)、感覚と注意の授業で熟達を (4)、発達 of 授業で未分化・分化・統合という概念変化の基礎を学び (5)、次の授業で素朴理論からの概念変化の例と状況学習を学ぶ (6)。

そこから具体的な学校の姿を示しつつ、心理学の知見に基づく授業方法を学び (7)、個性あふれる社会で誰もが困らないでよい状況をつくる重要性とその中で自分にあった学び方・過ごし方を身に付ける重要性を理解する (8, 9)。

次に、行動主義の学習と認知心理学の学習を示し (10)、動機づけの授業として、内発的動機づけと自己決定の重要さと (11)、原因帰属など学びをメタ認知することの重要さ (12) を学ぶ。最後に、メタ認知と学習方略 (13)、自己調整学習 (14) について学ぶことで、教育心理学のメディア授業が通信制大学での学習者が良く学べるようになる授業構成になっていたことを知るという流れであった。

②自己調整学習へ繋がる概念

授業では、最終回に自己調整学習 (Zimmerman & Schunk, 2011) が扱われた。自己調整学習には、メタ認知による自己の状態と課題の状態の把握が必要で、それを元に適切な学習方略を選択し、そして自らを動機づけることとなる。それらの過程は、学習内容をただ暗記するのではなく、概念的知識として身に付けることを目的として遂行される。

最終回に向けて動機づけ (11, 12)、メタ認知と学習方略 (13)、自己調整学習 (14) を学ぶという構成になっているが、そこまでに、それらにつながる諸概念を学ぶことになっていた。動機づけは自己調整学習と直接つながるため、今回は内容の分析として、「概念的知識」、「学習方略」、「認知主義的学習観」、「自己調整学習」を採り上げ、それらを理解するための概念がどのように学ばれたのかを示す。

概念的知識 概念的知識とは、「生きて働く知識」を指し、「言葉で説明でき、つながっている知識」と言い換えられる (文部科学省, 2017; 久野, 2019)。この概念を学ぶために、以下のようなつながりが示された。

意味を考えたり自己との関連性を考えたりする深い処理が記憶に残りやすい

ことにつながるという実験が示された(3)。そして、自分が何を学んでいるのかというメタ認知をして、既知の領域なら元々持っている意味ネットワークに新しい知識を位置付けることで、新しい事実に知識を概念的知識とすることができると示された(3, 4)。また、未知の領域を学ぶ際には、既知の領域とつなぐためにアナロジーを使った思考をすることが有用とされることが示された(2)。つまり、新しい知識は、生きて働く知識のネットワークの一部に取り込むことや結びつけることで有意義に受容でき(7)、概念的知識とすることが可能となることを学べるようになっていた。

このような学びを通して特定の領域において概念的知識を得た人を適応的熟達者と呼ぶ(4)。適応的熟達者は、そのために生産的失敗をすることもある(4)。つまり、未分化な部分がある自分の知識を活用して、一人では到達できない課題(発達最近接領域にある課題)に取り組み、失敗することでその意味ネットワークを更新し、分化・統合する経験をする(5)。言い換えると、素朴理論を活用しただけでは解決できない課題に取り組む(そして失敗する)経験によって、科学的理論(より科学的な概念的知識)に近づくことができる(6)。

このように示された概念的知識の考え方は認知主義的学習観に基づいており、自分の学び方や知識について認知する、すなわち、メタ認知をする必要があることが示された(12)。

学習方略 学習の方法を意図的にコントロールして、有効な方法を探し、それを選択するという学習方略の選択は、概念的知識を身に付ける上でも、自己調整学習にとっても必要なことである。学習方略について、認知的方略、メタ認知的方略、外的リソース方略に加え、情緒的方略が示された(13)。学習方略については、認知的方略以外、「考えて書く活動」として体験して学ぶ形を採ったため、ここでは認知的方略についてのみを示す。

認知的方略として、リハーサル方略と精緻化方略・体制化方略に言及された。前者より後者が深い処理であるとされており(3)、概念的知識を得るための方法であるため、概念的知識に関わる各授業回とのつながりがあった。

学習方略の使用を妨げる理由では自己効力感として利用の価値やコスト感(12)が挙げられ、手続き的知識に見える化すること(3)が効果的な場面での利用を促すという内容があった。それに対して、体験することによる有効性の認

知(6)、スモールステップや易しいところから徐々に難化させることで認知的コストを下げる(10、12)が挙げられた。

認知主義的学習観 これは個人が持つ学習についての系統立った認識であり、非認知主義の学習観ではないものとして提示された(市川ら, 2009)。結果重視志向ではなく思考過程重視志向、丸暗記志向ではなく意味理解志向、勉強量重視志向ではなく方略活用志向が認知主義的学習観であり、それぞれ対の概念となっていた。それとは別に、非認知主義の学習観では環境重視志向が採られ、認知主義的学習観では失敗活用志向が採られる。

結果重視志向ではなく思考過程重視志向という点については、環境重視志向ではないという点、失敗活用志向であるという点とともに、達成目標理論や増大的知能観(マインドセット: Dweck, 2006)によって支持されていた(12)。失敗活用志向については、生産的失敗としても学んでいた(4)。丸暗記志向ではなく意味理解志向という点については、記憶に関する処理水準説をはじめとする概念的知識に関する様々な論拠を示していた。勉強量重視志向ではなく方略活用志向という点については、原因帰属と動機づけに関する研究として市川(1993)などを示しながら、失敗の原因をただ努力不足に帰属することの危険性とともに伝えられた(12)。また、順番は前後するが、授業では認知主義的学習観を学んだあと、その具体として学習方略を学ぶことになり、この方略活用志向を支持することとなった(13)。

自己調整学習 自己調整学習は、具体的には予見段階、遂行段階、自己内省段階の3つの段階に分けて示された。自己調整学習の熟達者の行うことを例にとつてつながりを示す(Zimmerman, 1998)。

予見段階では、漠然とした一般的な遠い目標より具体的で順序性のある階層的な目標を掲げることがよいとされており、これは行動主義の学習でスモールステップとして学んでいた(10)。また、目標としては遂行目標より習得目標がよいとされていて、達成目標理論で示された内容だった(12)。

遂行段階では、自分の情動や周囲の状況に引きずられるのではなく、注意を集中し、イメージ化や自己指導を活用することがよいとされていた。注意のコントロールと自己指導は、トップダウン処理・ボトムアップ処理やメタ認知とともに、適応的熟達者の行う方法として示されていた(4)。イメージ化については、「考

えて書く活動」において実施されたため、後述する。また、外的結果や断片的情報ではなく系統立った自己観察に基づいたモニタリングとコントロールがよいとされていて、これは原因帰属の枠組みの応用であった（12）。

自己内省段階では、失敗を学習方略の選択や練習不足に原因帰属する自己判断をすること、それにより次の課題に対して期待を持つ自己反応をすることが熟達者とされた。これは、原因帰属として、すでに学んだ内容であった（12）。

その他、自己調整学習を学ぶ際には、自己効力感と結果期待（12）や課題価値・関心（11）、方略の調整（効果的な学習方略の実行）と環境整備と援助要請（13）、自分へのご褒美（10）、より効率的な目標の設定（後述する「日誌」）などが示された。優れた習得目標の設定とは、概念的知識を得ることであるため、概念的知識に関わる内容がすべて関わっていたと言える。

（2）学習者に求めた学習法

授業では、以上のような概念の伝達に加えて、授業前後には「日誌」への書き込みを、授業中には「考えて書く活動」を行うよう指示を行い、映像中も作業時間をとった。学習者が自ら考え書くための「考えて書く活動」については、学習者が自己調整学習者になるために計画的に提供されており、通信制大学の学びの適応的熟達者になる一步を踏み出すことが期待された。

① 「考えて書く活動」について

表2：各授業で課される「考えて書く活動」の内容と体験する自己調整学習関連概念

活動番号	学ぶ内容(テーマ)と手法	体験する概念
1-1	教育心理学の定義について、多くの資料を読み、比較し、共通点や相違点を見つけることで理解する	読解方略
1-2	本科目を採った理由・目的について、書き出しておき、後の授業で扱われる概念と自らを結びつけられるようにしておく	概念的知識
2-1	こころとは何かをモデルを使って考え、それをアナロジーとして捉えて精緻化する	概念的知識
2-2	要塞問題と悪性腫瘍問題を扱う実験の体験を通して、学習の転移の難しさを実感する	概念的知識
3-1	記憶の処理水準説について、子どもを対象として想定し説明する	仮想的教示
3-2	よく行う行動についてプロダクションルールを作成する	概念的知識

4-1	注意についての実験の体験を通して、集中すると他が見えないという体験をする	概念的知識
4-2	主観的輪郭のある図を図が見えていない人を想定し説明する	概念的知識
5-1	視覚的断崖の実験状況を読んで、書かれた場面を具体的に映像として想像する	再文脈化
5-2	三ッ山課題ができない子どもの認識を図を使って考える	図式的説明
6-1	正統的周辺参加をした経験を思い出し、概念と自らとを結びつけて考える	概念的知識
6-2	子どもを対象として想定し、地球が平らではなく球体であるという概念変化をもたらす経験をデザインする	再文脈化
7-1 ～4	特定の授業方法で受講する人物の認識（学び方・やる気）を間主観的に理解する	再文脈化
8-1	インクルーシブ教育の捉え方についての2つのテキストを読解し、共通点/相違点を抽出する	読解方略
8-2	発達障害の3種の定義から共通点を抽出する	読解方略
9-1 9-2	発達障害の子どもへの対応を考える際は、具体的な状況での姿を想像する/複雑な事柄は表に整理する	再文脈化 図式的説明
10-1	行動主義心理学の万能さの主張が現実のものとなる際の社会への影響について、心理学の倫理的問題として考える	再文脈化
10-2	オペラント条件づけという心理学の概念が、スマホゲームの設計という社会への応用されていることについて体験する	再文脈化
11-1	動機づけに関するスライドを見て説明の文章を書くことで、論理の穴を見つけ、論理的つながりを意識する	仮想的教示
11-2	7-1～4を基本的欲求理論で捉え直し、概念同士を結びつける	概念的知識
12-1	学習性無力感を原因帰属で捉え直し、概念同士を結びつける	概念的知識
12-2	増大的知能観の持ち主の学び方を間主観的に理解する	再文脈化
13-1	認知主義的学習観を持つよう、子どもを対象として想定し説得する	仮想的教示
13-2	既習の科目で有効な学習方略を同輩を想定し説明する	仮想的教示
14-1	講義中に扱われる概念（読解の自己調整学習）を自らがどれくらいできていたか考える	概念的知識
14-2	講義中に扱われる概念（ライティングの自己調整学習）を自らがどれくらいできていたか考える	概念的知識
14-3	講義中に扱われる概念（日誌法による自己調整学習）を自らがどれくらいできていたか考える	概念的知識

「考えて書く活動」は、1コマ当たり2回以上あり、それぞれ5分以上の時間が割かれた（表2）。何を考えて書くのかが映像に表示され、学習者は事前印刷

された「作業場」と呼ばれる十字に区切る枠線が書かれた紙に内容を考え書くことが求められた。その後、考える際に考慮してほしかったキーワードを述べたり、活動によって学んでほしかったことを述べたりして、次の内容へと移っていた。

第13回では、学習方略の使用を促す具体的な方法として「認知的カウンセリング」（市川, 1993）の方法の応用を提案し、「自己診断を求める」「診断的質問をする」「比喩的説明をしてあげる」「図式的説明をする」「仮想的教示をしてもらう」「教訓帰納をしてもらう」の6つの方法を挙げた。これも参照にして、活動の形式は5つに分類できた。第一に、概念的知識を得るための活動があった。これはいくつかの焦点に分けて考えられた。第二に再文脈化、第三に仮想的教示、第四に図式的説明、第五に複数テキストの読解だった。以下、括弧内に活動番号を示し、それぞれの活動について説明する。

概念的知識 教育心理学の中で学んだ内容を振り返りながら、現在学んでいる内容と結びつける活動が行われた。授業方法を動機づけの観点で捉える活動（11-2）と学習性無力感を原因帰属の概念から捉える活動（12-1）だった。

また、講義で伝えられる教育心理学の知見を自分のこととして考えることで、概念的知識へと変化させることが期待される活動だった。教育心理学を学ぶ理由（1-2）、自らの持つ手続き的知識の記述（3-2）、自らの正統的周辺参加の体験の記述（6-1）、自らの通信制大学での学び方の記述（14-1～3）が活動として求められた。

教育心理学の知見を得るために実施された実験等の体験も行われた。これは心理学の科学としての営みを理解し、知見として抽象的に書かれた内容を自身の体験と結びつけることになる。「考えて書く活動」の内容がその授業回で学んでいる内容と一致するものとして、自ら考えたところのモデルの作成（アナロジーを使った比喩的説明）（2-1）、学習の転移の実験（2-2）、映像中のバスケットボールのパスの回数を数える注意の実験（4-1）、カニツツアの三角形に類似した図を自らの言葉で説明すること（4-2）が活動として求められた。

再文脈化 別の文脈でも活用できるよう、思考のための道具として概念を獲得することが、「分かったつもり」の状態を脱した深い理解を表していると言える（c.f. 田島, 2011）。自己調整学習におけるイメージ化と言えるこの方略はそれぞれ、視覚的断崖の実験の説明から行われた文脈で実験者として（5-1）、概念変

化の実験結果から対象となった子どもを担当する教室の文脈で教師として (6-2)、説明された授業方法の説明からその授業が行われる文脈で子どもとして (7-1～4)、発達障害の定義からその特性を持つ人の特定の状況での姿・振舞方と対応策へ (9-1、9-2)、行動主義心理学者の発言からそれが実現した仮想の社会の文脈へ (10-1)、条件づけの知見からスマホ (コンピュータ) ゲームの文脈へ (10-2)、増大的知能観の説明からその持ち主の学び方の文脈へ (12-2) と、文脈を超えて概念を活用することが求められる活動であった。

仮想的教示 設定された対象に対して、学んだ内容を説明するという活動を求めた。はっきり分からないことがあるとうまく説明できないため、理解モニタリング方略の1つとされた。2-1 と 4-2 については、上記の通りの内容で、モデルを作成し説明する活動、図を言葉で説明する活動だった。他は、記憶の処理水準説 (3-1)、動機づけ理論の発展 (11-1)、認知主義的学習観を持たせるための中学生への説明 (13-1)、通信制大学の任意の講義で活用すべき学習方略の同輩への説明 (13-2) が活動として求められていた。

図式的説明 図や表を作成することで情報を整理することができる有用な方略であること、図のようにポイントをおさえて省略されたものは論理的な抜けがありうるということが図式的説明を体験して学べることだった。自ら考えたところのモデルの作成 (アナロジーを使った説明) (2-1)、三ッ山課題をうまく解けない子どもの認識の図化 (5-2)、発達障害の表の作成 (9-1、9-2) が求められる活動だった。くわえて、3-1 と 11-1 では、スライドとして示した省略されたものを文章で説明することで、論理の抜けに気がつけるようになっていた。

読解方略の使用 複数のテキストの読解を求める活動であり、目標を意識して、読み直したり、ほかの言葉と結びつけたり、先を読んでみたり、自分に説明したりしながら、つまり、読解の自己調整学習として紹介した読解方略を用いて、読むことが期待されたる活動だった。教育心理学の定義を複数の文献から共通点として書き出すこと (1-1)、インクルーシブ教育についての賛成・反対意見を読んで、どう違うのかを書き出すこと (8-1)、3種の発達障害の定義から共通点を抜き出すこと (8-2) が求められた。

②「日誌」について

「日誌」への書き込みについては、第13回「自己調整学習」の最後に日誌法による自己調整を紹介した（Schmitz, Klug and Schmidt, 2011）。第1回から毎回の学びの前と後で、学習者には「教育心理学メディア受講日誌」への書き込みを求める時間を設けていた。

事前を書く内容は、学びに向かう自身の状況（やる気・いろいろ・集中・心配）や環境（他の心配事ややるべき事がある・予定通りしっかり学べると思う）を5件法で振り返ること、学習目標を立て、方略を決定し、学びにかかる時間の予想をすることだった。特に、授業映像の中では、授業毎に本質的な問い「学びのための質問」を示しており、答えを学習前と学習後に書くことで、自らの学びの程度を確かめられる形になっていた。事前に答えに対する自信を書くことで、自らの状況をメタ認知することが求められた。

事後に書く内容としては、かかった時間、効果的に学べた時間、「学びのための質問」への答え（自由記述）、理解・満足・自己動機づけ・方略選択の評価（5件法）、次に向けての工夫（自由記述）、復習にかかる時間の予想だった。

学習目標と学習方略については、事前に資料を配り、例を挙げることで、どのような内容を書けばよいのか分かるようにした。自己モニタリングを行うことや学習中のメタ認知を行うこと、原因帰属をして次に活かすことなどが行われることになっているが、この資料ではその説明をせず、第13回授業での解説を待つこととなった。そこに至るまでにそれぞれの知見を学ぶため、毎回書いている日誌と学んでいる内容が徐々に結びつけられることが期待された。

（3）アンケートの回答

分析対象とされた授業はメディア授業という形式で、授業者側からは資料・用紙・時間の提供を行うことしかできない。それを活用するかは学習者に委ねられている。そのため質問紙調査から学習者自身による振り返りとして、学びの実態について回答を求めた。

表3:「考えて書く活動」と「日誌」への参加頻度

日誌 活動	いつも	しばしば	ときどき	全然
いつも	9	3	1	0
しばしば	4	3	3	0
ときどき	1	3	2	0
全然	0	0	0	0

参加の頻度について、30件のアンケートの結果は表3のようになった。日誌

の書き込み頻度の平均（「いつも」を4、「全然」を1とした）は3.28となり、「しばしばできた」に近い数値となった。考えて書く活動への参加も3.24となり、日誌と同様の結果となった（ $t=0.214$, $p=0.831$ ）。日誌について、しばしばできたと回答した一人は、「はじめは書くという習慣が今までなかったため難しく感じた。」という感想を書いていた。

質問3の感想は、Microsoft Wordの文字カウントによると全員分で5024文字であり、一人当たり167.46文字であった。得られた感想を命題毎に区切り、KJ法（川喜田, 1967）を参考に内容に即して分け、ラベルをつけた。メディア授業の内容、映像や資料の形式、参加の仕方とその意義、今後への活用の宣言、レポート課題の分かりにくさ、活動結果共有の提案、教員個人への感想、感謝に大別できた。ここでは授業内容について述べたはじめの3点のみを詳述する。

メディア授業の内容 分かりやすさと内容と他教科とのつながりが書かれていた。分かりやすさとしては、9命題があり、分かりやすいという感想が7つ、わかりにくいという感想が2つだった。内容については、7命題があり、全体を良しとする3つとインクルーシブ教育に関する授業の良さに言及する3つと提案が1つあった。他教科とのつながりについては2命題があり、「既に受講している心理学系の科目の復習になった」「心理学概論でふれた内容をさらに詳しく知ることができ、学びが深まった」と述べられていた。

映像や資料の形式 量の多さ、動画の長さや工夫、書き込みの形式について述べられていた。量の多さは2命題が授業内容や映像の量が多いと指摘していた。動画の長さや工夫においては、動画が30分くらいにするとよいとの指摘、短く区切られていて良かったという指摘（2命題）、短いと次を開く動作で集中が切れるが小休止の目安になるという指摘などがあった。また、区切った後の動画に番号をつけること、倍速機能をつけることの要望があった。映像であるため、繰り返しや一時停止ができることがよかったという指摘が3件あった。書き込みの形式については、授業では日誌や考えて書く活動を印刷された用紙に筆記用具で書き込むよう指示していたが、学生からはPC上で作業したいという要望があった。

参加の仕方と意義 主体的であること、日誌の意義、考えて書く活動の意義、振り返ることの意義、メディア授業の構成の意義が感想として書かれていた。主体

的であることは5命題として示され、主体的に学ぶ環境が必要で（ながら視聴ができず）、理解が深まり、達成感があったと指摘された。

日誌の意義は、4命題によって、その意義が書かれ、授業を始める区切りとしての役割も果たしていたことが指摘された。日誌の意味を知って、これからも続けていく決意をした報告もあった。

考えて書く活動の意義も、4命題によって、能動的であることや理解しているつもりでも説明することが難しいこと、記憶の定着の良さが指摘された。

振り返ることの意義は、9命題として、「振り返りが出来てスキルが習得していく段階を感じることができ」たとの指摘や「自己モニタリングが面白い」、「自分の思考傾向や何に興味があるのかははっきりとわか」る経験をした等の感想があった。

メディア授業の構成の意義は、二人の学習者によって対象授業のねらいが端的に表されていたため、考察に引用する。

5. 考察

本研究では、教育心理学の授業において、学習者に学ばれた自己調整学習のための知識と取り組まれた活動、それらに対する学習者による認識が一致することを明らかにしようとしていた。

自己調整学習を学ぶことを目的とした教育心理学の授業が、目的のために構成された内容と活動を持つことを結果の前半では指摘した。認知主義的学習観で概念的知識を得るために自己調整学習をする方法を学べる授業内容になっており、概念的知識を身に付けるための様々な方法と、仮想的教示や再文脈化、図式的説明が「考えて書く活動」で体験できる活動が求められていた。また、毎回の授業前後に、日誌を書くことでメタ認知、自己モニタリング、原因帰属が求められていた。結果の後半ではアンケートの結果として、8割ほどが自己調整学習を体験する活動に参加することができていた。感想としては、映像授業であるが能動的に学び、自らを振り返る機会になったとのことだった。

（1）授業内容と活動の形式

まずは、教育心理学の授業内容と活動の形式の関連性を考察する。

授業内容は、概念的知識、学習方略、認知主義的学習観、自己調整学習の4点が主要な概念として提示され、それを学ぶ以前に多くの心理学的知見や概念を積み重ねて、4点の主要な概念が有用な概念であることが納得できるようになっていた。

「考えて書く活動」でも、概念的知識に関わる12の活動が求められていた。31活動のうち、38.7%をしめていて、最も多い割合だった。内容としても、自分を振り返って、今学んでいる内容との関わりを考える活動や教育心理学の知見が生まれた実験を体験する活動が行われ、知識がただ覚える対象としてあるのではなく、誰かが作り出した道具であり生きて使える道具であることを体験できる活動となっていた。再文脈化としても8活動(25.8%)で、同様に状況を想定して、知識を使うことを求めており、概念的知識の形成を促していたと言える。また、特に科目の後半では、概念的知識に関わる「考えて書く活動」として、先に学んだ知識と結びつけることで、知識のネットワークの形成を促していた。

授業内容では学習方略として、認知的方略とメタ認知的方略、外的リソース方略と情緒的方略が伝えられていた。認知的方略については内容のつながりを結果に示したが、他の方略は、活動との関わりがあると考えられた。

メタ認知的方略として、自分の理解を確認する理解モニタリング方略、学習の進行状況や質を評価する自己評価方略、課題解決を経てわかったことを教訓として引き出す教訓帰納に言及された。「考えて書く活動」としては、仮想的教示を4活動(12.9%)行うことで、理解モニタリング方略(メタ認知的方略)を採ることができていた。「日誌」では、事前に自身の状況を振り返ることで自己評価方略を、事後の振り返りと次に向けての工夫を書くことで教訓帰納とメタ認知方略を活用することになったことが推測された。

外的リソース方略として、図や表の活用、援助の要請が、情緒的方略として、環境を整えることが伝えられたが、「考えて書く活動」では、図式的説明を4活動(12.9%)ですること、外的リソース方略を活用することが推測された。

その他、「日誌」では、事前に心配事存在など環境について振り返ることで環境を整えることという情緒的方略を活用するきっかけにもなりうる構成だった。また、学習方略として第13回に具体的に提示された読解方略についても「考えて書く活動」では3活動(9.6%)で体験することが可能だった。

以上のような過程で自己調整学習のために必要な学習方略を学びと体験によって習得することが期待される構成だった。特に、授業内容としては自己調整学習(14)にて扱ったのみであったが、日誌として事前に目標を立てて学習方略を選択し、事後に集中して取り組む時間がどれだけあったか等振り返ることで、毎回意識的に考えることを求めている。また、科目を終えた後で14回分の日誌として、効果を実感できる振り返りの蓄積が学習者の手元にあることが期待された。第14回に日誌法としての自己調整学習という項目でそれを振り返ることにより、意義を実感することが推察された。

以上から、内容として学ばれた学習方略や自己調整学習は「考えて書く活動」と「日誌」によって体験され、概念的知識が得られることが十分に期待できる授業であると考えられた。

(2) 内容・活動と質問紙調査の結果について

では実際に学習者には具体的にどう受け取られていたのだろうか。授業内容と学習者の感想を照らし合わせて、授業のねらいが達成されたか考察する。「書き込む活動」や「日誌」は、どのように取り組んだか確認できなかったが、質問紙調査によると高い参加頻度と感想から、学習者は十分に真面目に取り組んでいたことが明らかにされた。ただ、調査参加者は受講者の約半数であり、調査参加者ではない人の活動や日誌への参加はより低いことが想定される。

単位を取るという結果重視志向だけを持っている場合には単位認定レポートのみに取り組めばよく、「考えて書く活動」や「日誌」は取り組む必要のない活動である。社会人の学習者も多いため、本科目に割ける時間が限られていることも考えられる。その中で、質問紙へ回答した多くの学習者が能動的に書き込んでいたという事実は、思考過程重視志向という認知主義的学習観を持っていたことを推察させる。

また、感想の中で指摘が多かったのが、振り返りの機会が提供された点だった。授業を受け、テストを受け、評価をもらうという学びの中で、自らの学びを振り返ることは、メタ認知することである。自己調整学習はメタ認知なくして成り立たず、メタ認知は自己調整学習のきっかけになる(石川・向後, 2017)。学習者が自己調整学習の意義に気がついたことが推察される。振り返りがスキルの上

達の自覚を促すという指摘は、主観的幸福感の向上も期待できる(須崎ら, 2018)。

くわえて、能動的に学ぶことについても指摘があった。映像を見て学ぶことは受動的な行為になることが一般的であるが、活動を入れることで能動的・主体的に学ぶことになったという感想だった。その中で、理解が深まったという学習者もいて、丸暗記志向ではなく、意味理解志向を持っていることが推察された。

日誌を書くことがスイッチになるという指摘や、理解が難しいときには映像を繰り返し見ているという感想から、自らの学びの方法についてメタ認知を行い、方略活用志向を採っていることが推察された。

これらの感想には、認知主義的学習観を持って学びに取り組んだ様子が表れており、自己調整学習の主たる概念を活用できていたと言えた。その中で、2名の学習者が感想として多くの指摘を行っていた。長いが、ここに引用する。

まず、メディア受講日誌については、各映像前に学習目標や学習方法を記入することで、自らの学習特性への内省につながりました。それは、学びに対してより効果的な目標や方法を見出す過程となり、講義回数を重ねるごとにそれらはより精緻なものになったと推察しております。また、各講義の冒頭と終盤の双方に提示される「学びのための質問」は、受講前の自らの記述と受講後のそれとを比較することを通じて自分自身の知識定着の度合いの把握に結び付き、メタ認知におけるモニタリングが促進されたことで、効果的な復習も可能になったと考えております。

一方、各回に作業場が設定されていたことにより、講義の視聴というインプットの責任に加えて、作業場に記入するというアウトプットの責任が生ずることとなったため、メディア授業という形式であっても、能動的かつ主体的な学びが可能であったと考えております。なお、第8回において「発達障害まとめ表」を完成させたことは、これまで曖昧であった発達障害の特徴に対する明確な理解に結び付けました。

これらのことから、教育心理学のメディア授業を通じて、講義内容の理解とともに、自らに有益な学習方法の探索および獲得につなげることができたと推察しております。学生が主体的に学べる環境をご提供くださったこと、深く感謝申し上げます。(誤字の修正および改行・段落分けは引用者)

この感想からは、この学生は日誌法による自己調整学習がうまくできていて、

それは「学びのための質問」が大きな役割を果たしていたことが読み取れる。くわえて、「考えて書く活動」を通して、主体的な学びをすることができ、それを通して、自分がどこまで分かっているのかを確かめる理解モニタリング方略ができたようである。そして、自分に適した学習方略を探し、実施し、調整するという自己調整学習を遂行したことがうかがえる。

もう一人は、以下のような感想だった（文中の引用文献は省略する）。

自分の学習方略を振り返ったことで、自分が考えていた以上に方略を用いたり、メタ認知的活動を行っていたことが分かり、自己効力感が高まった。学習方略は方略を教授されることで意欲が高まる(岡田 2007)との研究結果がしめすように、学習方略、自己調整学習の過程を学んだ後は、自分の学習に対する態度のどこが欠けているのか、どうしたらよいのかがよくわかるようになった。この考え方は、学習の場以外でも使うことができるため、良い学びを得ることができた。

この感想からは、これまでの学びに対して、自己調整学習やメタ認知、学習方略といった知識を得た上で振り返ることで、より精緻に自己の学びを捉えることが可能になったことを示している。

二人の感想に端的に表れているのが教育心理学の学習内容をただ暗記しテストで解答する知識として捉えているのではなく、自らの学びに応用する生きた知識として捉えているという点にある。別の学習者の感想からは学んでいる最中にはすでに、学んだ内容を活かした言葉かけを関わっている子どもたちに行っているとのことだった。学習内容が概念的知識として取り入れられていることが推察され、少なくともこのような感想を示した学習者においては、授業のねらいが達成されたと結論づけられる。概念的知識・認知主義的学習観・学習方略・自己調整学習という内容と活動が質問紙調査からも読みとることができた。

（３）本研究の意義と今後の課題

教育心理学のメディア授業について、内容と活動と感想から検討してきた。

概念的知識や学習方略、認知主義的学習観といった自己調整学習のための概念は、教育心理学で伝えるべき基本的な知識とともに、「考えて書く活動」や「日誌」を通してそれらの概念を活用する体験をしながら学ばれていたことが明ら

かになった。それらを体験することで、特に自分の学びに対するメタ認知が遂行されていることが感想から示され、個別の事実に知識が概念的知識となって身についていることが示された。通信制の大学において、一人で学ぶことに困難を感じる学習者が主観的に幸福になるためには、自らを動機づけ、自ら学び、成長していることを実感できることが重要である（須崎ら, 2018; 露口, 2017）。その対応策に本科目がなり得ることが、示された点で意義があったといえる。

ただ、本研究には限界もあった。その1つは、研究者が授業者である、当事者による研究である点である。客観性を確保するため、授業で伝えられる具体的な概念・専門用語と求められる具体的な活動内容・形式について記述した。それにより、読者が考察で書かれた解釈に対し、反論ができる形とした。授業資料の公開も求めがあれば可能であるため、検証及び反証可能性は確保されている。とはいえ、主観的な解釈が含まれることは否定できない。

また、本研究は、授業内容が変わったことを契機に取り組まれたため、メディア授業の映像が撮り直される前に授業を受けた学習者からのデータを得ていなかった。感想に対する質的な分析から本科目に独特の内容・形式への評価を得ることはできているが、より確かな知見を得るためには、比較対象が必要となろう。今後の課題としたい。

6. 引用文献

- Dweck, C.S. (2006) *Mindset: The New Psychology of Success*, Random House, New York (今西康子訳 (2016) . マインドセット : 「やればできる！」の研究 草思社)
- 石川奈保子, 向後千春 (2017) . 大学通信教育課程の社会人学生における自己調整学習方略間の影響関係の分析. 日本教育工学会論文誌, 40(4), pp.315-324
- 石川奈保子 (2019) . オンライン大学の学生の自己調整学習とその支援方法. 早稲田大学審査学位論文 博士 (人間科学)
- 市川 伸一, 南風原 朝和, 杉澤 武俊, 瀬尾 美紀子, 清河 幸子, 犬塚 美輪, 村山 航, 植阪 友理, 小林 寛子, 篠ヶ谷 圭太 (2009) . 数学の学力・学習力診断テスト COMPASS の開発, 認知科学, 16 巻, 3 号, pp. 333-347.
- 市川 伸一 (1993) . 「数学的な考え方」をめぐっての相談・指導 市川 伸一(編

- 著) 学習を支える認知カウンセリング——心理学と教育の新たな接点 (pp. 36-61) ブレーン出版
- 川喜田 二郎 (1967) . 発想法——創造性開発のために—— 中央公論新社
- 久野 弘幸 (2019) . 新学習指導要領と授業改革—問われる教科の授業づくりと「知識の意味」— 学校と ICT retrieved 2024.2.12 from <https://www.sky-school-ict.net/shidoyoryo/190405/>
- 文部科学省 (2017) . 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 文部科学省
- 須崎 康臣・中須賀 巧・谷本 英彰・杉山 佳生 (2018) . 高校体育授業が大学生の主観的幸福感に及ぼす影響 体育学研究, 63, pp.411-419
- Schmitz, B., Klug, J., & Schmidt, M. (2011). Assessing self-regulated learning using diary measures with university students. In B. J. Zimmerman & D. H. Schunk (Eds.), *Handbook of self-regulation of learning and performance* (pp. 251-266). Routledge, New York. (深谷 達史訳日誌法を用いた大学生の自己調整学習の評価 塚野 州一・伊藤 崇達監訳 自己調整学習ハンドブック (pp.198-209) 北大路書房)
- 田島 充士 (2011) . 再文脈化としての概念変化. 心理学評論, 54 巻, 3 号, pp. 342-357
- 露口 健司 (2017) . 学校におけるソーシャル・キャピタルと主観的幸福感: 「つながり」は子どもと保護者を幸せにできるのか? 愛媛大学教育学部紀要, 64, pp.171-198.
- Zimmerman, B. J. (1998). Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: An analysis of exemplary instructional models. In Schunk, D. H. and Zimmerman, B. J. (Eds.) *Self-Regulated Learning: From Teaching to Self-Reflective Practice* (pp.1-19). The Guilford Press, New York (塚野 州一訳 (2007) 学習調整の自己成就サイクルを形成すること-典型的指導モデルの分析-. 塚野 州一編訳 自己調整学習の実践 (pp.1-19) 北大路書房, 京都)
- Zimmerman, B. J. and Schunk, D. H. (2011). Self-regulated learning and performance: An introduction and an overview. In Zimmerman, B. J. and Schunk, D. H. (Eds.) *Handbook of Self-Regulation of Learning and*

Performance (pp.1-12). Routledge, New York (塚野 州一訳 (2014) 自己調整学習：序論と概観. 塚野 州一, 伊藤 崇達監訳 自己調整学習ハンドブック (pp.1-10) 北大路書房, 京都)